
Death such as in nightmare

C.コード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Death such as in nightmare

【Nコード】

N9403M

【作者名】

C・コード

【あらすじ】

12月24日、たった数時間で全てが激変した。

ゾンビという名の脅威がわずかに生き延びた人間を更に追い詰める！
生存者達はこれに対抗するためにチームを結成するのだが、

まだ人員が足りない……！ 生存者はもう他にはいないのか……！？

Organization (前書き)

つたない文章かもしれませんが、温かい目で見てくださいれば幸いです。

修正：全サブタイトルの日本語訳 ver. を前書きに追加。ただし、物語の内容からそのままの日本語訳とは限りません。

間違いなどありましたら、お気軽にコメントに書き込んで下さると幸いですッ!!

サブタイトル『Organization / 結成の時』

Organization

12月24日。クリスマスイヴ。雪が降る夜、街は明るく、カップルやなにやらで賑わっているはずだった。

しかし、街中を闊歩するかっほような人はいない。なぜなら、この世にゾンビという脅威的な存在が現れたからだ。

テレビは全く使いものにならず、ラジオもしかり、電話もつながらず、電氣的な通信手段を断たれ、

ただやつらから逃げ回るばかりなのかと思っていたが、とある人間との出会いで逃げ回る事から、

戦う事へと変わったのであった。事の発端も今日12月24日。数時間で激変したこの世は、

全人口の内の偶然にも生き延びた人間達を更に追い詰めていく……！

俺、新堂しんどう 幽ゆうは事情で逃げ回っていた拳句、とある人に助けられ、今はとある3階建ての建物の暗い1室に4人の人が集まっていた。外はつめたそうな風が吹いていて、静けさが漂う。明ける事がないような世界に放り込まれたような感じた。

一人の男が口を開いた。

「4人……か。とりあえず、全員無傷なのかどうか確認してくれ。小さなかすり傷でもあれば、今すぐにも言ってくれ。」

「俺は無いな。」

「俺もだ。」

「見当たらないよ。」

「そうか……皆、良く聞いてくれ。すでに知っている通りだが……この世は地獄になっちまった。」
「重い雰囲気か辺りを包んだ。」

「……だな。まさか、あんなのに襲われるなんて思いもしなかった。」

「他の人間は、もうあんなのになっちまっているのか……。」

「……父さんも母さんももう……。」

「そう、やつら、ゾンビが現れた途端に日本のシステムは完全に崩れた。」

「電話も不可能、電気も使えない。おまけに生き延びた人間はほんのわずかで武器もない。」

「俺達、どうすれば……?」

「どうすることもつするも、生き延びなきゃ始まらない。だから、生き延びる手段を探すんだ。」

「ここに集まった4人で!」

「生き延びる手段……。」

「そうだ、考えるんだ。こうしてる間にも、街中にはやつらがうるうるしてやがる。いつ、

ここを襲うかもわからん。」

「戦う、しかないと思いますよ。」

「ゾンビ共相手にか? 4人で一体どれくらい始末できるのか考慮しての回答か?」

「何も、街中をうるつくようなことはしないだろ。それに、やつらにもしつかり弱点がある。」

「そ、そりゃ街のど真ん中に行くわけじゃないだろうけど……。で、弱点ってなんなんだ？」

「まず、大抵のゾンビが器官をやられてるってことだ。見えないだの、聞こえないだの、

症状は個体によって違うが、確実なのは知能だな。ベースが人間つても、

あるから火に弱かったり、知能がないから溺死させることも可能だと思っただ。細かい動作も無理だろうしな。」

「なるほど……。つまり船で海に出れば安全ってことか！？」

「食糧があるうちはだけどね。」

「だが、油断は禁物だ。ゾンビは全個体共通で強靱な肉体を持っているぞ。海に出た後の事じゃなく、

そこまでの過程を重視すべきだろう？」

「そうでしたね。まずは武装する準備を整えましょう。」

「そうになると、狙うは大型のシヨップینگモールか？」

「ですね、4名というのはある意味で好都合かもしれませんよ。小数精鋭…つまり、あまり気配が出ないので、

隠密行動もできると思います。できればどこかでトランシーバー等も確保できればいいのですが……。」

「よし、まずはシヨップینگモールだな。」

「そこに行くまでの道のりはどうするんだ？ ここにあるもので武装するしかないからな……。」

「多分、大丈夫だ。シヨップینگモールはすぐ近くにあるし、ゾンビ共は人間しか食わないからな。

あさりに来るなんてことは無いだろ。」

「……シヨップینگモールに訪れた人間をあさりに来るってのは想定しておいた方がいいですよ。」

「と、いうことはやはりまともな武装がないと整えるのも無理ってことか……。」

「武器は……。そうだな。ここにあるものではどうしようもない。書

類ばかりだからな。

どこかの民家で調達する事にしよう。手短に手に入るのは包丁とい
ったところか。」

「そうだな。善は急げという 諺ことわざもあるから、さっさと行こうぜ
！」

「その前に、自己紹介ぐらいはしておこう。俺は大門おおかど 将しょう。
サラリーマンをしていて今は27歳だ。」

「俺は藤島ふじしま 満みつる。高1だ。」

「僕は岸田きしだ 吉成よしなり。中学2年です。」

「俺は……新堂しんどう 幽ゆう。高2……と言っても、多分知ってるやつは知
ってるだろ？」

働いている大門さんにはわからないのも当然だろうな。だが、学生
なら知ってるはずだ。

「え……？ 新堂しんどうって、あの新堂……！？ 『地区最強』の……
幽！？」

「そつだ、一応言っておくけど、俺は多少の事じゃ荒っぱい事なん
かしないから安心してくれ。」

「え、そうなのか？ 噂じゃ物凄く荒れてるって聞いたぞ。」

「もとは向こうから吹っかけてくるんだよ。全部な。いきなり殴
りかかってくるもんだから、

こつちも仕方なくやってるだけなんだ。」

「君きみって、喧嘩強いのか？」

「ん、ああ、そこそこ強い方だと……思う。」

「謙遜しても意味ないんじゃない？ 地区最強なんだろ？」

「まあ、そうなんだが……だけど、俺はこうして素性も明かしたん
だし、この4人で生き延びて行こうと思う。」

「俺も助力を惜しまないつもりだ。よろしく頼むぞ。」

大門さんが言う。

「ああ！ 地区最強がいれば頼もしい限りだ！」

藤島が言う。いや、ゾンビは人間とは違うから！ 強みにされても

期待にこたえられるのかどうか……。

「皆さん、よろしく願います。」

ちよつと礼儀正しい言い方は岸田吉成君か。

「俺も、チーム優先で行きたいんで、よろしく頼みます。チームのリーダーですけど、

とりあえずは大門さんという事で。俺達をここに呼び集めてくれた人だし。」

「う、うむ。」

「ええ、新堂が、……新堂さんがリーダーじゃないんですか？」

「いや、ここは大門さんの方が……それと、あまり堅苦しくならなくていいよ。」

普通に友達みたいに接してくれて大丈夫。安心していいよ。」

「え、あ、……そ、そうか。」

「とりあえず手順を説明する。民家までの道のりは不備な状況だから最短ルート、最短時間で行く。」

武器の調達具合で民家1軒で済むかもしれないし、もう1軒回るかもしれないから、

最後まで気を抜くなよ。包丁意外は何も取らなくてよし。あ、できれば灯りも欲しいな。」

でも包丁が最優先。灯りは余裕があればいい。」

「分かった。」

「了解。」

「OKです。」

「それじゃあ、荷物をまとめよう。ちなみに皆、今何を持っている？」

これを聞かないとな。場合によっては危険を冒すリスクの大きさも把握できるかもしれない。

「俺はほとんど何も……。慌てて家から逃げるときに取ってきた携帯と、こういう時の為と思って、

小型の懐中電灯が1つくらいだ。」

大門さん、ナイス！ 灯りについては少し余裕が出来たな。

「懐中電灯、上出来です！ これで灯りを手にれる為のリスクがだいぶ減ります。」

「俺は……そこに立てかけてある木刀だけだ。以前習い毎の為にと親が買ってくれたもので、

もしもの時の為にと持ってきた。度胸がないから実戦で使った機会はまだないんだが……。」

藤島もナイス！ 最低限の武器がもうここにあるとは！

「木刀か、大丈夫だよ。長さも十分だし、武器としては優秀だ。」

「ちなみに2本ある。お前には、少し長めのこつちを使ってくれ。」

「すまない、恩にきる。」

これももしもの時の為だが、こうしている間にも襲ってくるかもしれないゾンビを攻撃できるように、

事前に手に持つことにした。強さの面で信頼を寄せてくれていたなら、それにこたえなくては。

「僕は特に何も持ってません……。」

役にたてなくて落ち込んだような表情になる。

「落ち込まなくても大丈夫。普通はみんな持ってないからさ。その点俺達は恵まれてる。」

表情が明るくなった。しかし、勝負はここからだ。顔つきが真剣になる。

「暗くて見えない時は、大門さんが懐中電灯で照らして下さい。いつでもできるように準備を

しておいてください。」

「……よし、ちゃんと付く！ いつでも行けるぞ！」

「では、いざという時にはお願いします。さて、外は一体どうなつて……。」

窓から外を眺める。目先の事しか分からないであろうゾンビ。うわ、ここの目の前にも1体うろつろしてる！

外はやはり静かなままだ。目の前の1体のゾンビをどうにかすれば、

もう周りにはいなさそうだ。

民家はショッピングモールとの距離からも考えると、遠回りになるけどショッピングモールを無視して、多少距離はあるが民家を目指そう。ショッピングモールには大量のゾンビが予想されるからな。

いや、そうでなくても突然の次第に対応するためには相応の準備が必要だ。

『備えあれば憂いなし』という言葉はいつでも役に立つ格言だと改めて認識される。

「目の前に1体ゾンビがいます。個体によって器官が機能したりしなかったりすることなので、追ってこなかった場合は無視します。道はショッピングモールを通り越して民家に行きます。」

距離がありますが、民家までの辛抱です。頑張りましょう！」

「お、おう。」

「ついに出発ですか。」

「うし、俺も戦ってやる……！」

「木刀は俺と藤島が持ちます。点灯は大門さん。荷物等の回収はできれば各自で……だけど、

もしまとめる機会があったら……岸田。君が荷物を担当してくれ。」

「分かりました。後、僕の事は吉成と読んでください。」

「分かった。吉成。もしもの時は頼む。」

「はい！」

木刀を構えて俺が先頭に立つ。喧嘩の時もこんな感じだった気がする。俺一人身だったけど、

今と似た感覚だ。冴えている。ああ、そうだ。これだけは言っておかないと。

「ああ、そうだ。もしゾンビに関して気付いた事があったらいつでも教えてくれ。」

かなり有力な情報だからな。後ろに控えている事になるのは吉成に

なるけど、

吉成はできるだけ観察じゃなくて後方の見回りをしてくれ。左右は大門さんと藤島で。」

「いよいよか。」

流れに任せて俺が指揮を取る形で表のリーダーは大門さん。

調達と整理は岸田吉成。

戦闘員は俺と藤島。

4人だけではたしてどこまでいけるのか……。

喧嘩に散々付き合わされていたせいか、やけに落ち着いているな俺。ちらっと思つた事があつたっけな。『どこまでいけるのか試してみたい』って。

喧嘩が強いのは全部親父のおかげ。剣術やら柔術、必要性のない弓術まで教わつたおかげで、

大体の相手なら負ける気はしない。弓術は体力よりも精神力を問われるので、

精神面でも冴えていて冷静を欠くことも無くなった。

おかげで中学時代まで拳法まっしぐらで中学時代から喧嘩を吹つかけるようになった。

一人やればまた連鎖的に襲いかかってくるアホ共は今となっては飽き飽きする。

高校からは穏やかな生活を送りたいという願望で少しだけ学力の高い高校にしたんだ。

それでも勉強というか、学力は並々だったんだが、頑張つて入学したんだ。

そこからは喧嘩も少なくなった。中学時代は皆俺から遠ざかっていて、友達なんていなかった。

だけど、高校に入ってからとは違った。皆俺の事を知らなくて、親しくしてくれて、

過去に例がないくらい友好的だった。おかげで友達はすぐにできたし、平和だった。

「ただ、もう、俺の友達にはここに……」。

「それじゃ、階段を下ります。扉を開けて安全を確認するので合図で行動してください。」

「皆さん、視力はどれくらいですか？」

「俺は0.7だ。」

「大門さん0.7つと……」。

「俺は1.3。」

「藤島1.3か。」

「僕は0.5です。」

「0.5だな。」

「それじゃ、藤島が俺の合図を良く見てくれ。藤島が動いたら皆も動いてくれ。俺だけにゾンビが

気づいて襲ってきたら、皆は黙って見てるか逃げてくれ。犠牲者はできるだけ減らしたいし、

巻き込むのは少々気が引ける。」

皆、それを聞いて無言でうなずいた。緊張が伝わったのだろうか。

とにかく意図を理解してもらえてよかった。この状況じゃ理解力が欠けると面倒だからな。

あえてリーダーを大門さんにして、戦闘員を2人にしたのも俺が欠けた時に自力で何とかできるように

するため。単独でもなんとかやっていけた経験があるのに対し、他の3人は平和的に暮らしてた人だ。

1人じゃ危険すぎる。

「それじゃ、階段を下ります！」

暗くて下がうつすらとしか見えないが、少しすれば闇にも目がなれるだろう。

俺達、いや、俺はすぐに覚悟を決めて歩いた。皆も後ろについてチームを乱さないようにしていた。

そしてついに扉の前まで来た。

「いいですか……？ それじゃ、開けます！」

B e a d v a n c i n g (前書き)

サブタイトル『B e a d v a n c i n g / 進行中!』

B e a d v a n c i n g

「いいですか……？ それじゃ、開けます！」
ゆっくりと扉を開ける。

ゾンビはふらふらと扉の直線上の約3mぐらい先にいるみたいだ。
すきまから覗きこんだ程度じゃ流石にバレないか。

ゆっくりと音を立てない様に扉を開ける。やがて全開の状態になっ
たが、

ゾンビはこちらを向く様子もなく、ただゆらゆらと体を揺らしてい
るだけだ。

窓から見た時はただゾンビの個数だけを見ていたので気付かなかっ
たが、このゾンビ、右腕がない。

ホラー映画なんかでは喰われて死ぬと、その死体もゾンビに生まれ
変わるっていうのが定番だ。

だが、これはそれと同じなのか……？

「……………大丈夫だ。やつはこちらに来る気配は無い。」

「な、なんだ。あいつは結構鈍くさいやつだったのか……………」

「それにしてもあれがゾンビか……………こうしてじっくり見るのは初め
てだが、ひどい光景だ。」

……………左右を見渡してみるが、ゾンビはいないようだ。もっと沢山い
るのだと踏んでいたが、

ここはそうでもないみたいだ。できればこういう過疎地帯を探り当
てていきたいからな、

ここ一帯のゾンビを抹殺すれば拠点になるかもしれないな。

ショッピングモールさえ制圧……………というか、占拠できれば食糧もあ
るし、運が良ければ

武器も手に入るかもしれない。その先の事までは考えてはいない。

多分皆もそうだろう。

「一応ですけど、合図は今みたいに近距離とは限りませんから、後は手で合図します。」

藤島は手に注目しててくれ。」

「わかった。」

「とりあえず……静かにここを離れよう。たかが1体とはいえ、ゾンビが目の前だとな……。」

「そうだな。それがいい。」

「緊張していたが、こうしてみると少しだけ滑稽こっけいに思えても来る。まさか襲ってこないとはな……。」

俺が脚を動かすと、皆も無言で歩きだした。

俺達が出た建物の裏。そこは確か、道路があつて、その向こうに川がある。橋を渡っていくと住宅街。

すぐ近くにあるショッピングモールとは方向が違っけどね。成功は俺の手にかかっている。

他の3人はさっきのゾンビがハリボテ状態だったおかげで安堵したような事を言っていたが、

歩きだした途端に表情がこわばり、みんな周りに集中している。

建物と建物の隙間にいるとき、手のひらを見せ合図を出した。『ここで止まれ』の合図だ。

隙間から出て、周りを確認する。俺から見て左側に橋がある。ゾンビはいなさそうだ。

川の水が流れる音がやけに響く。右側の遙か向こうに2体のゾンビがいるが、

地べたを這はつてもがいている。おそらく冬だから道路が凍結している、上手く歩けないのだろう。

「大丈夫だ。右側の遠いところに2体いるが問題はなさそうだ。」
皆は急ぎ足でこちらに来た。さて、ここから橋まで歩くわけだが、

最初の調達までは上手く行ってほしいな。

「道路が凍っていてゾンビも自由に動けないみたいだから、道路のど真ん中を歩こう。」

いざという時には広いところの方が逃げやすい。」

「なんだかすまないな。全部まかせつきりで……。」

「いえ、大丈夫です。これからは協力してゾンビに立ち向かっていきましよう。」

そして、生き延びるんです。何が何でも。」

「ああ……！」

「俺達、生き残れるのか？」

「少なくとも最初の民家で当たりだったら、生存率は格段に上がると思う。」

できれば全員分の武器と灯りを確保しておきたいし、揃えば大概の事なら、

個人でもなんとかかなると思う。」

「そ、そうなのか？」

「と言っても使いやすいものとか色々あるから、そこは個人個人によるけど。」

「それじゃ、やっぱり絶対的な強さってないのか……。」

「格段に強い武器と言ったら銃だろうな。ただ、俺たちに扱えるかどうか……。」

警察署に行つて調達しようとも思ったけど、多分もう全部持っていかれてると思う。」

「そう、か……。」

「銃声一つ聞こえてこないこんな場所じゃ銃の存在自体無いと思つた方がいいと思いますよ。」

最後の一括りは吉成に取られちゃったな。

また歩き出した俺達は油断も許されないこんな状況をシビアに捉えていたが、

実際はそこまでシビアに考える必要もないほどあつけないスタートで早々に油断を招く山場が訪れた。

俺は気を緩める事もなく橋まで歩き続けたが、本当に何もアクシデントは起こらず、

ゾンビも現れなかった。そして、ついに橋の前まで来た。川沿いを歩くのつて案外早いもんだな。

「橋を通る間は挟はさまれたら厄介だ。ゾンビが片方から来たらその逆の方から一気に逃げます。」

挟まれた場合は……片方だけを相手にして突破します。準備はいいですか？」

「あ、ああ、いける。」

藤島が言った。

「いつでも走れます。」

吉成も言った。

「ようし、ここぐらいは無事に突破しよう！」

大門さんも言ってくれた。

「皆さん、ダッシュで橋の向こうまで走って！」

俺が言うともみんな橋の上を駆け抜けた。俺は橋の方を確認する。橋の淵ふちは

道路が3方向に続いてるからな。ゾンビが来るかどうか確認しないと……。

橋の中央くらいで振り返る。

俺達があるいてきた方向は橋から続く道路の左に続く方だ。あの時見えた2体のゾンビはもう見えない。

「大丈夫そう……いや、待て、あれは……ッ！」

大通りに続く、正面へ続く道路から結構な数のゾンビがこちらへ向かってきている！

後数分もたたずにこの橋に着くだろう。急いでここから逃げなきゃ！藤島達は無事に橋を通過したようだ。奥で俺を待っていてくれる。

俺は全速力で走った。

大きめの川を跨またぐ橋だから藤本達のところまで着く頃には流石に少し息が上がった。

「新堂、こっちは3方向からゾンビは見えなかったよ。」

藤島が教えてくれた。そうか、ならこっちはだいたい安全か。

「ハア、ハア、橋の正面の道路からゾンビが群れてこっちに来てる。軽いマラソン気分がいいから少し走りながらで行こう。」

「何！？ 急いでいかなきゃ！」

「いや、まて、そのための軽いマラソン気分なんだ。今全速力で逃げてもし、

途中で疲れきっている時にゾンビに出会ったらどうする？

逃げ切れるはずがない。戦う体力が残っているかすら怪しい。だから、少しでも体力を

温存しながら行こう。戦えれば、こっちにも分がある。」

焦っていた皆も落ち着いてくれた。その後は道路をマラソンのように軽く走っていった。

当たりの家、か。そろそろ吉成が息を切らしてしまいそうだったので、途中で止まった。

「結構進んだな。このあたりの家で調達しよう。家の中は多分誰もいないからゾンビもいないはず。」

クリスマスイヴだから皆外に行ってたんだと思う。」

「いや、自宅でパーティーしてたかもしれないじゃないか。安心してきなぞ。」

「ゾンビ化してるならこの辺にゾンビがいてもおかしくは無いはずだ。それなのにうめき声すら

聞こえてこない。それから自宅でゾンビ化したなら家の中が荒れてるはずだし、

もしこの辺に人がいたならこの辺で騒動が起こってるはずだ。」

「そう、だな。しかし、この辺りは静かだな……。」

「人すらいない証拠じゃないかな。ゾンビ化する対象もいないところも静かなものなのか。」

「とにかく願ったり叶ったりじゃないですか。早目に調達しましょう。」

家は鍵がかかっていると思いますから窓ガラスを木刀で割って入りませう。音でゾンビの有無、

生存者の有無を確認して、誰もいないようだったら包丁と、できれば灯りを入手。

その後は速やかに離脱。いいですね？」

「な、なんで速やかになんだ？ 誰もいない家だとわかったら急ぐ必要は無いんじゃない？」

「家の中に誰もいないとわかったところで、外に音が響く。長居は無用なんだ。

それと探すのは1階だけ。2階以上は絶対に入らないこと。それから灯りは目について見えそうなら

ものがあつたらだけにすること。包丁は必須だけど、灯りはそこまです必要じゃない。

もうすでに懐中電灯は確保できてるからな。」

「OK」

「分かったよ。」

「逃げる準備だけは万全にしておきますね。」
民家の前に移動した。

「よし、それじゃ、まずここで待ってて下さい。ガラスを割った後に戻ってきます。危険そうだったら、

放置して他の民家へ。当たりが出て揃ったら橋じゃなく、別ルートでシヨッピングモールへ向かいます。」

「よし」

「了解！」

了承を得て、俺は窓ガラスの前にたった。リビングが見える。ここなら簡単に入れそうだ。

人気もなし。荒れてもいない。よし、ここならいけるぞ！

俺は、手に持っている木刀を渾身の力を込めて窓ガラスに叩きつけた！！

O p e r a t i o n n a m e & q u o t ; s u p p l e m e n t a t i o n

サブタイトル『Operation name』supplement
ntation” / 補充計画

俺は、手に持つている木刀を渾身の力を込めて窓ガラスに叩きつけた！！

ガラスに罅ひびが入る。俺は何度もガラスを叩き割った。

やがて遮るものがなくなり、ガラスの戸の鍵を開ける。そして家の正面へ。

「守備は大丈夫だ。……で、どうだった？」

「ああ、多分誰もいないよ。深入りさえしなければ安全だ。」

俺達は割れたガラスの破片が散っている床を土足で入り込んだ。

「家の中を土足で入るのはなんだか気が引けるな……。」

「俺だつて気が引ける。」

「そんなことより包丁ですよ。皆さん。」

岸田のまともな発言により会話は無くなり、あたりを警戒しながら台所へと向かう。

調達は仲間に任せることにした。俺は他の3人を守るために当たりへの警戒を解くわけにはいかなかった。

「……あ、あつた！ 肉包丁！ 果物ナイフも！」

「良い包丁が見つかりましたね！ 扱いには注意して下さいよ。」

「ああ、せめて収納できるようなものがあればよいのだが……。」
「なんだか危なっかしいなあ……。」

「切れ味がよさそうな包丁はこれ一本だけ見たいです。後、ちょっとそこにある棚を調べていいですか？」

「ああ、割と手際が良かったからな。探してもいいぞ。」

「はい、……。」

何か見つければよいのだが。灯りの代わりになるものとかはやっぱりもつと欲しいところだからな。

「何かあつたか？」

「単3電池が買ったままの状態のやつがありました。」

「大門さんの懐中電灯の電池は単3電池で点きますか？」

「ああ、俺のは小型だから単3電池で使える。」

「よし、それを持っていこう。撤収だ。」

ガラスを割ったところから俺が先頭になる形で外に出ていく。家の正面に出たが、

ゾンビの気配はない。冬だから外は暗いのだが、いい加減目が慣れてきた。

「そろそろ目がなれてきたと思います。包丁は吉成。君が持つてくれ。ナイフは大門さんが。」

「分かりました。」

「おう。」

「次の民家はどこにするんだ？」

「あ……包丁で怪我しないとか安全なら良かったんだけど、思った以上に危なさそうだからさ。」

他にいい武器は……。灯りもあればいいんだが……。」

「あ、あれはッ!？」

手を前に突き出しながらこちらに向かってくる人影……。視線は感じる。だが、もう少し様子を……。」

「大門さん。あいつを照らして下さい!」

「あ、ああ!」

大門さんの懐中電灯の光が人影と思しきものを照らす。そこには青い顔をして血まみれの人の姿があった!

「に、逃げるおおお!」

俺の一言で全員が駆けだした!

「に、逃げるってどこに!？」

「そんなのわかんねえよッ!」

俺も無我夢中だった。喧嘩が強いとかそういうのとは関係ない。俺だって少しは怖いんだぞ。

前方だけを4人が走る。ゾンビは追いついてこれるはずもなくすぐに距離は開いた。

走っていると、横から目の向いている方向がおかしいゾンビが右から現れた！

しかしこちらに向かってくる。目が見えなくて耳だけ聞こえるタイプか！

手を前に突き出して耳だけでこちらを探ろうとするゾンビ。俺は空いている脇腹わきばらに、

向かって木刀を横に薙ないだ！

ゾンビは横に叩きつけられ、倒れた。うめき声をあげていたがすぐに起き上がった。

恐ろしい生命力だな。おまけに手ごたえありの一撃なのにダメージはたかが骨折程度。

そんなことをしている間にも俺たちは走ってゾンビから遠ざかった。

「こいつら、恐ろしく強いぞ！」

「ハア、ハア、ハア、ハア、そんなにか！？」

「勝てる相手じゃなさそうだ。」

「やる時は頭を狙え、弱点は人間と一緒にだと思う。」

「頭だな？ 了解だ。」

「分かりました！」

しばらく走っていると流石に俺も息切れしてきた。冬場は寒いから体力が持たない。

「こ、この辺で休憩にしよう。」

「ぐへっ、っ、疲れた。」

「ゲホツゲホツ、そ、相当、ハア、ハア、走ったんじゃないですか？」

「ここまで走ったら流石にな……。」

「思ったけどここどこだよ？」

大門さんが聞く。

「ここは住宅街の橋の方ですね。」

「ならあの橋とは結構遠いな。別の橋なら割と近いけど。」

「何ッ！？ ならシヨツピングモールまでかなり時間短縮が出来る

ぞ！」

「なるほど……ここで聞くがショッピングモールに突入するか？」

「な、なぜ今？」

「民家で武器は揃ったが灯りがほしいのは事実だ。しかし、外は思った以上に寒いし、

体力も持たないと思う。暖を取って、今日は休んだほうがよさそう
だ。」

「ショッピングモールが、最適だっというのか？」

「それもあるが、生存者との合流もあり得る話だろ？ 睡眠も交代
でやれば、安全性を高めることだって、

可能な話だ。生き延びるためにはまだまだ足りないものが多い。
ここは、危険な所でも、

行ってみるべきだと思う。」

「今危険を冒してまで行きたい場所なのか！？ 危ないって！」

「それに、生存者が続々と集っているとしたら？ 俺達のような奴
がすでにショッピングモールに、

集まっているとしたら？ 防衛も完璧だろう。戦力的にも足りてい
て、食料もある。

それに、団結しなくて戦っていける相手か？」

「う、そ、それは……。」

「リスクに伴う価値はあると思う。知的にレベルが低いなら、面
倒事も起こせないし、

隠れることもできると思う。」

「そうか、お前が言うなら俺も信じてみよう。」

大門さんが言った。

「大門さん……ありがとうございます。」

「僕もその意見に乗るよ。」

吉成も続く。

「吉成……恩にきる。」

「マジなのか、皆。」

「俺は、マジだ。」

俺が言つと真剣な面持ちで考え込む藤島。

「……分かった、俺も行くよ。」

「よし、意見一致で、シヨップینگモールへ行く！」

「この寒さ……ヤバイ。もう行こう！ 寒くて体が縮こまってもう激しく動けそうにない！」

「よし、橋は近くだ。こっちの橋はそう大きくないから、ダッシュでも駆け抜ける！」

走つてすぐに橋が見えた。これを渡れば、もう一息だ！ ……俺はそうでもなさそうだけど。

「うおおおおおおおおお！」

藤本が最後の力を振り絞つてのダッシュ！ 凄いぞ、あの長い橋のダッシュの時よりも早い気がする！

「あああああああああああああ！」

大門さんも全身全霊の力で走っている！ 冷静さを明らかに欠いているが、

この寒さで天国が近くにあるとなればもう全力で向かわずにはいられないってか！？

一方岸田吉成は……

「ハア、ハア、ハア、ハア、ハア、ハア、さ、流石にこの寒さじゃ

…ゲホツゲホツ、辛……い。」

冷静でありつつもこの寒さで俺の前を走っている。俺はあえてペースを合わせて、

最後尾を走っている。吉成がもし途中でだめそうなら、俺が吉成を助けなくては！

やがて全力で走った大門さんと藤島はペースがガクツと落ちていった。

まあ……予想はしていたが。

「吉成大丈夫か？」

「え、あ、はい。たぶん……ハア、ハア、」

「うつしやあああ！」

ゴールを目前に大はしゃぎする藤島。俺たちはシヨツピングモールの外で走るのをやめた。

ゾンビの気配はなし！ 素晴らしい！ 素晴らしいすぎる！！ パーフェクトだ！

「み、皆、大丈夫か！？」

「ああ、もちろんだ！」

「ゴールだぜ、ゴール！ 天国だ！」

「やっとですね！」

みんな嬉しさを露わにしている。

「よし、それじゃ、シヨツピングモールに入るぞ。俺が先頭、右は大門さんが、左は藤島が、

後ろは吉成が見張っててくれ。」

急に緊張感が伝わる。無言で皆が頷く。

すると、突然シヨツピングモール内から悲鳴が聞こえてきた！

「うわ、な、なんだこいつ！ いったいどこから……待て！ や、やめろおおお！ うぐああああ！」

「ゾンビだ！ ゾンビが入ってきたぞ！」

「きゃああああああああああ！」

「女子供は下がって！ ここは俺達が！」

「お、おい、中は大変な事になってそうだぞ！」

「恐らく2階からだ。生存者がいるってこともこれで潔白になった！ 突入だ！」

俺が先陣を切ってシヨッピングモールの入口へと走った。なんだかなだで俺、体力がまだ余ってたんだな。

他の3人が揃って、形態を整える。それぞれ配置についた。

「この形態で走るぞ。何があっても俺の先には行くなよ！」

「おう！」

「ああ、そうさせてもらうぜ！」

「いつでもいいです！」

「よし、入るぞ！」

叩き壊されていた自動ドアを、俺たちは形振り構わず突破した。
その先には床でピクリとも動かない死体と器官でさっちしてこちら
を振り向くゾンビが待っていた！！

B e d u e l i n g ! (前書き)

サブタイトル 『 B e d u e l i n g ! / 決闘中! 』

B e d u e l i n g !

叩き壊されていた自動ドアを、俺たちは形振り構わず突破した。
その先には床でピクリとも動かない死体と器官でさっちしてこちらを振り向くゾンビが待っていた!!

「こ、これは……ッ！」

ゾンビが5、10、15……だめだ、数えてる場合じゃない！と
にかくここで生存者とコンタクトをとらないと！

俺は小声で指示した。

「皆、ここは下がっててくれ。」

「な、どうして!？」

藤島が聞く。

「この人数相手ではとてもじゃないが全員で無傷での突破は不可能だ。幸いにも入口は壊されていて、

以外と狭い。この狭さだと、おびき寄せる事が出来れば少人数のゾンビを延々と俺が片づけることで、

なんとか突破口が見えてきそうなんだ。これ以外は時間がかかりすぎるし、安全性に欠ける。

だから………頼む！」

「あ、ああ、新堂がそこまで言うなら……。」

藤島も納得してくれたみたいだ。

「ハハ、心配ないって。地区最強ってお前も言ってくれただろ？」

それに新堂って呼び方、

俺の素性を知ったやつらはみんなそんな呼び方はしてくれなかった。呼ばれてみて俺、嬉しかったんだぜ？

だから、皆はここで見ててくれ。俺が、皆の期待にこたえてやるよ
！」

「は、ハハ、そうか、……今後もよろしく頼むぞ、新堂ッ！」

ふ、藤島……！

「おうよッ！」

うおおお、今の呼び方はマジで親友っぽいような感じだ！ やばい、俺、テンション上がる……！

「藤島は後方の見回りをしてくれ。大門さんは懐中電灯で店内を照らして下さい！」

視力が機能してるやつなら気づくはずです！」

「よし、ゾンビ共！ こっちだ……！」

大声で大門さんが叫んだ！ 懐中電灯が店内を照らし、視力があるゾンビがこちらへと寄ってくる。

目がおかしな方を向いているゾンビもきてるが、多分大門さんの策略だろう。

耳が機能してるやつなら確実によってくるぞ！

「……………あの、新堂さん。」

「ん、どうした？ 今から忙しくなりそうなんだけど！」

「皆も頑張っているみたいですから、僕も特技を見せようと思います！」

「ん、特技？」

「例えばこの石。これを使ってですね…………。」

何の変哲もない石。そこら辺に落ちてたやつじゃないか？

「…………ハッ！」

狙いを定めて石をゾンビの群れに投げつけた！

石は最前列のゾンビの頭いや、目に命中し、ゾンビが1体床に崩れ落ちた。ゾンビは目を押さえている。

「僕は投擲とつてきの命中コントロール精度が人一倍優れているんです。

僕の投げた物は絶対にはずしません。これが、僕の特技です！」

「おお、凄いいじゃないか！ なら、重量のありそうな石でも持ってきて、手伝ってくれ！」

「はい……！」

岸田は嬉しそうに重量のある石を拾いにすぐ向かいのところに落ち

ている石なんかを拾いに行った。

「さて、そろそろだな！」

ゾンビがいよいよ破壊されている扉にまで迫ってきた。壊れて崩れていて、通れるところが狭いからこそ、

この戦法が効果的なんだ！　こんの、うめき声ばかりだしやがって。今楽にしてやる！

「うらあッ！」

大きく斜めに振り下ろした木刀はゾンビの頭部を正確に狙っていた。頭部への強烈な攻撃は、

やはり有効なようだ。それと、さっき石に命中して床に倒れたゾンビがいたけど、

あいつ、目を押さえていた。痛覚があるゾンビも存在してるみたいだな。

「まだまだあ！」

すぐ後ろに控えていたゾンビをも頭部への一撃だけで沈め、続く3、4体目もあつという間に始末した。

ここまで倒したら次のチーム待ち。最前列ゾンビがまた入口のギリギリまできたら一気に頭部への

攻撃だけで方をつける。これを延々と繰り返すだけでいいんだ。俺らはこの方法で生き延びてやる！

「へへ、案外もろいな。藤島、守備はどうだあ？」

「おう、全く問題ナーシ！」

「アツハツハ、さつさと始末してくれよ、新堂さんよお！」

「おう、任せとけ！」

「新堂さーん！　石たくさん用意できましたよー！」

「んじゃあ、次のゾンビチームを潰したら一気に沈めてくれえ！」

「はいい！」

こいつは確実にいけるぞ！　……って待て待て、俺達、テンションがおかしくないか？

ゾンビだらけでむしろ焦っていてもいいはずなのに、俺らはなんか

楽しんでないか??

気でも狂ってしまったのか、俺たちは……でも、気にすることは無いか！ 何しろ今は楽しいんだからな！

そろそろ次のチームを始末しないと。こっちに出てきちまう。

「そおらッ！」

右下から左上への軌道で頭部を攻撃。ゾンビは俺から左側へとばたりと倒れ込んだ。

意識なんて残さねえからな！

また入口の狭い通路の分だけ始末。そろそろ足場にゾンビがかさばってきたな。

うざったい限りだ。念のため、足場の安全のために頭を確実に割っておくべきか？

まあ、そんなことは後だ後！ さあ、出番だぜ！

「岸田吉成ー！ お前の出番だぞ！」

「はいはい！ 任せてください！」

そういうと、遠くにいるゾンビに今度は命中。もちろん頭部狙い。

入口の高さは案外高くないのに精度は素晴らしい！ 吉成、お前は
このゾンビだらけの世界で、

唯一の遠距離攻撃が出来るやつなんだな！ 頼もしい限りだ！

次々と頭部へ石が降り注ぎ、やがて大半のゾンビが地に伏した。

石で息の根を止められたゾンビもいれば、まだ息があるゾンビもいる。

まあ、どの道起きれないようじゃ、頭を潰すのも簡単だろう。

「ふむふむ、後6体くらいだな！」

大門さんが言う。

「そろそろ突破するぞー！」

「おおー！」

と、他の3人が言う。

「残りのゾンビは俺が全部始末します。皆は手にしてる武器で地面でかるうじて息があるゾンビの

始末を！」

「御意！ …… って一度言ってみたかったんだよな！ なんか力ツコイイじゃん！」

藤島が言った。

「十分すぎるほどカツコイイじゃないか！」

「あははは、お前には及ばないけどな！」

なんか、この状況でこの会話、不自然すぎる。あれ、頭では常識的に考えれるのに、

行動は全くおかしい。だ、だめだだめだ！ こんなんじゃ、生存者とのコンタクトなんて取れない！

お、俺だけは正気に戻らないと。

そんなことを思っていると、4人全員がゾンビ6体ぐらいを通り過ぎていた。距離は遠い。

俺達だけ突っ走ってんだ！

「アハハ、ハ、そ、それじゃ、処理よろしく。」

俺が言った時には皆すでにナイフやら包丁やら木刀やらで床に倒れているゾンビの頭を、

生死を問わずに叩きまくっていた。鈍い音がめっちゃ響くんですけど！

「ハッ！ハッ！ハアアア！」

気合いの入った声とともに3体のゾンビを一気に始末。おっと、左下に1体ずつゾンビが！

「ほっ！ はあああっ！」

左の的には強烈な腹部への突き、左を落としたところで右へは大きく振りかぶって頭部を割る一撃！

俺、一度行ってみたかった台詞があるんだ。後ろからうめき声が聞こえてくるが、お前に言ってるうじゃないか。

「背後からとは良い攻め方だな、だが、甘いッ！」

腰を捻って、木刀を横に薙^ないだ。案の定後ろにはゾンビ……… って近ッ！

俺とした事がつい慌ててしまい、木刀の軌道が少し下にずれた。

「あ！」

「フゴッ」

ゾンビは床に倒れこんだ。息の根はもうない。ハヤッ！ 死ぬの早いだろ！

ああ、そうか、ずれた軌道は頭部ではなく、首を狙った一撃へと劇的变化を起こしていたんだね！

なるほど、首も弱点か。首の骨を砕けば、それだけで即死級だからな。

血こそでなかったものの、首の捻り具合がこれまたグロテスクだ：

…。

「おい、片付いたぞ、そっちはどうだい？」

「全部始末しといたぜ！」

「案外ちよいもんですね。ゾンビって。」

「俺の木刀の活躍の場がもちだくさんだったぞ！ 俺ももう一人前のゾンビバスターってかあ？」

「ハハハ、まだだろ！ でも、これから俺たちはそうなるかもしれないんだぜ？」

「そうだな、そうだったな！ これからもこのメンバーで生き残ろう！」

「ああ！」

「僕もこのメンバーは良いと思います！」

「偶然揃った面子がまさかこうも愉快なやつらだったとは！」

賑わってるな俺達！ だが、まだ恐怖は終わらないぞ……。

「きゃあああああああああ！」

「来るな、来るなああああ！」

「怖いよ、お母さん！ お母さあああん！」

「この化物めえ！」

その後にゴスツと鈍い音が……

たのに、もう血だらけだ。

「あ、ありがとうございます！」

「礼には及びません。あなたは他の生存者達をまとめてください。ゾンビは僕も始末しますので、

援護を呼んでください！ お願いします！」

すると男は言った。

「そ、それが、他の武器を持ったメンバーは他の女子供を守るのに手いっぱい……、

俺たちにかまってる暇は無いんだ。すまないが、援護は……。」「

「なら、武器になりそうなものの調達を！ 軽めで丈夫で、棒状の物があれば回収してくれませんか？」

「わ、わかった。探してみる！」

男はすぐに走って探しに行った。

「あんなに急がなくてもよかったのに。」「

すると、次の悲鳴が！

「クソ、クソ、どこから沸いてきやがるんだこいつら！ どっかにいけ！」

荒い息使いで一人用の椅子を持ってゾンビを押ししている男が！

もう息も上がってるし、このままでは男の命が！

「クソ、クソ、ハア、ハア、ハア、く、来るなアアア！」

ついに渾身の力で男はゾンビの群れに向かって椅子を放り投げた。

7体のゾンビに対して3体が負傷、2体が軽傷と言った運の良いダメージとなったが、これじゃだめだ！

「ハア！」

男に気を取られていたゾンビに渾身の力で木刀を振り下ろした！

続いてもう1体！ 更に男の近くまで寄っていたゾンビの脳天を力ち割るほどの強烈な一打！

軽傷のもう1体のゾンビを突きで飛ばし、その後再び脳への一撃。椅子でけがしたゾンビはまだ動けそうになさそうだ。

「大丈夫ですか！？ ここは危険です。さあ、逃げましょう！」

「あ、ああ、すまない！ 君には感謝の言葉も出ない！」

「こつちです！ あ、僕はこの椅子で動けない奴らも始末した後に行くんで、お気になさらずに！」

そういつて何の迷いもなく動けないゾンビ3体相手にそれぞれ1ずつ、木刀を振り下ろした。

「さて、次は……。」

「な、なんだこのゾンビ！？ クソ、いい加減にしろ！」

「その声は藤島か！」

走り寄って声のもとへ！ 藤島の木刀をゾンビが手でつかんでいる

！こ、これは一体……

「グッ……は、離せ！」

「……………」

ゾンビは何もしゃべらない。当然だ。ゾンビはゾンビ。しゃべるはずもな……

「キサ、マ ニ コンナ、モノハ 必要ナイ」

「なっ……………」

「ぐわっ！」

ゾンビが掴んだ木刀で藤島を押すと、藤島の体制は崩れ、床に倒れ込んだ。

「コン ナ、モノ」

ゾンビは木刀を投げ捨てた！ ってこれは、捨てたのは俺の方じゃねえか！

カラカラと床に落ちる音。そして俺はちょうど自分の足元に落ちた木刀を拾った。

「ツ、ギハ、 オマ エ ガ シマ ツ サレ ル ト、キダ」

「く、くそ！ やっぱり俺じゃゾンビには勝てないっていうのか……

……

俺は気配をでいるだけ出さずにそのゾンビの後ろへと回った。

「オレガ キサマヲ クツテ ヤロ ウゾ」

ゾンビが口をあぐりと開けて藤島に襲いかろうとしていた！

「うわ、来るな！ 新堂さえいてくれれば！ クソがッ！」

上手い具合に藤島が繰り出した蹴りが顎あごにヒットしたらしく、勢い余あまって仰向け

になるように倒れた。よし、俺の出番はここだろ！

「いや、違うな、お前が俺の木刀の餌食えじきになるんだよ！」

そう言っつて木刀を思いつきり顔面に叩たたきつけた！ 鈍い音と、つぶれた顔面。想像以上にグロいな。

「藤島！」

「た、助かったあ！ ありがとう！」

「逃げるぞ！ こいつ、危険だ！」

「うし！」

こうして藤島を逃がした。さて、俺はこいつにもう一太刀浴びせなくては！

ゴス 脳天への一撃。こいつ、ゾンビのくせにしゃべるとは。知能が生きてやがったんだ！

この事を急いで報告しなくては！

俺は粗方始末したゾンビを置き去りに、藤島達が駆けた道の後に続いた。

The assembled company (前書き)

執筆中に突然用事が入り、急ぎめで執筆してしまいました。
文章を修正しましたので是非見てくださいね。

サブタイトル 『The assembled company /
集いし者達』

The assembled company

俺は粗方始末したゾンビを置き去りに、藤島達が駆けた道の後に続いた。

「あ、新堂！ 早かったな。さっきはホント助かったよ！ サンキユーな！」

「いいつてことよ！ 俺達、修羅場を潜り抜けてきたメンバーじゃないか。」

「ああ、ところでそれ、俺の木刀か？」

「ん？ ああ、これか。さっきのゾンビの背後にこっそりまわろうと思ってたら、偶然木刀が俺の足元に落ちてな。」

「いいでがてらに感じてとってきたけど。ホラ、次は絶対に離すなよ？」

「おう、すまねえな。」

「新堂、ゾンビはもういないか？」

「ん、この辺はもういないと思う。女子供とその護衛はどこにいったんだか……。」

「ああ、女子供なら1階だそうだ。」

「1階！？ マズいぞ。藤島、行くぞ！」

「まあ待て、そう焦るな。確かに1階だが、頑丈なバリケートを作つて立てこもってるんだ。」

「言ってしまうば、2階經由じゃないといけない場所なんだ。だから安心して1階に籠れるってわけさ。」

「な、なるほど。そしたら、さっきの2階からの悲鳴はどうして？」

「食糧の確保だったらしい。バリケートを作った事で食品売り場までの距離がグッと伸びたからな。」

「皆で手分けして運ぼうってことになってたんだが、それでこの有様だ。ほら、2階に上らなとダメだろ？」

ゾンビってホント厄介だな。」

「そ、そうだ。生存者がいるならコンタクトを……。。」

「よし、早速行ってみよう。」

「バリケートの中は向こうのエスカレーターを降りた先だ。俺は向こうで手当てしている岸田と一緒に後で行く。」

「分かった。必ず戻ってこいよ。」

「そんな大げさだなあ。岸田がいるんだぜ？」

「だといいんだけどな。」

大門さんが自信満々に言うので俺たちは信じてエスカレーターを降りた。

「さて、ここがバリケートの中だな。」

「うわわ、ゾンビ……の死体？」

「向こうにいるみたいだな。」

俺たちはバリケートの奥を進んだ。すると、本当に女子供、それに護衛を務めていたらしい、

武器を手にした人や、体格の良い男も一緒だった。

「君達も食糧目当てか？」

リーダー格の雰囲気を放つ男が言った。手には金属バットが握られている。

「そ、そうです。」

「そうか、よくここまで来れたな。ここは安全だ。そういえばさっき1階で愉快そうな声が聞こえたが、

あれは君達の声なのか？」

「あ……。」

そ、そういえば！！ テンションが上がっていてあの時はとんでもないような事を……！！

こ、このままでは信頼に影響が……。

「その様子だと君達のようにだな……。」

「あの、俺達、メンバーを集めてるんです!!」

「メンバーだと？」

「はい、ゾンビに対抗するためにはどう考えても仲間は集まったほうが有利です。」

「確かにそうだな。だが……仲間を集めてお前はそいつらを導いてやれるのか？」

「導く……？」

「そうだ。仲間はいればいるほど、護衛も必要になってくる。集める食糧の量も増えるし、

小数精鋭で今まで頑張ってきた君達には無理があるだろう？ さっきの声も尋常では

なかった。そんな信用もないやつらの言う事など聞けないな。」

「な、……………そうですか。藤島、行くぞ。」

「お、おい、新堂！」

「これ以上何を言っても無駄だ……俺達は信用を欠いた。これは当然の結果だ……………」

何をやっているんだ俺は！ 大事な正念場せいねんばで相手の信用を欠いてしまった。

これでは、チームのリーダー失格だ……………。

「ま、待ってくれ！」

突如、護衛の後列の男が声を上げた。

「そ、その人はの命を救ってくれた人だ。そこまでキツク言わなくても大丈夫だぞ、きっと。」

「お、俺もだ、ギリギリのところまで助けてもらったんだ！ さっきのは言いすぎなんじゃないか？」

「きっと良い人達ですよ。それに、こんな世界でも赤の他人を助けてくれるような人、

悪い人のはずがない！」

「……………」

リーダーと思しき人が真剣に考え込む。さっきのは助けた人たちじゃないか。

最初の方はゾンビの顎を蹴りあげた人。次にしゃべったのが、椅子

で押していた人、最後の人が、知能を持った厄介すぎるやつに襲われそうになった人だ。

「新堂、どうだった？」

大門さんが聞いた。藤島が状況をこっそり耳打ちしてくれた。

「今がちょうど正念場なんです。大門さんは新堂を信じて見ててください。」

「あ、ああ。」

「分かりました。」

「岸田吉成まで聞いていたのか！？ 大門さんだけに耳打ちしてただけど……。」

も、もしかして、吉成って意外と地獄耳？」

「……わかった、君達のここへの出入りを許す。」

リーダー格の男が言う。

「ありがとうございます！」
頭を下げて言った。

「ね、ねえ。一番前の君。」

「は、はい？」

一人の女子高生のような女性が聞いてきた。

「あなたって、新堂って呼ばれてたけど……新堂幽しんどうゆうって名前だったりする？」

「え、ああ、そうだが……。」

「噂は聞いていたけど、意外と暴力的なイメージじゃなさそうな人ね。」

あ、噂はやっぱり知ってる人は知ってるんだね……。

「アハハ、そう言ってもらえると光栄です。」

そりゃ、そうだろ。高校に入ってからには律儀になったんだからな。制服もしっかりボタンはきちんと閉めていたんだぞ、俺。

「え、地区最強っていうあの新堂！？」

「こいつは凄い来訪客だな……。」

「新堂君が味方なら安心ね！」

「よろしくね、新堂君！」

いつきに場のモチベーションが上がった。あれ、俺ってそこまで凄
い扱いされてるの？

なんか鼻^{ひいき}肩^{かた}されているみたいで気が引けるんだが……。

「そ、それと、ここは本当に安全なんですか？」

「ん、ああ、その壁際に置いてあるでかいやつでエスカレーター
を塞げば、

寝床ぐらいは作れると思うんだ。だが、実際はまだ心配だから、
護衛が夜も見張りをするって感じた。」

「な、なるほど……。や、やばい、そろそろ……。目が……？」

「おい、新堂！？」

「新堂君！？」

俺はぼつたりとその場に倒れた。目が開かない。俺の身に一体何が
……！

すまない、皆、俺はもう……。ここでリタイアだ。皆だけは絶対に助
かれよ。

藤島、大門さん、吉成。いままでありがとう。ここで、さようなら
だ。もっと皆と一緒にいたかった……。

視界だけじゃなく、意識まで暗闇に飲まれていく気分だ。俺の意
識は闇の中へと消えていった……。

B r u t a l n i g h t , D a n g e r o u s M o r n i n g (前書き)

藤本視点

サブタイトル『**B r u t a l n i g h t , D a n g e r o u s**
m o r n i n g / 残酷な夜、危険な朝』

すまない、皆、俺はもう……ここでリタイヤだ。皆だけは絶対に助かれよ。

藤島、大門さん、吉成。いままでありがとう。ここで、さようならだ。もつと皆と一緒にいたかった……。

視界だけじゃなく、意識まで暗闇に飲まれていく気分だ。俺の意識は闇の中へと消えていった……。

「おい、……新堂？ 新堂ツ！？ 起きろよ！」

「ま、まさかこの瘴気せうきにやられちまったっていつのか……？」

「新堂さん！ しっかりしてください！」

「息はまだある……。だが、すごい熱だぞ！」

「グッ……こういう時に物が揃っていれば……。俺、何か役に立ちそうなものを取ってくる！」

「いや、無理に行動するのは得策ではない！」

リーダー格の男が言った。

「モタモタしたら新堂が！」

「新堂、彼は瘴気せうきで病に伏したわけではない。確かに汗もかいていて、

熱もあるが……。今までの活躍から見て病気の線は確率が低いだろう。それこそ赤の他人を救う余裕などなかったはずだ。」

「なら、なんで……！」

「これは憶測だが、お前達の中では一番……というか、新堂君が群を抜いて行動していなかったか？」

「え、ああ、そうだ。確かに新堂は群を抜いてずば抜けた感性と行動力で俺達を率いてくれた。」

「だったら話は簡単だ。新堂君は過度な疲労を一気に蓄積させたために今こうして倒れてしまったのだらう。」

たかが1日とはいえ冬に外で過度な疲労をため込んでいれば流石に

彼でも倒れるだろう。

最も、常人では彼よりもはるか前に倒れていただろうがな……。」

「な、なんだ、ただの疲労かよ……。」

「そ、それじゃ、新堂君は……！」

「命は助かるだろう。休養を取ればいずれ体力も復活するさ。」

そういえば自己紹介がまだだったな。俺は高杉たかすぎ 光一こういちというものだ。

シヨッピングモールを拠点にして活動……しようとして計画している。

よろしく頼む。」

「俺は藤島ふじしま。藤島満みつるって名前だ。こちらこそ。」

「俺は大門将おおかどしょうという名前だ。よろしく。高杉さん。」

「僕は岸田吉成きしたよしなりという者です。よろしくお願いします。」

「新堂君についてだが、休養を極力優先させたい。中途半端な事で
ゾンビの餌食にはできない。」

完全回復を待つようにと、目覚めたら伝えておいてくれ。」

「分かりました。」

「では、俺はもう一仕事をしなくてはな……。」

「ま、またゾンビの場所に行くんですか!？」

「我々には、まだ持久戦に持ち込む余裕などない。食糧はバリケ
ートの向こう側だ……。」

『腹が減っては戦は出来ぬ』。実際に食べている者、食べていない
者との差は歴然だ。

だからこそ、食料は何としてでも手に入れる。それほどの価値はあ
るんだ……。」

「今確保できているのはどれくらいですか？」

「まだ確保には至っていないんだ。ゾンビを押しつけてバリケート
を作る作業で手いっぱいだった。」

それに食糧目的で挑んだ者もいたが、そいつの末路は……もう分か
っているだろう？」

「……………」

「せめてと思って2階とバリケート内のゾンビは殲滅せんめつしたが、

1階は広い。バリケートの3倍はある。2階に上るゾンビはごく少数だったが、1階となるとな……。」「

「ど、どうするんです？ そのゾンビは……。」「

「早期討伐が目標だが、戦力差がありすぎる。恐らく一撃離脱の形は取らざるを得ない。」「

「新堂が、元気になってくれれば……。」「

「彼は相当の実力者と見た。来訪して短時間だがすでに3人も救出し、おまけにここまで来る体力、

精神力……どれをとっても申し分ない。彼は一体どれほどの強さなんだ？」「

「ゾンビ7体をものともしない木刀捌きさばであつという間に倒せる強さ……です。」「

「7体も相手に……ッ!？」

「常に戦況を把握できる冷静さもあると思います。だから、実質1ガ体1チンコの勝負では、

負けなしと考えてもいいと思います。」「

「むう、有力な人材だ。なら、やはり彼の命のためにも食料は必要だろうな。」「

「できれば……そうしてあげたいです。」「

「電気が使えない今、冷凍食品や冷蔵庫にあるものが前提の食糧はナシだ。集める食糧は

必ず常温でも長持ちするものがいい。」「

「なら、スナック系のお菓子とかですね。」「

「問題はどうかやってあのゾンビを突破するかだな……。」「
突破の作戦を練っていると、突如バリケートの外から声が聞こえてきた。

「うお、ここがショッピングモールか……ここまでひどい事になっているとは。」「

「ウグ、ここにはいないみたいだが……！ 距離はあるが向こうに蠢うごめくなにかが……。」「

「大量のゾンビか!?」
「多分、食品売り場の方だ。あれをどうにかしないと食べ物にはありつけそうにないぞ。」
「へへ、心配無用! 俺、警察のゾンビを倒した時に拳銃を奪っておいたんだ!」
「銃弾は何発あるんだ?」
「この銃にはもう2発入ってる。リロードを含めると8発分だ。」
「おお、凄いなお前!」
「それと、警察が結構やられていた場所があるだろ? ほら、街の大通りのあそこ。」
「ああ、あそこか。」
「あそこから1つ、良いもん盗んできたんだよ……。これだ!」
「そ、それは……。ッ!」
「そうさ、手榴弾だよ!」
「な、なんで警察が……。」
「自衛隊も挙って前線で戦ってただろ? あの通りはかなり危険だけど、報酬は優秀すぎるぜ? とりあえず、これぶつ放してやろうぜ!」
「ああ! やつちまえ、伸介ええッ!」
ガチッとピンを引きぬく音がした。
「そらよっと!」
「おおおお、ゾンビ共の距離まで軽々と……。」
「これでも円盤投げじゃあ良い記録だしてたんだぜ?」
「というか、ゾンビの群れの奥まで行っちゃまったぞ……。」
「え、まさか、飛ばしすぎたか……。?」
その後には派手な爆発音が響いた! 爆風の音も聞こえてくる。バリケート越したとホント安全だな。
「ッヒヤッハー! 流石に凄い威力だな!」
「見るよ伸介! 蠢いてたやつがほとんどなくなったぞ!」
「これで食糧に関しても安泰だな!」

おお、食料がいとも簡単に手に入りそうだな。これはチャンス到来か!? 見知らぬ来訪者に感謝だ!

「いようし! 持ってこれるだけでもっていくぞ!」

「おう!」

店内を走る音が静かなバリケート内に響く。

「これはチャンスかも知れんぞ。」

「うわわ、高杉さん!? いつからここに!?!」

「手榴弾云々の話ぐらいから聞いていた。絶好のチャンスだが、ここはもう少し様子を……。」

銃が使えるあいつらなら、残党ゾンビも始末してくれそうだしな。「なるほど。」

これで、大分危険が減った。新堂、待っててくれよ。もう少しで旨い菓子でも取ってきてやるからな!

すると、バリケートの外から男の話声が聞こえてきた。

「おおお、ゾンビが壊滅状態! やったな、伸介!」

「何言ってるんだよ。あの大通りの時に武器を回収して行こうって言ったのはお前じゃねえか。」

お前も少しは役に立ったような態度とつてもいいんだぜ?」

「ハハ、でも使う度胸が俺にはないからな……。なんだかんだで役に立つようにしてくれてるのは、」

伸介、お前なんだよ。俺にはこれぐらいしか……。」

「実際はそうかもしれないけど、俺らはここまで生き抜いてきた仲間じゃねえか。」

謙遜は無用! そうだろ?」

「……ああ、そうだな。スナック系の菓子でも取っていこう。腐るのは御免だからな。」

「おうよ!」

歩く音が遠のいていく。ああ、待ってくれ! そろそろ聞こえなくなってくる!

「く、距離が遠い……!」

「俺にも聞き取れん……。」「

すると後ろから吉成が言った。

「僕に任せてください。」「

「よ、吉成……。」「

「こつ見えて僕、耳が結構良いんです。多少遠くても聞きとれます。」「

「すまない、俺の代わりに聴いてくれないか。」「

「はい。」「

吉成が答えた途端、遠くからでも聞こえるほどの大きい声の悲鳴が聞こえてきた！

「うわああああ！ な、なんだこのゾンビ！」「

「こいつ、普通じゃねえ！」「

「うて、撃つてくれ！ 伸介ッ！」「

「クソ、くたばれえええ！」「

銃声が響く。

「当たったぞ！」「

「でもこいつ、こつちに寄ってくるぞ！」「

「クソ、クソオ、なんでだよ！」「

2発目、3発目の銃声。

「駄目だ！ こいつに銃は聞かない！ 逃げるぞ！」「

「うああああああああ！」「

絶叫と走る音、一体バリケートの外では何が……。な、なんかバリケートも安心できなくね！？

「ここのバリケートはホントに安全なんですか！？」「

「ああ、見ての通りどこも何重にも重ねてある。銃器でも通しはせんさー！」「

「ところで、さっきの声って……」「

「……未知のゾンビがここにいるという事だろう。ますます油断はできない状況になってきた。

今日は俺を含めた護衛が交代で、バリケート内に限るが見張る事に

する。

その代り、俺たちは朝交代で行う。護衛の半数ずつでやれば、効率的だろう。」

「食料の調達はどうします?」

「……今夜は断念したほうがよさそうだ。未知のゾンビを夜目が利かない我々では、

勝算は薄い。それに、銃弾を3発も受けたんだ。深手ふかでまぬがは免れないはずだ。」

「そう、ですね。」

「今夜は我々が見張る。君達はもう寝てもいいぞ。」

「わ、分かりました。それじゃ、お先に……」

「僕も寝かせてもらいます。お先に失礼します。」

「ああ、しつかり寝とけよ。」

高杉さん……仲間には最良の計画で考えてくれる良い人じゃないか。俺、勘違いしかけてたよ。

うう、急に眠気が……。新堂、早く回復してくれよ……。

俺も不覚なことに睡魔に黒の世界へと引きずり込まれていった。

その後の夜については、当然知る由よしもなかった。

そして、朝が来た。太陽の光が店内を照らす。

「う、ふああ……ああ。」

大きな欠伸あくびをして、体を起こす。今、何時だろ。腕時計……はない。家だ……。

なんで持ってこなかったんだ俺は!

俺が見渡すと護衛がしっかりと見張りをして……いないだ?!?

一体何があったんだ!

女子供も大半が姿を消している。というか、俺を含めてバリケート内に6人しかいない!!

ど、どういうことだ……!?

朝の陽ざしを喜ぶ状況ではなさそうだ。6人のうち4人は俺達だ。

新堂、吉成、大門さん、そして、俺だ。ほかは、高校生と思える女性が2人。

「大門さん、吉成！今すぐに起きてくれ！」

「う、う、一体どうしたんですかあ？ 藤島さん……」

「寝ぼけてる場合じゃない！ 緊急事態なんだ！」

「う、………って、それホントですか！？」

「バリエート内のやつらを全員起こすんだ！ あ、新堂は寝かせてやってくれ。」

「OK！」

俺と吉成の二人でなんとか新堂を除いた全員を起こして集めた。

「一応確認するけど、護衛がない理由を知ってる人はいるか？」

「……………」

全員が知らないみたいだ。これはマジだ。新堂が寝込んでいる今、俺が何とかしないと……。

「護衛、それから女子供の大半。………というか、俺たち以外が全員バリエートにいない。」

見て分かると思うけど、異常事態だとは思わないか？」

「そ、そりゃそうだが、朝で明るいんだ。食糧を取りに行っただけかもしれないだろ？」

「足音が一つもない。ゾンビのうめき声すら聞こえてこない。静かすぎるとは思いませんか？」

「………確かに、な。」

「俺が思うに、いよいよバリエートの中も安全とは言えない状況じゃないかと思う。」

いざという時の為に、破れないバリエートを登って降りれるように逃げ道を確認しておいた方が

良いと思うんだ。朝で腹もすいていると思うが、安全第一だ。

逃げ道確保が出来次第、バリエートに上れたら、そこから外を見てもみようと思うんだ。

それからだ。食糧にありつくのは。」

まともな感じにまとめてみた。新堂のマネだけど、こゝ、これでよかった……のかな？

「あの……」

女子陣から始めて声が。

「ん、どうした？ 気軽に言ってくれ。」

「バリケートを登るなら、あそこにある脚立きやたつがあるのでそれを使うつてのはどうでしょう？」

「おお、バッチリだ。逃げ道だから、入口側にセットしておくか。俺は脚立を真つ先に持ち、入口に近く、バリケートが一番手薄そうなところに立てた。」

(どこも手厚いのだが、見た感じでの判断で)

「それじゃ、外を見てみる。」

「頼むぞ、藤島君。」

大門さんが言う。

「藤島でいいですよ。大門さん。」

「分かった。」

どれどれ、外は一体……。

朝日が差していて、ゾンビの死体だらけだ。どこにも動くものなんか見当たらない……！！

今、遠くで動く何か！ 結構大きいぞ！

「あの、皆さんよく聞いてください。」

皆が俺に集まる。

「大きい何かが動いていたのをちらつとだけですが確認できました。昨日偶然にも来訪した人がいたんだけど、その人たち、手榴弾を使つたんだ。」

それでもなお生きているゾンビがいる。そいつと出会ったら、俺たちでは勝ち目は薄い。

生存者は、理由は分からないけど俺達だけだ。食べる対象がいなかったら、

やばそうなああのゾンビもどこかへ行ってくれるかもしれない。それ

まで待とう。」

「……そうだな。確たる勝算無くして勝てる相手ではなさそうだ。」
「やだ、怖！」

女子が言う。この人かなりキャバい女性だなあ……。金髪だし、肌の色が黒っぽい……。

もう一人は控えめそうで綺麗で長い黒髪で、お淑やかなのに……、この差はでかいぞ。

すると、突如、低いうなり声のような声が聞こえてきた。

「ウオ”オ”オ”オ”オ”オオオオ……」

「な、何だこれは！」

「店内の奥から聴こえてくるぞ。」

「わ、私、なんだか怖い……。」

「み、皆さん、遠くから走ってくる音が……」

「へ？ そんな音は聴こえてこな……いや、聞こえる！」
ドツドツドツドツドツドツ

重みがある音がどんどん近くなってくる。そして、決定的な唸り声が聴こえてきた！

「ヴオ”オ”オ”オ”オオオ！……」

ドシヤアアアアツ

バリケートの内側から聞こえてきて……って、バリケートが破壊されている……！！

「逃げるぞ！ 女性から先に逃げてください！」

「に、逃げるわよ！」

「きゃああああ！ い、急ぎましょう！」

急いでいる割には手際よく全員がバリケートを越えて、入口に出た。もちろん俺達は木刀もナイフも包丁も持参してる。

「よし、これで完璧だ！ 逃げるぞ！ 全員いるよな？」

「いるに決まってるじゃん！」

「私も無事です！」

「よし！ 外に出るんだ！」

「ま、待て！」

大門さんが遮るように言う。

「大門さん？ どうかいましたか？ 急ぎますよ！」

「新堂が置き去りだ！」

大門さんの力強い一言が辺りに響いた。

「あッ！ しまっ……！」

バリケートの中から更にドシヤアアアアつと崩れる音。

「し、新堂！ 新堂オオオオオオオ！」

クソオ！ 俺は馬鹿か！！ 命の恩人の事を気にもかけずに安全に

ノコノコ脱出……俺は、人間失格だ！

命を救ってもらった仲間を気にかける事も出来ずに何が仲間だ……

ッ！

目から涙が溢れ出てくる。

「ウツ、ウツ、新堂……！ 新堂オオオオオオオ！」

俺は走り出そうとしたが、大門さんが腕を掴んできた。

「は、離してくれ！」

「危険すぎる！ た、確かに新堂は俺達の恩人で仲間だ！ だが、

二の舞になつてもいいのか！？」

良いはずがない！ 少なくとも新堂は、そんなことは望んではいな

い……！」

「だけど、新堂が！ あいつは自分の神経を限界まですり減らして

俺達の事を……！」

「俺だって！ 俺だってできるならバリケートの中に戻りたいぞ！

だが、こらえるんだ！ ここで耐えずしていつ耐える！？」

「だ、だけど！」

「いいから逃げるぞ！ ここはもうダメだ！ 危険すぎる！」

腕を引っ張られて走らされた。俺は、新堂を……新堂を助けなきゃ

……ならないんだ……！」

だけど、大門さんの力が強くて引っ張られ続けた。

すると、シヨツピングモールから人影が走って外に出てきた瞬間を見た。

まさか、ゾンビか……！？ 走るなんて聞いてない！

「皆、走ってくる何かが！」

「何！？」

「ど、どこお！？」

「シヨツピングモールの方です！」

「あ、あれか！ 一体何なんだ！？」

「あ、もうひとつ後ろから人影みたいなのかが……。」

「なんだよ！！ 一体どうなってんだああ！！！」

大門さんが声を上げる。

「お、落ち着いてください！ あ、あれは……。」

目を凝らしてみる。正体がかめるまでは油断大敵！

見えるやつなら、視覚が機能するタイプだ。走るゾンビは前代未聞だが、一応な……。

生存者だといいな。できれば、高杉さんが一番望みのある線だと思っ

それでも望みは薄いけど……さ。気休みにしかならないか。

「視力がいいのは藤島だったな。何か見えたか！？」

「えっとあれは……ッ！！！！！」

「ど、どうした？」

「あれは……！」

また、ドツと涙が溢れてくる。あいつは、あの姿は……！

「し、新堂幽……！！！！！」

「新堂が！？」

「エエ！ 新堂さんが！？ やっぱりあの人は凄い！」

「だといったら、その後ろは一体……見えますか？」

お淑やかそうな女性が聞いてきた。えっと、後ろは……。

「あれは……ゾンビだ！」

「ええええ！ それ、チョーヤバイジャン！」

キヤバい女性が言う。新堂！ 頑張つて逃げ切れ！

「どんどんこつちに来るぞ！」

「あのゾンビ、相当でかい！ バリケートを壊したやつじゃないか！？」

「嘘でしょ……！？ に、逃げましょう！」

「ダメだ！ 新堂を思いではいけない！」

「あんなデカブツに勝てると思ってるわけ！？ 馬鹿ジャン！？」

「俺はあいつの事を1度見捨てちまった。今度はもう見捨てるわけにはいかない！」

逃げたいやつだけで逃げてくれ！ 俺は新堂と同じ道を進むツー！
そうしている間に新堂と俺達の距離は100m弱となった。

「もう無理！ 逃げるし！ あんたらで勝手に死ねばいいジャン！」
キヤバい女性が逃亡。関係ないな！ そして、新堂は俺達もとこ
で止まった。

後ろのゾンビは走れると言っても、相当遅いな。新堂の半分ぐらい
しかスピードがない。

距離もまだ500mは余裕であるだろう。

「新堂、無事だったのか！」

「ああ、ハア、ハア、バリケートは壊れた瞬間にバケモノとご対面
さ。木刀持つて逃げてきたよ。」

「で、でもどうやって……！？」

「ああ、上手い具合にバケモノの脳天に一打入れたんだが、全く効
果なしさ。だから、後退した。」

そしたら、偶然バリケートを上から昇つて外に出れそうな脚立があ
つてさ。

降りてみたらすぐに入口でさ。走つて外に出てきたよ。あのゾンビ
は何もかもブツ壊して、

俺を追っかけてきてるみたいだけだな。それより、あのデカブツ
を撒くぞ！」

「おっけい！」

進んでいった。

「俺たちは、生き残ったぞ!!」

新堂の一言で俺達に元気がわいてきた!

「コンビニで食料にありつこう。」

自動ドアが動かないので木刀で割って中には言った。

「おっと、店員は黙ってな!」

中に1体だけいたゾンビの脳天に一撃! ゴスツと重そうな音が響く。

新堂は動かないゾンビの服を掴んでガラスの割れ目からゾンビを投げた!

凄い腕力だな……。見た感じ中学生のような体格のゾンビだけどさあ……。

「ご飯中にゾンビを見て食うのは気が引けるだろ? さあ、何か食べよう!」

すました顔で新堂が言った。

俺は鮭のおにぎりを手に取った。包をあけて、ご飯にかぶりつく。

ああ、美味しい。ここまで美味しく感じたおにぎりは初めてだ。

俺はこうして生イソチというモノを噛みしめて皆と共にご飯を食べた。

自分でも今気付いたが、おにぎりを食べている俺は同時に目から一筋の涙を流していた。

F i v e r u n a w a y s w i t h a p a s t (前書き)

視点は新堂 幽に戻ります。

サブタイトル『Five runaways with a pa

st / 逃走者5人の過去』

Five runaways with a past

やった。やってやった。ついに、俺たちは無事に食料にありつけている。

今まで、ここにたどり着くまでにどれほど苦労した事か。

……今考えてみると、本当に仲間を引っ張り回してしまっただけじゃないか。

そつだ。そもそも食糧にありつく程度の事はコンビニでも事足りる話だった！

寝床も、視界を封鎖してしまえばゾンビではどう考えても立ち入るはずもない。

……なんてことだ。結局、俺は仲間に辛い思いをさせてしまった。

こうして食糧にありつけている今、皆は苦労を忘れて空のお腹にどんどん食糧を放り込む。

皆、幸せそつだ。安全に食料にありつけているからだろう。この結果は本当に奇跡的なものだ。

走っている時には偶然右を俺は選んでいた。その次の右に曲がる事は確定していたけど。

ただ、コンビニが逃げた先に構えてあったのは本当に救われた。

だから皆全力で走れたし、けが人もいない。これは、偶然が生んだ賜物だ。たまもの

走るゾンビを想定できずに、皆を撒きこんじたのは飯の後で皆に謝あやらないと……。

弁当に大体ありつけて、全員が満腹そうな顔だ。そろそろ、言い時か。言いたい事は早目が一番だろう。

「皆、すまない。俺のせいで、あんなゾンビから逃げ回る事になっちまって……。」

「ん？ 何言つてんだ、新堂は。誰のおかげで全員生き延びてると思ってるんだ？」

「いや、そりゃあ、今は奇跡的に全員無事だけだ。」

「俺は、お前の声がなけりや逃げなかつたかもしれない。他のみんなもそうだろ？」

「おう、お前を見た時は俺も立ち向かう勢いだったぞ。」

「皆で立ち向かえば、どんなゾンビだって勝てますよ！」

「……………皆。」

「全く、いきなりしんみりと何を言うかと思えば。個人のミスはチームでなんとかする！」

これは常識だろ？ 新堂君、君一人で積荷^{つみに}全てを背負う必要は全くない。」

「大門さん……………」

「そうだぞ、新堂。頭に血が上って、お前の事を一度見捨てちまつた俺にもその積荷……………」

背負わせてもいいんじゃないか？ むしろ、そこは俺が持つべきだろ？」

「藤島……………」

「相当疲れていたんでしょ？ 仲間のためばかりに命をすり減らすのもどうかと僕は思います！」

「吉成……………」

皆、皆……………ありがとう。俺は、心のどこかでその言葉を待っていたような気がするんだ。

う、ヤバい、俺、涙が出そうだ。泣くな俺！ ここはチームを活気づけてやるのが最良な場面だ。

これ以上しんみりするの……………。

「まあ、深く考え込まないでさ。腹も久々の食糧つつうわけで、あんまり派手な事は出来そういない。

だから、ここはひとつ食休みも兼ねて……………いままでの過去を語るつてのはどうだ？」

「今までの過去？」

「そう、今までの過去。あ、と言っても俺たちと会うところまでな。」

ゾンビがあらわれて、

今に至るまで。話すのはここにいる5人全員だぞ？」

「過去……か。よし、俺から話してもいいか？」

「おう。」

「朝……昨日の朝の事だ。祖父が開いてる道場に久々に顔を出しに行っただ。」

そこで、久々に祖父と話して、稽古けいこをつけてもらったりしてたんだ。だけど、少しして、道場の外が騒さわがしい事に祖父が気がついてな。

道場は其の日は休みにしてて、柵さくを閉めていたんだけど、ゾンビが柵さくにのしかかってたんだ。

祖父はゾンビだと知らずに口で喝を入れてたけど、今考えると当然の結果だろうな。ゾンビは

祖父の一喝にも何の変化も示さなかったよ。

そこで、祖父が木刀で一太刀、肩に入れたんだけど。ゾンビは当然軽いダメージじゃ、

ひるむことなく祖父に抵抗してきたよ。

ついに憤った祖父は脳への一撃を入れたんだけど、それでようやくゾンビが倒れたんだ。

それでも人間だと思ってた祖父は手加減してた見ただけだ。

祖父が外の異変をいち早く感じ取ったらしく、家族に人数分の木刀を渡すように頼まれて、

無事に家族まで届けたんだ。そこからだよ。家の外にゾンビがいて、俺たちは

かまいもせずにダッシュで逃げた。そこからだよ。家族と別れたのは。

祖父のもとに戻ってみると道場には誰もいなくて、道場から祖父のお気に入りだった、

長い木刀も1本道場からなくなってるさ。」

「おお、それじゃ、祖父はその木刀で今も生きてるってことか！」

「多分ね。祖父とあの木刀の事だから、些細な事じゃやられないと

は思っけど……。

電話はいつからか使えなくて、友達的事も考えなくて……

おかしなやつらをずっと外で軽くあしらってたら、偶然にも昨日、大門さんが声を掛けてくれた。

俺はここまでだよ。」

「新堂も難儀な目にあつてたんだな……。」

「アハハ、親は多分……生きてはいないと思う。」

「エ、なんでだ？」

「逃げた方向が悪かった……。母は大通りの方に行つてた。最初渡つた橋、覚えてるだろ？ あそこさ。」

父はモロ、シヨッピングモールの方角。俺ももう生きてるとは思つてないよ……。」

「そ、それじゃ、他には？」

「弟と妹がいてな。妹は……どうしているんだろうか。逃げた方角までは分からない。」

クネクネと角を曲がつてすぐに方向を変えてたからな……上手く生き延びていてほしい。」

弟は中3で、祖父じゃないけど俺が鍛えてたからな。家にあつた俺の木刀を持たせてやつたよ。」

平等な勝負で負けるとは俺も思つてないけど……。」「
「……よし、次は俺が行くぜ！」

「藤島？」

「だから、言つてるだろ。積荷はお前だけのもんじゃないって。考えすぎるなよ？」

「あ、ああ。」

「さて、俺だな……。俺はだな、ゲームセンターにいたんだ。朝からな。」

一人でボチボチ楽しんでたら、突然にゾンビが入ってきてさ、一人喰われてからみんなパニック状態。」

いろんな奴が殴ったり椅子を押しついたりで、押し返したんだ。そ

こから皆逃げたよ。

パニックってるもんだから、その辺の大型店とかはもう荒れ放題。俺は手軽な軽食だけ持ってきて、

逃げながら食ってた。いつの間にか俺一人で、ポツーンって突っ立つてたら……大門さんとね。

俺はここまで！」

「藤島も大変だったんだな。」

「お前ほどじゃねえけどな。何とか今まで無事だけどさ。」

「僕はですね、ファミレスにいたんです。朝起きてから高1の兄と外食しようってことになりました。

両親は親戚の所に行くと言っていたのですが、僕も兄もどういいうわけか出かける気にはなれなかったんです、

どうしてでしょうね……。今考えると、こうなることを本能が察知していたのかも。

ファミレスでだいたい食べ終わった頃、ゾンビが現れて……逃げたんです。僕も兄も、

だけど、周りこまれて……そして、兄が僕の犠牲になってゾンビ達に……。」

「な、なんだと……辛かったろう。」

「僕は兄を見捨ててしまいました。こうして生き延びているのも、全部、兄の犠牲の上にあるものです。

大分空も暗くなってきたところで、大門さんと出会いました。藤島さんもその時は一緒でした。

そこで僕の過去はお終いです。」

「目の前で喰われたのか……大変だったろう。だけど安心してくれ、俺がいる間はもうそんなことは、

絶対にさせないからな。」

「新堂さん……ありがとうございます。」

「次は、俺の出番か。あまり長くないからそんなに熱心になることはないぞ?。」

「はい。」

「そうだな……俺は家族のクリスマス祝いのためにケーキを買っておこうと思つて外に出たんだ。」

「こう見えても、もうすぐ4歳になる娘がいてな……喜ばそうと思つて、娘には内緒で」

「ケーキを買つて、家の冷蔵庫の奥にしまっておいたんだ。次に、娘のクリスマスプレゼントを」

「買いに言つたんだ。妻と1週間前から相談して、やっとの思いで決まつたやつだから、急いで買いに行つたんだが、」

「もう一度表に顔を出してみたら、騒動が起こつていて、それどころじゃなかった。」

「騒動があつたのは一通りの多い街中で知つてたから、急いで妻に電話をかけたんだが、電話越しに」

「泣く娘の声、妻の絶叫が聞こえて……ゾンビのうめき声も聞こえてきた。」

「そのあとはどうなつたんだろうな。俺は通話を切つて自宅に戻ろうとしたが、ゾンビが」

「次から次へとわいてきて、結局後退せざるをなかつた……家族の事を、俺は……。」

「大門さん……。」

「……心配掛けてすまん。もう、大丈夫だ。」

「そ、そうですか。よかつた。……ええと、藍沢さん？」

「あ、はい。私のことは香憐と呼んでください。」

「分かつた。香憐？」

「あ、過去の事でしたね。私は親が父だけしかない家族構成だったんです。」

「私と父の二人だけが家族でした。でも、父はもうこの世にはいない母の分も、」

「私を一生懸命に何不自由な思いをさせる事がないようにと私を何かと甘やかしてくれました。」

クリスマスも私に色々とプレゼントを買って張り切っていた父が、外の異変に気付いたんです。

父と私は車で移動しました。すると、ゾンビが横から出てきたんです。ゾンビは

車でも遅いかかってきて、父は逃げると言っていました。結果的に、私も父も、

バラバラに逃げたので、その後の事は……。高杉さんと出会って、バリケートづくりを手伝いました。女性は皆、バリケートの完成後はどこからともなく聞こえる

断末魔におびえて……。護衛に人が2階に上っていく姿を見ていられませんでした。

そしたら、新堂さんがバリケート内に現れて、ぼったりと倒れてしまつて……。」

「なるほど、そこから一緒だったのか。」

「はい。」

皆、苦労の連続だったんだな。家族を失った者や、行方が分からない人も……。

「そうだ、今後は、失った家族の安否を確かめに行くってのはどうだろう。」

「なるほど、目標がなくなった俺達にはそれが一番いいかもしれないな。」

「せめて、バックか何かがあれば……。」

「バック……！」

「ん、新堂、どうかしたか？」

「一か八かだが、レジの奥にある扉を蹴破る！」

「な、どうしてだ？」

「コンビニにはアルバイトの従業員がつきものだ。逃げたやつらが置いていったものがあるかも。」

「おお、そうか！」

「それじゃ行きますよ……。」

木刀もしつかり握ってるぞ。ゾンビが出てきたら大変だからな。
ガチャガチャ やっぱ鍵がかかっているな。木刀を振り落とす！
ガキッ ドアノブが取れる。

「うらあッ！」

バキィイツ！ 派手な音と共に扉が開かれた！

「凄いキツク力だな。」

「喧嘩の毎日でしたからね。中学時代は。」

「な、なるほど……。」

中に入る。ゾンビはいないみたいだ。ん、あれは！ 高校生のもの
と思しきバツクが！

「あ、あつたぞ！」

「おお！ これで、食料が持っていけるな！」

「さっそく、入れられるだけ詰め込んでくれ！」

「任せとけ！」

「保存がきくやつだけにしてくださいよ……？」

香憐が心配そうに聞いた。でも、スナック菓子ばかり詰め込んでる
し保存は利くだろう。

「一人一本、スポーツドリンクも頼む。」

これを忘れてはいけない。飲み物も大事だ。

「お、忘れてたぞ！ サンキュー、新堂。」

大体準備も整った。よし、行くか！

「ここから近い現場ではぐれた人はいるか。」

「はい、この辺りに、さっき言ったファミレスがあります。」

「そうか、ならずそこだ！」

「ようし。」

「ん、大門さん？」

大門さんが掃除用具入れからモップを取りだした。ゴミを取る部分
のカバーをはずす。

「それ、武器ですか？」

「そうだ、モップも武器にはなれる。誰か持っておけ。」

「それじゃ、香隣さんが。」

「はい。」

モップもどきの長い棒を受け取る。

「もう一つあるから、これは俺が持つ。」

「では、もしもの時は、大門さん。よろしくお願いします。」

「もちろんだ。」

「それじゃ、行きますよ。カバンは吉成が持つてくれ。」

「はい。わかりました。」

こうして、俺たちはコンビニを後にした。

吉成の通りに進んだ。すると、荒廃したファミレスの数々が目に映った。

遠くから見てもわかる。ゾンビが徘徊している。吉成の被害現場は、シヨッピングモールのような、

ゾンビの溜まり場に激変してしまっていたのだ。

A s t r e e t d i s p u t e > p e o p l e v s . z o m b i e <

サブタイトル『A s t r e e t d i s p u t e p e o p l e
v s . z o m b i e / 街紛争 >>人間vsゾンビ』

荒廃したファミレスの数々が目に映った。

遠くから見てもわかる。ゾンビが徘徊している。吉成の被害現場は、シヨッピングモールのような、

ゾンビの溜まり場に激変してしまっていたのだ。

「クソ、ここも想像以上の数だ！」

藤島がぼやいた。

ここを突破するのは困難か……。しかし、吉成の親族の安否を確認する手掛かりは

ここ以外には見つかるはずもない。なんとか、ゾンビ達に奇襲をかける算段を立てないと……。

作戦会議でもかけてみようと思った時に、一番手前のファミレスから声が聞こえてきた。

「その君達ー！ 俺の声が聞こえるかー？」

俺たちに声をかけているのか。

「ええ、聞こえてます！」

返答をすると、そのファミレスから一人の男が出てきてこちらに向かってきた。

ゾンビじゃないし、普通の人間だ。

「ハア、ハア、あの、できればいい。協力してくれないか？」

「きよ、協力ですか。一体何が？」

「ああ、その説明が先か。この町……いや、この一帯は、人間とゾンビの抗争が起こっている。

こちらは小数でなんとかゾンビの進行を遅らせているのに対し、向こうは数で攻めてくる。

このままでは……俺達の居場所が占領されてしまいそうなんだ！」

「ここを移るわけにはいかないんですか？」

「……すでに、けが人もでて、全員で大移動は無理なんだ。安全性に欠ける余所よその地域での活動もあまり望ましくない。向こうのシヨップینگモールは全精力でバリケートを張っても破られたそうじゃないか。とてもじゃないが、確実に安全なところを捨ててまで行く場所もない。」

昨日までは人間とゾンビの勢力は5：5ぐらいだった。少なくとも知能がないゾンビでは、

人間の思うがままになる展開も多かった。だが、交代で入れ替わったやつらに聞くと、

勢力は大きく傾いてしまった……。その比率、約2：8。戦略も尽きて、数の差をつかれ……

このままでは俺達の敗北は確実なものになりかねない！ だから、頼む！ 協力してほしい！」

「……分かった。協力しよう。」

「お、おい、新堂？」

「あっさり決めていいのかわ？」

「ここ以外に吉成の手掛かりは無い。それに、シヨップینگモールと同じ事さ。救える命を救わないという選択肢はない。無謀な挑戦とはまた意味は違うが、武器もある。」

危険なら後退しながらでもいい。」

「君達……ありがとう！」

「礼なら、俺達が勝利を治めてから言うもんですよ。それじゃ、俺たちはもうゾンビのもとへ向かいます。」

最前線はどこですか？」

「この一帯の勢力は直線にしかぶつからない。この通りをまっすぐ行けばゾンビのもとへたどり着く。」

仲間もいるはずだ。加担してやってくれ！」

「分かった。行くぞ！」

「おう！」

「それじゃ、僕は石でも拾ってきますね。」

「頼む。」

「狙う時は頭だ。強打しても死ななかつた場合、何回でもいい。叩きまくれ！」

「ラジャツ！」

俺たちはまっすぐに走った。それにしても本当に勢力が分かれているんだな。ゾンビー体すらいない。やがて群れている何かが目についた。

「あれか！」

マズイ。人間の方が押されている！

流石、ゾンビだな。数の利がある……だけど、俺たちもここで引くわけにはいかない！

「うらあー！」

一番手前のゾンビに一打。周りのゾンビにも次々と一打ずつ叩く。バタバタと倒れていくゾンビ。

「き、君達はッ！？」

「援軍です！ ゾンビは頭を狙ってください！ 思いっきり叩くんですー！」

「よし、ぞああああー！」

鉄の棒でグシャッと体格が大きい男が叩いた。

「おお、こいつはいいぞ！ 一撃で沈んだ。頭が弱点だったのか。」

「よし、全員頭部を狙ええええ！」

一気に人間のモチベーションが上がった！
数で圧倒的に不利な人間が、一撃で確実に処理できるようになり、後退することはなくなった。

「押せる！ こいつは押せるぞ！」

人間側が雄叫びを上げるように叫び、気合いで押している！

「お、俺たちはこの隙に建物のなかを！」

「見て何するんだ！？」

「建物内のゾンビの殲滅と、調達だ。役に立つおのがあるかもしれない。店によっては

日があるかもしれない。」

「よし、……といつてもほとんど倒壊してんじゃんか!」

「無事そうな建物は……かなり向こうに1軒だけだな。」

「そこまで押してやるまでだ! おらああああああ!」

藤島も、大分強くなったな。萎縮いしゆくしていた場面も少なくなつて、もう俺の事も気にかけるほどになつたよ。

本格的に、俺がいなくてもやっていける度胸は身についているだろう。

「全員、進軍せよ!」

指揮を執る人が声を張った。また、最前線もひるむことなく頭部への一打でゾンビを崩していくため、もう数の利程度では負けそうにない!

「あの唯一無事そうな建物まで押しきれええ!」
指揮官の声が響いた。

「な、なんであの建物なんだ?」

「あの建物、5:5の時に戦つてたところなんだ。あそこが基準だ。あそこ以上に押せれば、

俺達の勝算も高くなつてくる!」

「よし、押すぞ!」

どンドンゾンビの群を押しついに建物以上に押しきつた!

「一気に押し切り、殲滅するぞ! 1名は作戦本部に戻り、援軍を至急呼んでくるように伝えてくれ!」

「その役目は俺が行く!」

「よし、では大至急だ!」

「はい!」

俺達がいなくても、連携が成り立っている。指揮官がしっかりと指示していたから、

あの状況でも2:8までに抑えられていたんだな。頼もしい指揮官

だ。

「俺たちは建物内への特攻だ！ 行くぞ！」

「ああ！」

「いまいく！」

「僕も行きます！」

「わ、私も！」

ガチャリ 扉を開ける。中には死体すらない。いや、待て！ 奥にゾンビが！

「みんなはここで隠れてくれ。ここは狭すぎる。もしもの時は奇襲を頼む！」

「はい。」

「それから、吉成。耳を澄ませて聞いててくれ。建物内の音をよく聞いててくれよ。」

「もちろんです。」

ゆっくりとゾンビに近づく。すると、ゾンビが席から立ちあがった！……こちらをゾンビは見据える。まだ、俺以外には気づいていないはずだ。

こちらを見据えたはずのゾンビは俺から目をはずし、厨房の方へと向かった。

「な……ッ？」

ゾンビが、襲ってこない……？ こ、これは一体どういう……。すると、ゾンビは蛇口じゃくちを捻りひね、コップを手に取り、水を入れ始めた。そのコップの水を飲み干すと、やがて、元いた位置に戻り、座った。ゾンビの矛盾した行動に俺が戸惑っていると……

「……お前は、俺を攻撃しないのか？」

「……」

グウ、知能があるゾンビか！ この余裕ぶった態度。これが畏だとしたら、俺たちは思いつつばに……動かない方が賢明だろう。

「外はどうだ？ 人間が押しているのではないだろうか。ゾンビは

もう負けてしまう。そうだろ？」

「……ああ、そうだ。だけど、それはお前だって同じ事。俺たちは人間。お前はゾンビ。」

「……そう、なるのだろうか。」

「こ、こいつ……！！ なんなんだ、この態度は！ ゾンビってのは、死に際でも恐怖を感じないのか！？」

「確かに、私は……ゾンビとしての生を受けてしまった。だが、私はゾンビとしてではなく、

第2の人生として……今を生き抜くと決めたのだ。」

「な、何言ってるやがる……お前は何がしたいんだ？」

対話だけで刻々と時間が過ぎてゆく。そして、そのゾンビは言い放った。

「私は……生前の願いを叶えたいのだ。」

「何だと……ッ！？」

「生前、私は、確かにこの場所で、大切な兄弟と共に食事をしていたはずなのだ……。」

だが、ゾンビが現れた……。私はあえて犠牲になり、弟を逃がす選択肢を選んだ。ゾンビ共から、

弟を救うには、これしかなかったのだ……。」

「なるほど、ゾンビにも生前の記憶はあるのか。」

冷酷な態度で言ってるやっ。知能があるゾンビは未だに信用ならぬい。いや、ゾンビ自体信用できない。

「かなり、生身に近い状態でゾンビになれば、自我を持てるようになる」と私は推測しているよ。」

「へえ、初耳だな。」

「私は、奇跡的に脳へのダメージがほとんどなかった。だからこうして会話ができる。」

もつとも、おかげで体はボロボロになってしまった。」

「お前はそんなボロボロの体で何を望むっていうんだ？」

「前置きが長くなってしまったようだ。私は、もう一度、弟の顔

が見てみたいのだ……。」

「そいつの安否は気にならないってか？」

「できれば、生きていてほしい。だが、私にはその助力をすることは不可能だろう……。」

きつと、この姿を見れば……人間だれしも忌み嫌うはずだ。私の弟もな……。」

「そりゃそうだ。生前で会えればよかったのにな。」

「まったく……。」

「お前は人間を食わないのか？」

「生前の記憶まであるのだ。人間を食うはずがないだろう？」

「はは、いかにもらしいこといやがって。そろそろ逝くか？」

「そう、か。なら、最後に聞いてくれないか。」

「良いだろう。冥土の土産とは全く逆だけだな。話してみる。」

「その弟は、とても優しくかった。事件が起きる前までは……眩しい笑顔で笑ってくれたよ。」

「良い弟じゃないか。」

もう、適当に相槌あいつちを打つ事にした。そろそろ逝くゾンビ相手だからな。

「あの顔を、もう一度拝みたかった。弟の顔を、『吉成』の顔を……。」

「……………」

「……………何だとツ!？」

ガタツと後ろから音がした。当然だろうな。こ、こいつが吉成が言っていた兄なのか!？」

「ま、まさか、生前の名字……『岸田』じゃないだろうな？」

「ああ、確かに私は生前は『岸田』と名乗っていた。『岸田 孝利』たかとしという名だったよ。」

後ろから歩く音が聞こえてきた。振り向くと、吉成の姿があった。

「吉成……!」

吉成の目はまっすぐに孝利という名のゾンビを見ていた。目からは涙があふれている。

「兄さん……兄さんなの？」

「吉、成……！」

俺は、とてもゾンビとは思えない光景を目にした。孝利と名のるゾンビが、目から涙を流している！

「おお、本当に、本当に吉成なのか……。」

「兄さんッ……！」

孝利に向かって走ろうとした吉成の手を俺は掴んだ。

「は、離して！」

「ゾンビになっちまうかもしれないんだぞ……！」

「でも、でもッ……！」

「そうだ、吉成。これ以上私に近づいてはならん。お前に、私と同じ道を歩かせたくはない……。」

吉成は完全に泣きじゃくっている。孝利も涙を必死にこらえている様子だ。

俺は、ゾンビの認識を改める必要があるそうだ。このゾンビだけは見た目こそ青白く、肉もえぐられ、骨が一部むき出しになっているが……

このゾンビだけは、間違いなく人の心を持っている……！！

「吉成、もう、私の事で泣いてはいけないよ。人間がゾンビ相手に悲しむのは、

本当は存在してはならない事なのだ……。」

「ウ、ウウ、兄さん、兄さん…………！」

「その人、お名前は何と言う？」

孝利が聞いてきた。

「俺は、新堂幽っていう名前だ。」

「新堂……地区最強か。」

「知っていたのか……！」

「想像よりも、ずっと優しそうな先輩でしたか。」

「え、先輩……？」

「あなたの事は噂でも聞いてましたし、同じ学校でした……。どう

か、吉成の事を頼みます。」

「え、あ、ああ。」

「そろそろ、死ぬ時が来たようだ。」

「え？」

「君達、大丈夫だったか？ む、あれはゾンビか！」

「しまった！ 部外者に気づかれた！ こ、これではもう、孝利の命を救ってやることは……。」

「遅かったか……！ 逃げてください先輩……。吉成にむごい姿を見せるわけにはいかないんです……！」

早く……！」

孝利……！ お前、本当に、どうしてゾンビなんかで第2の人生を始めちまったんだ。

俺には納得できない……！！

「いくぞ！ 吉成！」

「待って、まだ兄さんが！」

「ダメだ！ もう、どうしようもない！！ 藤島達も外に出るぞ！」

「あ、ああ！」

俺達が出た後に、次々と中へと前線で戦っていた面々が押し込んでいく！

そして、建物の中から聞こえてきた。

「このゾンビめ！ よくも今までやってくれたな！ 借りを全部返してやるッ！」

「こんの、死ね！」

「死ね！」

「うらっ！ 全部お前たちのせいだ！ 死んでしまえ！」

「うぐああああああああ！ 逃げろ、吉成いいッ！」

「まだ言うか！ 化物め！」

「がああああああッ！」

うおおおおおおおおおおおおお！

俺は吉成を引きずる勢いで手を引っ張った。

孝利の断末魔を聞かれてしまうことになるとは……。もっと早

く動いていれば、

悲しませる事もなかったのに……！俺はまた、仲間を苦しめてしまった……。

もっと早く動けば、こんなに辛い思いをさせる必要なんてなかったのに！

しばらく走ると、やがて断末魔は聞こえなくなった。

「ヒグツ、ウグツ、に、兄さん……」

「吉成……」

悲しみに暮れている吉成。これ以上は、何も言わない方がよさそうだ。

「兄さああああああああああんツ！！！！」

吉成が無慈悲なこの世に響くぐらいの叫びを上げた。

しかし、兄『孝利』の返答が聞こえてくるはずもなかった……。

その日、俺たちは平穏な夜を手に入れたが、吉成がその晩に泣きやむことはなかった。

M e s s a g e . . . b y T a k a t o s h i (前書き)

吉成視点

サブタイトル『M e s s a g e . . . b y T a k a t o s h i

』 / 孝利からの伝言

……事なきを得ても全然食べ物がつかずになっちゃったなあ。
皆には、迷惑掛けてばかりだった。分かってる。みんなも泣きたくなる世の中なのに、
自分だけメソメソしちゃって。……でも、兄さんも死んでしまった。生きる希望がなくなったと言っても過言じゃない。それほど兄さんは……。

夜も遅くなったところで、ようやく涙が止まった。

皆はもう寝ているし、僕ももう明日に備えて寝なくちゃ。備える意味があるかどうかはおいておいて。

目を閉じると、今でも兄さんのことが思い浮かぶ。

もう、今すぐにでも兄さんの声が聞こえてきそうだよ。

『吉成……。』

そう、聞こえてきそうだ。いや、僕の頭ではそういう兄さんの言葉が響いていた。

『吉成!』

ああ、兄さんが呼びかけてくれるよ。

『しっかりしろ、吉成!』

頭にしっかりと聞こえてくる。兄さんの声だ……って、兄さん!?
『おお、気づいてくれたか、吉成。お前の考えている事はよくわかったよ。』

先に逝ってしまったって、本当にすまなかった。』

兄さん……!』

『悲しい思いをさせてしまったなあ……。少しだけなら時間がある。』

お前の話、聞かせてはくれないか?』

うん、僕は新堂さんと出会ってからとんでもハプニング続きだったんだよ!

ショッピングモールまでの道は民家に侵入しちゃうし、ゾンビもあっさり倒しちゃうし、

大きなゾンビ相手に一人で逃げきったんだ！

『やっぱり、新堂先輩は頼もしい方なんだな。お前の命を預けるのにこれ以上の人間はいないだろう。』

新堂さんなら責任を持ってやり通すと思う。でも、僕には生きる希望が……。

『吉成、ここで諦めてはいけないよ。皆も希望を断たれたと思った事があるはずだ。』

吉成だけじゃない。そんな中、吉成を私に合わせてくれる恩人達とめぐり合えたのだろう？

なら、吉成は恩人達に恩返しをしなくてはいけないよ。自分の態度で、

仲間にも希望の光を分けるんだ。希望を持てば、ゾンビなんて足元にも及ばないさ。』

そ、そうなの？ 僕にはゾンビのことはよくわからないや。やっぱり兄さんにはかなわない。

『何を言っただ、吉成。吉成は今日から私を越える人間になったのだ。もっと、自信を持ちなさい。』

でも、兄さんはもうこの世には……。『私の肉体は確かにこの世からは消え去る運命だ。しかし、心は違う。』

吉成、私の魂は吉成が思っている限り、心の中で生き続ける。だから、もう悲しまなくても

良いのだよ。』

え、えそれじゃ、兄さんはこれからもずっと一緒にいられるの？ 『吉成、いつでも会えるわけじゃない。心の奥底で、私は静かに見守る事にする。』

新堂先輩達を信じなさい。うっ！ もう、時間が来たようだ。』

兄さん！？

『私はいつも見守っているから、もう悲しむことはしてはいけないよ……吉成。』

最後に、どうしても堪えきれなくなった時の為に、私の宝物をあげよう。』

そんな、そんな！ 兄さん！！

『うう、もうダメだ。吉成、最後にお前とこうしてまともに話が出て、私は嬉しかったよ。』

宝物は、枕元にそっと置いておくよ。吉成、私の生涯には悔いは無かった。最後に幸せになれた。

吉成には感謝している。では、さようならだ、吉成。 希望を忘れずに生きるんだぞ……！！！！』

兄さん！！！！！！

それから、兄さんの声は途絶えてしまった。でも、兄さんのあの時の言葉は信じるよ。

朝が来た。新堂さん達も起き始めて、僕も目覚めた。

「吉成、昨日は眠れたか？」

新堂さんが心配そうに聞いてきました。

「はい、割と寝つけました。」

「そうか、よかった。」

ほっとしたような表情の新堂さん。

あ、そうだ。兄さん、枕元に宝物を置いていくって……あ、あった！！

枕元には、ペンダントがあった。写真付きのペンダントで、確か、兄さんが高校進学祝いに作ったって言う……。

写真は見ると、僕と兄さんがニッコリと笑って自宅の庭で撮られた風景だった。

「そうだ、兄さんがどうしても取りたいって言って……」
小声で言った。聞き取れてる人はいないはず。

ペンダントを首に付けた。朝食の時に皆で集まると、

「ん、吉成ってペンダントつけてたっけ？」

藤島さんが聞いてきました。

「はい、これには、兄さんとの思い出が詰まっています。」

「おお、思い出の品か！ くそー、俺もなんか持つてくるべきだった〜！」

「アハハ、なんだか藤島らしいや。」

新堂さんが言いました。

「な、新堂！ それどういう意味だッ！」

藤島さんが言いました。

「ええ？ そのまんまの意味だけど……？」

「新堂ッ！！ 今度、俺と決着をつける必要があるようだな！」

「何の決着だよ！」

メンバーはいつもよりも、友情と信頼で満ち溢れた雰囲気に包まれていました。

そうだ、僕もメンバーなんだ。もっと、明るい表情でいなきゃ！

そんな朝を迎えて、僕らは昨日の悪夢とは真逆の素晴らしい朝日を目にした。

兄さん！ 僕、皆と生きるよ！ だって、僕と兄さんは繋がってるんだから！

朝食後、街の皆に礼を言って後にしました。どこに辿りつくかは分からなけれど、

どこに行っただって平気だよ。だって、僕には、最高の仲間と兄さんがついてるんだからね！！

R o a d W a l k e r (前書き)

サブタイトル『Road Walker / 道を行く者』

Road Walker

平穏を取り戻した街の人々は周辺一帯を制圧したと言える。

紛争はもう起こりえる状態ではなく、完全なる人間の勝利という形で幕を閉じた。

彼らは今後、一帯への警備パトロールを実施することを決め、ゾンビ達への防御態勢の強化を図った。

彼らは現段階ではまだ街に滞在するみたいだ。けが人の傷が癒え次第、安住の地を求めて

本格的な大移動に移るそうだ。

一方俺達はというと、飽くなき旅路を歩いていた。

もう、どれくらい時間が経っただろう。まだ日は明るく、空も少し雲があるだけで青い景色が

そこに展開されている。

しかし、寒い。いかに日が当たると言っても流石に冬の昼間というのはこんなものか。

「あゝ、寒い寒い！」

藤島がついに口を開いた。あまり考えないようにしていたんだがなあ、寒いってこと。

「言うな……余計に寒くなるぞ。」

大門さんもついに口を開く。

「でも、この気温ですつと歩いていたらんですから、仕方ないですよ。」

吉成も言う。ああ、ダメだ。俺も寒くなってきた……。

「なあ、なんか他に言うことないのか？」

「んなこと言っただって寒いもんは寒いんだから仕方ないだろ！」

「いや、そんな強調されたって困るぞ……。」

「それじゃ、何かするか。」

「手軽に歩いてできることと言ったらしりとりぐらいしかないだろ。」

「うわ、なんか普通すぎて嫌だ。」

「普通でいいだろ?」

「まあ、いいんだけどさ。」

「……まあいいや。俺、大門さん、吉成、香憐、藤島の順番で行くぞ。」

「俺最後か!」

「何か異論でも?」

ギロリと俺が藤島を見る。異論があるなら言ってみてほしいものだな。

「クツ……卑怯者め!」

「勝負で先に卑怯な手段を使ったのはお前だろ! 石投げの飛距離勝負でどこか怪しいと思っただら、

吉成にアドバイスもらってたじゃねーか!」

「あ、あれは吉成が俺に言いたい事があるって言うてたから仕方なくだな……!」

「嘘つけ! そう都合よく事が運ぶか! ……ま、吉成のアドバイスありでもお前には勝っていたがな。」

「マジでどういう鍛え方してんだよ……スペシャリストの助言があつても勝てないなんて想定外だ!」

「なにはともあれ、先に反則したのはお前だ。当然の処置だろ?」

このくらいで済んだら

安い方だと思え!」

「ま、まさかもつと思ひ罰があるっていうのか?」

「さあ、どうだろうなあ……」

ここで極めつけのポイントが「相手にニツコリと陰謀めいた笑顔を見せつける」。

これの有無で相手の心の揺れ具合が変わるんだ。不安になって惑え、

藤島あ!!

「な、なんだよそれ……どんな罰があるんだよお!？」

「それは受けてからのお楽しみじゃないか。それとも、今体験してたい？」

笑みで明るく言った。どうだ、流石のお前も恐怖には勝てまい!

「う、…、そ、それは……。」

「なら、お前が一番最後な。しりとり『り』から始めるぞ。『り』
ス。」

「『ス』イカ。」

「『カ』ラス。」

「『ス』トロー。」

「『ロ』マンス。」

「『ス』チール。」

「『ル』ス(留守)。」

「『ス』リップ。」

「『パ』ルス(英語『Pulse』訳:脈拍)。」

「『ス』ランプ。やけに『ス』が多いな。」

「『プ』ラント(英語『Plant』訳:植物)。」

「『ト』ロツコ。」

「『コ』シヨウ。」

「『ウ』ス(臼)。」

「『ス』カイ。(英語『Sky』訳:空)」

「『イ』ス。」

「『ス』キマカゼ。」

「『ゼ』ニ。」

「『ニ』ス。」

「『ス』ス(煤)。」

「『ス』コップ。藤島、スからスでバトンを渡すのは邪道だと思っ
たことないか?」「どこがだよッ!」

「『プ』ラス。」

「『ス』カーフ。」

「『フ』カヒレ。」

「『レ』スリング。」

「『グ』ライド（英語『Glide』訳：すべる）。」

「『ド』ス。そろそろきついな……。」

「『ス』イス。」 「これは邪道じゃないのか？」 「小さいことは

気にするな。」 「こんなの差別だ！」

「『ス』カート。」

「『ト』マト。」

「『ト』ウガラシ。」

「『シ』マウマ。」

「『マ』ウス。」

「『ス』ライドガラス。」

「『ス』、ス……ス……… 『ス』ッ!？」

「アウトー！ まだまだ甘いな、藤島ッ！ そんなことじゃ俺には勝てないぜ！」

「どこに接点があるんだよッ!? てか何故に『ス』を意識した勝負になってるんだ！」

「ローカルルールでやるからそういうことになるんだ。中学校じゃよくあることだぞ。」

「ちゅ、中学校？」

「最近の主流は何かひとつを絞って頻繁に使う戦法があつて『字連魔』^{シム} っ て戦法なんだよ。」

「やらなかったのか？」

「知るかああああああアアアアアア！ 皆も知らなかっただろ!？」

「僕は知ってましたよ。」

「さわやかな顔で吉成が言う。」

「俺も一応知ってはいたぞ。」

「大門さんも続く。」

「私も知ってましたよ。」

「香憐さんも続く。」

「え、ええ、なんでみんな知ってるんだ!？」

「全く中学生の時一体何をやっていたんだ? 暇つぶしの主流といえはどう考えても『しりとり』だろ。」

まさかやってなかったってことは無いだろ?」

「やってなかったよおおお!」

「……ゾンビだ。藤島が大きい声出すから気付かれただろ。」

「……言いたいことは堪えておいてやる。」

グシャツ ……ふう、頭を狙うことには慣れたけど、ゾンビってのは全然慣れない。

「他にはもういなさそうだ。さ、続きを始めよう。」

「……まだやるのか?」

「……もちろん!」「」「」

藤島以外が一致団結した瞬間だった。趣向的な意味で。

そして、しばらくたった頃。

「『カ』……『カ』ラーコンタクト!」

「『ト』ウカ。そろそろ詰まってもいいんだぞ、藤島?」「『じ』で躓けねえんだ、俺は!」

「『カ』ンコーヒー。」

「『ヒ』リヨウ(肥料)。」

「『ウ』ンドウカイ。」

「『イ』カ。」

「『カ』ラ(殻)。「ちっ、しぶとい!」「浅い策略なんかじゃ俺は沈まねえよ!」

「『ラ』イト(英語『Light』訳:光)。」

「『ト』ンネル。」

「『ル』リイロ(瑠璃色)。」

「『口』カ(濾過)!!」

「『カ』ロリー。」

「『リ』チウム。」

「『ム』ラサキ。」

「『キ』カ（気化）。」

「『カ』……………!?」

「アウトー！ これで藤島のアウト6回目だ。」

「ぐうううう、しりとりがここまで奥が深いゲームだったとは……………

「！」

「『しりとりを馬鹿にする者、しりとりに泣く』という格言の偉大さが窺うかがえますね。」

「まさに、経験がモノを言うゲームだな。」

「大丈夫です、藤島君。私も最初は全然でしたから。」

「い、いつになったらこの負け組のレッテルから脱出できるんだ……………！」

「さあな、ただ一つ言えるとするれば……………お前が俺達の知りえる戦法を理解したところで

勝率が5分5分になるだけだということだ。」

「ぬううううう……………一体どうすればいいんだ……………。」

「……………これはひどい有様だ。」

「ああ、確かにこれはひどい結果さ、だが、次は必ず勝つ！」

「そっちじゃねえ、向こうを見てみる。」

「え？」

歩き着いた先は、火の海と化した街だった。

燃え上がる炎、倒壊した建物、死体、ところどころへこんでいてフ

ロンドガラスが割れた車……………。

人の姿は無く、ゾンビが蠢うごめいている。

ここでも激しい闘争があったのだろう。武器が地面に落ちている。

死体の手にしっかりと握られているものもあるということは、戦い

はゾンビの勝利……………。

「お、おい、あれー！」

藤島が指差した先には、巨大な体を持つ何かの姿があった。ま、まさか……!?

「新堂、あれはヤバいって!」

「あいつ……街まで襲いやがって……!」

「あのゾンビ、普通とどこか違うとは思ってはいたが……まさか知能があるとは。」

「え、知能?」

「見る……かつてない凶悪な組み合わせだ。」

「グッ……あれってマジかよッ!？」

巨大なゾンビは手に大きな何かを持っていた。

「武器まで使っつてことか!？」

「同じ条件じゃ、勝ち目は薄いですね……。」

「ねえ、どうするの?」

「街の人間は壊滅状態……ゾンビの手に渡った危険な場所を通るメリットは薄いからな。」

少し遠回りでもう。」

「そういえば、結局どこに行くんだ?」

「祖父の道場、かな。」

「そこには何かあるのか?」

「祖父は道場やってるっていつてただろ? 生半可な鍛え方してないから祖父の道場は

きつと人員がそろつてると思うんだ。それに、この状況は一刻も早く知らせたい。更に言うと、

弟がいるかもしれないからな。」

「新堂の親族の安否を確かめるのも兼ねてということか。」

「そういうこと。」

「ヤベ!」

「どうした?」

「あのゾンビ、こっちを向いてるぞ!」

「隠れる!」

全員身を低くして物陰に隠れた。

「こっちに向かって歩いてたぞ！」

何！？ またあいつか！ くそ、マズイ、本格的にマズいぞ！ どうする、どうすれば……！？

遠回りをするにしても物陰から出て一旦街の方に続く道路を横断しないとならない。

確実に、目に入る。このまま隠れていた方が安全か？

いや、見つかったらアウトだ。見つかる距離まで来てしまったら逃げ場所がない！！

どうすれば、どっちに向かえば見つからずに逃げ切れるんだ……！
？

B u i l d i n g o f h o p e (前書き)

サブタイトル『 B u i l d i n g o f h o p e / 希望の建
物』

Building of hope

どうすれば、どっちに向かえば見つからずに逃げ切れるんだ……!?

コンビニの時は隠れる事が出来る建物が多かったからな。視界に入らない場所を最大限に活かせた。

だけど、遠回りの道は散歩道の立て札がある。だからほぼ直線……。俺は問題ないが、他の皆の体力が持つかどうかだ。

走ってもたかが知れているそのスピードから逃げ切る事は可能だ。体力が持つ間までは……。。

視界の影に隠れて、なんとかやつを撒いてしまわないと確実に……死ぬ!

住宅を体当たりだけで破壊するような奴に真つ向勝負は不可能だ。まったく、なんて頑丈な体だ!

この俺が生前の姿が見てみたいと思うぐらいだぞ! 脳への攻撃も見込みのあるダメージにならないとなると、もう鈍器では歯が立たない!

だが、包丁などの鋭利な刃物ではどうだろう?

……だめだ、試すことすら許されない。誰かが犠牲にならねばだせない解答なのかもしれない。

だが、俺には誰かを犠牲にするなんて選択肢は無い。

「な、なあ、新堂……。」

「逃げるしか、ないな。」

「なら、早く動こう!」

「しかし、かなり走るぞ。この気温で、建物が多い場所までは……軽く見積もって4kmと言ったところか。

慣れない人では苦しい距離だ。

「行ける……と思うよ。いや、^{わす}僅かにでも希望がある方向にかけてみようぜ?」

「そう、か。よし」

これで行く。もう、後戻りはできないな。

「4 km先の住宅街まで走るぞ！ それまで無休で走らないといけない。覚悟はいいか？」

「ああ！」

「大丈夫だ。」

「僕はいつでも。」

「わ、私もいけます！」

「よし、いくぞ！」

俺の声で皆が動いた。まず、このルートで避けられないのが道路の横断と、ゾンビへの自主的接近。

少し前にある散歩道まではたかが10 mほど先。ゾンビまでの距離はおよそ100 mと言ったところ。

散歩道にまで近づくのが前提なのでまずゾンビが気づくはず。そして、

その後は飽くなき競走。生死を賭けた全力での走り。

ここで言う全力とは、平均スピードと走行時間の効率の意味である。最高スピードではない。

できれば、この効率的な勝負に望みたい。至近距離である最初は焦るが、それは仕方がない。

実戦や場数を踏んで初めて焦りや冷静さは保てるものであり、常人がそれを維持するのは

ほぼ不可能である。常人でその焦りや冷静を保つ方法は絶対的な優勢に立つことのみである。

例えば、獰猛な野犬がいたとする。その野犬が常人相手では勝負は火を見るより明らかであるが、

人間側が家の中からそれを見ている時というのは誰もが安心していることができる。

そう、絶対的な優勢はどんな人間にでも余裕を持たせることができるのだ。

さて、そろそろ散歩道に突入だ。さあこい、ゾンビめ！

……………どこがおかしい。俺の計算が狂ったのか、はたまたこれは偶然なのか？

あのゾンビが、全くアクションを起こさない。俺達の事に気が回ってない様子だ。

俺達は散歩道の入り口から約50mほどの位置にいるが、ゾンビは未だに走ってくる気配がない。

「……………は？」

「お、おい、これはどういう意味なんだ？」

「あいつが、追ってこない……………？」

「そんなバカな！」

あのゾンビが今までの事から考えてもなんのアクションも起さないのは明らかに不自然。

どういうつもりだ？ 知能を持つゾンビといえど、獲物を野放しにするのはありえない。

仮に俺達がなんらかのやつ策略や罠にかかったとしても、あの歩行速度だ。

時間がかかりすぎる。それに、ゾンビなら一刻も早く獲物にありつきたいはずだ。

色々推測したところで、不自然さがさらに色濃くなるばかりだ。

「……………く、どうする。」

「ど、どうするって、これはチャンスなんだぞ！ 逃げるんだろ！？」

「やつは、今こうしてみても俺達に気づいている様子すらない。走

った音があつたはずなのに、俺達がすんなり素通りできたつてことは、あのゾンビ、何かあつたんだ。」

「な、何かつてなんだよ？」

「さあ、そこまでは推測できないけど……今のあいつならいけそうなのがするんだ。」

「いけそうつて、何する気なんだ？」

「今やつに接近すれば理由が分かるかもしれない。あいつの身に何が起こつたのか、

それを確かめないと今後あいつに出くわした時の対処にも支障が出そうだからな。」

「まさか、お前が調べる気か？ 危険すぎる！」

「気づいていないつてことは、隙だらけなのとほぼ一緒なんだ。上手くいけば、

あいつをここで葬むすることだつて……。」

「お前、やる気なのか？」

「仕掛けるかどうかは近づいてからだな。いけそうならせめて1発頭に入れてくる。」

無理なら原因だけでも……とにかく、ここを動くなよ。俺はどうしても確かめないといけない気がするんだ。」

「なら、せめて俺も行く。」

藤島が宣言した。

「藤島はチームの中でも俺を抜けば最高戦力だ。俺もお前ももしかつにやられたらどうする？」

「チームは絶望的だ。ここで犠牲になるのは一人がいい。そしてその役目は俺がやる。」

「……どうしても、行くのか？」

「ああ……心配しなくても俺は生きて帰る。最悪の場合は逃げればよし。当初の作戦通りだろ？」

「分かつた。そこまで言うならもはや何も言うまい。だが……気を

つけるよ。」

「ああ！」

俺はできるだけ音を静かにして走った。間近まで近づくと時は歩くけどな。

そして歩いた。ここまで来ると射程圏内。さて、ここからは慎重にいかないとな。

あいつの手にしているのは明らかにどこかの建物の建設に使われてそうな長い鉄骨もどきだ。

長くて、（鉄骨というには）細い。くればば致命傷とまでは行かなくても骨折は免れられない。

いや、むしろあの鉄骨による攻撃で骨折程度で済むなら安い代償だろう。

俺はやつを観察した。どこか変化は無いだろうか。こうしてまじまじと見ることすらなかったためか、

どこがどう変化しているのかさっぱりだ。ん、な、なんだこれは…

…！？

「……ッ！？」

このゾンビ、街の方から歩いてきたが一体何があったんだ……？
目が、傷ついている。右目は完全にアウトだ。綺麗に眼球がなくなっってしまったている。

グロテスクだが、ここで音を立てれば確実に……。

左目は瞼に鋭利な物で切られたような跡がある。この痕跡は一体…

…。

右目を抑えているゾンビ。ときどき手の隙間からチラチラと見えるその内部は言葉にできないほどの、

何かがある。何か、どす黒い感情のような何かが……。

左目はたまに薄めだが瞼を開いている。ということは、ほんの少しだけなら視力があるのか？

どおりで俺達の姿に気づかないはずだ。その傷ならばたしてどこまで見えているのか。

もう、ぼやけた世界観だろう。体に外傷は見当たらないが、頭部には最初に出会ったときよりも、凄惨なものになっている。という、傷痕が多いのだ。ほとんどが切り傷だろう。

街で一体何があった？ このゾンビをここまで追い詰めたのは誰なんだ？

このゾンビよりも、危険なやつらが街に入るってことなのか……？ ……さて、俺はそろそろ戻るか。頭部への傷痕で完全に理解した。木刀では歯が立たない。

俺は、巨体のゾンビよりも早く静かに歩き、少ししたところでまた走りながら戻った。

「何だつて……？ あいつ、目が見えないのか？」

「すでにやられた後だったとは……。」

「街、の方が気になりますね。」

「で、でも、これで目的地に着くまでの余裕が出来ましたね。」

「そうだな、だが、そこもあの街からは隣町つてところだ。油断はできない。」

「……。」

沈黙がやけに響く。静けさが耳にはなぜか刺激的だった。皆が冷静に対処している証なのだろう。

成長が見受けられるが、このくらいにまで冷静になれるのならそろそろ実戦経験も積ませたい。

もう普通のゾンビ相手に1対1サシの勝負ならかなりの勝率は見込めると思う。

後で、その事について話すか。

「あのゾンビについてだけど、さっきも言った通りで木刀ではダメージは期待できない。」

もつと鋭い刃物なんかがないと外傷すら難しい。」

「そ、そうか……。」

「もう2度と会いたくねえってのに……。」

「なんだか、また出会うと思うと怖くなってきました……。」

「もう、ゾンビについてはここまでだ。行こう。散歩道の終わりでぐらいは早目に抜きたい。」

「そうだな。」

「後4 kmか……長い道のりだな。」

「体力温存のために極力徒歩で行きましょう。」

こうして、徒歩で散歩道を抜けた。走る必要性がなくなった分体力温存の恩恵が大きく、

残党のように単体で現れたゾンビはあっさりと始末で来た。

街の付近にはゾンビがあつまるようだが、やはり過疎地域となった場所では数も相当少ないようだ。

雨坂町。それが、この町の名前である。文字通り、雨が降り、坂にあたる箇所が多い。

山の近くではないのだが、以前に起こった大きな地殻変動やら何やらで地盤の陥没が大きく、

全てを平地にすることは難しかった地域なのだが、ゆるやかな坂で大半を埋めて作られた街だそうだ。

どうしてこんなところに街が出来なのかはわからないが、先代の人達の必死の作業の末に、

ようやく作られた町という話を聞いたことがある。なんでも、とある町人と貴族の間で起こった

討議やら一揆やらの末に元の町から離れてここに行きつき街を気付いたという説もあるらしいが……。

どちらにしる大規模な行動だったが、主導者が祖父の祖先だと言い聞かされたこともあったっけな。

懐かしいな。一体いつぐらい前の話だろう。

ゾンビも現れず、街の中を淡々と歩くのはどうにも感覚を狂わされる。

今まで波乱万丈な生き方を強要されてきた分違和感が否めない。

「なあ、ゾンビってどれぐらいで餓死すると思う？」

「唐突になんだ？ ……まず、人間がどれぐらいで餓死するのか

がわかんねー。」

「だよなあ…………。」

「勝手に死んでくれるならさっさとどこかに非難したいところです
ね。いままで思いつきませんでしたよ。」

「だが、望ましくない…………。時間がかかりすぎる。」

「なあ、目的地はまだかー？」

「あと少しだ。」

「だといいんだけどよ。」

「…………あの、新堂さん。どこかで騒動が起こって言うような人の声
が…………。」

「何！？ すぐに行くぞ！」

「あ、はい。こっちです！」

俺達は走った。

「まだゾンビがいたのか、この際ここ一帯も制圧しまおうぜ！」

「できればそうしたいところだな！」

「ひええ、またゾンビですかぁ！？」

「大丈夫大丈夫、俺と新堂がついてるからさ！」

藤島の自信もそろそろ良い感じになってきたな。実力も多分相当伸
びていると思うぞ。

「アツハツハ、ゾンビ共を潰すぜええ！」

「おい、藤島…………。テンションがおかしいぞ！」

「アハハ、なんのことやら！ 今なら新堂と互角にいけそうな気が
する！」

…………俺、このチームを組んでて初めてイラッときたぞ。

「ほう、地区最強の俺を越える時まで言うか。凄い自信だな。」

「ウゲゲ！ そうだった！ 最強だったってことすっかり忘れてたぜ！」

「ゾンビ相手では今でも多少遅れを取るが、同じ人間ではどうだろうなあ？」

「そ、そんなに恐ろしい口調で言うなって！ 俺が悪かった！」

「調子に乗ると大物が来た時に困るんだ。少しは抑えてくれよ。」

「大物？」

「巨体のゾンビ相手に特攻するのは危険なんだよ。それ以外にも知能がある相手には凶られるかも。」

「うわわっ、いやなこと思いださせんなよ……俺だって普通のやつじゃないとここまでにならねえって！」

「普通でも極力抑えるようにできないか!？」

「頑張ってみるよ。」

「さらりと言うな。絶対に頑張れよ？」

「チームのためなら命だって張るさ！」

そろそろ見えてきた。結構な数だ！ 2、30体ぐらいか？

どこかの門の前に集まって……ってあれ、祖父の道場じゃないか！！

「うおおおおお！！ 人様の門の前で何やってんだアアア！」

渾身の力でゾンビの脳天を突いた。

「うらあー！」

藤島の木刀も脳天への一撃。

悲劇ゾンビナイトの夜からはまだそこまで日は立ってないけど普通のゾンビ相手だともう、

そこまで緊張することもなくなった。

おかげで門の前のゾンビの殲滅はあっけなく終わった。

「ハハ、容赦ないな、藤島。」

「お前こそ！」

「さて、この門だけど……」

「開ける方法があるのか？」

「ないよ。この門を突破するには、堀を登るしかないんだ。」

「この堀をか!？」

「大丈夫、こっち側に確か……あ、あったあった。ここ、ほら。くぼみがあつて登れるんだよ。」

「意外な抜け道だな……。」

「盲点みただが、これつけて大丈夫なのか？」

「休日とか祝日ぐらいしか門を随時閉めてる日はないし、大丈夫。祖父はなんだかんだで毎日ここに来てたからね。」

「そ、そうか。」

「もちろん香憐が最後に上るんだぞ。俺達は越えたら門の前に行くんだ。速やかに。」

「速やかにする必要なんてあるのか？」

「まあ、その、香憐が越える時にだな……。」

「なるほどなるほど。」

「とにかく登ろうか……。」

無事、全員が内側に入れた。出るときは、内側からもくぼみがる場所があるので、そこを使うんだ。

「この道場を開けるぞ。」

「頼む、頼むぞ……!」

「ゴクリ……。」

「なんだ不吉な予感がします……。」

扉を開けた。中に入る。道場の格技場に当たる部屋はここだ。この扉を開ければ、

全てがわかる……。祖父の安否も、弟子の安否も……。

混濁した疑惑の思念が渦巻く中、俺は目の前の扉を力強く開いた!

L a s t l e t t e r (前書き)

サブタイトル『Last letter / 最後の文章』

Last letter

道場の格技場に当たる部屋はここだ。この扉を開ければ、全てがわかる……。祖父の安否も、弟子の安否も……。

混濁した疑惑の思念が渦巻く中、俺は目の前の扉を力強く開けた！

扉を開く音が響いた。反響までしつかりと聞こえてくるほどの静寂。扉の奥には誰もいない時と変わらない道場のあるべき姿がそのまま残されていた。

「ここにはゾンビもいないみたいだな。床も綺麗だし、さっするに戦闘すらなかったんだろう。」

「ゾンビもないし、ここは本当の意味で楽園みたいだな。」

「楽園？」

「ここならゾンビが来ることもないと思うし、何より周外の音がほとんど聞こえないからね。」

こんな地獄になっちまった国からすれば、ここはまさに外界からシャットアウトされた楽園さ。」

「んん、おい、新堂。扉に紙が貼ってあるぞ。」

「どんな紙だ？」

「『木刀に吊るしてある手紙を読み』とだけ書いてある。」

「木刀？」

祖父の道場は数々の木刀がある。もちろん、どれも普段使わない品々だが、

小太刀など常人から見れば大変珍しい品も飾られてある。一体どの木刀に吊るされてあるんだ？

考えれば木刀というジャンルだけだと格技場以外に保管されている別室にいかないとな。

グルリと見渡しても木刀から何かがつるされているというやつはない。

やはり、別室に行かないと。

「ここには多分ないと思う。木刀は別の部屋にもあるから見に行こう。」

「新堂の祖父は凄いい方だったんだなあ……。」

「いざ見てみると驚きっぱなしだわ。それにしても広すぎだろ。」

「道場ってこういう風にできてたんですね。マジマジと見るのは初めてです。」

「私もじっくり見るのは初めてです。」

俺達は別室へと足を運んだ。そして、保管庫の扉を開いた。

ギイイイッと扉を開くたびに音が出る。

「懐かしいな。」

窓が一つもない部屋だが、イスとテーブルがある。それに結構スペースもある。

壁にはいくつもの木刀やら何やらの祖父のコレクションと呼ぶべき品々が飾られてあった。

紙がつるされている木刀……あ、あの木刀か。

「これだな。」

木刀に吊るされている手紙をはずし、文章を見た。

『親愛なる家族へ』

12月26日午前0時以降にこの手紙を読んでいる誰かがいるのなら、私はもうここに戻ることはないだろう。

これを読んでいる者は落ち着いてこの先を読んでほしい。

あの日の悲劇から、家族は離ればなれになってしまったが、私は啓と聖奈を

見つけた。初日は二人とも無事でいたが、翌日に啓が手紙を残して去って行ってしまった。

啓の行き先は私が見つけた見解からの憶測だが、ここの隣街の横坂に行っただと思われる。

今のところ周辺での大きな騒ぎは無いが、啓を連れ戻しに、私はこ

こを離れることにした。

ここから隣街までの距離を考えると1日以内だと思う。が、不測の事態が起こった時の為に、この手紙を記した。

聖奈の話に移るが、彼女はこの道場【閉の間】に幽閉した。食糧や生活に必要な最低限の

仕度は整えてあるので安心してほしい。だが、食料については持つて2、3週間しか持たないだろう。

これを読み終えた者がいるのなら、どうか聖奈の事を頼む。

啓の手紙と【閉の間】の鍵の場所はこの部屋のテーブルの裏に貼つてある封筒の中だ。

では、健闘と武運を祈る。

新堂 貴道たかみちより。 12月25日

「こ、これは……」

「で、どういう内容だった？」

「家族の事について書かれてあった。祖父は俺の弟の啓けいの行方を追っていったらしい。

隣町に向かったって書いてある……。」

「と、隣町!？」

「な、なんだと!？」

「よりよって隣町ですか……!？」

「それって……!」

「弟の詳しい所在については祖父が発見でき次第ここに連れて来るつもりだったんだらうな。

俺の妹は安全なところに幽閉しているらしい。食糧もしっかり蓄えられてるらしいから、

多分無事だらう。」

「なら、妹の救出が先だな。」

「ああ。」

テーブルの下を見た。確かに、封筒がある。はがして、中身を確認する。

まずは、鍵だな。俺も見たことはない鍵だ。【閉の間】も祖父からは何も言われてない。

次に弟の手紙ただ『俺はここを去る。いままでありがとう。さようなら。』

とだけ書かれてある。どういった経緯けいでその判断に至ったのかはまるでわからない。

「手紙の方は別れの文章か。閉の間……俺も聞いたことがない。」

「むう、自力で探すしかないということか。この広い道場内を……。」

「……いや、ひとつだけ思い当たる場所がある。頑丈そうな扉で閉まっている部屋だ。」

「なるほど、安全面では随一の部屋なら幽閉状態でも大丈夫というわけか。」

「とにかく、行ってみよう。」

俺達はその部屋へと向かった。俺は一部屋だけ入れてもらえなかった部屋があるのを思い出した。

そこしか、もう幽閉できる場所がない。それ以外の部屋は安全性に欠けるし、

多分食糧をためることも難しいだろう。最低限の仕度もできている部屋だから、なおさらだ。

「ここ、か。」

「でかいな……！」

「凄い……」

「僕もこんなに頑丈そうな部屋、始めてみました。」

「なんだか少しだけ怖いです……。」

そこ佇たたずむ大きな扉。黒い。なんとも言えない確固かっこたる硬度の大きさを示しているのは

黒光りの加減である。

ここまでの黒い光沢こうたくはなかなかお目にかかれるものではないぞ……！？

「あ、開けるぞ……！」

鍵を差しこむ。ガチャ、ガチャ、ガチッ

「よし、開いた。開くぞ。」

ギギギギと扉が鳴る。しかし、重いぞこの扉。

「ウグ……！」

「俺も手伝う！」

藤島も手伝ってくれた。更に扉は口を開けるが、まだ足りない……！

「お、俺も手伝う！」

「僕も手伝います！」

「わ、私も！」

5人がかりでようやく黒の扉が開いた。その先は通路になっていて、その先に木製の扉がある。

この先か。

「よし、ここか。」

「ようやくここまで来たな！」

「妹さんも救出間近だ！」

「行きましよう、新堂さん！」

扉をゆっくりと開けた。どうしてゆっくり開けたのかは自分でもよくわからない。

多分、妹の安否を知るのが怖かったんだと思う。他の人なら、きっと勢いよく扉を開けていたんだと思う。

扉を開けたその先には、普通の生活空間としても機能を備えていると思われる部屋があった。

何事の争いの痕跡もなく、平和的な……そう、まるであの悲劇以前を思い出させるような、

そんな光景がそこにあった……。

部屋の中には、その平和な光景には似つかわしくない姿が見えた。一人の少女が、ソファーに座って泣いていた。広い空間だけに一人だけの少女……

まるで広くて誰もいない世界の中に置き去りにされてしまったかのような切なさ、孤独さが感じ取れた。

「……幽……にいい？」

その少女は涙が止まらない顔をこちらに向かせ、声を発した。

少女は俺の事を知っている。俺も、この少女の事は知っている……

！！

「幽にい！」

少女はこちらに向かってきた。俺も、多分無意識だったんだろう。

とっさに声が出たんだ。

「聖奈！！」

って声がさ。

泣きながら俺に抱きついてきた少女【聖奈】を俺はできるだけ強く抱いた。

「幽にい、ヒッグ、ヒッグ、怖かったよお！」

「聖奈、無事でよかった。俺、ずっと心配してたんだ。本当によかった……！！」

聖奈……やっと、家族に会えた。祖父ちゃん。俺、やっとめぐり合えたよ……！！

「おお、感動の再会ってやつか！」

「俺も、感動しすぎて涙が出そうだ……！！」

「おめでとうございます、新堂さん！」

「よかったです……本当に良かったです！」

後ろの方で皆何か言ってた気がするけど、この時の俺の耳には届かなかった。

何を言っていたかわからなかったけど、多分大事なことはないだろうな。

「さて、無事に救出できたことだし、次はどうするか決めないとな。」

「ああ。」

珍しく藤島から先陣を切っている。

「新堂は隣町に行きたいか？」

「そ、そりゃもちろん行きたいけど……。」

「なら、決まりだな。隣町に向かう方針にしよう。」

「気合い入れなきゃな。」

「僕もがんばります。」

「私も、覚悟きめておきますッ！」

「ん、でも行くのは明日以降にしよう。皆も色々疲れてるでしょ？」

「今日も色々あったからなあ。確かに疲れてはいるが……。」

「だろ？ 明日は待ちに行く。修羅場を見るかもしれないだろ？」

今日はもう寝ておくべきだって！

俺も話は聞いていた。しかし、忘れてはならないことがあるぞ。藤島。

「待ってくれ、藤島。確かに、その結論に意義は無いが……。」

「意義はないけど……どうしたの？」

「聖奈はどうしたい？」

「どうしたいって、何が？」

「ここに残りたいとか、危険な場所に行きたくないとか、何かある

か？」

「ん〜、幽にいが行きたいなら聖奈もついて行く！」

「危ないけど、大丈夫か？」

「うん、だって聖奈は……」

「よし！ それじゃ、明日はそれで決まり！ 今日ここで休養を取って明日出発ということぞ！」

「おう！」

「つかの間の休息ですね。」

「ふええ、疲れましたあ。」

各自で寛くわんぎ始めた。せめて許可ぐらい取ってほしかったけど、いまさら言うまい。

「さつき、何か言いかけてたけど……なんだって？」

「えっとね、聖奈は、その……ゾンビ？ って言う人達から受けた怪我を……なんて言うのかな……。」

「なんとか言葉にできない？」

「う〜ん、聖奈には難しいかも……。あ、お祖父ちゃんから手紙を渡すようになって言われてたんだ。これ！」

手紙を受け取る。確かに祖父の文章だ。

『聖奈について

聖奈が持つ、異形の力について書き記す。これをもし手にした者がいるならば、

最後まで読んだ暁にはこの手紙を始末してほしい。

やつらにすれば、聖奈の力は脅威であるとともに……最初に消した人間になってしまっただろうからだ。

前置きが長くなってしまったが、説明する。尚、これは見解や憶測があることを踏まえてもらいたい。

聖奈は普通の人間にはない特殊な力を持っている。いくつか種類があるかもしれないが、

ここでは確認できた能力だけを記す。

まず、第一の力【治癒】についてだ。聖奈はゾンビの攻撃を受けた者の治癒ができる。

傷口が癒えるという形ではないが、腐敗……つまり、ゾンビ化の進行を止める事が出来る。

上記のとおり、疲労回復等の類ではないものの、これによる効能は非常に効果がある。

また、かなりゾンビ化の進行が進んだ者に治癒をした場合も、ゾンビにはならない。

しかし、明確には分からないが重度の進行具合の者に治癒をさせた場合、死に至る事が発覚した。

この方法でもゾンビ化はしないが、踏まえておいてもらいたい。

もうひとつの力。確認できたのはこれで最後だが、これは本能的な力に近い。

ゾンビの位置を把握する力……つまり【察知】の能力がある。文字通りの力だが、移動方向まで正確に把握できるらしい。

自分が密閉されていても、外界にいるゾンビの位置が把握できるようだ。

聖奈についてはここまでだ。自分自身、まだ信用してよいのか、葛藤している。

これをどう思うのかについては読んだ者に任せることにする。どうか聖奈の事を守ってやってくれ。

健闘と武運を祈る。 新堂 貴道より。 12月25日『

「……………」これは……………」

ど、どういうことなんだ。異形の力？ 脅威？ 治癒？ 察知？ どこをとっても、これはあまりにもひどい文章だ。信用するに値しない。

だが……………これはまぎれもなく祖父の字体だ。そして、しっかりと最

後に自分の名前と日付まで……。

これは真実なのか？ 偽物なのか？ いや、しかし誰かこんな時に偽物の情報を流すやつがいる。

だが、これは信用してもよいのか？ 人間にはない能力ってなんなんだ……！？

くそ、どうすれば、俺はこの情報をどうすればいいんだ！？

鵜呑みにしてもいいのか？ それとも、シビアな目で見ればいいのか？

祖父は一体どんな心境でこれを書いた……？ そうだ、この時の祖父はもう普通じゃなかったのかもしれない。

そうだ、そうに違いない！

……ダメだ。なら、何故態々わざわざこれを保管庫じゃなくて聖奈に持たせた？

辻褄つじつまが合わなくなる。祖父の気が動転うごめくしていて、支離滅裂しりめつれつだった、これが一番適当な答えのはずなのに、聖奈に持たせた……？

気が動転うごめくしていたなら弟の啓を追っていく最中に聖奈に気づくかどうかも怪しい。

ましてや、聖奈に会う理由が手紙だ。動転うごめくしていてできることじゃない。

やはり、考えると祖父は正気で手紙を書いた。

どうすれば……あ！！ そうだ、聖奈に直接聞けばいいんだ！
何を考えていたんだ俺は……

答えは近くに知っている人がいるじゃないか！

「な、なあ、聖奈。」

「なあに？ 幽ゆいにい。」

「こ、この手紙のことなんだけど。」

「これって、聖奈は読んじゃダメってお祖父ちゃんが言ってたんだけど見ていいの？」

「ああ、見てもいいぞ。」

「それじゃ、読むね。……ふん、お祖父ちゃん、こんな事書いて

「たんだ。」

「らしいんだ。聖奈、そこに書いてあることって……本当なのか？」

「……うん、本当だよ。」

「……………ッ!？」

「なん、だと……？　これが、真実だっというのか!？」

「でも、聖奈はあんまり最初に書いてある方は使いたくないの。」

「ど、どうして？」

「これね、治す方法って、聖奈の血を使うの。だから、治すの嫌い。」

「

「血？」

「うん。傷口に血を当てたり、飲ませたりすると、治っちゃうんだ

っってお祖父ちゃんが言ってた。」

「そ、そうか。祖父がそう言ってたのか……。」

血を使う治療……。俺にも理屈なんかは到底理解できそうにはない。

問題は、この事実は本当なのだという事を受け止めるしかないこと

と……

これを皆に話すべきなのかということだ。何か、証明さえできれば

苦労はしない。

これが本当なら、俺達の生存率は格段に上がるし、今後の行動にも

大きく影響が出る。

しかし、証明する方法がないとなるとな……現に俺もまだはんしんはんぎ半信半疑

だし。

「そ、そうだ。察知の方も使えるんだろ？　このあたりにいるゾン

ビがどこにいるのか教えてくれよ。」

「え、あ、うん。こっちはいつでも使えるから。うーん、この辺

りには……ほとんどいないよ。」

もう2人しか見えないよ。」

「……………」

ああ、さらりと潔白証明できると思ったけど、この部屋、窓がない。頑丈な作りだから当然だろうけど、

これで証明する方法は無くなった。検証は明日でもいいか……。
なにはともあれ、聖奈云々については保留だ。聖奈は最後まで一人で苦しんでいたんだ。

これ以上、聖奈に辛い思いはさせられない。明日からはまた地獄のような日が続きそうなんだから、

今日はもう考えるのはやめよう。ああ、そうだ。黒い扉、閉めておかないとな。

「藤島、扉閉めるの手伝ってくれないか？」

「おう、いいぞ！」

扉を閉めて、俺達はその日だけあの時のような平和な日を過ごした。あの平和だった時以上の幸せを感じた。本当に、俺達は今、樂園にいるんだ。

あっという間に今日は終わり、明日を迎えた。

ふあああ、もう朝か。

時計がここにはあるので、時間が分かる。今は午前6時34分だ。皆はまだ寝ている。とっついていたら、聖奈が俺の隣に来た。

「幽にいくー！」

小声で言い、俺の腕に抱きついてきた。

「せ、聖奈？ どうしたんだ。今日から隣町に行くんだぞ。聖奈はまだ寝ててもいいんだぞ。」

「でも、もう目がさめちゃったし。それに、いままで一人ぼっちだったんだもん……。」

「聖奈……いままで辛い思いをさせてゴメンな。だけど今日からは俺が護るから……。」

「そっ、聖奈は何があっても護る。例え、この命に代えてでも……！！」

「幽にいの腕、あつたかい……。」「

「聖奈……そろそろ自分のベッドに戻らないと風邪ひくぞ？ 冬だから寒いだろ。」

「ベッドの中よりも、幽あつたにいの方が暖かいもん……だから、もう少しだけ……」

……！！ 聖奈、泣いているのか？ 涙が両目から溢れている。

やっぱり、一人で助けが来るかどうかすらも信用できない状況だったから……。

一人だったから、最悪の状況しか考えられなかったのかもしれない。俺は泣く聖奈を抱き寄せた。

「大丈夫、俺が護るって言ったじゃないか。もう、泣かなくてもいいんだ。」

「幽あつたにい……！！」

ギュツと腕を抱く力が強くなった。

その後の俺と聖奈は温度の低い部屋の中でも寒いとは微塵みじんも思うこととはなかった。

そして、時は刻一刻と過ぎて言った。

午前8時30分、全員が目覚め、朝食を取り終えてもう準備は済ませてあった。

「皆、準備はいいか？」

「ああ、バッチリだ！」

「俺も良い調子だ。」

「僕はいつでも行けます。」

「私も大丈夫です。」

「聖奈は準備万端ばんたんだよ！」

よし、皆も整っているな。6人か……護衛が務まるかどうかかわからないけど、全力を尽くす！

「戦闘員は俺、藤島、大門さん、吉成の4人。非戦闘員は香憐と聖奈。これで行く。それじゃ、ここを出るぞ。」

食糧や荷物はまとめてあるな？」

「鞆かほんが1つ聖奈が持っていたから、食料には少しだけなら余裕があ

ります。」

香憐が言った。おお、頼もしい限りだ。カバン2つ分も食糧があるなんてな……！

「懐中電灯も1つと電池が十数個あるからストックも十分だよ！」
聖奈が言った。灯りも問題ないな。

「それじゃ……扉を開けます。覚悟はいいですか？」

「……………」

皆緊張している。緊張するのは街の手前からいいのだが、まあ緊張感は無くされても困るから、
問題ないだろう。

俺は、小声で聖奈に聞いた。

「一応聞くけど、ゾンビの気配は？」

「ん、大丈夫。門の前に1体いるけど、中には誰もいないよ。」

「そうか、ありがとな。」

扉を開けて、黒い扉の前に立つ。扉は重厚な雰囲気を漂わせて、俺達の前に聳^{そび}えている。

「開けるぞ！ 手伝ってくれ！」

俺が扉を押し、藤島たちが続く。ギギギと扉が少しずつ開いていく。

寒気が隙間から差し込み、俺達を包んだ。

「出るぞ、俺に続いてくれ！」

扉から出て、俺は外ではなく保管庫に向かった。

「新堂？」

「ん、どうした？」

「どうしてここに来た？」

「木刀が欲しくてな。」

「ああ、ここにはたくさんあるもんな！」

俺は……そうだな、これとこれにしよう。

「これってどうやって使うんだ？」

「これはだな……後で使ってみせるよ。藤島はこれに変えておけ。」

木刀を一本差し出す。

「使ってもいいのか？」

「ああ、祖父はもういないんだし。」

「大門さんにはこれかな、はい。」

「ああ、すまん。」

「吉成も一応これ持ってて。」

「こ、これは？」

「小太刀つてよばれる武器だよ。射程が短いけど軽いし、小回りが利くからな。」

「ありがとうございます！」

「香憐と聖奈は何かいる？」

「わ、私は遠慮しておきます……。」

「聖奈はこれがあるから大丈夫。」

聖奈が見せたものは……凄く斬れ味がよさそうな刃物だった。

「扱いには十分注意するんだぞ？」

「うん！」

さて、武器も本格的に整った。俺は今まで使ってた木刀をベルトと腰の間に挟めた。

そういえば俺、制服のままだったな……。ベルトが役に立ったから文句は言えないけどさ。

保管庫から新たに手にした獲物ぶいきを手に握りしめ、俺達は道場を出た。

Y o k o s a k a t o w n (前書き)

サブタイトル『Y o k o s k a t o w n / 横坂町』

ここでの『横坂』は概存するものとは別に架空の設定として扱っています。

武器も本格的に整った。俺は今まで使ってた木刀をベルトと腰の間に挟めた。

そういえば俺、制服のままだったな……。ベルトが役に立ったから文句は言えないけどさ。

保管庫から新たに手にした獲物ぶきを手に握りしめ、俺達は道場を出た。

最初に目についたのは正面の門の下にあるゾンビの死骸しかいとは別の1体のゾンビ。

門前のあいつは動く気配は無い。チャンスだ。内側のくぼみの場所も外とは同様に、

門から離れた位置の扉があるので門の前なら何とかなりそうだ。

少し回れば戦う必要もない。ここは少しでも温存だ。更なる強襲きょうしゅうに備えておかないとな……。

「それじゃ、出るぞ。予定通り、くぼみから出る。」

俺が先陣を切ってくぼみを使ってさつと扉を越えた。藤島達も後に続く。

全員が越えたところでゾンビの方へと見やる。大丈夫だ。このままだいけば……。

そういえば、聖奈が言っていたな。1体いるってこと……あれは信じてもいいのか？

いや、あれが証明された今それを俺が否定することはできないよな……。

「あのゾンビは無視していく。横坂町に着くまではできる限り温存だ。いいな？」

「もちろん！」

「僕もOKです！」

「当然だ。」

「準備はできてます。」

「聖奈も大丈夫！」

「よし、隊形は戦闘が俺。左右の後方を大門さんと藤島が、吉成は後方の見張りと援護だ。」

香憐と聖奈はできるだけ俺達の内側にいるような形で行く。後、何か反応があつたら……

聖奈、教えてくれ。」

「うん！」

「ん？ 聖奈ちゃんって何かの発信機みたいな持ってたの？」

「え、あ、いや、そういうのとは違うんだが……それについてはまたあとで説明するよ。」

信じるしかないのにここで言えなかった……。俺も言いたかったんだが、

ここで踏みとどまってしまふということは、俺もどこかまでまだ信じ切れていないところがあるのか？

「それにしても驚きだったよ。聖奈ちゃん、想像よりも全然可愛かつたとは〜。」

「い、いきなりなんだ？」

「正直な気持ちさ。てつきり新堂みたいな感じだとばかり……。」

「ほう、俺みたいとは一体どういうことか説明してもらおうか、エエ？」

ギロリと視線を鋭くして藤島を見やった。若干の冷や汗が藤島のほほを伝う。

「……いつみても冷や汗がとまんねえ。」

「冬なのに冷や汗かくような事していると冷えるぞ？」

俺が悠々たる態度で言つてやった。

「心配してくれてんなら汗かかすなよ！」

「藤島、事の発端ほったんはお前だということを自覚してるか？」

「大方口火を切っているのは藤島さんですね。」

吉成が会話に加わつた。

「吉成まで!? 誉めてただけじゃんか。」
「だったら余計なことを口走らないようにしたらどうだ? そんなことだと信用されないぞ?」
「うおい! チームメイトは信用しあうもんだろ!？」
「チームメイトは信用しあうが、表面だけになるかもな……。」
「裏では評価されてないってか!? 悲しすぎる!」
「でも、悲観することもないですよ。信用を惜しんでいたら生きていけない世界ですから……。」
「そ、そういえばそんなご時世になっちまったばかりだな……。」
「俺達はこれから地獄に踏み入ろうとしてるんだからな?」
「わ、分かってるよ……!」
「……ま、さつきは俺も悪かった。地獄に入っちまったらもう、こんな会話できないかもしれないからな……。」
「……………」
「向こうは向こうで盛り上がってるみたいですね。」
「今は、一時の安らぎを与えてやるべきなんだろうな。シビアナ事は俺達だけで考えよう。」
「僕達も、楽しんだ方がいいんじゃないですか?」
「そう、かもな。」
「なら、続きをやるっ!」
「続き?」
「しりとりだよ! 俺が負けっぱなしだったからな。次こそは俺が勝つ!」
「面白い。受けて立つ!」
「僕も負けませんよ?」
「順番は俺、新堂、吉成の順だ。最初は『リ』からだな。『リ』ス
ト。」
「シビアナ……だな。『ライイト。』」
「『ト』ライ(英語『Try』訳:挑戦する)」「
『イ』ト(意図)。」

「トイレ。」
「レバー。」
「バス。」
「スコール。」
「ルール。」
「ルス(留守)。」
「スルー。」
「ルレット。」
「トットリ(鳥取県)。」
「リカ(理科)。」
「カラス。一字のやつはナシってことで。」
「ス……スパイダー！」

そんなこんなでいつの間にか6人全員参加のゲームにまで発展していった。

順に藤島、俺、吉成、大門さん、香憐、聖奈。

「な、なかなかやるな……！」
「カカシ(案山子)！」
「シーラカンス！」
「ス……ステーク！」
「キジ(雉)。」
「ジコク(時刻)。」
「クロウト(玄人)。」
「トキ(鴉)。」
「キシ(岸)！」
「シシ(獅子)。」
「シシマイ(獅子舞)！」
「イケ(池)。」
「ケダマ！」

「『マ』……？ あ、『マ』キガイ（巻貝）！」

「そろそろ決着をつけてやんよ！ 『イ』ソ（磯）！」

「『ソ』……ソーラーパネル！」

「『ル』……『ル』ロウ（流浪）！」

「『ウ』ソ（嘘）！」

「『ソ』ラ！」

「『ラ』……ラ……ラ！」

「勝負は決したな。まだまだ詰めが甘いぞ。藤島！」

「またなのか……？ また、負けた……だとお！？」

「『字連魔』じゃなかったですし、今回は経験不足だったんですよ。藤島さん。だから、落ち込まないで！」

「あ、ああ。俺はこの程度ではまだ……！ ちなみに今回はどんなテク使ったんだ？」

「今回は『一般型』^{ローカル}です。特に目立ったやり方は無いです。

個人の傾向とかがありますが、『間法』^{まほう}が若干ありました。……最後の最後で、

安心してませんでしたか？」

「え、ああ。確かに少し安心してたが……。」

「いいですか。『間法』^{テク}というのは文字通り『間をおく法』^{テク}なんです。

若干の間と、全力で考えた感をあえてかもし出させて相手を油断させるんです。」

「ハ、ハハ、マジで奥が深いな……。」

「しりとりはシンプルな分、出所次第で色々推測できます。

そこを考えてからの計画性が重要なんです。要はどれほどの許容範囲で何手読めるかです。」

「まだまだ、甘かったか。」

「藤島さん、頑張りましょう。いつか勝利を掴む日まで！」

「……ああ！」

「そういえば聖奈ちゃんもしりとりできるんだね。やっぱり学校で

「？」

「うん。皆やってるから聖奈もがんばったの！」

「聖奈ちゃんは強いほうなの？」

「強いつて言うよりも、顔見てたら大体何を言っ
て来るのかわかるの。」

「え？」

「顔に書いてあるの！」

「流石、自慢の妹だ。」

「これは幽を越える実力者の予感だな。」

「はは、どうだろな。」

実際のところ察知する力だけなら俺を越えている。

オセロ、将棋、麻雀……どれをとっても勝てたことは無い。

先読みする力が強過ぎて運よく早い順で上がれるような麻雀くらいしか先手を取れた事は無い。

一体どこまで読んでいるのかは俺にもわからないが……。

まあ、そんな妹が顔に書いているというのだから多分本当に顔を見ただけで分かるんだろう……。

そういう感じで幕を閉じたしりとり以後はまた3、3のグループに分かれた。

「それにしても聖奈ちゃん可愛いなあ。」

「いつまで言ってるんだよ。」

「だって、そうじゃんか。」

聖奈が可愛い。か。黒く艶やかで肩より少し下まである髪。

大和撫子を連想させるような……。なんだかんだで俺も可愛いということは否めていないようだ。

結局の所、聖奈は藤島の言うとおりで『可愛い』のだろう。

そんなことを考えていたらいよいよ荒廃した建物の群が見えてきた。

「ここからが本番だ。気合い入れてけよ！」

「ああ！」

皆の雰囲気コロッと変わり、緊張が伝わる。各自で武器を構えて

不測の事態に備えている。

「街の大通りの付近まで突っ切るぞ！」

俺の声と共に皆の目つきが変わった。俺が走り出すと、皆が走り出した。

「うぎゃあああああああ！」

どこからともなく悲鳴が聞こえてきた。

「悲鳴か！ 向こうからだ！」

現場に立ち寄った。……グッ、クソ、間に合わなかった……！

ゾンビがすでに男の肩に食いついている。無我夢中で俺はゾンビに長身の武器を振り下ろした。

グシャァ ゾンビの脳天が砕ける。おお、これは思った以上の威力だ。

「幽、それなんていう武器なんだ？」

「確か、矛って言うやつだ。木製だけど……。それでも頑丈だから威力はある。両手で使うんだ。」

「ほほう、便利そうだ。」

そうしていると……

「う、グハァッ！」

「だ、大丈夫ですか！」

「ゾンビ化が進んでいるのか……!?!？」

「ど、どうすれば……!?!？」

「聖奈に任せてください。」

全員が聖奈に向き直った。

「私が治療します。」

すると、聖奈は鋭利な刃物で少しだけ血が出る程度の傷を指につけた。

「聖奈……。」

本当に治癒できるのか!？

不安で仕方なかったが、今はこうするしかないだろう……。だが、俺には聖奈の血がなんだか

妙な風に見えてくる……。無事に治癒できるとよいのだが……。聖
奈の血が患者の傷口に当てられた。

The actual situation of Yokosaka Town

サブタイトル『The actual situation of
Yokosaka town / 横坂町の実態』

聖奈は鋭利な刃物で少しだけ血が出る程度の傷を指につけた。

「聖奈……。」

本当に治癒できるのか!?

不安で仕方なかったが、今はこうするしかないだろう……。だが、俺には聖奈の血がなんだか妙な風に見えてくる……。無事に治癒できるとよいのだが……。聖奈の血が患者の傷口に当てられた。

「ぐううう……。。」

「……はい、治癒完了。」

「え?」

思わず声を上げたのは藤島だった。患者はまだ苦しそうな表情を浮かべている……。

「ちょ、ちょっと! まだ苦しんでるんですけど!」

「何ってるの、これで完璧のはず……。」

「いやいや、血を当てただけじゃん! それって何の意味があるの?」

……藤島達は聖奈の能力についてまだ話してなかったよな。

「あ、あのさ……皆、よく聞いてほしい。」

「どうした、新堂?」

「じ、実は聖奈のことなんだけど……。」

「聖奈がどうかしたのか?」

「……皆、心して聞いてくれ。実は聖奈は凄い力を持ってるんだ。力?」

「ああ、今のところ2つの能力を持ってて今は……【治癒】の能力を使ってるんだ。」

「ち、治癒!?」

俺と聖奈以外が声を上げた。

「な、なんだってー!？」

「そ、それは本当なのか？」

「こ、これは……。」

「そ、そうだったんですかー!？」

「え、ええ〜と……お、俺もまだ半信半疑感が否めないんだけど
今回ばかりは頼らざるを得なかつたというかその……。」

「詰まる話、新堂さん自身も信憑性しんぴやうせいに欠けると……。」

「ああ……。」

「幽ゆに信じてなかつたの？」

「すまん……。」

「なるほど、治癒か。だったらなおさら患者への失態はいかんだろ
!」

「何言ってるの。その人はもう治ったよ。」

「だから苦しんでるっしょ、その人!」

「藤島、治癒と名ばかりの呼び名だから誤解しているが、治癒でき
るのはゾンビ化ゾンビ化だけなんだ。

傷口を塞ふさいだり痛みいたみの緩和かんわといったのは聖奈ではできない……。」

「え、そうだったのか……。」

皆にも多分直接は言わなかったけど間接的には伝わったんだと思う。

『治癒できるのはゾンビ化だけ』。これはもちろんゾンビへの進行
を止める効果を聖奈が

持っていることと、今の患者は放っておけばゾンビになっていたと
いうことを意味している。

それと、もうひとつが……『ゾンビから傷を負うとゾンビ化する』。
今の現場で目にして、治癒を受けているとなれば導き出される答え
は誰でもわかる。

俺達はまだ怪我を受けていないし、詳しいこともわからないので何
とも言えない……。」

ゾンビに喰われているのは攻撃だけでゾンビ化はしれなくて、ほかに条件があるのかもしれない。

が、今それを検証するには環境が悪すぎる。

「あの、もう大丈夫ですよ。ゾンビ化への進行は止めました。もうゾンビにはなりません。」

「ほ、ホントか!？」

「はい。完璧に治癒しました。」

「おお、ありがとう！ 君は私の命の恩人だ！」

「いえいえ、……命は大切にしてくださいね。」

「ああ、もちろんだ！」

「もう治癒は終わったので傷口に影響がでない程度に運動してもいいですよ。ただ、傷口があるので……」

いざという時には逃げてくださいね。」

「あ、ああ……とにかくありがとうございます！ 私は安全な所に非難することにするよ。君も早く逃げるんだぞ！」

「はいです！」

患者はやや小走りでこの場を去った。……命を救うのはやはり良い事なんだと思う。

自分への達成感や幸福感もあるけど、人として助け助けられるってのがあるべき姿なんだと思うんだ。

こんな状況だから忘れられがちだけど、助けあわずして生きてはいけないんだ。

だからこうして今皆と一緒に誰かを助けるのってきつと良い事だ。そうに違いない。

俺はこれからもこうして誰かを助けようと思う、皆の為にも……な。「行こう、ゾンビがここにも来るかもしれない。」

「ああ、大通りに出るまではなんとかしてでも頑張るぞ！」

「おう！」

街の大通りは……こっちな。俺が歩き出すと皆も何も言わずについてきた。

建物の間を通っているが多分問題は無いだろう。後ろにはゾンビは
かなり遠くにしかいなかったし、
前から来ても俺が片づけられる。もしも時は後ろから逃げればい
い。

さて、そろそろだな。

「ここで待つててくれ。この先は俺が確認してくる。」

「ああ、気をつけるよ……。」

「まかせとけッ！」

路地を出た。……こ、これはッ！ マズイ！ とてもじゃないが……

…突破できない！

俺は慌てて路地に戻った。クツ……これは予想だにしていなかつ
た。

「ど、どうした!？」

「ぞ、ゾンビの数が多すぎる。大通りの道路一带に散らばっていて

……とてもじゃないが通れそうにない。」

「な、なんだと……!？」

本格的に逃げの一手を迫られている。しかし……これは逃げるしか
ないか。

い、いや……向こうは日影が多くて視界も逃げ場も狭い。比べて大
通りは明るく広い。

しかしゾンビの数が違いすぎる……。二者択一だがよく考えるとど
ちらも望ましくない……。

だが、もたもたしているとゾンビが……!!

路地に1体のゾンビが大通りの方から入ってきた。俺は矛を振り下
ろす。

流星は両手で使う武器と行ったところか。ゾンビの力もものともせ
ずに下まで届く。

木製だがこれほどのものだとは……。もうゾンビも俺達の存在に薄
々気づいているやつらが、

少しだけ増え始めている……もう躊躇ちゅうちゅうしている暇は無い!

「大通りから突破だ！ 壁際を通るぞ！」

俺は出来るだけ皆がまとまれる方法を取ることにした。大通りはゾンビの隙間を縫うように

進めばチームとしての機能は無くなってしまおうが個人の力を存分に振るえるし、

進むスピードも自分のペースを維持できる。チームとしては、

壁際は後ろが壁なので背後の心配をする必要がない。

横も端の二人は2方向、他は目の前の敵を相手にするだけでいい。

好きあればその隊列のまま移動し、

極力安定した殲滅力で進める。……というのも全員がゾンビを頭部攻撃での1発即死を狙える場合でしか

意味がなく、吉成が穴になってしまふ。一応最低限の装備はそろっているけど……。

できれば投擲^{とつてき}方面で活躍してほしい。石はそこらじゅうに落ちているし、

広い大通りでは活躍する機会は多いだろう。その代り全方向からの襲撃に対処できなければならぬが……

いや、ダメだ！ 考えてる場合じゃない！

目の前の的に矛をたたきつける。矛の良いところは大ぶりで隙が大きそうに見えるが、

木製なのでそれほど重いわけでもなく、中学時代から筋力がそこそこある俺にとつてはすぐ

突きや横薙ぎにも繋げるのが容易なところだ。堅く、常人にとつてはそれなりの重さでもあるので、

威力は絶大だ。ゾンビ2、3体程度なら軽く振りきれぬ。木刀ではどうあがいても1体ずつしか

相手にできなかつたのに対し、矛は長い。余裕で届かなかつたところも届く！

ドシャツ 横薙ぎがゾンビを地に着かせた。木刀では頭部以外では軽傷だったが、

矛による重さのある一打は通常のゾンビなら思いのほか効果があるようだ。

ゾンビは地を吐き、必死に手足を動かしている。

「こつちだ！」

俺が言う。皆が俺についてきた。藤島はもちろんだが、大門さんも積極的にゾンビの頭部を意識して狙っている。

吉成は小太刀で急所狙いの連打。目、鼻、首等々。頭部へは横から突く攻撃を入れている。

使いなれていないようで急所狙いでもゾンビを1発で倒すことや即死させることはできないようだ。

それとも実戦経験が少ないからどこかで躊躇^{ためら}っているのだろうか？香憐は武器を持っていない。俺達の強さから自分が全く手を出さずとも生き残れるとも思っていたのだろうか？

後で護衛用の木刀を渡しておくか……まだ木刀のストックは2本ある。

1本は最初、藤島からもらった木刀、もう一つは道場で手にいれた良い品。

渡すなら訓練用にも藤島の木刀を渡すつもりだ。藤島と大門さんの後ろに旨い具合にびったりとくつついている。

多分大丈夫だろう。吉成も近いからなおさらだ。聖奈はというと俺の近くで果敢にゾンビに

立ち向かっている。俺もひやひやしたが、聖奈は木製とは違う本物の金属の刃物……。

それも祖父が渡した曰くつきのような感じのナイフ……いや、ダガ
ー？

なんか、刀身がシンプルな形状とは違い、歪^{いびつ}な形状をしている。

波を思わせるような刃先の部分、ハリネズミを連想させる刃先から下の部分。

そして掴^{つか}みやすいように設計されたような形状、柄^{つか}の部分も……。刃先はスパッと一刀両断できるようなコンセプトだろう。刃先より

下のギザギザの部分は
少しでも外傷を多く与えることができるような感じ……なのだろうか？

でも聖奈は見事と言えるほどに使いこなしている。身長の関係で頭部への攻撃はしないものの、

足首への攻撃でダウンしたところを頭部への集中攻撃に切り替えているといったところだ。

可能なら首狙い攻撃。首なら確実に死ねるだろうな。あの形状は死んでくれないとおかしいぞ……。

「くそ、次から次へと！」

矛で次々に始末しても奥からどんどんわいてくる。俺個人だと進む余裕はあるが、

仲間がてこずっている。俺はその助力をしているが、何せ香憐が非戦闘員……。

どうにかして一人分を補わなくては！ む、遠くに人影が……。やはり戦っているのだろうか？ 何人かで固まっかけていてゾンビを攻撃している。

その奥を見ると、大きなガラス張りで高さが目立つビルが立っていた。相当高い。

啞然としていると俺の手に噛みつかんとするゾンビが迫っていた！ 身をかがめて口を開くゾンビ。

「うわああああー！」

なりふり構わず矛を横に薙いだ。手にかみつこうとしてたので矛の攻撃をまともに食らい吹っ飛んだ。

俺の手はなんとか無事だ。念のためあとで聖奈に見てもらおうか……。

「はああ！」
グシャアツ ゾンビの頭部へ重い一撃。藤島の木刀がゾンビをあっけなく沈めさせた。

「ハハ、木刀でも数を相手にできるもんなんだな！」

「確実に一撃で殺れれば数相手には少しだけ優勢だ。だが必ず一撃

で仕留めろよ。

仕留めそこなったら距離を置かないと喰われるぞ!」

「言われなくてもわかってるさ!」

グシヨツ 藤島の木刀が横薙ぎされ、ゾンビを吹っ飛ばした。頭から崩れるゾンビ。

「ほっ!」

ゴツ 地に伏せるゾンビ。

「大門さん気をつけて!」

「オラッ!」

地面にいるゾンビに追撃。足にしがみつかんとするゾンビの頭を蹴り、自らの体重をも乗せた木刀で顔面を潰す。

グシヤツ 一応頭部への攻撃を心がけている大門さん。安心したよ。でもできれば一撃でできるようになってほしいところだ。

シユツ 水平に飛んでいく石。ゴツ ズンビの鼻を直撃する。そして全体へのバランスの掛け方が

おかしいズンビは後ろへと倒れざるを得ない。倒れたズンビは暫くちひは起き上がれない。

次々と投げられる石は遠くまで届き、ズンビを部分的に崩す。

さて、俺も頑張らないとな。

グジャアツ 頭部への位置を狙って水平に矛を薙いだ。するとバランス感覚が狂っている

ズンビは一気に倒れ込んだ。4体を巻き込んだ攻撃だったが頭部は脆いな。

流石、人間がベースだけの事はある。もちろん全体を狙ったの攻撃なので4体とも生きている。

俺はそれぞれに留めの一打を入れる。グシヤツと鈍い音が数回響く。これには慣れざるを得なかった。本当は誰もこんな音、慣れたくないよな……。

「キヤーツ!」

「香憐！」

香憐が上をゾンビに掴まれている！

藤島が迅速に木刀を握りしめ、腕を掴んでいるゾンビの顔目掛けて木刀を振り下ろした。

しかし、至近距離に香憐がいることで戸惑ったのか、ゾンビは腕を放さない。

頭部への攻撃を入れる時の角度が浅かったのだ。少し首が傾いたゾンビが、口を開く。

「やめて、やめてえ！」

「こんのやる！」

無我夢中で今度は木刀を掴んでいる腕へと振り下ろす藤島。しかし、腕がガクツと下がるだけ。

木刀では切断できるはずもない……どうしたんだ藤島！？ このままじゃ……！

ガクツ下がった影響でゾンビの体位は下がったが、香憐も同じように下に引きずられていた！

パカツと開けられた口が香憐に向かって迫る！ やめろ、それ以上は……ッ！！

グシャアアアツ ゾンビがかみついた！ しかし、香憐は苦しそうな表情ではない。

まだ恐怖におびえきったような顔だ。では一体何が……？

「藤島ッ！ お前……！！」

大門さんが声を上げる。俺もそれを見て目を見張った。

「ウグアアアアアア、ツアアアア！！」

藤島が叫ぶ。そう、藤島は香憐の身代りに自分の腕をゾンビに喰わせたのだ！

ゾンビが強引に肉を噛みちぎろうとするように顎を動かす。

「ガアアアア！ 痛エエエエ！」

悲痛な叫びが大通りに響く。

「藤島から離れる！ クソゾンビッ！」

大門さんが地面に伏す藤島の腕を喰うゾンビの頭部を真横から木刀で一打！

大門さん……！

「藤島ッ！ 大丈夫か！？」

「ゲホッゲホッ、ッ痛！ 八八、心配ねえよ……ゾンビ化は聖奈ちやんが治癒してくれんだろ……？」

俺はまだ左腕もあるし……出血もまだたいした事ねえからな。いけるさ……！」

「無茶を言っな……！ ゾンビ化への進行がどれぐらい苦しいかわかるだろ……！」

今だってもう痛みが響いていてるはずだ！」

「イテテッ！ ……治癒は戦場を駆け抜けてからでいい！ それまではなんとか持つだろ……。」

割って入るように聖奈が近くに居るゾンビを始末してからこちらに接近し、さきほどの指とは

別の指を浅く切り、血をたらす。

「藤島さん、病気はなんでも早期解決がいいんですよ。あまり無茶はしないでください。」

「あ……すっげえ！ 痛みが引いてきた！」

「馬鹿、腕の痛みはそのまんまだろ！」

「こんなの大したことねえって！ 大門さんがスパッと決めてくれたおかげで、

歯形が深めについただけで済んだんだぜ？ 大門さん、助かったよ

！ ありがとう！」

「お、おう……大丈夫なら何よりだが……。」

「修羅場を潜りぬけてきた俺にこの程度の痛みなんぞ無に等しいッ！ 行くぞ！」

木刀を両手でふり下ろす。

威力は今まで通りで一撃で沈めるほど！ おお、本当だったみたい……いや、違う！

顔には隠しているかどうかわからないが少し疲労の跡が見える。そして極め付けが木刀。

アイツ、片手でも倒せていたはずだ。それなのに今は両手。

威力的にはさほど変わらなくても両手だと動きに無駄があるだけで重荷になってしまう！

疲労もあり危険だツ！

「藤島、協力するぜ。」

俺も藤島寄りで戦うことにした。

「おお、サンキューな！」

「疲れているのか？」

小声で聞いた。

「……やっぱ、お見通しか。」

「きついか？」

「そろそろ限界だ……。右手がダメになれば両手で振れないし、喰われたら振り払えないだろうな。」

「馬鹿野郎……！ 強がってどうするんだ！」

「言っても不安にさせるだけだ。大丈夫だって。俺達には、お前がついてるじゃねえか。」

「そ、それでもな……！」

「あー、それ以上は言わなくて大丈夫！ 頼りにしてるぜ。新堂！」

「……ったく！」

矛を薙ぎ、確実に仕留めていく。頭を潰すことで次々と撃破していく大門さんと違い、

俺は少しでも藤島を楽にさせてやるために地面に伏したゾンビをようやく頭部狙いで仕留める形。

たくさん攻撃できるので一辺に倒すことも可能。そして頭部攻撃はリーチが長いので屈まなくても

頭は潰せる。

だが、そろそろ藤島の限界が……！ どこかに隠れる場所は無いのか！？

やばい、俺もそろそろ疲れてきた！ …… そうだ、あのビル！ ガラス張りのビルだ！

結構進んできてるし、距離もそう遠くは無い！ …… チームの為だ。自分が犠牲になるのは仕方ない。

「向こうのガラスのビルまで走る！ 俺の後ろに続けええ！！」
無我夢中で叫んだ。これしか、チームが生き残る方法は無い！
皆が俺に集まる。

「行くぞ！ うおおおおお！！」
矛を強引に薙ぎ、ゾンビを力いっぱい倒す。倒れただけだが、本気で入れた分良い威力のはずだ。

「うらああああ！！」
更に4体程度を倒す。また4体、次に2体と敵を多く倒しつつ進んだ。

俺は倒して道を作るだけ。処理はどうでもいい！

「階段を登ってドアに入れ！」
皆が階段を上る。階段の上には少ししかゾンビはいない。

先に乗った大門さんが1体を先に仕留める。そしてまた次のゾンビも仕留めた。

俺は聖奈と香憐が昇るまで階段の下で待機。

「ありがとうございます、新堂幽さん！」

「幽にい、ありがとうございます！」

そして迫ってきたゾンビを突き飛ばし、俺も階段を上った。

「ハア、ハア、ハア、全員いるな！？」

「ああ！」

「ビルに入れ！」

ビルの中には人がいて、ドアを開けてくれた。

「さあ、急いで入るんだ！」

中の人と言った。

皆が連なって入る。俺が最後に入ろうとした瞬間に横からゾンビ…
…とは違う何かが！

ガガガッ！

なんとか中には入れた。しかし……………

「新堂！」

「幽にい！！！」

「幽さん！」

「新堂さん！」

「新堂ツ！？」

「ガハツ……………何か横から……………」

「腕に傷が……………！ 今、治癒してあげるからね！」

ああ、痛みが少しだけ引いていく。凄いな、聖奈。お前の力は本物だったんだな。

今まで信じてやれなくてすまなかった……………。

「おい、なんだあれは！ ゾンビなのか！？」

皆が騒いでいる。俺はもがく事もなく床に倒れたまま動けない。体が……………重い。

「幽にい！ 幽にい！」

聖奈が叫んでいるのか。言葉もでねえ……………。耳も遠くなってきやつた……………！

こんなことつい最近経験した気がする……………。くそ、まだ俺が目を瞑つむるわけにはいかねえのに……………！！

しかし、俺は目を閉ざしてしまった。

「し、新堂……………？ 新堂ツ！」

「幽にい！ しっかりしてよ、幽にい！！！」

「し、しっかりしろ！ ここはビルの中なんだぞ！」

「新堂おおおおおおおおおッ！」

藤島の叫びがビルの中に響く。反響もしっかり聞きとれるくらいに。聖奈が涙を流している。ポタポタと床に落ちる。

「幽にい！ 死んじゃ嫌だよお！」

「嘘だろ、新堂……………！ 起きろよ、お前の言ってたビルだぞ！」

安全地帯だぞ！」

「……藤島、もうよせ……！」

大門さんの一言でついに藤島からも涙が溢れる。大粒の涙が頬を伝う。

「新堂……！　うああああああああああああああああああああ
！！」

藤島の咆哮にも似た声がビルを包んだ。

A m e e t i n g (前書き)

サブタイトル 『A m e e t i n g / 会議』

A meeting

「幽にいい！ 死んじや嫌だよお！」

「嘘だろ、新堂……！ 起きろよ、お前の言ってたビルだぞ！ 安全地帯だぞ！」

「……藤島、もうよせ……！」

大門さんの一言でついに藤島からも涙が溢れる。大粒の涙が頬を伝う。

「新堂……！ うああああああああああああああああああああ
！……！」

藤島の咆哮にも似た声がビルを包んだ。

……ここは、どこだ？

目を開けると見慣れぬ部屋の天井が見えた。ベッドに俺は運ばれたようだ。

どうやら、命は助かったようだ。痛みも大分引いてきている。

早期に聖奈の治療を受けたのは正解だったようだ。

俺がベッドの上で横になっているが、俺の腹部の上にかぶさっている聖奈の姿が見えた。

ベッドの隣に椅子をおいて上半身の重みが……って、案外軽いぞ。

聖奈は寝てしまっているようだスースーと心地よさそうな寝顔が目に移った。

ここで起こしてしまうのもかわいそうだ。せつかく安眠できる時間を手に入れたのだ。

まだ寝かせてやろう。さて、俺もそろそろ起きなきゃ……

「ウガ、痛テツ……！」

思わず大きな声を上げてしまった。そうか、俺は最後の最後で……しくじったんだっけ。

どうやら、起き上がるのは至難の業だ。聖奈をどうにかすればなんとかできなくもないが、

聖奈を動かすことは不可能。背中が開いてしまふ恐れがある……。

必死に頑張って起き上がったところで普通に歩けるかどうかも怪しい。

どうやら、安静にしていた方がいいみたいだな。

俺はどうにもならないような状況を打破することをあきらめることにした。

すると、ドアをノックする音が。一体誰だろう？

「いいですよ。」

すると、ドアの奥からは藤島が出てきた。

「おお、新堂！ 目を覚ましたのか！ よかったあ！」

「こ、こら、藤島！ 聖奈が起きるだろうが！」

思わず俺は起き上がった。あれ、背中の痛みが気にならなかったぞ？

「ん、ムニヤアア………幽、にい？」

「あ………！」

「ほら見ろ、起きちゃっただろ！」

全く、藤島のやつときたらううおおおい！？

「幽にい……！」

ガバツと聖奈が抱きついてきた。ああああ！ 背中が………！

全身に走る痛みをなんとか声に漏らすことなく倒れることに成功した。

が、また横になってしまったということはまたおきあがらなきゃならないのか……。

「聖奈………心配かけちゃった？」

「聖奈ね、ずっと幽にいの看病してたんだよ！ 治癒もいっぱいし

てあげたから大丈夫！」

「なんとか痛みも引いた見たい。聖奈、ありがとう。いっぱい治癒
って、気絶する前に
やってもらっただろ？」

「んとね、ビルの人が『ゾンビじゃない何か』の跡が気になるから
って言ってたの。」

だから聖奈がもつと治癒したんだよ。」

「それってもつと血を出したってことだよな？ …… 一体どこを切
ったんだ？」

「んとね、ここ。」

聖奈が無邪気な顔で見せた部位は腕だった……。左腕の綺麗な肌に
一本の切り傷の跡が……！

傷を見て俺は心が痛んだ。本来ならもつと綺麗で美しく見える肌な
のに、

今は傷痕がしつかりと残っている。

「聖奈の腕に傷が……。」

「ちよつとだけ痛かったけど、幽にいが助かるって言われたからや
ったの。」

「聖奈……。」

俺は聖奈を少しだけ強く抱いた。聖奈がこれ以上傷ついていくのを
俺は見てられない。

ゾンビ化のためなら俺も思っていたさ。でも、俺はもう我慢でき
そうにない。

「新堂、覚えているか？ 背中^の傷。」

「あ、ああ。」

「あの傷をつけたゾンビ。俺達が^{こそ}拳^{こそ}って戦って何とか倒したんだ。
死体を公開してるから見に来ないかって言ってた。島虎さんって人
なんだけどさ。」

「そう、か。後で見に行くよ。もう少し痛みが引いた俺も聖奈と一
緒に行く。」

「分かった。俺らの臨時の休憩室はこの隣だからいつでも来てくれよ。左隣だ。」

「ああ。」

藤島が部屋を後にした。

「聖奈、むやみやたらと治療を使うのはやめるようにしてくれよ。」
「ど、どうして?」

「俺は聖奈がこれ以上傷つくのを見てられない。俺はお前に傷ついてほしくないんだ。」

「で、でも……」

「もしもの時は、傷口は左腕だけにしてくれよ。それ以外はダメだ。」

「うん。分かった。」

「すまない、聖奈。これもお前の為なんだ……!」

「大丈夫。聖奈、幽にいの事好きだから!」

そう言っただけ抱きついてきた。俺も少しだけ抱きしめ返した。

「俺、もう少しだけ寝るよ。聖奈は?」

「聖奈もここにいる。」

「分かった。」

「ベットから落ちないようにね。」

「誰が落ちるか! ……って言っても背中の中の傷のせいで動けないんだよ。」

「幽に、今動けないの?」

「悪い、傷が治ったらすぐに起きる。」

「そっかあ。えいッ!」

「うわわッ!」

聖奈がベットに侵入してきた! ちょ、待ってくれえ! 俺は動けないんだアア!!

なすすべは無く、背中痛みが引くことをただただ祈ることしかできない。

「えへへ、幽にいと一緒に寝るの久しぶりッ!」

「こ、こら！ 聖奈！ 他人に見られたら大変な事に……！！」

「他の人はこないよ！」

「ど、どうしてだ？」

「集中医療中の札が掛けてあるもーん！」

「ってことは……！？」

「ずっと、このまんまか！？ うおおおおおおおお！！ このま

までは……マズい！」

「なんか法律的にどうか、関係的にいけない気がする！ このままでは罪に問われる気がするぞ！！」

「えへへ、幽にいの体暖かい……。」

「ちよ、聖奈！？」

「もう放さないもん！！」

「グオオオ……」

「なんか、もう、妹の数少ない願望を聞いてやるとかそんな感じじゃない！

「俺はいつ来るかドキドキしながら後を過ごした。正直ドキドキしていて聖奈の感触は覚えていない。」

「こんなこと、聖奈が幼いころはよくしていたが、いまとなると恥ずかしい……。」

「……幽にい。もう無茶しないで。聖奈を置いていかないでね。」

「ああ、すまなかった。俺はおまえをおいていたりはしないよ。」

「ホント！？」

「ああ、ホントさ！ 聖奈は俺が守る！」

「嬉しい……ッ！」

「全く、聖奈は変わらないよな。」

「幽にいへの思いも変わらないからね！」

「はいはい。」

「もー、真面目に聞いている？」

「もちろんさ。」

「背中に刻まれた傷の事も忘れて、俺達は寝ることにした。ああ、心

地よい。

安心して眠れるってこんなにも心地が良かったんだな。

マズった！ 寝すぎた！ 急がなきゃ！

「聖奈、聖奈！」

「うーん、幽にい。どうかしたのー？」

「そろそろ起きなきゃ！」

「うん、わかった。」

あれ、俺……今気付いたけど上半身裸だ！！ 服は……あつた！

背中に切り裂かれた跡があるけど、

文句は言ってられない！ 服は血がついてたけど……文句は言わな
いぜ！

急いで着た。

俺と聖奈は隣の部屋に行った。

ガチャ ドアを開けるといつもの面々が見えた。

「おお、新堂！！！」

「心配しましたよ、新堂さん！」

「幽さん。無事で何よりです！」

「あれ、大門さんは？」

「大門さんなら会議に出席してるよ。」

「会議？」

「ああ。このビル、実は対ゾンビ対策の連合の拠点らしいんだ。山
のように積まれている

保存食と水。緊急非難用の道具の数々。懐中電灯も電池もかなり揃
っている。

ああ、これ、新堂に渡しておくよ。」

ひょいと渡された。これは懐中電灯か？ 少しでもいいな。

「懐中電灯だ。最新式で手動発電で電気を作れる。しかも光の強さは最高級。」

「電気の消費が少しだけ早いのが欠点だが……軽いし差し引いても便利な方だぞ。」

「あ、ああ。すまないな。」

「えっと、これは確か……あ、あった。ここを回して発電するんだよね、確か。」

早速発電開始だ。使いものになるように早めに充電だ。

「でも、これ俺が持っていてもいいのか？」

「全然問題ないよ。だって、俺たちもう持つてるから。」

「へ？」

「ビルの人達が全員分配給してくれたんだ。凄いよな、ここって……。」

ガチャツ ドアを誰かが開けた。大門さんだった。

「会議が終わったぞ。……新堂！ 良かった、目覚めたのか！」

「ええ、おかげさまで。」

「えっと、ああそつだ。会議の内容を説明するから、全員集まってくれ。」

大門さんに寄る。

「色々説明することがある。まず最初に、このビルは『対ゾンビ殲滅連合隊員』への招待が来ている。」

新堂の活躍が評価されていて、連合から直々に加入してほしいとのことだ。」

「対ゾンビか。人脈も欲しいところだしな……。入ろう。」

「軽く決めていいのか？」

「連合の会議がここであつたつてことは拠点はここだろう。このビルはガラスの壁だけど、

ゾンビは寄ってこない。階段の上に建てられてある分、ゾンビが来ない。」

そしてこんなに人が集まるんだ。対策も出来てるだろうし。今は安全が第一さ。」

「そ、そうか。新堂がいいならいいんだけど。」

「加入するで通しておくぞ。」

次だが、加入にあたって『部隊名』を決めてほしいとのことだ。ちなみに俺達は8番目のチームだ。」

「チーム名……か。良い案がないな……。」

「被らなければ何でもいいらしいぞ。文字数に制限もなし。」

「『High speed runners』ってのはどーだ？」

藤島の柄にもない意見が出た。

「ちよつとそれは……。」『Six star』とかどうですか？

6人チームですし、六芒星むくほうせいを意識してみました。」

香憐の意見。これまた柄にもない……。でもいい案かもな。

「チーム名や編成の変更はいつでもできるから安心してくれ。」

「こだわらないなら『Six star』じゃなくて『Hexagram』が良い。意味合いは同じだぞ。」

こっちの方が俺的にかっこいいと思うし！」

「あー、どっちも捨てがたいな……。」

藤島が言った。

「両方とつて『Hexastar』ってのどうだ？ 臨時に決めて後でいくらでも訂正できるからな。」

「大門さんの案をとりあえず採用して次に行こう……。はりきりすぎたな。」

「次はだな。リーダーの選出だ。新堂でいいな？」

「ああ。」

「その次はリーダーが3階の会議室に行つてほしいとのことだ。リーダーの役割を教えてくださいらしい。」

「分かった。今すぐか？」

「できるだけ早くしてほしいとのことだ。」

「分かった。行つてくる。」

俺は部屋を出た。ここは4階だと壁の案内板に書いてあった。ここ
の下か。

階段を下りると木製で凄そうな扉があった。ここ……だな。

俺はごくりと息を飲んだ。行くしか……ないよな!!

俺は取っ手を握り、扉を開いた!

Conference room (前書き)

サブタイトル『Conference room / 会議室』

Conference room

扉の先には数人の人がいた。

「大門君じゃないな……君は？」

大門さんが来ることを予想していたみたいだ。まあ、当然の見解か。

「僕は、新堂 幽と言う者です。」

「新堂君！？ 君は傷を負っていて眠っているはずじゃ……。」

「傷はまだ完治していませんが、こうして動ける程度には回復したのでお伺いに来ました。」

「そ、そうか。思ったよりもずいぶん早い回復だな……。」

「こうして来て分かったと思いますけど、僕がチームのリーダーです。」

何かお話があると言っていたので急ぎ目で来ました。」

少し堅苦しい言い方だが仕方ない。ああああ、もどかしいなあ。

「リーダーの役目とチーム編成を記してほしいんだ。それから、新堂君には少しだけ体験談を

話してもらいたくてね。地区最強こと新堂幽君の歩んだ道を聞きたいんだ。」

「分かりました……。」

「チーム編成と役目については簡単で、編成はこの紙に記入してほしい。あ、このペンで書いて書いてね。多分ペン持ってないでしょう？」

そう言っってペンを渡された。

「そのペンもあげるよ。加入チームには配給サービスをしているんだ。」

「あ、ありがとうございます。」

「次に、リーダーの役目だよ。義務があつてね。リーダー及びその代理人が会議に出席すること。」

絶対にだ。それと、チームを纏める力も必要だけど、そこもリーダー

1の変更は随時受け付けるから、問題が起きた時には来てくれ。後、部屋の割り振りについてだ。加入したからには部屋を設ける。

4 7階までの間でこの地図の好きな所に印を入れてくれ。君のチームには2室の使用を許可されている。

色々と一部屋じゃ都合が悪いからね。どこか選んでくれ。バラバラでもかまわないよ。

4 5階に一室ずつとか。今はもう時間も時間だから明日に会議を開く。

各チームのリーダーも来るから名前ぐらいは確認しておいてね。色々ここもおかしなところがあるけど、

早くなじんで活動できるように準備しておいてほしい。それから、異種のゾンビと思しき生物の

死体を展示してある。明日見に行こう。今日はもう休むといいよ。お疲れ様。」

「お、お疲れ様でした。」

俺は会議室から出た。あれ、紙とペンを渡されておわっちゃったぞ。あの数人、もしかしてリーダー格の人たちだったんじゃないか。それかとあるチームか。

まあ、考える時間はあるんだし……気にすることもないか。

俺は臨時の休憩室に戻った。

「皆、ちよつと来てくれ。」

会議室でのことを大方話した。皆の意見が飛び交ったが、すぐにまとまり、

2部屋は5階に2室とも置くことにした。

それから、チーム名も変更なし。チーム編成は名前だけでいいみたいだ。

コンコン ノックする音だ。誰だろう？

「誰かいるか？」

「はい。」

ガチャ

「新堂が目覚めたときいたが。」

「島虎さん。」

大門さんが言った。この人が島虎さんか。

「僕が新堂です。」

「……なるほど、よくここまでチームを引っ張ってくれた。このビルでの生活に早くなじめるようになる。」

それと、全員が揃っている内がいい。8階に来てほしい。」

「な、なんですか？」

「ゾンビの見解についてだ。詳しい事は8階で話す。」

「は、はい。」

8階か。ずいぶんと遠くだよな。生き返ってたりしないよね？

そして8階。うわ、なんだこのゾンビ……。

「こいつだ。」

横になっている死体。手を広げ、足もしっかりまっすぐに正されている。

こいつ、ゾンビとかそういう類から外れている気がする。

肩から先が少し太くて、手が大きい。いや、肩は普通なんだ。そこから先がどんどん太くなって、

手まで来た時には凄いことになっている。手の大きさは物凄く、人を片手で持てそうなくらいだ。

そんな両腕が特徴的だった。頭部には人間の面影が少しだけ残っているが、

脳の形が変形しており、更には目が肉に覆いかぶさっていて目が見えるようには思えない。

これは一体……。鼻の骨も変形していて、やや平らになったという感じだ。口は大きくなっていて、

蛇のように長い舌がある。ゾンビの類なのかもしれないが、人間ベースではないぞ。こいつ。

手は大きいが、爪がやや硬く見えるような感じだ。まだ発展途上だ

ったのだろうか。

足も変化していて、まるで犬のように前と後ろでしっかり分かれているような感じだ。

腕は爪が長く足は地面をけれるような作りに変化。これは一体何をベースにしたんだ？

こんな生物、存在するのか？

「俺は、こいつにやられたんですね……。」

「ああ、そうだ。四つん這いで動いていたよ。まだこいつしか確認されていないが、

ゾンビ化した人間の耐性、器官の機能具合によって劇的な変化をおこした結果じゃないかというのが、

現在の見解だ。最後にこつちだ。ついてきてくれ。」

俺たちは無言でついに行つた。一体、俺の知らない世界で何があつたんだ……？

とある部屋の扉が開かれた。

「お前たち全員に、念のためこれを渡しておく。受け取ってくれ。6個分の何かを受け取つた。」

「トランシーバーだ。連絡用に常備するように頼む。」

「え、ええ！？ いいんですか!？」

「チームでの状況把握は不可欠だ。これがあると大分楽になる。性能や機能も充実しててな、

電波も広い範囲で良く電波を拾ってくれる。トランシーバーには特定のコードがあつてな。」

トランシーバーのコードを利用することで特定の人間とだけの通話も可能だ。

基本的には電波があるとなんでも拾ってくれるが、これを利用することでチームメンバーだけの

電波を拾うこともできる。個別のコードを利用しての通話は10人まで登録可能だ。

使い方もこの説明書に書いてある。良く読んでみてくれ。」

俺は説明書を受け取った。

休憩室の荷物も全て5階の自分たちの部屋に移し替えてようやく休憩の時間がきた。

俺はと言うと、トランシーバーと説明書との飽くなきならめっこ対決ばかりしていた。

だってこのトランシーバー、全然想像していたやつと違うんだもん。イヤホンとかもセットで渡されて便利そうなんだけどなあ。

無線イヤホンだし、かなり本格的な作りなんだろうなあ、これ。

おまけに携帯電話みたいに画面付してるし。

俺が持つてるような携帯とは違い、一昔前のタイプで閉じたり開いたりはできない。

が、大きさ的には今の携帯のように、開閉ができるタイプと変わらないコンパクトなサイズ。

画面は上半分、下半分はキーである。無条件無線通話は横についているスイッチで稼働し、

そこからは声を入れたい時だけボタンを押しながらしゃべるといったように、

以前から引き継がれている部分もある。流石は最新式と言ったところか、

携帯のメールアドレスのようにコードを登録すると特定コードにのみ受信される電波を発することも可能。

おまけに発電式。ちよっと分厚くなってしまうているが、ポケットにも入るし、

腕に巻きつけられるようにもなっているので配慮されていることも多い。

無条件通話のスイッチの下にもスイッチがあり、順に特定グループ1、特定グループ2という風な具合に分かれている。

この特定グループとは、指定コードを集めたものであり、特定コードの人にしか拾えない電波を

即時に発信できるようにと配慮してくれてつけた機能だ。素晴らしい！

使い方もわかったところで早速トランシーバーの設定だ。コード名はあらかじめ決まっているので、そこに自分の名前と情報を入れていく。所属チーム名もしっかり情報として扱われるようだ。

チーム内の登録も終わったところで早速特定グループ発信のところに追加した。

これでもチーム内に通話ができるぞ。

余談だけどこれ、メールも遅れるらしい。隠密行動のためにとつけてくれた機能らしい。

イヤホンつけているときにしか音がならないが、音で反応するゾンビもいるだろうということだ。

文字打ちも形態とほとんど遜色ない。

使い方を大方把握したところでグツと眠気が襲ってきた。

「悪い、俺先に寝るわ……。」

「ああ、お疲れ。」

「おやすみなさい。」

「しつかり休めよ！」

すまないが俺は先にギブ。もうくたくただ。さっきまで寝てたんだが全然足りないみたいだ……。

「ああ、なら聖奈も寝るー！」

聖奈、お前はもう少し俺離れしような？ 体はもうスリープ状態だし、俺も気力が残ってない。

今日のところは勘弁してやるか。それじゃ、皆。お休み……。

そして朝が来た。

時計の機能もあるらしい。基準は偶然アナログの腕時計をつけていた人物のを参考にしているようなので、狂いはほとんどないだろうとのことだ。

傷の痛みもほとんどひいて、派手な事をしなければなんとかかなりそうだ。

隣にはなぜか聖奈が寝ていた。すやすやと本当に心地よさそうな寝顔だ……。

兄心というかそんな何かをくすぐられてしまうような、そんな感じの何かがわいてきたぞ！

寝顔は言葉では括れないほど愛くるしいと思う。……少し見ても仕度でもするか。

まじまじと聖奈の顔を見やる。なんだか見ていて癒される。そんな風に思える寝顔だ。

さて、そろそろ仕度でもするか。起き上がると聖奈の手が俺の腕を掴んでいた。

「んん？」

握る力がやけに強いぞ。どうしよう、はずれない！ このままでは前と同じ事に……！！

いや、待て待て。この力の強さもしかすると……。

「聖奈、朝だぞ。」

「……………」

「聖奈……」

「……………」

強情な所もあるんだな、ならいいだろう。とっておきの実技をお見せしてやるうじやないか。

「ウグツ、背中中の傷が……ゾンビにやられたのが悪化しちゃったか！」

苦しそうにもがく。さあ、どうだ。聖奈！

「待ってて幽にい、今すぐ治癒するから！」

ガバツと聖奈が起きる。

「……やつと正体を現したな？ 聖奈。」

とんでもない速さで起きたぞ……。化けの皮もあつという間にはがれてしまった。

「うう、幽にい、嘘ついたのー!?」

「わざとらしく強く握って一体なんのつもりだ？」

「もう起きる時間だぞ。」

大門さんが仕度をしながら言う。

「だってえ、また寝たかつたんだもーん。」

「全く、わがままもほどにな。」

「はい……。」

さて、トランシーバーのホルダーをセットしなくては。ベルトのところにかつちりセット。

トランシーバーはというと、……おや、一通メールが来ている。

どれどれ……

『TO: 島虎たかし 隆

件名: 会議

本文: 会議の時刻が9時30分に行われる。出席が困難な場合は代理人を用意してくれ。』

え、え、島虎さん!? いつの間にコードを……!!

9時30分か。今は8時40分だからまだ時間があるな。

会議までの間にトランシーバーの使い方を皆に説明しないと……。

俺は皆を起こして説明会のような何かをしていた。時間は9時15分。ようやく一通り終わった……。

「そ、そういうことだから使い方は各自で確認しておいてくれ。」

「分かった。」

「疲れるなあ。」

「なんとか使えるように覚えておきます。」

さて、そろそろ会議室に向かうか。

9時20分に会議室へ入室。10分早いけどまあいいか。なんてことを考えていた俺が甘かった。なんともう実質俺の到着待ちだったようだ。

席が俺の分だけしか空いていない！

「新堂君が来ました。」

「おお、これで全員そろったな。」

「君が新堂幽君か。」

「地区最強とは心強い！」

等々、色々聞こえてくる。

「では、これより臨時会議を始める。」

俺を含め、新しいチームを迎え入れての会議が始まった。

Important topics (前書き)

サブタイトル『Important topics / 主たる議
題』

Important topics

「では、これより臨時会議を始める。」
俺を含め、新しいチームを迎え入れての会議が始まった。

いよいよ、か。

初の会議参加だから少しだけ不安だなあ……。『臨時』ってことは『定時』みたいな感じに別種の会議もあるのか？

ゾンビの出現の日時からしてまだ1週間もたっていないが、こうして集って話し合われる場まで設けているとなるとやはりゾンビによる被害は忌々ゆづしき問題なのだろう。

しかし、情報の量も俺達のチームよりも群を抜いているはず。

『以前話し合われた事』については何かと知っている前提で話し合われることもよくあるから

俺が果たしてついていける話題なのか、これは。

「今回の意義については……『新種の生物』。新堂 幽に対し損傷を与えている事が報告されていて、目撃者の証言と、ゾンビの死体からその『新種の生物』に対して様々な憶測がなされている。」

今はまだあの個体以外に発見、襲撃の報告は見られていないが今後の脅威になりえる。」

今回の議題は新種の生物についての対策だ。」

「やはり、あの生物か。」

「それにしても本当に新種だったとは……。」

「証言によると、四肢で移動し、前足にあたる部分に長い爪。後ろ足には脚力を飛躍的に高める

構造をもったという事が挙げられている。舌は長いが比較したとこ

る、人間の約2倍。

頭部の構造は大きさ的にはほぼ同じ。視覚は退化の傾向がみられ、嗅覚はやや向上。

聴覚、味覚、触角については不明。耳に至っては特に外部的変化は見られなかったそうだ。」

「ふむ、しかし……やはり人間の面影が残っている。」

「なら、ゾンビと同じ対処法でよろしいのでは？」

「実戦では勝利を収めたいが、素早い相手だったそうじゃないか。」

「素早い相手に効果的な方法、か……。」

このままじゃいつまでたっても終わらないな。

「なら、頭部狙いよりも四肢を狙った攻撃で動きを封じた上で確実に仕留めるのが効果的だと思います。」

「頭部……？」

「通常のゾンビでは頭部への攻撃が最も効果的です。ベースが人間なだけに弱点も同じですよ。」

いくら新種の生物が相手でも頭を潰してしまえば勝ったも同然です。

「

「通常のゾンビへは頭部への攻撃が有効と言うのは本当か？」

「はい。木刀でも重ければ一打で仕留めれます。」

「おお、ゾンビにはそのような弱点があったのか！」

「なるほど、弱点があればこちらにも分がある。」

「人間と同じ、か……。」

「し、しかし……素早い相手では四肢に一撃入れるのも難しいのでは？」

「慣れないと厳しいですが、後ろ足には初戦でならした目でもいけます。」

前足で攻撃すると思われるので、カウンターを狙うのも十分ありだと思います。」

カウンターでは前足への重傷または切断が基本ですが、いけるなら

「頭部狙いでもOKだと思います。」

「ほほう、いきなり妙案ですな。」

「納得のいく対処法だな。」

「ゾンビに対してはいままでどういう方法で戦っていたんですか？」

「うむ、機能している器官を把握しながら機能していない器官を利用すると言った方針を今までは

とっていた。」

「今後は頭部狙いの方針を推奨します。器官機能の有無を把握するには時間を要する上に多数相手では

無理があります。個体によっては全ての機能が正常なゾンビもいるので頭部へ攻撃するのが一番です。」

「一撃で仕留めていければ多数相手でも一人でできるようになります。」

「なるほど、

……ふむ。この案について意義がある者はいるか？」

「多数相手でも一人で戦っているのは大きいな。」

「確かに、いままでの戦法は時間を要するうえにあまり確実性に欠けていた。」

「一打で仕留めれるなら時間短縮や怪我の防止にもつながりますな。これは採用してもよろしいのでは？」

「メリットが多数を占めるこれなら戦略としては有効だと思つよ。」
「皆からの評価も大きかった。力任せというのが少々重荷ではある

が……。」

「うむ、では新堂君の案をここに採用する。」

議長のように進行を進めている人物が威厳の重みを纏わせた一言を室内に言い放った。

「これに繋がり、新種生物における対処法も頭部への攻撃を確実にするために、

四肢を封じるという案も採用という形でよろしいかな？」

「意義なし。」

「私もだ。」

「俺もだ。」

「僕もだ。」

「右に同じ。」

同意の声が続々と聞こえてくる。ここまで俺の意見が議会を進行させてしまつとは……。

「では、新種の生物への対処法をここに採用する。各自、チームへ告げるように。」

新種の生物の名義についてもここで議論したいと思うのだが、いかななものか。」

「新種の生物……か。」

「『Creep』(訳：4本の足で這う)を取つて『Creep^{クリーパー}』
というのはどうだろうか。」

「うむ、現段階についてはそれで通そう。採用する。今回の議題については以上だが、

今回からはご存知の通り、新堂 幽とそのチームが新たに加わることとなった。

連合に正式加入も済ませてある。コミュニケーションを取っておくように。」

では、臨時会議をここに閉廷とする。」

議長の一言で皆が立ちあがった。席を立つ。

俺も室内から出るべきか。今回の議題は色々学ぶ事は……そう多くは無かったが、

チーム内にしっかりと伝えておかないとな。

「新堂君。」

後ろから声がした。

「はい。」

振り向くと20代と思しき男の人が目に映った。

「私は角^{かど} 礼司^{れいじ}という者だ。第4チーム『Square』のリーダーを務めている。」

『PT-2000』は持っているようだな。」

「『PT-2000』？」

「ああ、トランシーバーの事さ。」

「なるほど、これそういう名称なんですね。」

「君とコンタクトを取れるようにしておきたくてな。」

「はい、いいですよ。」

えっと、確かここで情報を交換するんだっただな……。

「これでいいですか？」

「すまないな。こちらは今送るから少し待っていてくれ。」

「あ、来ました。」

「何か必要な場合があったら連絡してほしい。出来る限り助力する。」

「

「ありがとうございます。」

その後も次々とコンタクトを取りたいと申し出る者たちが出てきた。俺ってそんなに期待されていたんだな……。

……ん、あれ。第6チームのリーダーとだけはコンタクト交換されていないな。

「あの、第6チームのリーダーはどこですか？」

「多分、先に自室に帰ったと思うぞ。ただ、コンタクトは無理にとる必要もないぞ。」

第6チームだけはあまり関わらない方が無難だ。」

「……………」

だいたい言いたい事は分った。だが、見過ごすわけにはいかない。せつかくこちらも多勢で集い、ゾンビを押しきれるといふ恵まれている状況におかれてるんだ。

ここで引いてどうする！ 広げられるだけ人脈は広げる。それが俺のやり方だ！

「何回ですか？」

強く言い放った。

「な、7階だ。2室ともそこにある……………」

「ありがとうございます。」

俺は自室に戻り、チームの皆に議会の内容を告げた。新たな知識も
少なかったのでそこそこ

短く終わった。さて、行くか。7階の第6チームのもとへ……。

俺は矛と1本の木刀を腰に差し、部屋を出た。皆にはすっかり7階
の第6チームのもとへ行くと告げてある。

俺の身に何かがあっても大丈夫だろう。それに俺は人間相手なら負
ける気はしないからな。

とはいっても、ここまで自分に言い聞かせるように言うのは久しぶ
りだ。

いままでは意識せずにいたが、第6チームのもとへ向かう俺が本能
で何かを察知したのかもしれない。

6階から7階へ上ろうとしたとき、音が聞こえてきた。

8階から7階へ降りてくる階段の音、そして以下には下りずに床を
移動する音。

間違いない。第6チームだ。7階はやつらしかいならしい。なら、
絶好のチャンスじゃないか。

俺はすかさず7階へ上った。そして部屋に入ろうとする第6チーム
の二人に声をかけた。

「ちよつと待つてくれ。」

ギロリと二人の視線が俺を差す。だが、こんなのに動じる俺ではな
い。どこかの不良共の

親玉格のやつが放っているのと何ら変わりがないその視線ではな…

…。

「誰だ、てめえ。」

「第8チームのリーダーで新堂 幽という者だ。」

「……何か用かよ？」

「第6チームのリーダーと話がしたい。」

それを聞いて一人があきれたような顔で部屋に入って行ってしまっ
た。

俺もう議会で緊張しすぎて疲れてるし、さつさと終わらせたいな。

「けっ、馬鹿を言うな。雑魚が俺達に構うなってあれほど忠告してやったのによお。」

せつかく人がこんな人気も薄い場所に一人で来てやったつてのにこの扱いとはな。

流石の俺もイライラしてきた。この様子じゃリーダーが来たらキレそうだな。

「生憎だが、お前たちの忠告を聞いた覚えは無い。」

少なくとも第8チームはそんな報告は受けていないはずだ。大体そんなの認められるわけがないだろ。

「てめ……ッ！」

その瞬間、目の前のやつがポケットからナイフを取り出し、俺に向けて振りおろそうと

襲いかかってきた！

「てめえらはホント……」

ヒュッ ナイフを軽くあしらう。

ブンッ 矛が空を薙ぐ音が聞こえさせるようにして、俺はやつの顔面ギリギリで矛を止めた。

やつの顔に汗が流れる。

「凝りねえよなあ。」

この手のやつらは皆こうだ。飽き飽きしてくるぜ。

「クソ……ッ！」

「先手も取らせだし、俺は律儀に名乗り出たぞ。そろそろ茶番は終わりにしようぜ。」

そこの扉から気配を窺ってるお前。」

扉が開かれる。

「気づいていたとはな。」

「扉が開いてるなら聞こえるよなあ？」

俺は大きく言っちゃった。もう我慢はナシ！ キレさせた第6チームには少々枷でも

背負ってもらおうじゃないの。

「下っ端のカスの賤もできてねえじゃねえか。一体どうなってるんだ？ おい！！」

「てめ、下っ端って言いやがったな！」

「今度は矛止めねえぞ？ それでも異論があるなら言ってみるよ。なあ？」

最初につっ込んできたやつを見やる。若干ビクツと体をさせている。ビビってるならでしゃばるんじゃねえよ。

「おい、お前。中に行つて伝えてきてくれよ。」

「ゲツ、なんで俺が……！」

「聴こえなかつたか？」

圧力で押す。もうここまでキレさせた第6チームのリーダーは相当なやつなんだろうな。

顔を拝むまでは絶対帰らないからな。

しぶしぶ部屋に声をかけに行く下っ端。こんな呼称は失礼極まりないが、

こいつら相手に慈悲は無用。

「つたく、面倒なやつだな。」

扉の向こうから聞こえてきた。

「ここまで俺達に齒向かってきたんだ。おとしまえつけてもらおうじゃないの。」

俺達に勝つたらリーダーに合わせてやるよ。」

「まあ、その方が俺も都合がいい。」

「へ、なんでだ？ おかしなやつだな。」

「それって、リーダー以外全員出て来てくれるんだろ？ 後々邪魔者抜きで会えるんだからな。」

俺からしたらサービスすぎるよ。」

すると、そいつの顔つきが変わった。怒りをあらわにしている。

「おい、お前ら！ たたみかけるぞ！」

「おっツ！」

ドアから続々と出てくる。ふむ、合わせて4人か。リーダー合わせて5人チームと言うわけだな。

腰にある木刀を後ろに置いた。邪魔だからな。矛で十分。急所は外してやるし、

骨折の手前程度で済む怪我でとどめといてやるよ。罅ひびも入れねえようにしないとな。

前衛の下っ端がナイフで今度は突きで襲いかかってきた。しかし……
「うわッ！」

ゴスッ 頭に一打。もちろん手加減してあるが、人間にしたらすさまじい激痛だ。

「ウガアアッ………！」
短いナイフでしかも突きで襲うとはな。矛みたいに長い武器ではガラ空きもいいところだ。

「ウラッ！」
鉄パイプで横薙ぎに顔目掛けて振ってきた次のやつ。
俺は身をかがめると同時に矛を横に薙ぐ。

「ガッ………！」
やつの足に命中し、足の痛みでもがき倒れている隙に腹部に取っ手の方で突いた。

それはほんの一瞬すひだけ埋まるだけだが、体感すると相当苦しいはずだ。

もう吐いてもおかしくないぐらいの激痛が襲っている頃だろう。

「ゲホッゲホッ」

すぐには立てやしないだろうな。しばらくは床でもがいてる！

最後はリーダーでもないのにでしゃばっている野郎だ。

金属バットで襲いかかってくる。俺は矛を両手で構える。

金属バットを自分の頭から20cmぐらい上空の低位置から振り下ろした！

隙が少なくなる打算だろうが、甘いな。

「お前には他よりも痛い目にあってもらうぞ。」

俺が言った。金属バットをすんでのところ左に避ける。そして手を狙って矛を落とす。

「ッ痛！ このやる……！」

俺は矛を捨て、痛みと俺の視線で少しだけ遅れを取ったあいつの頬を一発殴り飛ばした。

「ケホツケホツ！ つ、強え……！」

「せっかく来てやったのにクソみてえな接客すんじゃないよ。」
完全に悪役だな俺……。まあ、こうしてようやくリーダーに拝めるんだ。きつちり話つけようじゃないか。

ドアの中に入る。もちろんさきほど捨てた矛は回収済み。木刀は帰りでいいや。

「来てやったぜ。親玉さんよお？」

「俺以外をこうも安々と蹴散らすとはねえ。俺のチームに入ってほしかったよ。」

「そうなってたらお前はリーダーじゃなかったがな。」

「言ってくれるじゃねえか。」

部屋の中に一人。こいつがリーダーか。ドアのサイドにも潜んでいるかと思っただが、

本当に5人チームだったみたいだな。

「物騒な武器持っ^{エモ}てここに何の用？」

リーダー格の男が言う。

「お前の後ろに隠し持つてるやつよりはマシだと思っけどな。」

「……お見通ししてわけか。」

「銃口向けたら容赦しねえからな。」

そう、後ろに持っているのは銃だ。警官から取ったのか？

どついうわけにしる、別の大通りで警察沙汰の騒動が起こっていたとシヨツピングモールで

手榴弾ぶっ放したやつがいつていたな。持っ^ていても不思議ではないか。

「そいつは怖い……ねえ！」

ジャキ 銃口を向けた。だが、俺は引かない。なぜなら、やつも部下を蹴散らした俺は今以上の実力者だと推測出来ているからだろう。俺はドアのラインからまっすぐにきている。

いまやつが銃を放てば、避けた俺の後ろで倒れている部下に当たる可能性がある。

このご時世でリーダーが部下を見捨てるはずは無いだろうな。

だからこそ隙はあるはずだ。誘ってやるまでさ。

矛を斜めから振り下ろした。そして俺はフェイントを交えてドアのラインから出た！

右上からの振りおろし。避けるように動くならなら、当然右だろう。だが、俺は左に避けつつ矛を落とした。

銃口が俺から見て右に向けられ発砲された！

どこまで予測していたかは知らんがチエックメイトだ。

相手の胸部に一打あつた。これでどうだ。大人しくなつたか？

「……っ痛！ ったく。遅えよ、司朗。」

更に左に避けた。俺の元いた位置の頭上から鉄パイプが降り落とされた。

チツ 全く何て野郎だ。保健を掛けてやがるとは！ ……確実に仕留めるには詰めが甘かつたな。

声出してまで勝利宣言するなんて確信しすぎだ。それに、色々予測できてたんだよ。

最初に相手にしたやつらが静かすぎるんだ。どうして静かにしているのかと言うと、

こういう保険を隠すためだろう。切り札つてのを用意するのはいい線だが、

悟られないようにすべきだったな。

空振りで体制を崩したところで、脇腹に突きを一撃入れた。重みのある一撃だから、今度こそは……。

追撃を加えておきたかったが、銃弾が避けられなくなってしまった

め断念した。

今度は右に大きくローリングして避けた。2発目が発砲される音が響いた。

案の定と言ったところか……。俺は矛を水平に投げた。重いから護るしかないぞ？

それを察したのか、相手はガードの姿勢に入る。矛がゴツツと腕にぶつかり、床に落ちる。

矛を使おうとしたのか、相手は手を矛に伸ばした。

そこだ。俺はそれを待っていたんだよ！ ガードで視界を捨ててまです手にしようと矛に集中している

間に俺は横から相手に攻め寄っていた。拾おうと身をかがめた相手の脇腹を思い切り

蹴りあげた。

悶絶する相手に追撃を加える。ついに銃を手放したところで俺は回収し、言ってやった。

「散々他のチームとの連携を拒んてたらしいじゃねえか。

気取ってないでさっさと連合に協力しやがれ。……わかったな？」

「ゲホツゲホツゲホツ……どうして、そこまで連合に必死になる！？」

「俺だつてここまで必死になるつもりはなかったさ。それなのに歯向かってきやがって……！」

「ここまで廃れたチームなら追放しても連合は咎めやしないだろうな。」

「……！ 待つてくれ！ それだけは……ッ！」

「何か文句でもあるのか？ 散々でしゃばってきた報いじゃねえか。」

「そ、それだけは……頼むツ！ 俺達、帰りを待つてるんだ！」

「へえ、戯言も吐くような連中だったとはな。予想してはいたが、酷い連中だな！」

協力しようと思死の議会も何も感じずに黙って聞いてたんだろ！？

必死でこの世界を生き延びようとしているやつらに紛れて自分達だけ樂できると思うなッ!!」

「お、俺達だつて……必死にあいつの帰りを待っていたよ！ 元リーダーの『啓』が帰ってくれば、

こんなことには……!」

「啓？ 俺の弟の啓の事か!？」

「……新堂 啓は俺達の元リーダーだったよ。だけど、連合加入決定してから初戦の

ゾンビを押し最前線で俺達が戦つてた途中で啓の行方が分からなくなつちまつたんだ!」

涙がやつの頬を伝う。

「……その後は?」

「まだ、見つかつてねえ。死体も見つかつてない……。」

「そう、……か。」

俺も悲しむべきシーンだったんだろうな。だが、怒りが収まらねえ。悲しむどころか、

怒りの矛先を全部こいつに向けちまいたくなる!!

「そうか。お前ら、啓を見捨てたとかそついうわけじゃないだろうな?」

「最前線で大体を片づけた時に気付いたんだ！ 本当だ！ 信じてくれ!」

「分かった。今回は信じてやる。だが、お前たちは今後連合に従い、連携が取れるようにしておけ。いいな!？」

「あ、ああ！ 約束する!」

「啓が戻つてこようがこなかるうがだ。分かったな?」

「わ、分かった……!」

「さつさとトランシーバー出せ。俺に送れ、ホラ。」

俺もトランシーバーを出す。よし、受信した。

「後で俺の情報を送る。しっかり登録しとけよ?」

「あ、ああ……。」

ドアを出る。っと、その前に。

振りかえって床に転がっている。確か……なっていたっけな。司朗？

「おい、お前もだ。トランシーバー出せ。」

「ケホツ……分かった。」

受信完了。無言で立ち去る。

ドアを潜った先に下っ端と言われたあいつが俺の木刀を持ってこっちを向いていた。

距離はそこそこある。何のつもりだ？

「何のつもりだ？ おい。」

そのまんま口にした。

「お前に、お前なんか……俺達の事がわかるもんか!!」

木刀で突っ込んだできた。ああもういい。お前、もう眠っつけ。

ガツッ 矛と木刀がぶつかった。が、力で大きく勝っていたのだから。木刀は弾かれた。

そのまま下っ端も吹っ飛ぶ。

「はつきり言う。お前らの事なんかわかる気にもなれねえ。勝手に巻き込むんじゃねえよッ!!」

「ゲホツゲホツゲホツ!!」

「転がってるテメエラもだ！ さっさと俺に送れ！」

キレてる俺にこれ以上手を出すような輩は流石やからにいなかった。

第6チーム全員分をしっかり掌握し、俺は部屋に戻ってきた。木刀も回収した。

銃も俺が持つていった。これでもう妙な気を起こすことは無いだろう。

部屋にはなぜか第8チームメンバー以外にも他のチームのリーダーの面々もいた。

俺が長く留守にしていた理由と第6チームの末路を話したら、誰もが驚いてしばらく声も出なかった。

銃は結局俺が保持することになった。ますます俺が凄い存在感にな

ってしまつたな。

できれば戦力に乏しい吉成に渡しておきたかつたんだが……。女性には出きれば持つてほしくないものでもあるのであえて女子陣ははずしたが。

後でしっかりメールを送った。個人情報付きのメールを第6チーム5人全員に。

リーダーがしっかりチームを統率した関係を作れとも入れておいた。リーダーを変えてでもだとしっかり念を押ししておいた。ついでにチームの定時報告という

俺と第6チームだけの義務も持たせた。その後一史かずし(第6チームのリーダー)のメールには、

あの時の俺は相当なものだったと書いてあり、主従を誓う代わりに暴力行為をしないと誓ってくれとまで

書かれてあるメールまで送られてきた。俺はそれを承諾した。もちろん平和条約のようなものなので、

向こうが破れば俺も遠慮はしないとここでも強く念を押しした。

その後、島虎さんから今日の定時会議は無しになったとメールが来たので、

俺は第6チームの元へと足を運んだ。7階の第6チームのドアの前に立つ。

流石に、ここまで怒りを引きずるのはあれだよな。冷静になれ、俺！感情を堪えつつも、そのドアを開くのであった。

It name is "Kei" ; (前書き)

サブタイトル『It name is "Kei" / その名は
" 啓" 』

It name is " Kei " ;

俺は第6チームの元へと足を運んだ。7階の第6チームのドアの前に立つ。

流石に、ここまで怒りを引きずるのはあれだよな。冷静になれ、俺！感情を堪えつつも、そのドアを開くのであった。

コンコンとノックをする。すると、扉がゆっくりと開かれた。

「……あんたか。何か用か？」

例の下っ端が出てきた。情報が送られてきて知ったが、名前は「空^そ知^ち信^{しん}」。

珍しさもあつて名前はすんなり覚える事が出来た。

「ちよつと聞きたい事があつてな。全員揃つてるか？」

「ああ。中に入ってくれ。」

怪我の方は大丈夫らしい。皆もそこそこ痛そうにしている者もいるが、普段の行動には師匠はなさそうだ。

これなら実戦でもおそらく大きな影響は無いだろう。

「幽か。ここには確かに全員揃つてる。聞きたい事っていったいなんだ？」

「……啓の詳細についてだ。」

「……なるほど、な。」

皆の顔つきが変わる。

「啓は俺達の元リーダーって話は聞いただろ？ このメンバーが揃つたのはちよつとクリスマススイヴの日だ。

あの時から俺達はずっと行動してきた。幸いにもこうして武器が揃つてたからな。

なんとかメンバーが欠ける事もなくこうしてここにたどり着いたつてわけだ。」

「そこで最初の防衛戦が始まったつてわけか。」

「そつだ。こうして武器も揃ってる俺達はすぐにビルの付近のゾンビ共の殲滅にあたった。

その時はすっかりいたはずなんだ。だが、ゾンビ共を粗方始末した時にはもう……。」

「ゾンビはビルの前にまだウヨウヨしていたぞ。本当に殲滅していたのか？」

「ビルの中まで侵入するゾンビはいない。何しろ、昼夜交代制の方針を取っていたからな。

ビルの手前の階段までは確実に始末することで必要最小限のリスクと人員を保っていたんだ。

俺達は例外で実戦派だ。啓もいたからな。それで階段よりも少し範囲を広げてなんとか

ゾンビを追い払ってきた。だが……今はそうもいかなかった。」

……やはり、啓がいなくなったからだろうか？ 啓は腕もそこそこ立つと俺も思う。

だが、実戦派だと主張している割には一気に弱気になりすぎじゃないか？

「啓はいなくなる前に何か言っていたか？」

「いや、特に何も言わなかったよ。加入決定時にしっかり物資も受け取っているし、

ちゃんとトランシーバーも持っていたはずだ。」

「連絡はとれるのか？」

「いくら連絡を入れても反応は無かったよ……。」

「まさかな……啓がヘマをするとは考えにくい。色々考えても啓が戦線で姿を忽然と消す要因が見当たらない。トランシーバーの反応は……そつだ。」

「啓のトランシーバーの反応はどうなんだ？」

「トランシーバーの反応はあった。だけど……返事は無かった。」

このトランシーバー『PT-2000』は相手のトランシーバーの

有無を確認できる。

メールでもなんでも対象のトランシーバーの反応が返ってくる仕組みになっている。

つまり、トランシーバーが壊れていれば反応は無く、反応があればトランシーバーが機能している事になる。

これにより仲間の生死、登録メンバーの生存も大体だが明らかになる。

トランシーバーはモードの切り替えがない通常の状態だと1時間放置状態になると電源が勝手に落ちる。

このモードは常に維持されるが、振動や温度を感知していないとモードも勝手に解除される。

そして反応があるという事は啓はまだ生きているという事が証明されたのである。

……ただ、何をするにしても電源ON時のパスワード入力が最初で最後の壁であり、

電源を切らさなければ簡単に他人にでも使えてしまうというのが欠点だ。

せめて悪用されているなんて事だけはないように祈る……。

「でも、お前がこうしてここに来るなんて……。啓よりも鬼気迫るものがある。」

「色々あったから……。最初は4人メンバーで戦闘員も俺だけだったが、

なんとか6人メンバーで戦闘員3人。2人は援護とか補助、1人は非戦闘員だが……。」

「確か、地区最強なんだろう？ 啓もお前の事を言っていたよ。」

「地区最強なんてもうただの過去でしかないさ。」

「謙遜したって無駄だよ。最強なんだろう？」

「八八、前にも言われた事あるようなセリフだ。」

「啓はお前に憧れていたみたいだ。強く在り続けるお前にな。」

「そう、か。啓はそんなことを言っていたのか……。」

啓、お前は俺みたいになりたかったのか？ 強くても、実際には喧嘩ばかりな日々だった。

俺は啓にはそんな道を歩んでほしくは無かった。結果的に言えば、啓は普通の学生らしい生活を

送っていたように見える。だから、俺はすごく安心したぞ。俺を目の敵にしているような連中が

お前を目につけたりしてないかどうかって。だから強くなくてもいいと思ってたんだ。

だけど、少しずつ稽古をつけていたりしていたのは正解だったかな。

普通の学生らしさと強さも兼ね備えたやつなんて、もう啓にしかないよ。

過去の俺に張られたレットルはもう取り除けない。……本当は俺も啓が少し羨ましかったし、憧れてたのかもな。

沈黙を破ったのは一史のトランシーバー。メールが来たようだ。

「すまん、ちよっと待っていてくれ。」

「ああ」

「誰からだ？」

徐おもむろに聞いた第6チームのメンバーが聞いた。すると、

「じ、これは……！」

「どうした？」

「まさか、ゾンビか？」

「今は確か……第3チームがビルの入り口付近を見張っているはずだぞ。」

「一体何があった？」

一史は言い放った。

「新堂啓からのメールだ……！」

「!?!」

「ほ、本当か!?!」

「やっぱり生きてたんだよ!」

「これでこのチームも……!」

「読むぞ……」

『第6チームの誰でもいい。可能なメンバーを代表で一人選んで空白メールを返してくれ。』

「代表は俺でメールを返すぞ……。」

返信したようだ。数十秒後に今度はトランシーバーから音声が流れた。

『よう、一史。俺だ。新堂 啓だ。元気にしてるか?』

「啓!?! 一体今までどこに……!」

『まあ待て。積もる話もあるだろうし、ビルにお邪魔させてもらうよ。』

部屋は変わってねえだろ?』

「ああ!」

「啓! 啓なのか!?!」

俺が言った。

『んあ? その声……幽にいか!?!』

「啓なんだな!」

『やっぱり生きてたんだな。でも、まさか身近にいるなんてな……幽にいても一緒みたいだな。』

「ああ、そうだ!」

「それじゃ、そろそろビルにお邪魔させてもらおうよ。部屋でしっかり待っててくれよ?」

俺もすぐにビルからさっちまったからな。あんまり場所覚えてねえんだ。」

「分かった！」

これで会話は終わった。啓が生きている事が揺るぎないものとなった！

これで……！！

「ん、おい、なんだこの揺れは……。」

「揺れ？ そういえば少しだけそんな気もする……。」

「少しだけが確かに揺れているな。」

「なんなんだ？」

「気にする事でもない気がするが……。」

「こんな時の為のトランシーバーか。」

俺はトランシーバーの一覧で通話することにした。とりあえず指定なしで。範囲内なら誰かが会話を拾ってくれるはずだ。

「もしもし？ 誰か聴こえてますか？」

すると、意外なほど早く、そして衝撃的な言葉が返ってきた。

『新堂か！？ た、大変だ！ いままで見た事もないゾンビが……！！』

「な……ッ！ 守備はどうなんです!？」

『1階で暴れまわっているんだ！ 第3チームメンバーは全員3階にいる。無事だ。だが、誰がやつを……。』

あいつを抑えられるかで必死で討議している。対策も練っている最中だ!』

「……！！ 一体どんなゾンビなんです!？」

『人と同じで立っている。が、知能もあり、言葉も話す。と第3チームが証言している。』

武器も扱えるようで、手には強靱な爪があるそうだ。』

「相当厄介なタイプです。僕も一度だけ知能を持つタイプは見た事があります。」

何としてでも逃げるか倒すかしないといけません。早急に決めてください!」

『……分かった。持ちかけてみる。君達は7階か？ そこで待機し

ていてくれ！

いざという時の為にな……！ 後、聖奈が君達の方へと向かっていくはずだ。見つけたら早急に保護するようにな！」

「は、はい！」

会話はここで終わった。

「お、俺、聖奈を迎えに行く！」

「分かった！」

ドアを開けると、階段から昇ってきた聖奈の姿があった。

「あ、幽にい！」

「聖奈！ こつちだ！」

聖奈が走って寄ってくる。

「聖奈、疲れたよ……。」

「聖奈、悪いけど部屋を移る。第6チームも移動してくれ！」

なんだか嫌な予感がする。

「ど、どうした？」

「危険なゾンビがビル内に侵入して来てる。もしもの時の為に部屋を移し替えよう。この部屋と

階段がドアから見える向かいの部屋がいいと思う。中央は空洞状になってるし、危険も回避できると思う。」

「分かった。全員、向かいの部屋に移るぞ！」

「ああ！」

「向かいだな。」

全員が向かいの部屋に移った。俺と、聖奈と、啓を除く第6チームメンバーがこの部屋にいる。

「声は絶対に出さないようにお願いします。話す時も小さな声で……。」

ドアを少しだけ開けておく。隙間からしっかりと階段も部屋も見えないぞ。

トランシーバーで第3チームのリーダーを指定して通話を持ちかけてみた。

「もしもし？」

『おお、新堂君か！ 私だ。』箱田^{はした}だ。』

「はい。箱田さん。状況はどうですか？」

『ゾンビはまだ1階にいるはずだ。俺は中央の空洞から下を見ている。まだいるぞ。』

ただ、黙々と1階を物色しているだけだ。俺は3階の会議室前から見下ろしているんな。

すまないが、刺激するわけにもいかないから、これで切る……………なッ！？」

「ど、どうしました？」

『ゾンビが階段を駆け抜けて行った！ 凄いスピードで昇っている！ 7階にいる君達も気をつけてくれ！』

「分かりました。一旦切ります。」

会話終了。さて、……………！ 気配が……………！！ 凄いぞ、これは。俺も少し怖い……………。

「ここか。」

奥から声が聞こえてくる。

こ、こいつは……………。言っていたことは確かだ。爪がやや長く見えている。ただ、右手だけだ。

物を掴むのはなんとかなる程度の長さだ。色々厄介そうだ……………。

服装は割ときれいだ。なんだ、こいつ。本当にゾンビか？

ガチャ 俺達が元いた場所を開ける。

「……………誰もいない？」

非難してみたが、正解だったようだ。人間らしい口調なのは理解できる。が、

爪がある。しかし、血色は人間の肌色だ……………一体どういうことなんだ……………。

俺は小さく言った。

「いざという時は俺と聖奈が出ます。トランシーバーで支持しますので準備しててください。」

「OKだ。」

「聖奈、幽にいと一緒でよかった！」

向かいのゾンビが言った。

「仕方ない……生物センサー使うか。嫌な予感するから使いたくなくなっただけだなあ。」

ピピピッ 取り出した機会のボタンを押してセンサーが音を放つ。

センサーならバレるか。仕方ないな……行くか！

ドアを開けて俺と聖奈だけ出てドアを閉めた！

「言葉が理解できるなんてな。意外だったよ。センサーまで持つてるのは想定外だったがな。」

「……………」

「急にだんまりするなよ。これから殺るか殺られるかの死闘が幕を開けるんだぜ？」

「ハハ、……ここで再開するとはなあ。」

「は？」

「俺だよ。分からないのか？ さっきトランシーバーで応答してくれたのは嬉しかったぜ。」

「な、な……お前が……そうなのか？」

「ああ、そうだ。」

「な、なんで……！ なんで啓が『ゾンビ化』してるんだ……！」

俺は目を疑った。目の前で言われて一気に世界が崩壊してしまったかのような絶望感に襲われた。

目の前にいるのはまぎれもなく啓。髪型も、顔立ちも、しゃべり方も、身長も……

全部、全部啓と同じなのに……異形の右腕に目が行き、見るだけで信じたくない事を

嫌でも現実にさせている。

どうして、どうしてなんだ……？ 啓、お前は無事に生還してきたんじゃないかったのか……？

俺は目から溢れる涙をこらえきれずにいた。

「幽にい……すまなかった。俺もこうなるとは思わなかったんだ。」
「幽にい、しつかりしてえ！」

聖奈が俺を気にかけてくれている。

「……聖奈、幽には強くて頼もしかったか？」

歩み寄ってくる啓が言った。

「うん、幽にはいつも聖奈を守ってくれたよ！」

「強いよな、幽には。」

「うん！」

感動の再会なんだろうな。だが、これを受け入れるわけには……い
かないんだ！！

ヒュッ 矛を聖奈と啓の間に挟む。

「そこまでだ……。」

「幽にい？ どうしたんだ？」

「聴こえなかったのか？ そこまでだと言ったんだ。それ以上寄っ
たら……容赦はしない！」

「ど、どうしてだ！？ 受け入れられないって言うのか……！！？」

「会いに来るだけならまだ許してやった。人の心を持つならまだ受
け入れたさ。」

だがな……『ビルで暴れまわるような奴』はどんなやつでも聖奈に
は触れさせないッ！！」

「ふん、鋭いな。流石は幽にいつてところか。」

「なッ！？」

「やっぱりその強さも感覚も健在か。生存者の中じゃ最強クラスだ
な。」

俺は矛で啓を薙ぎ払った！ 体ごと吹っ飛ばしてしまったが、多分
ダメージは薄い。

啓の口調が変わった。いや、もうあいつは昔の啓じゃない……！

「イテテッ……なんつー力だよ。流石は地区最強だな。けどな、
俺もイイ力もってんだぜえ！」

今度は凄い猛威で突っ込んできた！ 木刀を構えている！

俺は矛で木刀を抑える姿勢に入った。たぶん……隙をつける相手じゃないぞ！

ガツ 啓の木刀を俺の矛で抑えている。クツ、なんつー力！俺が押されそうだぞ！

「いいパワーだろ？ 人間を失った代わりに手に入る力はでけえんだ。」

「……………失ったのは人間だけか？」

「あ？」

「大切な仲間とかも失っちゃまって……………どうだよ？」

「仲間だと？」

「クツ……………馬鹿野郎！ 第6チームのメンバーがいるだろ！」

気を抜いたらあつという間に潰されちまうぞこれ！

「ああ、仲間ってそっちか。あいつらはもういいや。俺にはもう戦友がいるからよ。」

チーム組んでようやく生き残れるような人間とかかわるのは御免だなあツ！」

グウウ！ さらに力を入れてきやがった！ 俺が折れるわけにはい

かねえ！！

「てめえ……………！！！」

「……………どうしても届かなかった幽ににもうすぐ届くぜ。」

「……………ふざけるなツ！」

矛で押し返して薙いだ！ カツとなって今以上の力が出たみたいだ。

「あと一歩つてところか。」

「力じゃ負けるかもしれないな。だけど、勝負なら俺は絶対に負けねえよ。」

「どうだろな？」

「人間相手になら負ける気はしねえ。知能がある分行動に人間臭さが混じってんだ。」

「だけど、体力面ではゾンビクラスか……………。まあ、とにかく今のままじゃ俺が勝つよ。絶対にな！」

「舐めるなよ！」

啓が木刀で斜めから振り落としてきた！

俺は屈みながら右に避ける。今だッ！

矛で頭部を横から渾身の力で一打を入れた！ いい手ごとえだ。

「ぐあッ！」

啓が膝ひざを突く。

「ふッ！」

腹に矛による一撃を加える。体ごと壁に向けて吹っ飛ばした！

「ガハッ！」

「聖奈、治癒だ！」

「うん！」

聖奈はダガーをポケットから取り出し、傷を入れる。少量の血があふれてきた。

俺はダガーを聖奈から取り、血を付着させる。治癒には多い量ぐらいの血がついたダガーを壁際でもがいている啓の足を狙って浅く切りつけた！

スパッ

「ダガーか……痛くも痒くもねえよ。」

ダガーを聖奈に返した。余裕なんてもうじき無くなるぞ。

「ただのダガーじゃねえよ。」

「じゃあ、どんなダガーだ？」

「聞いて驚け。」

俺は勝利宣言も含めて言った。啓……人間の所業を越えたお前はせめて俺達の手で……。

「聖奈の血が着いたダガーだ！」

余裕のあった啓の顔つきが一気に恐怖の顔へと変わった。

T h e e n d o f b u i l d i n g (前書き)

サブタイトル『建物の末路』

The end of building

啓……人間の所業を越えたお前はせめて俺達の手で……。
「聖奈の血が着いたダガーだ！」
余裕のあった啓の顔つきが一気に恐怖の顔へと変わった。

原理は知らないが、聖奈の血にはゾンビ化の治療をすることができ
る。

だが、祖父の手紙には重度のゾンビ化状態にある者に使うと死に至
ると書いてあった。

宿主の体をも変質させるほどの脅威的存在だが、これには勝てまい！
死に至るとまでは到底思えないが……何しろ変質が凄すぎるからな
ゾンビが出現してからの日を計っても早すぎる。しかし、人間から
逸脱した姿はまぎれもなく現実。

「ウグ……ッ！」

「許せ、啓……！」

「ぐあああああああああッ！」
痛みで激しくのたうち回っている。だが、ゾンビ化の進行を浄化さ
れるってのは、

そんなものじゃないはずだ。なにしろ通常のゾンビには死に至るほ
どの猛毒のようなもの。

「行くぞ、聖奈！」

「う、うん。」

急いで階段を下りた。血は少しだけ多めにしたからなんとか時間は
稼げるはずだ。

4階のチームの部屋に戻る。

バンッ 勢いよくドアを開ける。

「皆……！」

「幽……！」

「藤島……だけか？」

「どうしたんだ？」

「急いでここを出るぞ！ もうここはダメだ。食糧も水分も積んであるんだろ？」

「すぐに準備してくれ！ もう時間がないんだ！」

「わ、分かった……！」

後ろから誰かが入ってくる。

「新堂？ 無事だったか！」

皆が入ってきた。香憐も、吉成も、大門さんも。

「急いで荷物を持ってください！ もうこのビルにはいられない！」

「えー？」

「あのゾンビは強い。いままでのゾンビをはるかに超える格だ。」

ああ、そうだった。トランシーバーで連絡を取らなきゃ！

急いで会話を周りに発信する。

「皆、急いで荷物を纏めてビルを脱出してくれ！ 今7階でゾンビがやられているが、

時間がもうないんだ！ 第6チームも今ならまだ間に合う！ 構わず降りてくれ！

他の皆もなりふり構わずビルから脱出して散ってください！

僕達第8チームは荷物をまとめ次第脱出します。7階にいるゾンビからなんとしてでも逃げるんです！」

急いで言ったが、多分大体伝わったと思う。

さて、俺達もこれ以上長居をするわけにはいかない。

今の啓は、もう以前の啓じゃない。生きている人間をも殺せる。

罪なき人間も殺せてしまうんだ。躊躇や戸惑いがないやつは強いんだ。

未だに戸惑いがある俺では互角といったところか。あれ以上続けなかったのは、

俺の心のどこかに啓に対する情があったからだろうか……？

「荷物は大体OKだ。準備も万端だぞ！」

「よし、脱出だ！」

ドアを出る。階段を下りているとまだ啓の叫び声が聞こえてくる。すると、連合のメンバーに出会った。

「新堂君！ これは一体……？」

「ゾンビの仕業です。もう持ちません！ 7階でいまだにゾンビが叫んでますが、それだけの間しか

持ちませんが、ゾンビを倒しに7階へ向かうのも、諦めてビルを出るのも自由です。

僕は脱出します。僕達はもう応戦できない！ では、失礼します！」

「あ、君達！？」

俺達は駆け出した。出口を目指して。

ゾンビは入口にはいない！ 今が好機！ 階段の奥に見えるゾンビの数も少ないぞ！

ドアを通り、外に出た！

「こ、これからどうする！？」

「そうだな、これからは……」

「ちよつと待ちたまえ。君達。」

声を放ったのは階段から昇ってきた男だ。白衣を着ていて、年齢は若そうだ。

黒髪でオールバック。初対面だというのにこの男、表情は笑っている。このいかにも俺達が焦りと恐怖で

戸惑っているのもすべてを愉快そうな視線で見ている。

「あんだ……」

「ん、私かい？ 私の名は『江田 裕』。とある研究室で研究員をしている。

相棒を迎えに来たんだ。」

「そう、ですか。」

危険なおいがする。普通の人間のはずなのに、ゾンビ……いや、啓よりも恐ろしい気がする。

「行こう。ここにいたら危険だ。」

「あ、ああ！」

「とにかく離れるかなさそうだ。」

無事に全員が揃って逃げれた。もっと、もっと遠くへ……！！

その後のビルについては分からない。

あの時にトランシーバーで伝えた事。連合の人に伝えた事。しつかり聞いてくれて、皆が無事でいてくれる事を願う。

ただ、色々と気がかりな事はある。啓の事もそうだが、研究員が最も気がかりだ。

啓よりも凄いい気配がした。威圧と言うかそんな感じのものだ。殺気ではないのだが……なんだか、

大事な事を見逃してしまった気がする。そういえば、碇さんは一体なんの研究員だったんだろう？

俺達は、とある場所に来ていた。巨体のゾンビが通ったがために遠回りを強要され、結局

通過する事が出来なかった場所。そう、あの場所だ。

無言だが、誰もが認知している。刻まれた記憶がよみがえる。

宿命のように回る時の歯車。それを俺達に再度確認させようとするかの如く、

目の前には微かだが堂々とした歩行でこちらに近づいてくる者がいた。

「新堂、あれは……。」

「あれ、だな。」

「あいつか。」

「怖いです……！」

「幽にいい、負けないよね？」

「幽さんが負けるはずないですよ。」

いよいよ、決着をつける時が来たとも言いたいのか？ あいつは

……。

巨体が俺達に刻一刻と地に跡をつけて迫ってくる。

ついに決戦の時だ。

「皆、決心はついたか？ 油断するなよ。」

「ああ。」

「もちろんだ。」

「私は……どうすればよいのでしょうか？」

「木刀あるから使ってくれ。」

荷物として持ってきた者を渡した。

「ありがとうございます！」

「頭部と急所狙いだぞ。」

「は、はい！」

「聖奈も頑張る！」

「よし、覚悟はいいな？ ……来るぞ！」

聖奈はなんだかんだでいつでも冴えているというか、マイペースを貫き通しているような気がする。

本当は危険な目にあわせたくは無い。短期決戦だな！

ゾンビがこちらに気づく。ギラつく視線と俺の目があった。

「ヴオオオオオオオ！」

猛突進で巨体が迫ってきた。

人間とゾンビ。それぞれの思念を抱いて雌雄しゆうを決する戦いが火蓋ひふたを切った！

The end of building(後書き)

感想や意見等々を随時受け付けております。

読者様の声をお待ちしております！ お気軽にどうぞ！

The master (前書き)

サブタイトル『The master / 飼い主』

The master

「ヴオオオオオオオ！」

猛突進で巨体が迫ってきた。

人間とゾンビ。それぞれの思念を抱いて雌雄しゆうを決する戦いが火蓋ひふたを切った！

やはり、戦力となりえるのは俺と藤島。それから大門さんだろう。

吉成は正直主戦力に加えるにはいささか条件が悪すぎる。いざという時の、

動揺や少しだけの時間だけやつの目を引くのが主な役目になるな。

聖奈は最後の砦だ。俺も使いたくは無いが、聖奈の血はどんなゾンビにでも効果は抜群だ。

香憐はまだ動体視力や持久力にも欠ける。ここで吉成と同じ役目を持たせるのはダメだ。

誰かに護衛を務めてもらわないとな。

「香憐は遠くで見ているんだ。いいな？ 後、他に一人は香憐の護衛を頼む！」

言葉の次には俺は動いていた。動いた次は他のメンバーも動いていた。

香憐と藤島がセットで接近してくる奴から距離を置こうと離れる。

吉成は左手に小太刀を構え、右手はフリーだ。左利きではないが、いつでも特技（投擲）が使えるように

するためだろう。いざという時は任せたぞ！

迫るあいつを避ける。巨体では急に止まれないのは予想通り。

避ける時に確認したが、やはり眼球はあの時の読み通りだった。

右目は開いていない。前は眼球が無かったが、今は瞼まぶたを閉ざしている。

左目ははっきりと開けている。目が俺に視線を向けた。

あの時に見えた眼球への傷は完治してしまったようだ……！　なんつー治癒力だよ！

右目が見えないなら、死角は右側後方と言う事になる。そして左目が利く以上、避けるなら右側だろう。

これを踏まえていれば、回避も多少容易になるはずだ。

あの時は武器を持っていたが、今は何も持っていない。勝機はある！ただ、あの大きさの身体だ。握力、腕力共に人間相手では一撃で……。

だからこそ、ここで皆を生かすためには俺がやらなきゃならないんだ！

「うおお！」

ガスツ　右の脛ひざもとに横から一撃を入れる。

「ヴオオア！」

少しひるんだが、やはりダメージは小さかった！

右から振り返ってこちらを見据える。そして拳を上げる。

「この野郎！」

後ろから大門さんが攻撃してくれた。俺の攻撃していた右の脛をさらに木刀で突いていた。

「ヴウオツ！」

ひるみ方が大きくなった。しかしまだ膝を突く様子はない。流石は大物と言ったところか……！

大門さんの方へと向くゾンビ。馬鹿なやつめ！

「そらッ！」

腰の捻りも加え、薙ぎ払った。

すると、ゾンビがついに体制を崩し、膝をついた。

「今だ！　残っている左目を潰すんだ！」

「任せろ！　ハッ！」

ゴスツと鈍い音が響く。が、眼球はつぶれてはいなかった。

土壇場で大門さんも焦っていたのか、眼球ではなく頭部が叩かれていた。

もちろん、頭部へのダメージは他の部位よりも効果的なものの骨の髄までは響かない……。

『肉質が完全に人間とは違う』。そう悟らざるを得なかった。

特異な形状のゾンビは明らかに人間の原型を思わせるゾンビとは持つている能力も、

センスも、戦い方も違っていた。ゾンビはただ貪欲に近くの獲物を取るためには

手段はただ接近による噛みつきのみ。更に言うと腕などほかの部位での攻撃は無い。

知能を持った個体は別だが……。

だが、こいつは違う。武器を使い、危険を察知し、獲物が複数いる時もそれを認知した上で、

持ちえる範囲で行動をする。そういうゾンビ……ッ！

「この、この……！」

何度も叩くが、頭部にしか当たらない。眼球には木刀は届かない。

「大門さん落ち着いてください！」

「し、しかし！」

頭部への攻撃がまだ弱かったのか、いままで倒れていたゾンビがついに体を起こし始めた。

「距離を置いてください！」

「あ、ああ……！」

ヒュッ 起き上がるうとするゾンビを横から飛んでくる石によって行動は後れを取った！

「吉成、ナイスだぞ！」

返事は後で とでもいつかのようにまだゾンビへと視線を向けている。まるでタイミングを計るかのよう

落ち着いた目で見据えている……。振り向くゾンビ。振り向いた瞬間、

吉成は更に手に隠していた石を投げた！

その石は放物線を描かず、直線に飛んでいった。恐らく渾身の投

擲だ！

ゾンビはそれに気づいて角度を変えた。石は眼球には当たらなかった。

「く、しぶといですね……！」

右足はもう狙い目確定。武器で突くなり薙ぐなりすればもうよろめくのも時間の問題だろう。

問題は最後だ。あいつを仕留める事は出来るのだろうか。何度も何度も叩けば息絶えるのか？

恐らく今の俺たちでは……最後の最後に聖奈の血を使うほかに手段は無い。

できれば首を吹っ飛ばしたい。心の臓を貫いておきたい。だが……俺達には無理だ！

「新堂幽！ここにいたか！」

声の方へ振り向くと、第6チームのメンバーがいた。5人がこちらへ向かってくる。

「緊急事態のようだな。参戦する！」

「分かった！眼球を潰してくれ！」

「任せとけて！」

第6チームのメンバーがなりふり構わず特攻していく！

巨体故に足を攻撃するのが定石なのを理解しているらしく、ゾンビは倒れこんだ。

その後にはやはり頭部への連打。こちらと違い、向こうは鉄パイプを所持している面子もいるので、

これは想像以上にダメージが大きいかもしれない！

そして連打が終わった。ゾンビはうめき声を上げるばかりでアクシヨンがない。

「こんなところか？」

数の力とは、こうも強大なものとはな……。

啓のやつも見くびっているに違いない。協力しなきゃ生き残れない世界だが、

協力すれば人数分よりも凄い真価を発揮できるんだ。それが人間なんだ！

「それじゃ、聖奈の出番だね。」

浅く切り傷を……。くそ、こうしてまた傷が増えていくのか！？俺には止めることはできないのか……！？

チームのため、生き残るため、聖奈のためとはいえ……心が痛むよ。

「聖奈、ここから先は向こうに行ってなさい。俺がやる……。」

ダガーを受け取る。聖奈は少し距離を置いた。

俺はダガーに力を込め、左の眼球へと振り下ろした！

ザシュツ　ブシュツ　一気に刺し、引き抜いた。血が流れて唸るよ

うな声を上げる！

「ヴオオオオオオオオオオオ！」

手でゆっくり眼球を抑えてもがく。

ダガーに着いた血を空で一振りすることで払った。ビシャッと血がコンクリートに付着する。

ダガーを聖奈に返す。声は続き、今だ止む^や様子が無い。

「やはり生命力はすさまじいな……。」

「化物だな……。」

「だが、これでお終いだろ。」

「そう、だな。」

第6チームが言う通りだと良いのだがな……。

すると、声が少しずつ弱まっていく。死ぬというところまではいかないが、小さくなっていく。

「……………これで、終わったんだな。」

俺が空に語りかけるように言ったつもりが、思わぬところから返答が返ってきた。

「終わりじゃありませんよ。」

「何ッ！？ ……あんたはあの時の。」

「そう、一度お会いしましたよね。新堂幽君。私です。江田^{こした} 裕^{はなま}ですよ。」

「あ、あなた……一体ビルに何しに向かったんですか？」

「前にもお話した通りで、相棒を迎えに来たんですよ。ただそれだけです。」

……しかし、気配は変わっていない。近づきがたいこの雰囲気……一体何者なんだ!?

「相棒つてのは俺の事な。」

碯の後ろから聞き覚えのある声。まさか……

「碯、なのか……?」

「びつくりしたよ。聖奈の血の事はすっかり忘れていた。思い返してみるとあれほど天敵になる相手は

他にはいないな。」

「どうして生きてる! お前は確かに……」

「辛かったぜ? ゾンビならどいつもこいつも死に至る血を喰らったんだからな。

俺もやばかったんだが、碯のおかげで何とか助かったってわけよ。」

「碯……? 一体何をした!」

この男、ゾンビへ助力をするとは……! ただの研究員ってわけじゃなさそうだ。

「何、ちよつとした薬を与えただけですよ。」

「……何の薬か言ってみろ。」

「『IR-013』。とある研究室で生み出されたゾンビ化の進行を促進させる薬ですよ。」

「ゾンビ化促進だと……!?!」

そんな薬が存在していたとは……! 研究室で生み出されたってことは、

十中八九ゾンビ化の起源も人間が生み出したものなのだろうな……!

「聖奈君の血はゾンビとは相反するもの……。生身の人間とゾンビは相いれない存在なんですよ。」

ゾンビ化とは、文字通りゾンビに変わりはてる事を差しますが、厳密には違ってくるんです。」

「ど、どういうことだ……？」

こいつ、何か知っているのか？

「ゾンビ化とは、生身の人間が普段管理下に置いている体の支配権をその過程で奪い取るんです。」

生身の状態の支配権を奪われると当然動けませんし使えません。

ところが、進行はどんどん進みます。生身の人間の抵抗力……の事を『Normality』と呼称していますが、

ゾンビ化ウイルスの『Vilits』とノーマリティ。どちらかが尽きるまで人間の体は支配権を奪い合っんです。

結果的に勝者が人間を支配します。ただ……体質で打ち勝つ人間も稀にいますからね。」

「ウイルスだと？ あれはウイルスの力だって言うのか!？」

「ええ、ただ彼らはそう長くは持ちませんよ。所詮はモルモットですからね。」

モルモット？ ゾンビがモツモットだって？ こいつら、これだけの被害を出して置いて何を言ってるやがる!

「貴様、そんなのが許されるとでも思っているのか!」

「許されますよ。この事実は君達も含めて知っている者はごくわずか……。」

ついでに質問ですが、この状況下で我々を裁いてくれる者はいるんですか？

裁けませんよねえ。自分の事で手いっぱい。もしくはもうゾンビになっっているのかもしれないからねえ。」

「この野郎……この状況を利用したのかッ!」

「利用？ クツクツク、御冗談を。もちろん自らの手で作り出したんですよ。」

「全部計算どおりってわけか……。」

「……いや、予想はしていましたが例外が出てきましたよ。その最大の例外が……。」

「聖奈ってわけか。」

「御名答。少しはキレるようですね。」

「なるほど、な。で、お前らは聖奈を始末しに来たのか？」

「始末……ですか。研究者としては確かに聖奈君のデータは検証したいところですが、

今回は別件。そこに転がっている『H エイチ・ヴィルティス - V i l t i s』の回収ですよ。」

「エイチヴィルティス……？」

そこに転がっている……ってこの巨体のゾンビのことか!?

「今回もよいデータが取れましたよ。ご協力に感謝します。」

「誰がてめえなんかに!」

「クク、……そろそろいいですよね？」

裕の目が俺とあった。グツ……! 凄い威圧がある視線だ。ここまでのものとは……!!

深い闇が具現化したかのような黒の瞳ひとみがギロリと俺を睨んでいる。

こいつ……なんなんだよ! どうしてゾンビに加勢しているんだ!? 「今のあなたには何も出来やしませんよ。」

言葉が俺の内にズシツと響いた。俺はあいつが……怖い。存在がゾンビよりも恐ろしい化物に見える。

『H エイチ・ヴィルティス - V i l t i s』に歩み寄る裕を俺はただ固まった足で立ち、

俺の横を平然たる態度で通り過ぎていくのを見ている事しかできなかった……。

The master (後書き)

ゾンビ化の詳細については次話以降で詳しく取り上げていく予定です。

感想等がありましたら、是非是非聞かせてください！ お願いしますです！

I n f a c t (前書き)

サブタイトル 『I n f a c t / 真実』

In fact

『H - ヴァイルティス』に歩み寄る碓を俺はただ固まった足で立ち、

俺の横を平然たる態度で通り過ぎていくのを見ている事しかできなかった……。

場が一気に滞る。動いているのは碓と啓だけ……。

「派手にやられてくれましたねえ……。」

呻く『H - ヴァイルティス』に語りかけるように碓は言った。

「もつと改良の余地はあると思うんですけどねえ？ 啓君。」

「貴重な人材使ったんだろ？ なんで最新のやつにしなかったんだ？」

「最新……。」『H? - ヴァイルティス』のことですか？

「巨体なら最新のほうがよかっただろ？」

「あれでもよかったのは事実ですかね。ただ……他の研究員の発明品を使うのは虫酸が走りますから。」

最も起源に近く、派生の利く初代を使わせてもらったというわけですよ。」

「なるほどな。……で、派生の見越しはあるのか？」

「勿論。良質な人間をベースにした割にはなかなかのデータですよ。ここまで改良点が見つかるとは！」

会話を聞くからにこいつらは完全に黒だ。俺達の敵……！

ここで始末しておかないと後々とんでもない事になる。俺が……やるんだ！

矛を構える。すると……

「幽君、そこで何をしているんですか？」

「!?!?」

「物騒な矛を収めてもらえませんかねえ。私はここで貴方と対峙す

るつもりはないんですよ。」

「そうかもな。ただ、俺達……いや、生きている人々の為にはお前が降伏するか、

死んでもらうしかなくなる。」

「ほう、面白い見解ですね。私がいなくなったところでゾンビの感染、拡大は止まりませんよ。」

「ああ、止まらない。止まるわけがない。お前でも止められないんだろ？」

「……止める方法はいくつかあります。しかし止めては実験も、割り出しの意味もないですからねえ。」

「割り出しだと？」

「ここにいる生存者。なぜゾンビに喰われずに生きているか……。

答えは簡単。君達が強い存在だからですよ。我々はその強き生存者を割り出すためにも、

ゾンビと言う名の悪鬼を登用させたんですよ。」

「俺達もその生存者の一人ってわけか。」

「そう、その通り！ この世にいる人間でも本当に土壇場でも使える実力を持つ者は

そうこの世にはいませんよ。ゾンビに打ち勝ってこそ本当に強き人間。」

「お前はその強い人間を炙り出してどうするつもりだ……？」

「モルモットにはできませんからねえ。今のところはまだ検討中つてところですか。」

今はまだ生存者を集めているわけでもないですから。」

今はまだ……か。これは想像を絶する『災害』になりそうだ……！

「ああ、『H - Viltis』を倒した褒美に良い事を教えてあげますよ。」

「何い……ッ!?!？」

「この付近にはまだ『H - Viltis』を越えるゾンビが徘徊しています。」

啓君はこの中には含めていませんが……あと3匹。面倒なので

『ヴイルテイス』は略しますが、

『地這い鬼』こと『R? - Viltis』。

『獣人』こと『A? - Viltis』。『軍曹』こと『L? - Vi

ltilis』。

……どれも強敵ぞろいですよ。私ではなく他の研究員が生み出したので私には関係ないですけどね。

啓君ならもう単独で『軍曹』程度はやれるでしょう。あなたたちではどうでしょうかね……?」

「こいつを越えるのがまだ3匹もいやがるのか!？」

「何もゾンビへの研究は私に限った話じゃない。すでに他の研究者たちも開発に取り掛かっています。」

なんだと……。こいつは俺達でようやく倒したんだぞ!? それ以上がまだ3匹……!」

とてもじゃないが太刀打ちできる気がしない……! もしかしたらあいつもまだ情報を持っているのかもな

聞いてみるか……。

「そいつらの特徴は?」

「『地這い鬼』はその名の通り地を這う者。長身で『H - Viltis』をも超える巨体です。」

『獣人』は獅子を思わせる方向に伸びる爪、牙……。体格は『H - Viltis』に劣りますがね……。

『軍曹』はゾンビを率いる新手のゾンビです。指揮官のような位置に着き、

常にテリトリーを配下のゾンビに見回らせるので軍団に近い……。意志無きゾンビを抑制させることもできるかなり異質な存在です。こんなところで情報提供は終わりでもいいですかね?」

「全く、裕は一夕おしゃべりが過ぎるんだって! だから『B - Viltis』の

研究も盗まれちゃうんだぞ?」

「『B - ビーワン - V i l t i s 』は元々調整が難しいゾンビでしたし、他の研究員が勝手に成果を上げてくれるなら良い事じゃないですか。正直な話、

誰かが盗んで成果を上げたなら、その調整された個体は私も盗み返すまでですし。」

「あれほど云々言つてたくせに……。」「こいつら、まだ奥の手を隠し持ってやがるのか……？」

そして他の研究員たちもゾンビの研究だと？ 狂っている！ この世界はもう狂っている！

「お、おい！ 幽！ なんかこっちに向かってくるぞ！」
「え？」

な、なんだ。凄い咆哮が遠くから聴こえてくる。そして地をたたくような重量のある音……。

「マズいですね！ もう『地這い鬼』の登場ですか……！ 退却ですよ。啓君！」

「おう！」
啓と裕は俺達がもともと向かおうとしていた方角へと橋を渡って行った。

つて、裕も啓も凄い速さで走っている！ 生身の裕も相当凄腕らしいな……。

「お、俺達も逃げるぞ！ 橋を突っ切った後は橋の道路から外れる！ いいな？」

「あ、ああ！」
「もちろんだ！」

「時間が惜しいです！ いきましょう！」
俺達は全力で走った。まだ姿が見えたわけじゃないが、あの咆哮は

ヤバすぎる！
人間が太刀打ちできる相手じゃない。それが直感で分かった。

「こつちだ！」
俺達がやむなく使った橋を遠回りするために使った散歩道を通った。

しばらく走った。俺の祖父の道場のある街の手前まで続いている散歩道をその街の手前で止まった。

振り向く。しかしまだ変化は無い。しかし、この周囲に振りまく感じの狂気は……。

「うわ、見る！ さっきまで俺達があるいていた街が……！」

『H - Vilitis』と対峙する橋の前……ビルの街から出る時に通った道に表れた巨影は、

俺達の想像を絶するもので……俺たち全員の戦意を一気に消失させるほどのものだった。

今、俺達が目撃しているのは『地獄絵図』そのものだった……！！

P a s s a g e (前書き)

サブタイトル『P a s s a g e / 経過』

「うわ、見る！ さっきまで俺達があるいていた街が……！」

『H - Vilitis』と対峙する橋の前……ビルの街から出る時に通った道に表れた巨影は、

俺達の想像を絶するもので……俺たち全員の戦意を一気に消失させるほどのものだった。

今、俺達が目撃しているのは『地獄絵図』そのものだった……！！

巨体の何かが橋に迫る。

皮膚は血の色を少し濃密にして浮き出したような紅色が目立つ。

以前のビルでの会議に話題になっていたな。名前は確か……『C r e e p e r』だっけ？

似たような状態だが決定的な違いがある。それは……巨体だ。

あの巨体では二足歩行は難しいが、それでもあの『H - V i l t i s』を越える巨体。

そして前足に見られる鋭利な爪。人間から逸脱した牙。

巨体だけあつて頭部など体の形状も大きい。そして後ろ脚にも若干長めの鉤かぎのような爪。

この距離から見えるんだぞ？ あいつは近付いちゃだめだ！ 戦つて勝てる相手じゃない！

碯はあれは自分のものではないと言っていたな……。お気に入りの啓も連れて逃げるほどの相手だ。

碯達でも勝算は薄いということか……聖奈の血があつて初めて勝利した俺達では話にならないだろう。

橋の前まで来て巨体が止まる。あれが『地這い鬼』か……。

周りを見渡し始める『地這い鬼』。見つかつては大変だ！ 逃げるなら今しかない！

「皆、逃げるぞ！ 街とは反対の方向に逃げるんだ……！」

「なんなんだよもう！ 碇とか言うやつにも逃げるし、いきなり巨体が出てくるしよっ！」

「落ちつけ、藤島！ 冷静を欠いてはいかん！ この距離だ。そう焦らずとも助かる方法はある！」

「そうですね！ 今は逃げてからでも考える事は出来ます！ 今は走りましょう！」

「せ、聖奈ちよつと怖い……。」

俺が指示すると皆も黙らずにはいられなかったらしい。

「香憐？」

藤島が言う。振り向くと香憐が腰を落としている。

「わ、私、腰がぬけちゃって……。」

「大丈夫か？」

そうしているうちに咆哮がまた聴こえてきた。

「ッ！！ しゃーない、俺が背負う！」

「え、え！？」

「ほら、早く乗れ！」

「で、でも……！！」

「ここで死ぬよりはマシだ！ 死んだら何もかも終わっちゃうんだぞ！」

「……わ、分かりました！」

香憐ガバツと藤島の首に手をかけた。

「うし、行くぞ！」

「こうなったら、歩いていくことにする。藤島、無茶すぎるなよ？」

「任せとけて。勝手に倒れたりしはしねえからよ！」

「行先は……どうする？」

これが決まらなないと延々と放浪の旅をすることになる。コンビニ等を探当てていきたいな。

恐らくこの道中も休憩、食事を取りつつ進むことになる。下手をすると睡眠も必要になってくる。

どこか良い場所は無いだろうか。

「ゾンビと戦った街ってのはどうだ？ 今ならまだそう日もたっていないし、あの集団もいるかもしれない。」

なるほど、あの戦いの場所か。吉成には複雑な場所になってしまおうそうだが……今は進むしかない！

「あの町までならわざわざあの橋の前の道から進まなくても辿りつけるし、

今はこっちの道を進もう。」

「ああ。」

「本当にアレ、怖いよお……。」

俺達はまた旅路の道を選んだ。これが初めてというわけではないが緊張してしまう。

まだ他に2匹……か。

俺達は鬨着地点だけを目指して道を行った。その時、俺の手は少し震えていた……。

途中でゾンビニを見つけたので立ち寄った。すでに誰かの使用の後があり、ゴミが散らかっている。

ゾンビがいた痕跡は見当たらない。関係者用の扉も蹴破ってみたが特に注意すべきところは無かった。

音が漏れないように防止の役目もある扉だが、簡単に開けられるので少々不安がっていた皆。

なんとか俺が説得して皆には休養を取ってもらった。食糧等などの整理もして、

俺達はゾンビニ内でまだありあまっていた保存期間が長い食料にありついた。

その翌日の朝に俺達はゾンビニを出た。ゾンビも来なかったし、人も来なかった。

その後もまた道を淡々と歩き続けた。

長い道のりの果てについて辿りついたあの町。

ゾンビへの戦いの傷痕はあるものの、まだ若干人気はあった。

「む、君達は……！」

「どうも、あの時はお世話になりました。」

「とんでもない。恩を受けたのは我々の方だよ。……ところで長い旅路だったようだが？」

「はい、実は……話さなくてはいけない事があるんです！」

「何？」

人を集わせて俺達は話した。ゾンビ化の事、研究者が存在する事、恐ろしい個体のゾンビが徘徊している事も全部話した。

聴衆は驚きの顔を隠せず、絶望をあらわにしている者もいた。泣き崩れる者もいた。

「そうか、そんな事態にまで発展していたとは……。」

「はい……。」

「だが、その前にだな。君達も疲れているだろう？ 今日はずっきりしていきなさい。

努力の甲斐あって、この辺りにゾンビはいなくなったよ。……1匹取り逃がしてしまっただがな。」

「取り逃がした？」

「ああ。普通のやつとは違っていたな。走ることもできて、ゾンビに対して指をさしていたと思う。

あの時は向こうも相当焦っていたんだろうな。ゾンビが盾になってしまっただけ。走り去ってしまった。

俺達は街から離れるわけにもいかなかったから追わなかったんだ。」

「そう、ですか。」

ゾンビに指をさす……？ 指示していたってことか？ 若干『軍曹』の予感がしたんだが……！

だが、話で聞いたようにあまり余裕は無かったみたいだ。ゾンビにあれこれ指示できる能力でゾンビを盾にすることもできるだろうな。

その後、俺達は疲れを癒した。食後に『軍曹』、『獣人』、『地這い鬼』について持ちえる情報を話し、今後気をつけてくれと言った。

この集団もあの時から発展したみたいだ。俺達が最初に来た時よりも、

倒れて負傷していた者が減っており、人数も増えている。

本来ゾンビ化するはずなのに……。ということは、この人達は耐性が強いのだろうか？

言いたい事は色々あったが、全ては明日やることにしよう。今日は俺も疲れたよ……。

あれが起きてから時間が過ぎゆくのがかなり早い気がする。

あれほど気を張って、危険に満ちた世界を経験してから、ここのように安全地帯でのうのうと過ごすのは

俺達にとっては夢のような話だ。やはり、人々の力は侮れない。

ゾンビでは決して持ちえる事が無い、人間だけが持つ最大の武器だ。

「朝だ、皆起きてくれ。」

呼び出しがかかる。朝食の時間では賑やかな雰囲気満ちていた。

俺達は、

この時だけ……。あの日以前に戻されたような、そんな風に思いつつ目の前の食べ物を食した。

思わずホッとできる状況って、この世界ではもう他では味わうことはできないだろう。

今は、俺も至福の時を噛みしめていたい。そんな甘い感情を持たされてしまう。

朝食後、全員が一堂に集う。

「俺達の今後の方針は例のシヨツピングモールだ。意見があるものは後でもいいから来てくれ。」

シヨツピングモールか……。あの『H - Viltis』が最初にあられた場所だったな。

だが、あれは俺達が協力の末に始末した。大丈夫だろう。

「ところで、君達はどうするんだ？ 俺達としては是非共に行動してもらいたい。」

「はい、僕もそう思っていました。同行してもいいですか？」

「本当か！？ ありがとう！ 今後も一つ、よろしく頼む。」

「はい！」

こうして俺達11人はこの集団に加わった。これで総員が42名らしい。クラス1つ分という感じが。

シヨツピングモールへの道のりはそう遠い距離ではない。まだあの場所には食料もあるだろう。

不安もあるが、俺たちならきつと切り抜けるさ！

「なあ、幽？」

「藤島か。どうしたんだ？」

「シヨツピングモールってやばいんじゃないか？」

「どうしてだよ。『H - Viltis』は俺達が始末したただろ？」

「そうじゃねえよ。ただ、俺はあの時に『こっせん忽然と姿を消した人達』が気になってさ……。」

「なるほど……な。」

考えていなかった。確かに、これは注意すべき点である。

強靱な個体のゾンビがいたからというのが最もあの場面では有力になりえるが、

それ以外の事も考慮しておかないと……。

と勝手に嫌な感じが頭をよぎる。あの時の事を思い出させる。

俺達は、何か忘れているかもしれない。重大な何かを……。

そしてその何かに気づく前に一行はシヨツピングモールが見えて歓

喜の声が溢れだす。

その中でただ数人だけが不安に満ちた冷やかな目線でシヨッピングモールを見据えている。

冷たい目線をしているのは俺が見渡してみた限り、第6チーム以外の俺達の他に2人いた。

この状況に喜べずに警戒する視線をしている2人の内一人が俺に気づいた。

こちらを向くと少しだけ見据えてこちらに歩いてくる。

「おい、幽？」

「ん、藤島か。何かあったか？」

「ここに来て嫌な予感がするんだ。なんとか引き返す方法とかないか？」

「……ここまできて引き返そうなんて、俺の口からでも言えないよ。」

「そうか……。」

俺はそう言って気付かれないようにそっと藤島たちから距離を置いた。会話声ぐらいは聞きとれる。

「何か不安でもあるのか？」

大門さんが聞いてきた。

「シヨッピングモール……嫌な雰囲気があるとつか、妙にすんなり行けたというか……。」

「なるほどな。だが、このあたりにいたゾンビはもういないんだろっ？」

「ああ、だけど不安で仕方ないんだ。」

「何、この人数だ。一網打尽にするのは俺達の方だろうか？」

「そうだけど……！」

「藤島は気を張りすぎだぞ。俺も一応警戒はするから、お前は少しでも多く休むんだ。」

「分かった……。」

会話がそこまで終わった。そして迫る人物が俺のもとにきた。

「君、同じような目をしてるね。」

凜とした視線が俺をとらえている。女性の人だ。ストレートロングで毛の色は茶。

腰に何か棒状の物を携たずさえている。この人もただものじゃなさそうだ。

「皆、そろそろ中に突入する！ 準備はいいか！！」

「おうッ！！！」

「いよいよだな！」

「これでしたらくは安泰だぜ！」

「これもきつと新堂君たちのおかげだわ！」

等々聴こえてくる。

「……マズいな。」

俺が放った一言に隣の女性は敏感に反応した。

「君もそう思うのか？」

「以前ここに来た事があるので。」

「……なるほど、な。」

「そろそろ皆が行ってしまいます。詳しくは皆が落ちついてから話しましょう。」

「そうしよう。君の名前は？」

「新堂 幽です。」

「分かった。後で呼びに行く。さあ、中へ行こう。」

「はい。」

中に入ってから皆もせわしなくしていた。破られたバリケートはそのままだったが、決定的に俺が目を見張った事があった。それは……

「死体が……ない？」

ゾンビの死体が無い。あの時にはかなりの数の死体があったはずだ。腐るにしても早すぎる。

骨すら残らないのは不自然だ。

どつやら、藤島の言う通りのようだった。このショッピングモールは嫌な予感がする。

不可解な現象が取り巻いている謎めいた場所へと俺達の認識が変わった。ここは、安息の地ではない！

H i s t e r r i t o r y (前書き)

サブタイトル『H i s t e r r i t o r y / 彼の領域』

H i s t o r y

どうやら、藤島の言う通りのようだった。このショッピングモールは嫌な予感がする。

不可解な現象が取り巻いている謎めいた場所へと俺達の認識が変わった。ここは、安息の地ではない！

ゾンビが見当たらない。

何があったのかは見当もつかないが、何かがここで起こったのは間違いなさそうだ。

「み、皆！ 2階に上がってください！ 詮索はその後です！」

「ど、どうした？ 幽。」

俺は藤島にこそつと教えた。バラすとパニック騒動になりかねないからな。

「ここはおかしい。とてもじゃないが今のままじゃ喰われるか消されるか……。」

どっちにしてもかなり危険だ。ひとまず危険の薄い2階に上がってから全部話す。」

「なるほどな。そういうことならその方が賢明だな。もう中に入っちゃまってるし、

2階なら特攻でもなんとかなるしな。」

「そういうことだ。」

俺は順に2階へと上らせた。俺達が昇るのは一番最後。

そして無事に全員が2階に上った。

2階も1階と同じくゾンビの死体は無かった。あの時の惨事のままだ。

わけもわからずに2階へと来た人たちがざわついている。

団員の一人が聞いてきた。

「一体どうしたんだ、新堂君？」

「……このショッピングモールはどこがおかしいです。」

「おかしい?」

「はい。以前は僕達がここを最後に出たんです。が、今ここに来てみたら、ゾンビの死体が全て無くなっているんです。

本来ならあり得ません。先客がいてもおかしくないのに無人つてのも気になります……。」

「なるほどな。」

「2階もゾンビの死体は無いですから、ゾンビの危険はなくなりましたが……用心に越したことは無いでしょう。」

「つまりはこの不可解な現象を突きとめる方が先決と言っわけだな? 君のことだから、

まずは安全地帯確保のため2階から下層へと下って調べると言い出すのだから?」

「アハハ、お見通しですか。」

「ハツハツハ、あの時は世話になったからね。私もしっかり指揮を取れるように精進しないと!」

「あなたならきつとこの団員を導けますよ。頑張ってください!」

「ああ、君も無事で成功させるんだぞ。」

「はい!」

「この旨は私から伝えておこう。こちらもゾンビとの戦闘には力を入れてきたんだ。」

君達は君達のチームで事を進めてくれ。慣れないチームでは何かと不憫だろう?」

「ありがとうございます。」

俺はそれだけを言うと仲間のもとへと駆け出した。

第6チームは武闘派要素が強い。武器も備えてあるし、実戦では頼りになるだろう。

武器があればの話だが、波に乗れば素手でもやってくれそうだ。

「お、幽。やっと帰ってきたか。」

「お、遅くなつてすまん! えっと、話だったな。」

「そうそう。皆心配してたんだぜ？」

「あ、ああ。実はな……」

俺は大方さつきと同じ内容を話した。が、話し終わった途端に介入してきた者がいた。

あの時の二人だ。どこか予断を許さぬ気配を携えて今も尚持ち続けている。

「あ、あなたは。」

「正面でお会いしたね。新堂君。」

「ええ、今回は一体どんな話で……？」

「実は私ははぐれ者で、君達のような実戦的なチームに入れてほしいのだよ。」

「俺達のチームに？」

「ああ。決断は今すぐに出なくとも構わんよ。ただ、ここを出るまでには決めてもらいたい。」

「……分かりました。あなたの名前は？」

「私の名は『影山かげやま日向ひなた』。また逢う機会があったらよろしく頼むよ。」

「わか、りました……。」

悠然たる態度で去っていつてしまった。きっと彼女も彼女なりに何かあるのだろう。

腰に携えているモノも安物ではなさそうだし……戦闘はどうだろうか。

はぐれ者と言っていたが……だとするとここまで生き残れたのは強者の証。

相当の熟練者だろう。一人でも十分大丈夫そうだ……。

「俺も入れてもらいたいんだけど？」

振り向くと、高校生と思しき男がいた。学ラン姿でなびくように艶やかな髪。そして鋭い眼光。

「君の名前は？」

「俺の名前は『丸卿まるけい』って言うんだ。以後、よろしくー！」

「イチジク？ 珍しい名前だな……。」

「数字の九って書いて『イチジク』って読みだ。まあ他で見たことねえな。」

「なるほど。お前も同じだ。すんなり通すわけじゃない。ここを出る時までには結論を出す。」

「それまでは待つてくれ。」

「りょーかい。……いつとくが、俺は強えぞ？」

最後の間に眼光が俺と合った。一瞬ゾクツと寒気がした！

「お、お前……！」

「ま、俺もあんたの実力ぐらい分かるよ。んじゃ、俺はそろそろ行くわ。さつさと結論だせよ？」

九は去っていった。

「な、なんだあいつ！ 幽、どうするんだ？」

「まだ入れるかどうかは決められない。今後次第だ。それからでも遅くは無い。」

「影山さんはともかく、九の方が先じゃないか？ あいつ、おだてるとつげ上がるタイプだと思っぞ。」

「そう、だな。統率できそうにないやつはあまりな……。しかし、あいつも相当の実力者に違いない。逃すには惜しい人材だが、

グループ単位での行動で不憫ふびんがあるかどうか分からない。こうしてみると影山さんのほうが人望があるだろう。」

「だが、面倒な話だぞ。」

「ああ、そうだな。」

「キヤアアアアアツッ！！」

「ツッ！？」

「何かあつたんだ！」

声のもとへと向かうと一人の女性が階下を見て怯おびえている。その視線の先には……

「啓！？ なんてお前がここに……！！」

「んあ？ 幽にいい？」

啓が少し驚いた口調で言った。

「悪いが、ここは俺達の大事な場所なんだ。今すぐ出てってくれねえか？」

「ふざけるなツ！ 先にここを占拠したのは俺達だ！」

「いや、俺の方が先だ。ゾンビも全部俺達が始末したんだぜ？ 面倒だったらありやしねえ。」

なんだと……？ こいつがここの先客だったってか！？

「そっちが出てかねえなら、こっちから行くぜ？」

「そこまでだ。」

その声の主は……影山 日向のものだった。

「……残念だが、お前の相手は俺じゃない。こいつだ。」

啓の背後から何かが姿を現した。

「へへ、碯の新作『H? - Viltis ver.』！」

かなり早いぜ？」

若干人よりも大きい程度の感じだろうか。人型だが『H - Viltis』よりは小さい。

「コンパクトサイズだが、詰まってるもんはあいつとは違う。さあ、行け！」

合図とともに『H? - Viltis』が走り出した！

ここから見ても結構早いぞ！？

「おっと、ここから先は俺が相手だ。」

この声は……九！

手には濃い焦げ茶色の木刀が握られている。質が固そうだ。

スウィツと木刀の位置を落とし、迫る『H? - Viltis』の顎に向けて、

下から一気に突きあげた！ と、同時に向こうも拳を握りしめ、前へと突きだそうとしていた！

俺達は、新たな敵を前にしてもひるむことなく攻撃に移る九の動きに見とれっぱなしだった。

そして今、両者の攻撃が繰り出された後の光景を俺は啞然と見ている事しかできなかつた。

The only clue (前書き)

サブタイトル『The only clue / 唯一の手掛かり』

The only clue

スウィツと木刀の位置を落とし、迫る『H? - V i l t i s』の顎に向けて、

下から一気に突きあげた！ と、同時に向こうも拳を握りしめ、前へと突きだそうとしていた！

俺達は、新たな敵を前にしてもひるむことなく攻撃に移る九の動きに見とれっぱなしだった。

そして今、両者の攻撃が繰り出された後の光景を俺は啞然と見ている事しかできなかった。

キュツと床との摩擦音が響く。

初撃を与えたのは九だが、彼は無傷だった。そして大きく後退する。

一方『H? - V i l t i s』なるゾンビは初撃を顎に入れられ、且つ己の攻撃も空振り。

大きく態勢を崩し、床に伏す。

「案外脆かったな。」

言葉はただ静寂に響くだけだった。終始啞然と見ている人がほとんどだ。

「な、なあ、幽。……あいつの動き見たか？」

「あ、ああ……。」

「なんつー動体視力してんだよ。土壇場で踏み止まるなんてよ……。」

「あいつ、ひよっとすると俺より強いかもな。」

放った一言に皆が反応した。

「な、なんだって!？」

「幽、その話はマジなのか？」

「し、信じられん……あの少年も相当の実力者だったとは!」
周りも少しざわつき始めた。

さっきの言葉は率直な感想でしかないけど、敵対してみるともつと実感できるんだろうな。

味方のうちは重要戦力となりえるだろう。が、敵対するとなると、もはや野に放たれた虎同然。

一体どこまで強いんだ？ …… ちょっと聞いてみるか。

「九……お前、今何をした？」

「んー……簡単な事だ。拳を食らう前に一発入れて引き返したんだよ。」

「一発入れて……か。」

「一発入れて引き返す……という表現はたぶん正しいのだろう。」

キュツと音が鳴ったのは踏ん張りを利かせたからで、一撃入れてからは脚力で体ごと後ろに引いた……
といったところだろうか？

「幽、一体どういう事なんだ？」

小声で藤島が問う。俺も小声で答えた。

「恐らく、そのまんまだ。素早く顎に一発入れたところで足の力で体を後退させたんだ。」

だから無傷だし、向こうも空振りしたんだ。」

「そ、それって……難しいのか？」

「難しいなんてもんじゃない。土壇場だとセンスも必要になってくるし、なにより

体ごと後ろに引つ張るなんて芸当は相当の力がないと無理だぞ。」

「それじゃ、あの九つてやつは……。」

「ああ。あいつはこの中だけじゃなく、生存者の中でも屈指の実力者……！」

冷やかな目線でH? - V i e t n a m を見下ろす九。

興味が削がれた人形を見るような意欲の消失を思わせる光景。

だが、まだ勝負は決してはいない。後は、影山の戦いが問題だ……！

未だ影山と啓は向き合ったままで動かない。お互いに隙を窺っている

るのだろうか？

無音と思われた空間に暗がりの中から足音が響いてきた。こちらに近づく人影……。

ようやく光の当たるところに姿を現したのは碓はなだった。

「……まだ、研究の余地がありそうですね。それにしても一撃ですか……。」

虚空のような静けさに碓が言葉を紡つむいだ。

「コンパクトというアイディアは非実戦的だったようですね。」

「……………」

啓は無言のままだった。

その後のため息を吐いて碓の方へと向き直った。

「あれほど忠告しといたじゃねえか。コンパクトはこういうのは性しょうにあわねえって……………」

「あまり体格が大きいと潜伏場所の護衛にも使えませんからねえ。パワーだけを考えて

体格の縮小化も計算に入れましたが……………駄作だったようですね。」

「元々がでかすぎるんだって！ やっぱアレの方が絶対イケるぞ。」

「アレですか……………あんまり『超人もどき』を生み出すのは気が引けるんですがねえ。」

「それでも『もどき』止まりだろ？」

「……………まあ、今回はこういう結果だったということにしましょうか。それより、

どうしてまあこんなに囲まれているのか……………」

影山は未だに動かない。じっと見据えるだけ。二人相手では分が悪いと感じたのか、

それとも碓の実力を察したのか……………。

俺は止まっているエスカレーターを通じて1階へと降りた。

どうにも分が悪い。1階にいるのは影山と九。ここで大半の勢力をぶつけてでも止めなくては！

降りてきた俺の方を見て碯が言う。

「新堂幽君とはただならぬ縁がありそうですねえ。こうも短期間にお会いすることになるとは。」

「……そんなことはどうでもいい。どうしてあんたらがここに？」

「その質問には答えられませんねえ。しかし、こうして公にされてはもうここに戻る事もないでしょう。」

「俺達が安々と返すと思うか？」

「チームワークもできていない集団じゃとてもとても……捕えるなんて無理ですよ。」

そもそも1階に身を同じくしているのは君達3人だけじゃないですか。」

「まあ、3人だが……戦力じゃどうか。」

「自信が御有りならどうぞご自由に。ゲームスタートです。」

途端にバツと方向転換し、闇へと掛けてゆく碯。追おうとすると……

「待てよ、幽にい。」

「啓、邪魔をするならお前からでもいいんだぞ。」

「甘いよ幽にい。刺し違えてもって言われるとショックだったけどそうじゃなくて安心したよ。」

でも、こういう場面で情が出てちゃリーダーとしては格下だよ？」

「なんでも捕えて殺せばいいってわけじゃない。必要な時に最小限の害で留めておくだけだ。」

碯を殺せば現象は変わる。少なくとも妙な研究でここ一帯が被害を被ることなくなる！」

すると、顔つきを変えて啓は言った。

「何言ってるのさ……幽にい正気？」

「どういう意味だ？」

「そのまんま。俺達はここ一帯で活動しているのは事実だ。だけど、他のやつらは見境なく

気のままに各地でゾンビをばら撒いてるんだよ？　ここで俺達が死んでも何一つ変わらない。」

いや、これからもつとひどくなる。」

「他の研究者も手を伸ばしてきてるのは分かってる。『地這い鬼』もあれからどうなってるのかは分からないよ。だけど、そう延命できるような固体じゃないだろ?」

「巨体だからつてなめてるのかい? 貪欲なだけに地上全てを荒らすようなゾンビだよ?」

「そうだな。でも、俺達にはゾンビには持ってない力もある。…

…もうそこをどいてくれないか。

俺もこれ以上待つ気は無いんだ。」

「嫌だね!」

俺はこれ以上言葉は言わなかった。足と手が先に動き、啓の元へと、強打する場所へと俺を運んだ。

矛を薙ぐと啓も対向してきた。大きな爪で威力を殺す。啓は後退した。

「……あの時以来だね。こうして一戦交えるのは。」

「若干こつちが不利みたいだな……爪もかなり堅そうだ。」

「もうすっかりいい感じになってきてるよ。食らってみる?」

「お前にも無理だな!」

啓の方向へとダッシュ! 矛を薙ぐ構えも取って準備万端の姿勢だ!

啓が防御の姿勢を取る。これは大きなチャンスだ……!

予想通りのポイントで薙ぐ。脇腹を狙った一撃。向こうも予想通りと言う感じでジャストポイントでの防御。

しかし勢いをつけて吹っ飛ばすぐらいの力を込めただけあって、啓も薙ぐ方向へと吹っ飛んだ。

よし、回路は開かれた!

「勝負はここまでだ。じゃあな!」

啓に向かって終戦を告げる。

その後はただただ谿が向かった闇へと走るだけだった。

暗いな。電気は元々付いていないし、その日の光が届いていないからだろうか?

それにしてもここ、結構続いているな。ショッピングモールを甘く見ていたな。

そして奥に到達した。壁だ。食品売り場の壁側と言ったところか。魚類、肉類のトレイが並んでいる。距離を置いているが、若干の腐臭が鼻を刺す。

どこに逃げた、碯のやつ……。

見渡してみると出入り口がある。隅の方にポツンと扉がある。が、その扉は開かれたままだ。

碯の事だ。何か策があっても不思議じゃないから入口で待つ事にしよう。

だが、チンタラやつてる暇は無い。啓はふっ飛ばしたとはいえ強い肉体、精神力がある。

床に思い切りたたきつけられたところで復帰は時間の問題。もうこつちに来てるかもしれない。

用心に越したことは無いが、一応……少し離れた位置で見張るか。

「……………」

沈黙がただただ流れる。啓は一向に姿を現さない。……そういえば、

啓はこちらに来るとは限らない。

集団の方に目を向けたか？ いや、九の強さはやつも目にはしているはずだ。

それでも勝つ自信があったということか？ 考えづらいな。俺と互角と言った啓が、

九に自信ありげにして戦うなんてありえない。

となると、別か？ 例えばさっきの一線でのダメージが予想以上に大きかったとか……。

それも無いか。聖奈の血でも耐えに耐えきったんだ。あの程度、比べるとどうということもないだろう。

考えていると、開いたままの扉の奥から碯の姿が現れた。俺は碯だけに意識を向け、

矛で空を切る。音に気付いて碯がこちらを向く。すると、碯もこち

らに近づいてくる。

お互いに距離が開いた位置で立ち止る。

「ようやく1対1でやれる時が来たな。」

「クク、勝ったつもりですか？ 待ち伏せされているとは思えませんでした。……啓を突破されるとは。」

不敵な笑みを浮かべる裕。俺は動じずに続けた。

「何、殺しちやいないさ。」

「ほう、聖奈の血は使っていないんですか？」

「使わなくてもここまでこれた。」

「……啓君、後ろで待機してるなんて性質が悪いですよ。」

「何ッ!？」

急に不安に苛まれた。俺とした事が見落としていたというのか……？ 迂闊だった！

ガバツと後ろを振り向く。しかし、そこに啓の姿はなかった。ようやく思惑に気付いた時には遅かった。

「全く、隙だらけじゃないですかッ!」

振り向くとすでに裕との距離は近かった。そして俺は裕の拳を避けることができなかった。

拳が俺の腹部に埋もれるように凄い力で突きだされた！

クソ、やられた……! あんな浅はかな言動にハメられるなんて!

「ゲホツゲホツゲホツ! て、てめえ……!」

「まだまだ、ここまで来られたからにはもうただでは済まされませんよ!」

床に一気に崩れおちてしまった俺に強烈な蹴りを入れてくる!

ただひたすらに防御に徹するしかなかった。こいつ、人間なのか?

啓と同じぐらい力がこもってるのに……!

ついに俺はもうほとんど動けない状態にまで痛めつけられた。不意に首を掴まれ持ち上げられた。

裕はそのまま壁に向かって叩きつけるように投げた。

「ガフツ ガハツ」

「もうすっかり虫の息ですなえ。」

「ケホツケホツ お、お前……本当に人間なのか？」

「……ええ、人間ですとも。一目見た時からあなたには勝つ自信はありましたよ。」

あの丸くわいという少年はなかなか見所がありそうですねえ。」

「啓じゃ勝てねえ……だろうな。」

「面白い見解ですが、一理あると言っておきますか。野性的な彼に啓君ではまだ無理があるでしょうね。」

「今頃啓はどうなってるんだらうなあ。」

「啓君の心配ですか……。余裕ですね、幽君！」

ゴスツ 蹴りが入る。俺はもうもがくしかなかった。血も流れちまっただな。

鼻血もでてるし、口からも吐いちまったし……。

「そろそろ見せしめと行きますか。」

首を掴まれる。そしてそのまま床をただ引きずられてゆく。俺は動けなかった。

もう流れるがままにされるしかなかった……。

時間がゆっくりと感じる。裕が何も話さないからかもしれないが、死ぬ間際というのはこんな感じなのだろうか？

長い時が流れた感覚の後に、引きずりが止まった。裕が止まったのだ。

その後、頭をがっしりと掴まれ、体が持ち上がった。俺はもう瞼を閉じているので、

眼前の光景が全く見えない。が、聞こえてくるものは鮮明に伝わってきた。

「皆さん、これをご覧なさい！！」

裕が少しざわついていると思われた空間に思い切り言い放った。

どこからともなく聞こえてきていた激しく動く足音も止やんだ。視線をたくさん感じる。

次の声が聞こえてきた。大門さんの声だった。

「まさか……新堂幽か!？」

「幽! てめえ、幽に何しやがった!」
さらに藤島の声。次に裕が言った。

「どうやら1対1で決着をつけるようでしたが……所詮はこんなものですかね。」

「てめえ! ふっざけんな!！」

藤島の声が響く!

エスカレーターを下りてくる音。そしてこちらへと向かってくる足音。

「そんなに返してほしければどうぞ、そらッ!」

ブワッ この上へと持ちあがる感覚は……! 俺、投げ飛ばされているのか!?

「幽………ガハッ!」

床にたたきつけられるものかと思っていたが、俺は誰かにキャッチされたようだ。

だが、近くで聞こえてくるのは藤島の声じゃない。耳元で聞こえてきたのは

「感情で勝てるほど私は甘くないですよ。」

裕の声だった……! そして藤島の呻く声が聞こえてくる。

その後は床に下ろされた。クソ、藤島にまで手を出しやがって……!

「新堂君! いま助ける!」

この声は……影山さん!? ダメだ! 勢いだけで勝てる相手じゃないんだ!

「おっと、ここから先は通行禁止だ。」

啓の声。予想通りだったな。外傷もまだまだ浅いか……ダメージも軽そうだ。

「幽………って言ったな?」

この声は……九か。

「助けてやるからそこで待ってるよ。」

その後、すごい速さで駆け巡る音。走るスピードが速いのか？

「グホッ！」

啓か？ まさか九のやつ、あっさり啓を突破したっていうのか！？

「ちょうど向こうも目当てが幽君みたいですし、今回は退散させていただきますよ。啓君！」

「痛て……わかってるよ！」

裕が大きく俺から離れ、そのまま走る音が遠ざかる。啓の方も走って行ったようだ……。

「おい、幽！ しっかりしろ！」

九の声が耳元で響く。

「幽！」

次に藤島の声。俺も必死で声を出してみた。

「ゲホッ！ ……心配、するな。ちゃん、と……生きてるって。」

「もうボロボロじゃないか！ 急いで手当てしないと……！」

「運ぶから我慢しろよ！」

体位が大きく変わる。俺、背負われているのか。

ヤバイ、もうそろそろ意識が薄れて……ま、まだ俺にはやることかと、扉の場所を教えて調べさせないと……！

ダメだ、口が開かない。瞼が開かない。声も遠くなっていく。

「しっかりしろよ、幽！ 聖奈に手当てさせるからな！」

「……………！」

藤島が言う。九は黙ったままだ。視界が無いから周りが理解できない。

こうして身動きが取れずに徐々に闇に沈んでいくのは流石になれないな。

意識は九の背中の上から離れて行った……。黒い絶望は再度、俺を苛む結果となって事は終結した。

In the door (前書き)

サブタイトル『In the door / 扉の奥』

「しっかりとしろよ、幽！ 聖奈に手当てさせるからな！」
「……………」

藤島が言う。九は黙ったままだ。視界が無いから周りが理解できない。
こうして身動きが取れずに徐々に闇に沈んでいくのは流石になれないな。

意識は九の背中の上から離れて行った……。黒い絶望は再度、俺を苛む結果となつて事は終結した。

「なんだ、これ……。」「
気を失っている自分の姿が見える。これってまさか……

「俺、死んでる!?!」
咳いた。確かに咳いたはずなのだ。が、響かない。誰の耳にも通らない。

ただ、眠るように床についている自分の姿と、それを取り囲む人達。そんな光景が見える。どうということなんだ……………!?!

しかし、死ぬという感覚じゃない気がする。なぜなら、今の俺には『自分』が見えている。

それは死体と呼べる状態にまで陥つたものではなく、呼吸をしている。今の俺と同じ拍で……………。

不意に体が闇を向く。暗がりの方角を。

そう、あの扉へと続く方角だ。フラフラと覚束ない動きだ。が、

これは誰かが視認できそうにもないな。障害物をすり抜ける感覚も驚いた。

思わず目を瞑る。が、痛みも感触もない。

……………これは、間違いないだろう。今俺が体験しているのはまぎれも

なく『幽体離脱』。

不思議な状況にもかかわらず、それに対する疑問は不思議と浮かばなかった。

そして、いよいよ扉へと侵入。

階段が続いている。下へ下へと続く長い階段。その先には、機会と屈強なセキュリティが

施されていてそうな扉があった。霊体が勝手にすり抜ける。その先には何かの資料をまとめた書類が何枚もあった。ここで何か行われているのだろうか？

更に続く扉。奥を見ると、思いもよらぬ光景があった。

……培養機だ。数々の培養機。液が充満しているものもあれば、中身が空の物まで。

ただ、液が入っていても中で培養されているモノが小型だ。

後々始末しなくてはならないのだろうか？ 培養機から脱出できる力を身に付けた時、

こいつらは……俺達にとって脅威になるのか？ 分からない。ただ、この扉……

知能なしで突破できそうにない。力づくでは無理がある厚みだ。

人間でもこのパスワードでロックが外れる扉をノーヒントで解錠するのは不可能だろう。

そして、その先にも続く扉。この扉だけはなんだが凄く頑丈な作りになっている。

パスワードの入力も今までは数字だったのに対して、アルファベット式になっている。

その先は……管理室のような場所になっていた。いくつかまた資料が……ん、これは？

『The First Key: 6047

The Second Key: 3745

The third Key: myhandsishazar

maker

The Warning door Key: 78665-33
267-08931-43889-01029

被検体の内容は規定の培養機で行うこと。

生体検査の基準を満たした個体のみを指定された培養機に移すこと。

基準を通過した個体は写された培養機の中でのみ投薬を用いること。

Viltisの薬物調整においては《人型》のみを採用し、体調2mを上回ることが予測される場合は、

大型の培養機の申請及び通過した場合のみ許可する。

尚、H系列及びV系統の個体専用使用する培養機は必ず確保すること。』

これは……扉の解除キーか？ その下には文章が書かれてある。間違いない、あいつらは黒だ。

この先の扉が最後までいだな。行ってみよう……

越えると、大きな培養機があった。

3つ並んでいる。君に左のものは空っぽだ。

真ん中は人型のような。表示には『Mother Viltis』と書いてある。

右は『V-viltis』の表示。中は人型。だが、隣とは雰囲気が違う。

もう、熟しているような不安にさせる感覚を感じた。

近くで見るとさらにぞつとした。この個体……薄く瞼を開けている。そして

目を動かしている……！ こいつ、もう活動できるのか！！

驚愕していると、視界が遠のいていく。徐々に引き返される視界、引っ張られる体……。

な、何がどうなってんだ……！？

……体中が軋きしむように痛みとなつて響く。
なんて様だ。これじゃ、もう皆の足手まといにしかならない……よ
な。

言いたい事も言えず、あつさり意識を失つちまうなんて……俺、
最低だ。

「う、うう……」

「ゆ、幽？」

「……藤島か。」

「皆、幽が目覚めたぞ！」

「おお、ようやく目を覚ましたか！」

「幽にイ！」

「やーっとお目覚めか。」

「私も心配していたが、一命は取り留めたようだな。」

「皆、すまなかった。色々と迷惑かけて……。」

「まあ、気にすんなよ、幽。厄介なやつらも去っていったんだ。も

う迷いの種なんてどこにもねえさ。」

「九。お前いちひくなれなれしすぎじゃねえか？ 俺達に会ってからまだ間

もないだろう。」

「あーもー分かった。分かってるって、藤島。」

こいつら、いつの間にかここまでの中を築いたんだ？ 眠っている間

に色々あったみたいだな。

「幽にイ、大丈夫？」

「ん？ ああ、まだ体が痛むけど、歩けそうだし、なんとかかなりそ

う。」

「良かった……ッ！ 聖奈、幽にいが眠っちゃうから心配で……。」

「聖奈。俺はお前を置き去りになんて絶対しないから、安心してもいいんだぞ?」

気休め程度の言葉しかかけてやれないけど、今はこれが一番良いと思う。

今皆が求めているのは休める場所なんだ。

「……6047か。」

「それって何の数字だ、幽?」

「何の数字って、これは………あぁッ!」

「ど、どうした?」

「皆、大事な話があるんだ!」

俺は皆に呼びかけた。何でボケっとしていたんだ俺は!

「どうしたっていうんだ? 幽。」

「扉だ! 碓のやつ。ここの地下にゾンビの培養機をいくつも置いている! このままじゃ、

地上に厄介なやつらがバラ撒かれることになる。俺達で止めるんだ、培養機を壊すぞ!」

「ホントに厄介な置き土産しやがって………碓の野郎!」

「焦りは禁物だ、新堂君。目覚めたばかりの体では不憫が多いだろう。」

ここはできる限り万全な態勢で臨むべきだ。」

藤島が憤る一方、影山さんは言った。確かに、焦ってこのまま特攻を掛けるのは……死につながるかもしれない。

夢か現か。幽体離脱のあの光景が真実なら、最深部の培養機に潜むあのゾンビが特に危険だ。

だが、やれるなら俺達の手でやらなきゃならない。被害が出る前に始末しないと……!

「幽が体調悪そうにしてるから今は休んで待つてやるが、後1時間。それ以上は待てない。」

幽が行けないなら俺達だけで行く事にする。いいな?」

「あ、ああ。」

九の案を俺は飲んだ。動けないままだから体調を整えるのは良い策だ。いちじく

だが、いつまでも先延ばしにできる問題ではない。これが賢明な策なのだろう。

……ソクソクと嫌な感じがする。暗がりの奥から漂う緊迫する空気。このまま、1時間後でいいのか？ 扉の向こうへ足を踏み入れてよいか？

不安が尽きないまま、あっという間に1時間は経過した。

Observers of occurrence Scene . 1 (前書き)

サブタイトル『Observers of occurrence

/ 観測者の出来事』

『Scene . 1 / 回想1』

江田 裕^{はろ}視^し点^{てん}& amp ; 番^{ばん}外^{がい}編^{へん}です。

前回の続きを読みたい方は『Trap of logic bom

b』からどうぞ。

「新事実……ですと？」

「ああ。いよいよ本格的に動くみたいだ。」

「なるほど、そうですね。クク、もう動くとはねえ。上も相当ウズウズしていることでしょうね。」

「まったくだ。……覚悟はできてるか？ 江田 裕。」

「真剣な面持ちは当然の場だが、彼だけは不敵な笑みを忘れなかった。改まってどうしたのです？ 我々はこういう……クク、非常事態の時に如何様にも、

行動の幅を増やせる立場にいるというのに。岬君。」

クク、こういう非常時に人ってのはどうしてこう簡単に素を浮かび上がらすのだろうか。

全ての人間は必ず非常時には化けの皮を剥がす。私はそのような人々を見てきた。

嘗ての私はとてもつまらない事だと思っていたが、見てみると面白い。

……いや、興味深いというべきでしょうか。どちらにしろ見て飽きませんねえ、これは。

いつもはカメラ越しでしたが……。自然と笑みつてのは出てしまっみたいですね。

毎回思う事は、笑みを堪えるというのはかなり辛いということですか……。

「では、私も改まったほうがよろしいでしょうかね？ 坂木、岬君。」

「……君に言われるとこう、背中がむずむずと来るよ。」

「クク、すみません。こういうの、ガラではないものでして。」

「まったく、君らしいな。用件はこのプリントを見てくれ。僕もこれを隈なく見渡して、

対策を練るよ。後、これを見た後……できれば君の意見も聴かせてほしいな。」

「気が乗った時にでも話して差し上げますよ。岬君。」

「そうか。では、失礼した。」

ドアを開けて部屋は彼一人となった。

「フウ、それにしてもまたプリントですか……。」

作業用の台の隅すみに重ねられたプリントの数々を見て裕は嘆息した。

「通知ぐらい直じかでやってもらいたいものですねえ。」

愚痴をいれつつも、プリントを眺めた。つまらなさそうな目線で文字の列を眺める。

「？ これは？」

プリントには見間違いを覚えるような字列があった。

『人体におけるV i l t i s の効果』

「おかしいですねえ。『被検体』じゃない……？」

被検体じゃないとなると、生身の人間ってことですか？ ……クク、

機会があるなら是非見てみたい！

さてと、続きを読まなくては。

『V i l t i s 使用時における周囲の人体における変化とその効果』

堅苦しい文面はいつ見ても堅い。もう少し、ソフトな文字列にはならないんですか？

『V i l t i s の被検体とは別に人体にも危機的状況において、新たな症状が』

……せめて、坂木氏が訪ねてきたときぐらいは噛み砕いた説明があつてもよいかもしれませんね。

『今回判明した症状については今後、更なる解明についての研究を早急に進める方針を』

見るに堪えない文面。これも昨日見たプリントと同じで、ほとんど

意味なしでしょうに……。すると、碯の目がとまった。『尚、判明した症状は以下の通りである。』

- 1．人体の体力面での大幅な向上
- 2．人体の覚醒

詳細は別途にて記載または公開するものとする。

Team・Villitis

』

「ククク、面白そうですね……！」
熱心に読み返すが、間違いではない。まぎれもなく書かれていることは事実。

すると、ドアがノックされた。

「……岬君？」

「ああ。中に入れてもらえないか？」

「いいですよ。」

ドアが開かれる。せっかちな男だと思って腕時計を見たが、別れてから30分も経過していた。

「意見は固まったか？ 碯。」

「私の意見頼りですか？ それでいいのですか？」

「心配するな。口外しないさ。」

「まあ、知り合ってからそう短い仲でもありませんし、良いでしょう。」

「すまない。恩に着る。」

「クク、詳細はプリントには書かれてませんが、いくつか予想できます。」

まず、人体って表現でしょうかね。」

「被検体とは別だってことは僕にも分ったよ。」

「ほう、……次に『周囲の人体』というところでしょうか。範囲は

かなり限定されるようですね。

次に肝心な所です。『危機的状況』って箇所、覚えてますか？」

「あ、ああ。使用した時のことか？ 曖昧な事しか書かれていなか
つたが……。」

「なにはともあれ、危機的状況に追い込まれないと症状はでないみ
たいですねえ。」

最後に、『今後、更なる解明』ってところですよ。上も明確には把
握しきれていないみたいですね。」

「なるほど、いつも君は頭が冴えるな。的確に突いてくる。」

「クク、いつでも冴えていないと上に飲み込まれますよ？」

「はは、そう思うとひやひやするな。……それと、連絡事項だ。」

『午後9時15分にて、大講義室で今回の件における詳細を公開』。
出席の有無は、

研究者の都合上有無は問わないし、公開途中での早退、途中入場も
OKとのことだ。」

「分かりました。通達、ご苦労でしたね。」

「ハハハ、君の意見が聴けるなら安いもんさ。それじゃ、僕はこの
辺で。」

「はい、御苦労様でした……。」

岬がドアを通り、また彼一人の空間となった。

「……これは、上を出し抜ける……いや、上層部よりも一歩リード
できるかもしれないね。」

万遍の笑みが碇の顔に浮かび上がった。これは爽快だ！

今回はなかなか面白くなってきましたねえ。クク、私は慎重に立ち
回る準備でもしなくては……。

しかし、この成果を公で使えないとは。……もっと、国単位で見え
る隙があれば、

この均衡に終止符を打ち、
まだ見ぬ未曾有の領域に踏み込めそうなんですがねえ……。

現在の時刻 8 時 3 4 分。現在の日時 6 月 1 8 日。

Observers of occurrence Scene・2 (前書き)

サブタイトル『Observers of occurrence

／ 観測者の出来事』

『Scene・2 / 回想2』

江田 裕^{こいしだ}視^は点^ん& amp; 番^は外^ん編^{ぱん}です。

事実が組織内で公開されるまでの間にしっかりとプランを練っておきますか。

……やはり、ここまでViltisについて知ってしまうと否が応でも単独行動を取らざるを得ない。

複数犯だと、裏切られる可能性も出てくるし、何より計画を丸ごと取られるなんてことも考えられますしね。

Viltisを使えば始末も用意。生かしたままで何も語らぬ人形を作り上げる事は可能ですからねえ。

……とはいっても、全ての基盤は今回の公開にかかっています。

考慮を重ねたうえで、穴一つ見落とすことなく……それくらいの完成度で臨みたいですね。

今の私にできる事は自分自身の事だけということになりますか。

とはいっても、最初からこういう事については念のために前もって準備は欠かさなかったのだから。

ほとんどはもう準備済みなんですけどね。

居ても立ってもいらなくなった裕は公開予定時間よりも早く移動を始めた。

そして、いつの間にかやや頑丈そうな扉の中へと足を運んでいた。

「江田氏か。」

「これはこれは、細川氏。久しいですね。」

「まったく。江田氏も席取りか？」

「……ええ。私のポジションは不動ですから。」

「なるほどね。そこもいいが、今回はしっかりメモ取れるような位置の方がよくないか？」

「このポジション……何故か落ち着くんですよ。今もこうしてそわそわときているのに、」

ここ以外の場所だとしても耐えられそうにありませんからね。」
前から3段目。そして端側の机。ここが私のお気に入りポジション
なんです。

妙に落ち着く感覚が神経を冴え研がせる気がするんですよ。

暫くして、ようやく公開が始まった。

我々のような、下層部の前に上層部らしき男が立って、説明を始めた。

「まず、人体の体力面での向上の部分だが、ここは
ただひたすらにメモを埋めてゆく。」

「ゾンビ化した被験者も同じく大幅な体力向上が確認されているが、
人間にもその効果があったと報告がある。周囲で限られた条件を満
たせば生存者にも効能があるが、

こちらもまだ全ては把握しきれていないので、それについては追々
公開の機会を設ける。」

ゾンビ化した個体に比べると見劣りするが、それでも向上効果は登
用可能なレベルだろうと

すでに憶測も立っていて、今後の被検体にはゾンビではなく生身の
人間としての被検体も

実験する機会を設ける側に意見が偏っていて、約2週間後に控えて
いる。」

やはり、実験に関しては上層部が勝手にきめてしまっている事なん
ですね……。

「次に、人体の覚醒の件についてだが、……こちらは先ほどのもの
よりもかなり発生条件、

及びその効能についてこの場で明確に証明できる物が少なく、今後
も実験を重ね、

検証していかないと証明は困難である。しかし、ゾンビ化していな

い生身の人間が、
危機的状况において覚醒は起こり、様々な異常を引き起こすとの声もある。

これに関しては体力面の向上よりも発生頻度も少なく、今後の研究がカギとなるだろう。」

ドンピシャですか。危機的状况。

さて、早くその異常とやらを公開してもらいたいですね。

「能力は完全な検証ではなく、信憑性も薄い」が『治癒』、『斥力』、『ホルターガイスト』、『超常現象』等々、

確認されているだけで十数種類に上っている。能力の詳細だが

「

部屋に帰ってメモを読み返す。覚醒の能力が多様すぎて……嫌になりますね。

治癒はゾンビ化の進行妨害。

斥力はゾンビの苦手な成分を常時放出する。

超常現象はその名の通り、摩訶不思議な現象を起こす。

透視は若干だが未来線を読む（らしい）。

器官強化は視力聴覚嗅覚等々五感の機能を引き上げる。

導話術はテレパシー能力により、脳で直接コンタクトが取れる。

色々のアレすぎる……こんな能力の数々、対処法なんて皆無に等しい。

「なんなんですか、一体これは……。」

こればかりは鵜呑みにできないです。

……そして、これらには大きな問題点がある。生きた人間にしか使

えないというところだ。

これはゾンビにはできない。しかし、ゾンビへの影響で生きた人間のみが使える。

それなりの条件がそろって初めて使えるみたいですが、厄介ですね。まさか、こんな事実を知る事になるうとは……。

その2週間後、本当に実験は行われ、恙無く終了した。さらに衝撃的な告発が上層部からあった。

大規模な実験が近い未来で行う事が可能になったそう。その規模とは……………

現在6月18日10時49分。大規模な実験への参加を自主的に磋が乗り出そうと決心した瞬間でもあった。

そして、とある被検体が本格的な活動を示し始めたこの組織内でも奇跡的な出来事も、

同時に起こり始めていた。この時間帯が大きな分岐となったのだ。た。

O b s e r v e r s o f o c c u r r e n c e S c e n e . 3 (前書き)

サブタイトル『Observers of occurrence

／ 観測者の出来事』

『Scene . 3 / 回想3』

江田 裕^{こいしだ}視点& amp ; 番外編^{はなは}です。

後日、この組織の関係者全員にとある告知が行われた。

今日7月4日はその告知がされてから初日だが、早々に皆が惑う意外な雰囲気施設内には充満していた。

それは周りの声を聞いても以前との差異は明らかであった。

「聞いたか、今回の告知。どうやら上は本気らしいぞ。」

「大規模なものだとは聞いていたが……いよいよだな。」

「合点がいかないんだがな、下で働く者としては……。上層部の事だから、きつと策はあるんだろ？」

「策だと？」

「ここまで大規模だと1組織の権力、財力じゃとてもじゃないが難があるとは思わないか？」

「そりゃそうだが……ゾンビの実験場なんて前々から確保してるし、それで十分じゃないのか？」

「監察院所属じゃないなら無理もないか……。実は、ゾンビの実験つてのは今の今まで小規模だったんだ。

単体ずつ行うのが普通だったし、俺も今後もそうだと思ってた。最近になつてようやく

外界に放つようになつたんだぜ？ おかげでまだ外界への反応についてのレポートは全然埋まらん。」

「なるほど。実態はそういうものだったのか。と、いうことは上もまだ全てを知っているわけじゃないんだな？」

「恐らくな。ただ、現段階で全ての情報は上に持つていくことになつてるからな。

知ってる事実の違いは無いにしろ、俺たちじゃまだそれに触れることすら難しいってことだな。」

「そして、ついに上もここまで大規模なものにしたってわけか。」

「ああ。これに参加するかどうかは置いておいても、これは異様な

告知にしか見えんな。」

通路を歩いていると、こういう会話もあり情報はますます多くなつた。

最初は迂闊には動きたくなかったが、……決心がつきましたよ。前々から練っていたプランとは別件と言う事になりますが……新たな計画でも練りますか。

それは置いておいて……告知がその通りなら、早期に参加を希望しなくては！

次の瞬間、通路を曲がった先に坂木氏に出会った。

「岬君ですか。奇遇ですね。」

「おお、碇君。聞いてくれ、実は僕、今回の告知を聞いて、参加希望を試みようと思うんだ。」

「……なんですと？」

「だから、決心したんだ。今回僕は告知通りなら参加希望をする。」

「……それは本当ですかッ!？」

「え、あ、ああ。もしかして、君も？」

「ええ、私も今回はこの目で確かめてみたいんですよ。」
百聞は一見に如かず。しっかり見届けてこそわかることもあるんですよ。

「僕も今から書類を提出しようとしていたところだ。」

「なら、私も提出しますか。定員が決まっているらしいですからね。」

「

「なら、僕は先に行くてくるよ。」

「はい、お互いに頑張りましょうね。」

ここで別れた後はしっかり承諾書を提出した。

部屋に戻って、複雑な心境にとらわれた。

「まさか、岬君が……。」

参加することになるとはね。

いよいよ本格的になってきましたね。分岐点は近そうですね。

ゾンビ研究を取り、孤独に生きるか……仲間を取り、集^くめて事を成すか……。

岬君。君は優秀な性質の持ち主です。誰とでも頼り、求め、信じあえるその心は評価に値します。

人間としてのあり方は道徳的で、きっと良い人間関係を作れるでしょう。

しかし、ゾンビ研究員としては三流以下。鵜^う呑みにするがままに過ぎているうちは絶対に

昇格などありえないし、……下手をすれば喰^くられて終わる。

そんな彼とはここで初めて付き合いを起こした人物でもあるんだがね。

長い付き合いだから情も起こりますが……今回だけはあまり参加させたくなかったですね。

付き合いが長く、携^たわっていたからこそ彼でも理解できると思っていましたが、彼はまだ甘^{あま}かった……。

岬君。あなた、このままでは……死んでしまうかもしれませんか？

翌日、7月5日。裕はとある男と向かい合^あって真剣な面持ちでいた。

「さて、どこから話した方がいい？」

「ふふ、最初から隈なくお願いします。私も、あなたの報告を心待ちにしていたのですから。」

「まったく、お前は毎回言う事が決まっているよ。江田裕君。」

「貴方が言いますか。ふふ、お互い様ですよ。風見^{かざみ} 恵亮君。」

「はあ……では、話すぞ。」

裕は予め用意してあるペンとメモ帳を手を取った。

「まず、被検体の中でも最も特別な個体と認定された女の子。それ

が『夜霧^{やぎり} 美鈴^{みれい}』。

通称は『エイチティー H T - ゼロゼロワン 0 0 1』で、今までの被検体の中でも

抜群たくいまれの生命力、精神力。それから……
類たぐいまれ 稀なる覚醒を成した一人だ。」

「前々から目をつけてはいたんですけどね。研究資料が1日で出来上がってしまいそうです。」

「まったく。下手な情報は流せないから、確定情報だけを上層部に回している。」

「と、いうことは今一番情報を持っているのは上層部じゃなく監視している院の人間ってことになりますね。」

「ああ。そうなるな。今は大分理性も感情も抑えていて、安定している。」

不安定な頃は監視している側が危険にさらされていたが、今となつては過去の話だ。

能力もコントロールを利かせる事が出来るようになってきていてな私としても鼻が高い。が、これをどう理論づけるかが問題なんだ。

モタモタしていると上層部から文句が来るし、証拠不十分で報告すると

何かあつた時はこちらの責任にもなりかねん。割り切ってもらえると幸いなんだがな……。」

「確かに、これは割り切る以外どうしようもないですね。同意書にでも書かせればよいでしょうに。」

「何と言えば良い?」

「そうですねえ。『もし、同意書に記入しなかった時は我々も全てにおいて保証はしません』と

言えば向こうも渋々聞いてくれますよ。なにせ、H T - 0 0 1ですからねえ。

いざとなれば、あえて不安定にさせるもよし、そういう仕草をさせるもよし。

彼女を使えば何通りでも圧力のかけ方はありますから書かせるぐらいはどうとでもなるでしょう。」

「上が、黙っちゃいないぞ。」

「そこもまあ、圧力で。」

「君はどこまでSなんだ？」

「クク、失敬な。これでも最良の案を練っているじゃないですか。安全かつ、

身体的には無傷で済むんですから。別にHT-001なら能力で暴走させてもよいんですよ？」

「そ、それは困るよ……ッ！」

「でしょう？ なら、仕方ありません。ただ、向こうからすんなり書いてくれるなら、

何事もなく終了するので、そちらもできる限りそっちに持ち込む方法は考えておいてくださいね。」

「ああ。それじゃ、俺はこの辺で失礼するよ。」

「ええ、また何かあったら教えてくださいね。」

「了解……。」

『HT-001……彼女は今、何をしているんでしょうっ。』
眠りにつく間際にふと、そう思った。

しかし、思いは虚しく答えが返ってくるはずもなかった。そのまま
裕は眠りに着いた。

高ぶるHT-001への好奇心を心の内に秘めながら……
その一方で、

「……………！」

ビクッと体を反応させる。

「どうかしたか？」

風見の声が耳に伝わる。

「……なんでも、ない。」

「そうか。……明日、能力を使ってもらいたいんだが、良いかな？」

「明日で、いいのね？」

「ああ。頼むよ。」

「分かった。」

「それじゃ、よろしくな。HT-001。」

ざらつく感触。また、その呼び名なのか。

「……………」

7月5日の午後11時05分。風間と話をした少女は、その夜、ひたむきにその名に苛まれ、
ようやく眠りに着いたのであった。

O b s e r v e r s o f o c c u r r e n c e S c e n e . 4 (前書き)

サブタイトル『Observers of occurrence

/ 観測者の出来事』

『Scene . 4 / 回想4』

碓視点です。

『尚、定員は最小4名、最大7名とし、規定外の場合は』

告知は徐々に広まり、認知度を高めていくが……

「依然として『個人の認識』と言うのは強く反映されてくるものですねえ。」

「由々しき問題と言うべきか、はたまた都合が良いというべきか……。」

岬が担当している室内に二人は席を並べていた。空間には二人のみである。

「ん、今回はどちらにしても変化は無いと思うんですがねえ。」

「変化、というと？」

「岬君の二通りに分けても大差は無いってことですよ。『由々しき問題』と取るなら、

我々以外の意識が甘いという意味合いに。『都合が良い』と読んでも他の昇格への願望意識が

あまりに低い事が原因。結果的に得をするのは一歩先へと足を着く私達ってことです。」

「急な告知だからまだ申請が少ないだけじゃないのか？」

「クク、認知度が高まったというのは先述の通りですが、『個人の認識』……これが原因でしょうね。」

今回の告知を『益』か『無益』と分けるなら、必ず人間と言うのはどちらかに分類されます。

どちらを選んでも『選んだ側』への『贖罪』が生じることには間違いありません。

これは人間の心理と言うべきでしょうかね。」

「贖罪だと？」

「そうです。例えば、ゲームソフトを1本買いたい時、店頭で興味

がわいた物が2本ありました。

貴方ならどちらを取ります?」

「そうだな……その場のノリとかジャンルで決めると思う。」

「ノリやジャンルでどちらか1本を買ったとすると、もう1本はどうします……?」

「ふむ、その時だと諦めることになるな。」

「そうですね。片方を手に入れてしまうと『もう片方』は諦めなくてはならないのです。」

この微妙な『差』こそがさきほどの話題の根本こんぽんと言っても過言かじごではないわけです。」

「ほう。なるほどな。」

「これが後にその人『個人の認識』となり、あの時買わなかった事から『には劣る』等という

憶測が立てられてしまう……。そうでなくとも両方を経験するまでは『自分の勘』が判断材料の全て

ですから、結果的にこういう意識を生んでしまうってわけです。まあ、ゲームだと買ったソフトが

あまりにも詰まらなかつたりするとそれもスタート地点からやり直しになるわけですがね。

ま、これ以上はどうでもよい事でしたね（もちろんそのソフトへの認識は生まれますが……）。」

「それが、結果として今回の告知のように人々を二分したというわけか。

例えばそのままだな（ただ、碓君の説明だと買ったソフトが確定でとても面白かった場合に限られるが）。」

「そういうことです。色々な要因を考えた結果で諦めた方もいるようです。

まだ私と君二人しか参加志望がないというのは些ちかかもったいない気がしますね。」

「定員の幅の狭さも今回はどうかと僕も思っていたが……。」

「ここには約200人弱の方（上層部含む）が出入りしていると聞いてましたがねえ。」

ゾンビの事となると現状維持が鉄則のように皆の考え方が固まってきている気がしますよ。」

「奥手が結果的に最も安全ってわけだが、それでは緊急事態の時に対処しきれない部分も多い。」

僕はそんな状況を恐れてここに来たわけだが……。」

「貴方は情報収集が目的ですか。私もそうですが、今回は純粹に『観測者』として

参加してもよいと思うんですよ。何しろ大物が見れるんですからねえ、ククク。」

考えただけで笑いがこぼれてしまう。一体いつになったらめぐり合えるのだろうか！

「大物……か。」

深刻な表情になる坂木氏。軽い心配性の彼がホント、よくこれに参加なんてしたものですよ。

「大丈夫ですって。ただのゾンビ開発、研究、試作品考慮はずがないでしょう。」

小数精鋭でしかできない。つまり、極秘に近い事が実験できるんですよ？

これを知らずして何が研究者ですか。ここで引き気味になるのはあまり良いとは思えませんよ。」

「そう、だな。すまない。少々深く考えすぎた。」

「ククク、岬君。参加が確定した時は大いに喜んでくださいね。なにしろ、

あのH T - 0 0 1エイチティー - ゼロゼロロウ、1が押めるんですからねえ……ッ！」

「む、HT-001？」

少し、声のボリュームを落として自慢げに裕は言った。

「ああ、知らなくても当然でしたね。詳細はこれからの調査に全てがかかっていますよが、

ゾンビ研究における 賜たまもの と呼ぶべき存在で、『覚醒』した少女のことですよッ！」

「な、なんだと……。」

「おまけに個体としても今はとても安定していて、その能力も健在……。」

能力の大まかな事は聞きましたね？ 告知次第では大幅にその事実
に迫れるわけです。」

「……これをレポートとして仕上げれば、昇格の可能性も」

「夢ではありませんよ。間違いなく今以上の待遇は確定ですね。」

最も、そのためには参加者の誰よりも、関係者の誰よりも先に事実
を突き止め、

それを確実なものとしなければなりません……。。

そして後日、参加希望者が新規に3名。

参加者に体験してもらった内容も確定した。が、内容は公開ではなく、
参加確定した者にだけ秘密裏に

プリントで通知された。

『調査内容はゾンビの各個体の状態と前回と比較してみられた変化
及び』

新規に調査対象に認定した【HT-001】の調査、分析と健康値
及び覚醒能力の全種把握を目標とする。』

「いよいよチャンス到来か。」

ロビーで坂木氏が暖かい缶コーヒーを啜すすりながらボヤクのを隣で
碇すが聞いていた。

「期限は明後日まででしたね。今回新規に3人も入りましたし、大
方条件はクリア……。」

早期に書類を提出した私達はもう確定らしいですからね。もう安泰
ですよ。」

「だからこそ、だ。上手くいきすぎている気がしてな。」

「甘いですねえ、岬君。上手くいきすぎているなら、流れに乗っていくべきなんです。」

「躓くまでいくらでも進むべきなんですよ。」

「そうなのか？」

「現に私は上からもそこそこ良い評価を頂いてるんですから、進まないメリットなんて

考える必要すらない。せめて、私の地位まで辿りついてから言うんですよ。そういうことは。」

「如何せん、今回があまりにも大事だったものでな……。」

「普通に今回のノルマをこなそうとするのが『奥手』思考の証。ノルマを越えて尚且つ、

より高い地位と評価を求めて深入りしてこそ『勝者』の証です。」

「そうだな。……共に頑張ろう。裕君。」

「おや、今回は協力しようかと思ったのですがねえ？」

「それでお前はいいのか？ 迷惑じゃないのか？」

「長い付き合いですから、協力ぐらいしてあげますよ？ 共同で仕

上げましょう。研究成果を……ね。」

「……本当にすまない。いつも手を煩わせているのは僕の方なのにな。」

「クク、これが『友情』ってやつですかね？ 私には似合わないといつも言われるんですけどねえ。」

「ハハ、本当に似合っていないよ、その言葉。……ありがとう、裕君。」

「当日、頑張りましたよ。私はそろそろ自分の持ち場に戻りますね。」

「分かった。また暇があったらその時にでも。」

そして、刻々と期限は近付き、硬直状態のまま告知のメ切りが過ぎた。研修日は7月23日と言う具合に確定し、派遣する側も念入りな準備

備を開始し始め、派遣される側の監察院所属の人間もゾンビへの管理に余念が無くなっていた。

そして当日が訪れた。

「おはようございます、岬君。」

「おお、裕君。おはよう。」

「ちゃんと出来上がりしましたよ。これをどうぞ……。」「
裕が錠剤じやうざいの入った小さな包つつみとコンパクトサイズの小箱を手渡す。
が、岬はそれを疑問の念を含めて見つめ続けた。

「……ほら、対ゾンビ化防止の錠剤ですよ。忘れたんですか？ ちゃんと用意しました。」

何かあった場合はそれで応急処置をしてください。最悪ゾンビ化を防ぐ事が出来ます。

錠剤の方が対ゾンビ化の錠剤『エヌ アール ゼロ ツー ワン』
N R - 0 2 1』で、
そちらの小箱には注射器が入ってます。液を詰めたケースも用意してありますので

非常時に使ってください。注射器の方は鎮痛剤ちんつうざいですけどね。」

「すまない。恩に着る。……できれば使わずに終わってほしいものだな。」

「どうにも貴方が心配性で困っていると思ったのでね。それでもう安心でしょう？」

「レポートを上げるためだ。ここで引くわけには」

「その意気ですよ。気持ちが悪ければ大概たいがいは乗り切れます。ポジティブに行きましょうね。」

「ああ……！」

他の面々も揃い、ようやく監察院へと足を踏み入れる事が出来た。

監察院も意外と広く、研究書類を纏める大きな事務のスペース。そして大量のゾンビを個体感覚で観察できる大牢館と名がつけられた空間。

院内の人数をはるかに超える個室の量。一斉にゾンビを沈められるように整った設備と

研究と実験のために貯蓄された薬剤がある倉庫。どこをとつてもこれほどの設備は他では見れない。

「おお、やっと来たか。」

「調査を受け持った江田 裕です。院への出入りを許可していただきたいのですが。」

「上からの許可は下りているよ。好きな個室を使ってくれ。荷物をまとめ次第、

さっそく大牢館に案内するからゆっくり準備を済ませてくれ。」
院の人間は以外にも快く対応してくれた。

個室について、大きな荷物を肩からおろす。裕は用意した小バツクにレポート用紙、筆記用具、

それから……錠剤と注射器セットを詰めた。後は飲料水程度で十分だろう。

「やっと、ここまで辿りつけましたか……。」

HT-001に対する研究意欲が十二分に表れた笑みを浮かべた。決して邪気があるものでなく、

純粹な好奇心に心が躍った稚児のような気持ちと同類の笑み。

それは研究者として成功を収めたに等しいほど裕の心を加速的に満たした。

小バツクを片手に個室を出ると、ちょうど佐々木氏も部屋を出たところだった。

互いに無言だったが、両者とも意図は理解していた。

『二人で、一つのレポートを纏める事が出来ればきつと成功を収め

る事が出来る』

その思いが裕と岬を結束けつそくさせた。

7月23日 8時35分 大牢館へ踏み入れようとする5名がロビーに集まった。

内の2名は情報を共有する参謀を企てている。

残りの3名のうち1名……成功、情報を求めている人物が1名ロビーで皆が真剣な面持ちの中、誰にも気づかれないう程度の微笑ほほえみを浮かべていた。

「……嫌な、予感がする。」

本棚を整理していた風見かざみ 恵亮けいすけが手を止める。

「なんだって？」

夜霧よぎり 美鈴みれい、通称『HT-001』が斜め下を向く。

「美鈴……。君には、一体何が見えているんだい？」

風見の質問に夜霧は率直な答えを述べた。

「ロビー。闖入者ちんにゅうしやが5人……。」

「ああ、きつと調査員だろう。そろそろ報告する時期だったか。」

「ここには、来るの？」

「恐らくね。」

「なるほど、……能力は使う？」

「その時が来たら、頼むよ。」

「分かったわ。それと、風見。」

「どうかしたのかい？」

「島坂しまさか 俊道としみちって人に注意して。後、坂木さかき 岬みさきって人と、

江田 裕ひろって人。バックに薬剤を仕込んでいるわ。」

風見の目つきが鋭くなる。

「それは、本当かい？」

「間違いない。」

視線を変えずに率直に夜霧は言った。

「……まったく。何を考えているのかは知らないけど、碯君には失望したよ。」

良き関係を気付けると思っていたんだがな。」

「この距離だと思考までは読み取れないから何とも言えないけど……。」

「黒だったら、『念力』でコンタクトしてくれないかな？」

「^{すき}隙があれば、伝える。」

「何の薬剤かまでは分からないからね。黒なら押えて薬剤を証拠として突き付ければ、

あつという間に追放。それを^{かえり}省みずに挑んできたのか、それとも美鈴を舐めていたのか。

どっちなんだろう。ねえ、……碯君？」

8時38分。5人が大牢館の頑丈な扉がセキュリティによって開かれ、5人による調査が始まった。

O b s e r v e r s o f o c c u r r e n c e S c e n e . 5 (前書き)

サブタイトル『Observers of occurrence

／ 観測者の出来事』

『Scene . 5 / 回想5』

碓視点です。

個体のレポートはだいたいはすぐにとり終わった。

そして、5名が全員無事に今、HT-001をお目にかかるうとしていた。

場所は館内ではなく、外の特別な室内だった。

「クク、ついに来ましたねえ。」

「ああ、やつとだな。」

風見が言った。

「彼女が、HT-001です。」

隣には、少女が立っている。

「クク、なんともまあ可愛らしいですね。」

少女がこちらを見た。禍々しくも鋭い視線で睨みつけるようにこちらを見てくる。

が、こちらも引く気は無かった。純粹な願いとしていたものが目の前にあるのだから。

「貴方……。」

「構わなくて結構です。能力を今この場で見せてください。」

「分かった。見せてやる。」

すると動いたのは別の人物だった。

ガバッ

動いたのは島坂だった!!

手に瓶のようなものを持ち、HT-001……夜霧美鈴の鼻に当てた！

「うぐっ！」

「責様！」

風見がすぐにおさえかかる。

しかし……！

「ず、頭痛が……」

「美鈴！ 大丈夫か……？」

「に、逃げて……このままじゃ、抑えきれない！」

「島坂、何の薬剤だ？」

「興奮剤さ。超強力なやつ。ゾンビの周りにいた人間って、そういう面でも凄く強いんだ。

頭痛がするほどの強い作用だけど、興奮作用はそれ以上ってところかな。」

「それが、お前の目論見か。」

「ああ、そうさ。」

「何が目的なんだ？」

「素直に言うわけないでしょ。んじゃ、俺はもうここには戻らないよ。」

外でじっくり自分の研究を続ける。お前らも首を洗ってまっとな。

俺がいずれ、

ゾンビの研究で日本を変えてやるからよ！ じゃあな！」
逃げ出した！

「島坂！」

「無理無理！ お前らには追いつけねーよ！」
あっという間に脱走を許してしまった。

「やはり、噂は本当だったか……。」

「噂？」

「あいつは、自分にウィルスを撃つたって話さ。一部だけウィルス化させても尚、制御させる

っていろいろを見つけたって自慢してたらしいぜ。」

「今の今までレポートには書かなかつたのか!？」

「そういうやつらしいな……。」

「それより、美鈴!」

「ウウウウ……逃げて、ニゲテ……!」

「美鈴……!?!」

ギンとした目で夜霧は碇を見た。

「アンタハ……ウツ!」

スツと立ちあがって夜霧は駆け出した!

「ま、待て!」

夜霧は一気に階段を下りて、外に抜けて行った。

「嘘だろ……?」

色々とんでもない事になってしまったが、話は後だ!

「上に連絡を!」

皆がそれに従った。結果的に今回の事は全てにおいて延期となり、結果報告も無しとなった。

覚醒少女が脱走したことで、上層部が決めた決断は

『この研究は、本日を持って凍結とする』

そして、時は翌日。

「どうしてですか！！ どうして凍結になったんですか！ わけを聞かせてください！」

ドアを岬が何度もたたく。

かれこれ粘って小一時間がたとうとしている。

私、碯もそこにいるわけですが……流石に色々と察しがつきますよ。こんなのが公にされたら、そりゃ責任は負いきれないでしょうね……

…私だって、

そんな目にあうくらいならさっさと断ち切りますよ。すると、ようやくドアの向こうから声が聞こえてきた。

「普通のゾンビならまだ処理が利いたんだ。だが、彼女はダメだ。

無理だ。頭痛が起こるほどの興奮状態は1、2日やそこらで消えるものじゃない。

そもそも、島坂が使った薬剤の詳細が彼独自のものとわかってない……。

対処法も未だにない。鎮静化も望めない。こんな状態でしか、罪を割ける方法はないんだ……。

君も、延命したいだろう？ 疑われる領域で済むならそれに越したことは無い。

国と契約したおかげで幾分か積荷は減ることにはなっているが、バレたらお終いだ。そういうわけなんだ。もう、帰ってくれ……

！」

最後の声は悲痛だった。

「そんなむちゃくちゃな！」

「岬君！」

「!?!」

「……あきらめましょう。」

「君まで……!」

「公になつたら、必ず責任者は罪をかぶせられます。

そして、そんなことになつたら事によつては海外もその事に注目するかもしれません。

そうなつたら、誰にも止められません。そうなる前に、最小限の被害ですませるほうが賢いです。」

「……分かった。君が言うなら……そうだな。」

これも、結果なのです。

「我々には、ここまでしか到達できなかった。」

仕方ありませんよ。

「もう、……」

しかし……

「本部のここは事実とともに抹消されるでしょうが、……支部なら生きてますよ。」

「支部？」

「私はそこそこの地位を得てますからね。上層部から研究施設の取引もあります。」

そういう目的の研究所、持ってますよ？」

「ほ、本当か!？」

「ええ、共に研究しませんか？ 行くところまで、行きたいと思いませんか？」

「……俺は、未知の領域を見てみたい。」

「なら、決まりですよ。行きましょう。研究所へ。」

「ああ!」

あの事から、大分月日はたった。結局、夜霧美鈴なる少女はTVのニュースにも、新聞にも取り上げられることは無く、インターネット上にも、その名前でヒットされることはなかった。完全に、事実は闇に包まれた……。

「支部の使い心地はどうですか？」

『ああ、大分慣れてきたよ。そろそろ、データを送ろうと思う。』

「お願いします。明日ぐらいにでも面会しましょうか。」

『ああ、それがいい。このご時世じゃ、区域内なら平気だろう。』

「そろそろ、別区じゃ抗争がはじまっています。ここもそろそろ……墮ちる日ですよね。」

『いつでも、墮ちるがいいさ。君が始めた事だ。君の手で……』

「ええ、それでは、ガス型の物を大型のシヨップینگモールにでも仕掛ける段取りを

早速立てます。あなたも、もちろん考えてくれますよね？」

『ああ、やるなら、今がチャンスだ。』

「クク、良い時間帯でセットして、ガス型でバラ撒きますよ。

作戦の考案、よろしくお願いしますよ？」

通話が終わった。碯の思惑と同じようなものが展開されるのは、今から約3カ月ほど後の話で、

その期間の間、彼らの意志に乗っ取る形で新たに悪夢を作り出さんとウィルス拡散の助力した人数は、あの本部の研究員の内の20人ほどまで集まった。

彼らが結束した日が11月13日。そこから、1ヶ月と少し後、人々は死と悪夢の中のような酷い世界に生きることとなる。

T r a p o f l o g i c b o m b (前書き)

サブタイトル『T r a p o f l o g i c b o m b / 遅発
性の罠』

元の視点に戻ります。

Trap of logic bomb

……ゾクゾクと嫌な感じがする。暗がりの奥から漂う緊迫する空気。このまま、1時間後でいいのか？ 扉の向こうへ足を踏み入れてよいか？

不安が尽きないまま、あつという間に1時間は経過した。

「そろそろ時間だ。」

新堂 幽が深手を負って行動に支障が出た今、場を仕切っていたのは九 卿ウラナキだった。

藤島は彼の戦闘における評価が高い事もあり今に限り九の提案を受け入れつつあった。

大門、吉成を含む他の面々は表面上は納得していたが、心から信頼していなかった。

警戒こそ、現状ででき得る最も有力な対処なのだ……。

「幽……いけそうか？」

「ああ、俺も行く。」

「体は大丈夫なのか？」

大門さんが言った言葉は恐らく皆を代表した質問だ。

「まだ軋むように痛むけど……『見えたんだ』。」

「見えた……？」

「ああ、扉の向こうが俺には見えた。」

「いつ見たんだ？ まさか寝てる間とか言わないよな？」

「勘が鋭くて助かるよ、藤島。」

「ええええ！？ 寝てる時について……どうやって!？」

「俺にも良くわからない。けど、見えたんだから仕方ないだろ？」
「理不尽と言わざるを得ない解答しか出ないけど、真実なんだし本当に仕方ないよな……。」

でも、信用してもらえなくても俺はいかなくてはならない。

『パスワード』を知らなければ進むことすら最初の扉で諦めざるを得なくなってしまうからな。

「とにかく、もう行こう。扉の最深部まで辿りつけば後はどうにでもなると思うし。」

「そ、そうか。ならさっさと言った方がいいな。」

大門さんが言うつと皆も続く。

「だが、新堂。体が痛むのなら先陣は俺達に任せてもらうぞ。いいな？」

「お願いします。」

俺は素直に頼んだ。正直、ガタがきたってレベルじゃない痛みだ……。

骨折とまではいっていない状況だと思うが、下手をするとすぐに折れるかもしれない。

扉の正面まで歩く。途中にゾンビの姿もなく、本当に奇妙な雰囲気だった。

管理者である『江田 裕』無き今も尚、この何とも言えない空間を生み出しているのは……

恐らく原因があるはずだ。まるで本能に直接語りかけられているかのような、

心の奥底を揺さぶられる感覚……一体これはなんなのだろうか？

「ここだな。」

九が言う。先頭は九。その後ろに大門さん、影山さんを含む勢力があり

俺の位置は華憐達がいるような後列だ。矛を杖にしてなんとか歩い

ていけている。

杖に使わなくてもよかったのだが、体力温存しておきたかった。いついかなる時でも油断大敵。今はそういう世の中であり、今後は更に気を引き締めなくてはならなくなるのかもしれない。

「この先は進んでいい。」

俺が言うと皆が無言で扉へと入っていく。念のため、俺が最後尾を務めた。荷物は待機場所に

おいてきて、他の団員に預けている。今回団員をこれに参加させなかったのは、

大勢で行くと逃げるときパニックになり、危険であることと、慣れないメンバーで

統率が利かなくなるといった事態を避けるためだ。信頼に欠ける九いちじくを参加させた時点で、

すでに後者の方の説得力が欠けるのだが、戦力的にみると誰にも負けないだろう。

それを見込んで正解だったと今は願いたい。

少し進むと扉が堅く道を塞いでいた。九が手を掛けるが鍵がかかっていた。

「ん、なんだこりゃ……鍵穴が無え。」

「パスワード式だ。俺に任せてくれ。」

4ケタの暗証番号を入力した。確か最初は『6047』だったな……。

ピーッ ガチャ ロックが解除された音がした。

「パスワード式か。面倒な仕組みだな……。幽、なんでこのパスワード知ってたんだ？」

「実態がある形で残ってるなら『見える』。俺は、このパスワードが書かれた紙を見たんだ。」

皆が驚きの表情を浮かべる。

「な、なるほど……。」

「どうやら、彼無くしては本来ここは進めなかったようだな。」

影山 日向ひなたが結論を述べた。キツパリ言ってることだから、今の発言にはかなりの自信があったという事だろう。普通は驚いたり、半信半疑に留るかなのに……

影山さんは相当思慮しりょ深いと見えた。

過去も持ち前の思考で苦難を乗り越えてきたのだろうか。だとすると、ここまで来れたのは

まぎれもなく自分の洗練された強さがあったから……！

彼女も、九には一步劣るものの実力の程はもつと高いはずだ。

扉の先の書類の束に皆キヨロキヨロ見渡していたが、

奥の扉にすぐに目があった。

俺はパスワードを打ち込む。2つ目はえっとえっと……『3745』

ピーッ ガチャ ロックが外れた。

「こりゃ、案外楽勝かもな。」

余裕の九。皆は警戒したままだ。もちろん俺も……。

扉の奥で皆は目を見張った。

「培養機……！？」

大門さんが言った。全員がこのフロアに入った時は皆が啞然としていた。

そんな中、俺だけが淡々と次の扉の前へと立って、パスワードを打ち込んでいた。

アルファベット式だったな。えっと……『myhandsishazardmaker』

ピーピーピーッ ガシャ よし、空いた。

「……幽、悪いんだが帰日も頼むぜ。」

「へ？」

「ここにある扉。出る時もパスワードが必要らしい。」

入ってきた扉を見ると、赤いランプがついていた。解除していた時

は確か緑に光ってたはずだな……。
仕方ない、帰りも俺が担当するか。

俺が扉の奥に入ると、培養機を見つめていた大門さん達もこっちに
来た。

扉の先は比較的狭く、重要な書類だけ。他は、コントロールパネル
があった。

「この先だ……覚悟してくれよ。」

シューー ガチャ 入ってくるときに使った扉が閉まった。間近だ
と確かに閉まるのが分かる。

パスワードを速やかに入力する。

えつと…… 『78665-33267』

「お、ここにあるじゃん。パスワードの紙が。まさかこれ見たのか
?」

「ああ。」

『08931-43889』

「へええ、なるほどねえ。結構狭いところだけど、あいつも御熱心に
やってたんだな。」

のんきな事言ってる場合か、九……。強いのは認めるが、もう少し
緊張感がほしいよ。

『01029』

ピーー ピッピッ ……あれ、ロックが外れない。

「……おい、幽!」

「ど、どうした?」

「そのパスワードは……! 数字の後に追加のパスワードを入れな
いとダメだ!」

「本当か! パスワードを教えてください!」

「……分からない。」

「え……?」

「ここにある紙に目を通したが、どこにも書いてねえ!」

「ど、どういふことだ……!?!?」

九が俺に紙を手渡した。4枚の用紙。それぞれに個々の用途、それからルール等。

パスワード等も書かれてある。が、最後のプリントに確かに書いてあった……。

『最終キーの入力は追加パスワードの入力が成功して初めて安全の元で扉のロックが解除される。』

し、しまった……！ 余計な置き土産残していきやがって……！！

『尚、3回の誤入力又は1分の経過から何も応答が無かった場合はプロトタイプの《V-Vil'tis》を
培養機から開放されるようにプログラムされている。

パスワードのキャンセルコードは「14892-22490-90
129-31807-34271」』

「キャンセルコード！ これだ！」

「ダメだ、間にあわねえ！ 探すのに時間がかかりすぎた！」

ピー！ プシューッ 扉が開かれた。奥に見えるのは、一つだけ、液が抜かれていく培養機。

「……撤退するぞ！」

俺は扉の奥に入らず、すぐに振り返り、パスワードを入力した！

『my hands is hazard maker』

ピーッ ガチャ 走って次の扉の前に行く！

そして素早く入力に専念する。だが、九だけは最深部の扉の奥を見据えていた。

「急げ、幽！ 液がもう半分以上減ってる！ それに、開けた扉が閉じないぞ！」

ッ！！ パスワードの入力が遅れるとあのゾンビ…… 『V-Vil'tis』と遭遇してしまう！

『3745』

ガチャッ 開いた直後にまたすぐ次の扉で入力する。

ガチャツ よし、全部開いた！ 後は荷物を持って、団員たちに伝えて解散できれば！

走ってエスカレーターのところまで全員着く。九はいつの間にか俺達の後ろにいた。

急いで登った。そして、大声で言った。

「皆！ ヤバイゾンビが出来あがっちゃった！ 急いでここから逃げる準備して、逃げてくれ！」

「何ッ！？ それは本当か！？」

「本当かどうか確認する暇も無いです！ とにかくここから離れるんです！」

俺達は各自の荷物を全てまとめて、ショッピングモールの外へと出た。

「こ、今後はどうすれば？」

団員が俺に聞く。

「ここからずっと遠くにまで離れるんですよ！ ここからかなり遠くまで逃げることだけ、考えてください！」

「わ、わかった！」

団員が伝えに走った。

「俺達も、ここを離れよう！」

「ああ。」

「先を急ごう。」

俺達は少し走った後は歩いた。少しだけなのは、体力温存のためだ。次の脅威は、一体いつどこから来るのか見当もつかない。

結局安息の地と思われた場所は、扉の開放により一気に危険地帯と化した。

裕が残していったあの個体の詳細は謎に包まれている。が、今はそれはどうでもよいことだろう。

今は、皆が少しでも多く休めるような場所が必要なのだ。

全ては、仲間と、未来の為に……………。

一方、ショッピングモール内。
扉の奥から、やや人間と比べて背丈が高い何かがあるいて出た。
始めてみる風景。始めてみる品物。そして、初めてみる外の世界の
光。

静けさしか残っていない場所。そこが、生まれたての彼の全ての始
まりだった。

「……………ウウ、アア。」
生後として間もない彼が、声を発するというのは目新たしすぎる行
為である。

慣れない感覚で己を満たす。慣れない世界の始まりで経験を満たす。
何も思わない彼にとって、本能は自分の全てだった。

そして、彼は……………その世界の全てを噛みしめながら、ショッピング
モールを後にした。

その行く先、行方を知る者はこの世の誰でもない。唯一無二の存在
の彼だけである。

Trap of Logic bomb (後書き)

5話を長い間で開けてしまったため、少し理解しにくいかもしれませんが。

思い出しながら読んでいただけると幸いです。

感想募集しています。お気軽にどうぞ。

突然長期間も開けてしまい、申し訳ございませんでした。

A n e w f i e l d o f a c t i v i t y (前書き)

サブタイトル『A n e w f i e l d o f a c t i v i t y
/ 新天地』

A new field of activity

人が霧散むさんしていく様子、そして後に孤立した影をシヨッピングモールから出ていく様子を、

静かに見据えていた者がいた。

シヨッピングモールの屋上で行く末を見届けた二人がようやく口を開いた。

「クク、いい感じですね。これはまた良いデータが取れそうです。」

可笑しさに口元が釣り上がっているのは江田 裕こじた はゆ。

「あーあ、これじゃ散ちった雑魚ザコが可愛かわいそうじゃん。」

憐あわれみの台詞を口にはしているのは新堂 啓けい。

「これでまた、研究対象が増えましたね。」

「『V』のこと？ 行動タイプは独特な構成だつて言つてたっけ？」

「ええ、それともう一つ……。今は『あの面子の内の一人の誰か』
といったところでしょうか。」

「へ？ 誰か分からないの？」

「……恐らく、『覚醒』が起こつたのでしよう。しかし……どの能力も並大抵の精神力、体力では使えませんから、候補として最も有力なのがやはり幽君率うりくんいる一行。」

『意外だ』というような表情で啓が裕に聞いた。

「覚醒つて、確かちよいと前に話してたやつか？」

「ええ。生存者には稀に特異能力を身につけるつて言っていた話です。覚えてますかね？」

「ああ、半信半疑だつたけどね。」

「心外ですね。ガセではなかったというのに……。」

「悪い悪い！ でも、その覚醒つてのはそう安々と手に入るようなものじゃないだろ？」

「その通りです。相応の力を手に入れるためには相応の条件が必要です。」

本来ならば候補としては幽君……と言いたのですが、新たに加わったメンバーの力とも、断定できません。

今のところは放っておきましょう。しかし、いずれ必ず分かる時が来ますよ……。」

「それは、いつなんだ？」

「……次に会う時にはもう答えは見えるはずですよ。」
遠くの空を見据えながら裕は言った。

「そろそろ行きますか。」

そういつて裕が立ちあがる。屋上を後にした二人は、幽一行も、
V-Villtis<sup>ヴァイ
ウィルティス</sup>も追わず、

早々にその場を去っていった。

「うおおおっ！」

気合いを含めて発された声とともに矛が道を切り開く。

地に崩れたのは残党ゾンビ。数はそう多くは無いが、この道路はほとんど手つかずだったようで、

駆除はされていない様子だった。

「てやッ！」

鋭い雰囲気ゾンビを圧倒する。今まで以上にゾンビとの戦闘に洗練された気迫を出しているのは藤島。

今までは頭部への一撃狙い。頭部へ一撃を入れていれば、後に衝撃で自然崩壊するゾンビの数々が

藤島と戦ったゾンビの末路であったが、

今回は頭部への打撃をより強力にすることで頭部を路面へ叩きつけるほどの意気込みがあった。

使っている木刀は何一つ変化はない。変わったのは藤島自身。

「はぁあッ！」

とにかく力でゾンビの姿勢を大きく崩すという、一撃必殺以外の狙いの目標を秘めているのは大門さん。

頭部ではなく、ガラ空きの脇腹を両手の力が加わった武器で吹き飛ばす。

力無きゾンビは攻撃を受けた後、地に這いつくばるのみである。

「そらよッ！」

余裕を戦いの中でも見せているのは九。有り余る実力を秘めている分、普通のゾンビ相手ではかなり温存した戦い方をしている。

が、余裕がある分負けるとは思えない俊敏な動きであり、遊んでいるかのようにも見える。

こんな芸当、彼以外には到底できない。

「せいやッ！」

一方、確実に隙を突き確実に安全な戦いを見せているのは影山。隙を窺うのはほぼ一瞬で、対峙したゾンビの呼吸を読み取って弱点を狙う。

安全面重視という動きで広く動けるように回避に徹底している。

が、それゆえの余裕も生まれている。常に逃げているからこそ生ま

れる余裕。

それは攻撃に臆おくするという意味ではなく、後の攻撃に十分な時間を確保できているという意味である。

だから決して回避にも臆おくすることは無く、常に攻撃か退避のどちらかを行っている。

動きに滞とまりが無いのである。

「ハッ！」

グシャッ 目の前の頭がやや陥没かんぼつする光景は何とも言えない悪寒を感じさせる。

いつになっても慣れる気がしないこの感覚……。こんなこと、一体いつまで続けられればいいんだ？

「後はこいつ一匹でお終しまいだ。おらよッと！」

最後の最後で力を入れたらしく、九が最後に蹴散らしたゾンビは地を転がるようにして

やや遠くで動かなくなった。

「これで、全部始末したか？」

大門さんが聞く。

「多分これで終わりですよ。」

「相変わらずって感じだったけど……少し物足りなかったって感じがあるな。」

藤島が言った事の心理が俺には読み取れた。裕の事だろう。

あれ以来、藤島は気迫があるし、ゾンビが裕と比べると当然劣っている。無理もない。

「んで、このまま歩いてどうするつもり？」

九が言った。

「そりゃ、ここから一刻も早く逃げるに決まってるだろ。何の因果いんがでこんなところに

留まらなきゃならないんだ……ハア。」

藤島が嘆息しながら言った。

「戦いに出向けば面白そうだったのになあ。」
まったくこいつは……戦鬪凶かつての！

「そんなに戦いたかったら今からお前だけでも引き返してもいいんだぞ？」

俺はため息交じりに言った。

「そりやないぜえ、幽！」

「だいたいなんでそんなに戦いたいんだ？ 死ぬとか怖くないのかよ。」

「死だつて？ 死ぬのが怖くて戦つてられるかつての。」

吐き捨てるかのように言った一言は他の面々を深く考え込ませた。覚悟の違いが皆を困惑こんわくという名の戦慄せんりつに感化させた。

「お前な……俺だつて死ぬのは怖いんだぞ？」

「あのなあ、死ぬ手前まで来てるやつがそれ言つてどうすんのさ。」

そういうの経験してるやつが、自信もつて死ぬ恐怖と闘つていかなきゃ、いつまでたつても人間止まりだぞ。」

「悪いが、俺は人間の心を捨てるつもりは無いんでな。」

「はあ、そんなんじゃないつまでたつてもあいつに負けちまうぞ……。」

「グツ…… 九の言う通りかもしれない。死ぬのが怖くて砦に勝てるわけが無い……。」

むこうは強力な兵器を率いているかもしれないんだ。死が怖くて勝てる相手じゃない。

もちろん、砦に勝てなくてこの世の中をこの先無事で過こせる保証は極めて薄うすい。

文字通りの弱肉強食の世界になつてしまったこの地獄じごくでは、生きることすら苦痛。

飽あくなきゾンビとの無限の戦いを強いられる。

俺まで考え込まされる……。いや、ダメだ駄目だ！ こんなんじゃ、

メンバーを率いていくなんで、

甘すぎる話だ！

俺がしっかりしなくてどうするんだ。2人の強力な助っ人が入った
といっても、

俺がしっかりしなきゃ、統率じゆうりつしなきゃ………！

深く考え込んで、かなりの距離を歩いた。

無言が続き、ゾンビもいないような場所を歩き続けた。

そして大きな道路から外れないように進み続けた。

「……今日は、あそこで休もう。」

俺が指をさして言った。指差した先には、コンビニがある。

ガラスはほぼ無傷。目立った戦闘の形跡けいせきもない。

ここなら、きつと安全だろう。

向かいにガソリンスタンドがあり、歩いて2分もしないところには警察署があった。

場所を把握はくわくしようとしていると、宣伝ポスターの張り紙が風に吹かれて飛んできた。

それを掴んで見てみる。

『君のポイ捨てを無くすだけで空羽町そらばはきつと変わります！

界野市ポランティア委員会 空羽町支部』

ゴミのポイ捨ての防止を訴えるポスターのようだ。

空羽町……聞き覚えは無い。かなりの距離はあるいたから、見知らぬ街でも不思議ではないか……。

肝な町の名前を覚えると、俺はポスターを手から放そうと……いや、やめておこう。

俺はコンビニの外に設置されてあるゴミ箱にポスターを入れた。

「無傷だな。意外とこういいうコンビニってまだあったんだな。」
のんきそうに九は言った。

聖奈、華憐もいままで後方に控えさせていて、皆も疲れているだろうし。

ここらで休憩をはさんだのは正解だったな。今日はもうゆっくり休もう。

自動ドアを九が力ちからずくでこじ開けて、また力ずくで閉めた。

こうすることで無傷のままの外見を保てる。

ここに立ち寄ってくるであろう人達がいたとしても安心できるし、ゾンビはここに人がいるとは思わないだろう。知能の有無関係なしに、安全に眠る事が出来る。

これはこの上ないメリット。眠る事が出来なくてはこの先の未来は掴みとれやしないだろう。

今日は早々に寝るのがベストだ。今後は寝れるかどうかもわからないしな……。

このコンビニは2階建だったので、2階を使うことにした。今日の夜はあつという間に訪れた。

「皆、たっぷり寝ておけよ。次寝れるのはいつか分からないからな。」

「おっけー。」

「ああ、ここが見つかって本当によかった。」

「今日はぐっすりですね。」

「俺はもう今日はねよつと。」

「済まない。今日はもう眠りに着かせてもらおうよ。」

「今日も、怖かったです……。」

皆が就寝に着く前と言うのは個人差がはっきりしているな。

うん、一言だけでも色々感じ取れるぞ。

「聖奈は幽にいの隣でいいよね？」

……忘れていた。聖奈の事を……！

「え、あ、ああ……。」

「ありがとうね、幽にいい！」

ア、アハハ……若干人目を気にしてしまう……。

だ、だけど、安心して眠れるようにできる限り尽くせないようでは、まだまだ俺も甘い……。

自分を犠牲せいていにしても、皆の事に関しては気を配らなければならぬいんだ。

例え、俺への目線が変わったとしても……な（皆の目線が明日も変わらないと信じたいところではあるが……）。

この夜は全員が深き眠りに着いた。彼らが眠りに着いた後、
ゾンビニを含む空羽町の隣町である、『高屋町』が完全にゾンビに
喰われた。

この事実と、ここ『空羽』に『高屋』への度重なる遠征を繰り返して
いる猛者が集ったチームが
存在している事を知るのは、明日以降の事である……。

A n e w f i e l d o f a c t i v i t y (後書き)

『高屋』等の語句はここではオリジナルの設定で扱っていて、実際に表現されているものとは別物です。

Skill former(前書き)

サブタイトル『Skill former / 技能構成者』

S k i l l f o r m e r

コンビニで安息の時間を得る者達は、その安堵あんどに浸ひたった。
彼らは安らぎゆたに委ねる。

夢心地だった眠りから覚めた世界は……紛れもない『現実』だった。

全員がほぼタイミング一致で目が覚めた。そして1分の間で一瞬で
思考回路はガラリと切り替わる。
窓から見下ろした光景が異様だったからだ。

「なんだよあれ……。」

藤島が文句をたれるように言った。全員眠れる限りまで眠りつくし
たので、

疲労回復も十分な効果はあった。目覚めも良し。だが、ここまで早
く戦闘態勢を強いられるとは……。

「大きく構える事もないんじゃないか？」

「いえ、警戒するくらいでちょうどいいと思いますよ……人だから
と言って、

襲おしかつてこないとも限りませんから。」

大門おおかどさんの質問に俺が答えた。

確かに……『人』なら信用したいご時世ではあるものの、生気を帯
びた敵も多数いることも

分かってきたし……。いずれは覚悟していたことだ。人同士でも争

わなきやいけないって……。

初日、初期は連携重視だ。設備ならなにやら整ってるわけだし。だが、中盤……日が経つにつれて崩れるものなんだ。

その理由についてだが、最も有力なのは『食糧』なんだよね……。ここ、誰が見てもコンビニだし。もしかして俺らが占拠してるとか思われているとなると、

交戦しなきやいけないのか……？（実際1泊分占拠していたわけなんだけどね）

「敵の狙いが食糧なら、俺達は争う必要は無いと思うよ。」

「食糧……か。戦う理由としては妥当な線だが、どうしてそう言い切れるんだ？」

「ここが保存食も有り余るコンビニだからこそですよ。」

コンビニは食糧が余っているもんだ。そして、このコンビニはほとんど手つかずの状態だったから
まだまだ食料は余ってる。

「『相手に少しだけ分け与える』とかそんな甘い交渉が通じるとも思えないですけど、

大丈夫なんですか？」

吉成が質問をしてきた。確かに、そうなんだよなあ。ちょっと驚かせるかもしれないけど、

これも仕方ない手段だよな。

「うーん、それでも良かったんだけど……。」

「それじゃ、どうするつもりだ？」

「えっと……コンビニは素直に引き渡す。食糧は保持できる分だけ詰め込ませてもらうけどね。」

俺達がついていく分を差し引いても凄い量がある。これで戦闘だけは回避できるはずだ。」

「そ、それで本当にいいのか？ 幽。」

「どの道こんな大きい通りの近くの建物に長居するつもりはなかつ

たからな……。」

こんなところを拠点にしたら……いざという時に逃げれない。そもそも2階で寝るならしっかり対策取らないと寝てる間に喰われるなんて事も……！」

ゾンビはいつでもどこから沸いてくるのかもわからない。

確固^{かっこ}たる条件を揃えて、次こそはこんな偶然に頼ることなく場所を確保しておきたいな。

「なあ、幽。」

「ん、どうした？ 九^{こちへく}。」

窓の下を見下ろしながら九は言った。

「俺さあ、あの外のやつら……食い物つつうより、俺達目当てだと思うんだけどなあ。」

「……そういう詮索はもうやめにしよう。今はもう堂々と表に出るしかない。」

詮索したって、相手の答えは変わらないんだ。どう考えているかは知らないが、

今は相手に従っておくしかない。それに、戦い自体は俺も好きじゃないし……。」

「行こう。」

皆は俺に続いて下の階に下りて、全員表に出た。

「ひゅー、本当にいたんだな。生存者！」

「だから待ち伏せしてたんだろ……。つーか、いい加減僕の事認めてくれないかな。」

「分かった分かった。これで認めてやんよ。……さてと、突然で悪いんだけど、

俺達の質問に答えてもらおうぞ。」

目の前の二人組は余裕そうな態度だ。一人はこの状況でも澁^{はつらい}刺とし

た感じで、

もう一人は眼鏡を掛けている。そして少々のことでは動じそうにもない雰囲気を醸かもしていた。

「……分かった。」

全員分を代表して返事をしたのは俺だ。

「えーつとだな、お前たちはどうやって生き延びたんだ？　ここじや俺たち以外はいないと思ってたんだが。」

「元々この住人だったわけじゃない。わけあって、放浪していたらこの町に辿りついたんだ。」

相手組が意外と驚きの表情を面おもに含めた。

「別の町からここまで歩いたってか！？」

「……よくここまでこれたね。君達、なかなかタフそうだ。」

「貧弱な面子でここまで来れるかっての。」

横から口を走らせたのは九だった。

「威勢がいいな。それにしても……… 8人グループか。」

「今じゃ大層な人数……… でもないか。場所を転々とするなら多すぎるが。」

ホントに余裕そうな態度だな！　戦う気が無いならいいけど、そろそろ場所探しの旅に行かないと、

今日の寝床消失の危機なんだけど………。

「戦う気が無いなら、もういいかな？　コンビニはもう開けるし、俺達、そろそろ行きたいんだ。」

「行きたいって？　どこに？」

「寝る場所探し。この町はきたばかりだから、色々把握しておかないとならないしな。」

「へえー。……… だったら、俺達のアジトに来ないか？」

「歓迎しますよ。」

アジト、だと？

「……… 一体どういう風の吹きまわし？」

「俺達も、面子が足りなくて困ってるどころなんだ。」

「君達が加わってくれるなら心強い。もちろん、寝る場所もある。」
「面子が足りない？ 俺達にとつては好都合だけど……事情を聞かせてくれないか。」
すると、二人は真剣な面持ちになる。

「実はな……昨日の晩にここの隣町が完全にゾンビに制圧されちまつたんだ。」

「え……！？」

隣町が……制圧された！？

「隣町ってこともあって、いつここに攻め込んでくるかもわからない。」

だから、こっちは結構前から隣町の大半がやられた時点でちよくちよく奇襲してたんだが……。

とうとうやられちまつた。予定よりもずっと早く町が落ちた。だから、こっちももつと多くの

ゾンビを削っておかなきゃ本格的にここも住みにくくなってくる。そのためにも面子が必要なんだ！」

「つまり、住むところを分け与える代わりに……ゾンビの駆除を手伝えってことか？」

「簡単に言つとそう言つところだな。」

……そうになると、非戦闘員の聖奈や華憐が困る。俺が3人分やるって形でいいか……。

「皆、向ここの意見……どう思う？ 俺は聖奈と華憐の都合に合わせる。」

「聖奈はいいよ。ちゃんと手伝う。」

「私も……良いと思います。」

……やっぱり、経験に欠ける華憐は奥手になっちゃうか。聖奈の意見を捻じ曲げたらとか、
そういう事考えてるのか？

「他は、どう思う？」

「俺はいいぜ。」

藤島は同意か。

「俺も。」

九も同意……か。

「私もこの提案は良いと思う。」

影山さんも同意なのか……！

「そうだな、しっかり場所もとれるなら、これ以上の事は無いだろう。」

大門さんも……。

「危険が行く分も減るなら、そっちを優先すべきですよ。」

吉成も一致。

全員一致かな。

「……OK。アジトに連れてってくれ。」

「交渉成立だな。ちなみに、アジトのリーダーは俺たちじゃないから、詳しい事はリーダーに聞いてくれ。」

「分かった。……それと、一つ聞いていいか？」

「なんでもいいぜ？」

「どうして、俺達がコンビニにいるってわかった？」

空気が凍りつくように固まった。

「聞きたい？」

「ああ。」

フウーっのため息をついて片割れが言った。

「えつとな、おれが見つけたわけじゃないんだ。……佐久、言っ
ていい？」

「勝手にしろ……。」

「それじゃ、言うからな。こいつ、『河上 佐久』っていうんだ
ど、

こいつが持つてる力でお前たちを見つけれられたんだ。」

「ち、力……？」

「ああ。つっても、原理がどうとか俺達にも良くわからないんだ
けど、分かっちゃまうんだから仕方ねーよ。」

「ほ、本当なのか？ その話。」

「間違いないよ。紛れもなく、この僕の力で君達を探り当てた。」
本人も言っている。奇妙な話だが、ここで質問攻めをしてても仕方ないだろう。

とりあえずは、アジトでリーダーと接触すること。そして、場所を確保すること。

これが絶対条件だ。今はもうそういう力を持ったやつなんだって、割り切るしかないか……。

「おつと、そっいや、自己紹介がまだだったな。俺の名前は『東条 春』」

「おつと、そっいや、自己紹介がまだだったな。俺の名前は『東条 春』の力が使えるんだ。」

「ま、今後はそういうことも踏まえてくれっと嬉しいぜ。」

「こいつも、奇妙な力持ち合わせてるのか……？」

「それがどういふものは良くわからないけど、都合よく揃った二人だな。」

藤島が急に口にした。口にしたくなるのは分からなくもない。確かに両方つてのはなかなか……

「おかしいよな？ こっいふのって組のメンバーの欠点を押さえるために、」

「バランスが均等になるようにバラバラにされるものだろ？」

「やつぱりか。お前ら、力もってないだろ？」

「そりゃそうだ。普通持つてないに決まってるだろ。俺達は普通に過ごしてた人間だ。」

「土壇場でも人間にできたことしかできないし。」

「え？ マジで？ 俺のアジトの連中は皆使えるぞ？」

「……ハ？」

聞き間違いだろつか。今、とんでもないことを耳にしたような……。

「え、いやいや、だからこっいふのはアジトの連中らは皆使えるって。」

……おっと、幻聴か、はたまた世間一般で言う『空耳』というやつ
だろうか？

俺はワントンポ前に聞いたことをリセットして、もう一度聞きなお
した。

「お、お前……なんていった？」

「だーかーらーッ！ 俺たちみたいなこういう異能の力はアジトの
やつら全員が持つてるって言うてんの！」

「なんだって……ッ!？」

この町の生存者は、俺達には過激すぎたことしかししないのだろうか？
彼、『東条 春』と名乗る男が所属するアジトが、俺には想像もつ
かないような場所に見えてきた。

こんな町のアジトで、俺達は生きていけるのか？ 不安が募るまま、
再び止めた足を俺達一同は動かした。

一方、アジト内では

「東条と河上の組が生存者グループと接触した。徐々にこっちに近
づいてきてる。」

「ほう、本当に生き残りだったとはな。……で、見込みはありそう
か？」

「えーっと、そういうのは『インスペクト視察系』に聞いてくださいよ……。」
困った顔でそう言くと、面持ちを変えないまま風格が大きいリーダー
―氣質の男が言った。

「8人増員か。これでこちらも幾分か奇襲が上手くいきそうだな。」
「そうですね。明日から仕事してもらおうとしてもなかなか見込みは
あるんじゃないかと。」

「東条組が到着でき次第、顔合わせをする。隊列、戦法はそれから
組み直すぞ。」

今日は遠征無しだ。『テレパス念派系』に伝えて全員に行き渡るように頼む。

「了解です。」

彼らの到着を待ちわびる男は、8人増員の報告を受けても尚、深刻
そうにゆがめた顔を変えなかった。

r u i n s (前書き)

サブタイトル 『 r u i n s / 廃墟 』

r u i n s

東条 春と、河上 佐久と名乗る二人組に先導されるままに、俺達は道を歩いた。彼らの言うアジトのメンバーに加わることに同意した俺達だが、アジトとは、一体どんなものなのだろうか……？

「もうすぐそこだ。」

東条 春が言った。

「あのなあ！ それ何回目なのか言ってみろ！」

「そんなこと言われたって、しょうがないだろ。リーダーの作戦で、このルートをしつかり通らないと

敵とみなされちゃうんだからさあ。」

九と東条の口争いが勃発している。

九の言う事にも若干同じ意見は出る。もう何回もそんなこと言われたよ。

俺は3回目から数えるのをやめてしまったがな……。

「ったくよお……。それで、そのお前のリーダー様のお考えになったルートとやらは、

今何割ぐらい進んでるんだ？」

「9割9分9里といったところかな。あ、ここ曲がったらまっすぐ

行けば大丈夫。」

「てめえ！ やっぱりなめてんのかアアア！」

「落ちつけえ！ 九ッ！」

憤る九を藤島が抑える。

「やれやれ、これだから野蠻人は……。」

「佐久とか言つたな！ 後で覚えてるよ！」

「あのねえ、君。いくら僕が直接戦闘に影響を及ぼさない能力だからと言って、

油断してると痛い目にあうよ？ 僕だって何回も経験してきたんだ。

」

「てめえの経験談は聞いてねえンだよおお！」

……ダメだ。九は完全に感情のコントロールが出来ていない。

九のやつ、朝に騒がれるとイライラするタイプか？

「九。もうゴールは目の前なんだから、落ち着いてもいいんじゃないか？」

「幽は甘い！ 見ず知らずの人間だからって奥手だと、不意突かれんぞ？」

ハアつとため息交じりに九は言った。

「そうかもしれないが……俺たちだって、伊達にここまで生き延びてきたわけじゃないだろ？」

少し余裕ぶつた目線で九を見やる。それを見て九もイライラを抑えて、いつものような、

余裕に満ちた目線を浮かべた。

「ああ、そうだろ。俺達は死線潜ってきたんだ。アジトぐらいどうつてことねえよ。」

「だったら、敵意満々にしなくても良いと思うぞ？」

そう、九はイライラと同時に敵意もばら撒きまくっていた。

堪えかねた東条達は今まで意外というぐらいにまで道中は話をしなかった。

が、敵意に感化されたのか、終盤はさっきのようにとつとつ口を開

いでしまったというわけだ。

比較的クールな『河上 佐久』もしゃべりだすのだから、彼らもかなり敏感に感じ取っていたのだと思う。

「はいはい、分かったよ。」

ついに諦めたのか、九から放たれた敵意は消えた。

おかげでいままで怯えていた聖奈もホツとしてくれたよ。

「先に行つとくが皆、何があつてもアジトで隊列に関しては文句なしだ。

バラバラでも、ちゃんと役目を果たすように！」

釘を差しておかないと、九が何をしでかすのか分かったもんじゃないからな……。

「さあ、入つて入つてー！」

「さつさとするんだな。」

なんだこのもてなし方は……！

そしてこの建物は！

アジトと聞いていたんだが、これは見当違いもいいところだ！

「ここ、アジトって本当なのか？」

「マジマジ。マジもんです！」

「嘘だろ！？ ここつて……」

そう、ここは紛れもなく……

「廃病院じゃないか……！」

廃病院。ゾンビ出現前ですら忌み嫌われたスポット。心霊スポットで有名だろう。この状況は。

ゾンビが出現しているから、今更心霊現象を怖がることはないが……

「中はゾンビはいないよ。元々人いないし。機材も全部外に投げ投げたし。薬なんか薬品関係は、

ぜーんぶ、遠征の時に投げ捨てたよ。中は調達した武器やら、食料

やら、寢床とか。

お化けが出たとかの報告は今まで一切出てないから安心して大丈夫だよ。」

「そ、そうか。ならいいんだ……。」

危ない薬品関係が無いなら大丈夫か。人が住めるならまあ、ありがたい場所ではある。

俺達は足を踏み入れた。

「ぶつちゃけ、ここはアジトの一部でしかないんだけど、休憩班が使ってる。ホラ、人いるでしょ？」

「ほんとだ……。」

人はいた。ピンピンしてるような人ばかりだ。

「なんだ、東条か。脅かすなよ！ もう交代なのかと思っちまっつたよ。」

「んなわけあるか！ 1日分のスケジュールぐらいリーダーはしっかりやってくれるだろうが！」

「そうか、そうだよな！ アハハ！ にしても、後ろの連中は？」

「ああ、『把握系』^{グラスウ}の連中が見つけた生存者だ。リーダーが待ちわびてるから、

さっさといかなきゃなんのでな。んじゃ、またな。」

「さっさとリーダーのところに行ってやれよ！ 後、遠征中止おめでとう！」

「サンキュー！」

少々理解に困る単語やら会話やらがあったが、まあ……リーダーに詳しく聞かせてもらえることを願う。

「さっきの会話からすると、東条……寄り道とはいいい度胸だな。」

俺は若干怒り気味に言った。こんなもてなし方があるか？

リーダーのところじゃなくて、他の連中にあいさつしに行くなんてどうかしてる……。

「悪かったって！ ちゃんと案内するから！」

今度は廃墟ビルらしい高い階層の建物に入った。

見てみると、1階の広間に格の高そうな人達がかなりいた。

どうやらここで話し合つらしいな……。リーダー以外は皆、各自で何かしている。

上の空でいる男、そして話し合っている男女ペア。真剣な目つきでこちらを見る男性。

「君達だな。生存者と言うのは。」

「はい、こいつらが生存者。総勢8名です。」

「東条、ご苦労だった。もう下がっていい。」

「はい。」

そう言うと、東条も河上も去っていく。

「さて、まずは自己紹介から始めよう。私は『加川 和』だ。

空を見てるのは……。『座光寺 雅』。武道界の名門家の息子だ。

男女ペアは男の方が『相馬 來斗』。女の方が『夜久 玲南』。

他の重要メンバーについては後ほど連絡を入れる。」

「は、はあ……。」

一気に詰め込みすぎて把握に困るぞ……。

「徐々に慣れていけば問題は無いだろう。君達の寢床はこの4階だ。

指定された階ならどこの部屋をつあってもかまわん。ただし、他の人も使うから平和的に頼むぞ。」

「は、はい。」

「今日はこちらも特に目立った事をするつもりは無い。ゆっくり明日に備えるなり、

連携を深めるなり……時間を有効に使ってくれ。」

「分かりました。」

俺達は4階に荷物をまとめた。ここは意外にも平和的な連中ばかり

だ。

窃盗にあつのではと危険視もしたが、大丈夫そうだ。

「フウ、……皆、解散していいぞ。ここで俺達だけが固まってもここにはなじめないと思うから、

各自でアジトに慣れれるように努力してみてくれ。」

「分かった。行こうぜ、藤島。」

「あ、ああ！」

九と藤島は先に行ってしまった。

そしてそれを追いかけるようにしてついでいく華憐。

大門さんは吉成とペアを組んで階下に降りた。

俺は……

「聖奈、幽にいとがいい！」

ということになり、聖奈とペアでアジト巡りだ。

「私も同行願っていたのだが、よろしいかな？」

影山 日向さんだ。

「もちろん、いいですよ。」

「ありがとう。恩に着る。」

こうして、各自で行動する日常が幕を開けた。

Unknown(前書き)

サブタイトル『Unknown / 正体不明』

Unknown

広大な範囲を占めるアジト内で、俺を含んだ総勢8名は散った。これからは、藤島達抜きで頑張らなきゃな……。ここでの生活にも早く慣れることを願うばかりだ。

俺達はまず先ほどのリーダーの話を参考に、重要人物へ挨拶をした。加川かがわ 和かずこと、リーダーはかなり忙しそうに去って行ってしまったから、

きつともうしばらくは質問の機会を伺った方がいいだろう……。

アジトの主要人物はリーダーによると、上から目線で超クールな『座まじ光寺みやうじ 雅みやび』。

体格の割には比較的フレンドリーで温厚な『相そう馬ま 來らい斗と』。
相馬 來斗の彼女で若干恥ずかしがり屋な『夜や久く 玲れい南な』。

更に、相馬さんからまた聞いてみると、

現在のアジト団員の最強能力者で仮名『Lunacyルナシー』と名乗る少年ぐらいのことらしい。

そしてLunacyは今日、遠征に参加していて、帰還するのはもう少し後になるそうだ。

しかし、最強の名を自分の者にしたLunacyは自分の過去の記憶がほとんどないらしく、

おぼろげに残っているものも、ほとんどが過去の特定に迫るほどのものは無かったと言っていた。

そんな謎多き少年だ。できれば、彼とも今日中にあいさつ程度は済ませておきたいな。

「ああ、緊張した。」

「雅とか言う人、ずーっとこっち見てたよ。」

聖奈が座光寺 雅に目をつけられている。

座光寺もずば抜けた能力の持ち主で、相手の思考を読み取る能力を
持っていて、

俗に言う『念力系』^{テレパス}と呼ばれる能力者だ。

そんな彼がどうして聖奈に目をつけたかと言うと、聖奈だけが思考
を読めないと言い出したのだ。

結果的に聖奈の血については口外されることは無かったが、
おかげで注目されてしまう事になってしまった。できれば知られた
くないんだけどなあ。聖奈の事。

ちなみに『相馬』^{そま} 来斗^{らいと}さんは『加護系』^{セルフ}の能力者。

夜久^{やぐ} 玲南^{れいな}さんも同じとのことだ。

「しかし、思ったよりは早くなじめそうだったな。」

影山さんが言った。確かにそれほど苦もなくなじめそうだ。

アジトの領域内を把握すべく、歩いていると突然頭の中に語りかけ
てくるように話しかけられた。

8名の部外者を確認、解析

「な、なッ!?!」

「な、なにこれ!?!」

「これは一体……!?!」

判明、無能力者5名、能力者3名。詳細解析開始

「な、なんだこれ！」

「こ、怖いよお、幽にイ！」

「頭の中に直で届くような……！」

解析率50%、 70%

「気をつける……！ 何が来るかわからないぞ。」

「承知！」

「幽にイ……。」

「大丈夫だ、聖奈。俺がついてる。」

聖奈を落ち着かせていても、内心乱れているのは俺の方だった。

100%、解析完了。1名『テレパス、Lv1』、1名『オリジンLv2』、1名『オリジン……Lv8』

「なんなんだよ！」

ミッション、スタート

「その辺にしておけ！」

！？

「ルナシー！ こいつらは新人だ。敵じゃない。」

この声は……加川さん！？

「こ、これは一体……？」

「ルナシーの力さ。大丈夫だ。」

次の瞬間、上空から何かかどさつと落ちたような音がした。振り向くと、人がそこに屈かがむような態勢でそこにいた。

「まったく、早計だな。ルナシー。」

「敵じゃ、ないのか？」

「安心しろ。そう簡単にアジトに敵を入れるかっての。」

「そうか、メモリーしておく。」

「ああ、早いとこ頼む。」

「あの、さつきから使われている語句がちょっと分からないですけど！」

「すまんすまん。それについては後で説明する。それで、こいつがルナシーだ。」

「よ、よろしく。」

「こちらこそ……。」

「おっと、すまない！ ルナシー、説明はお前がしておいてくれ！ 頼んだ！」

そう言つと、また足早にこの場を去っていった。忙しいのは本当のようだ。

「それで、君達が新人だつてのは分かったけど、君は何者？」

目線の先には、聖奈がいた。

「え、え、聖奈の事？」

「そう。君、聖奈つて言うんだね。アジトでも類を見ない能力者だ。」

「え、え、でも、聖奈は能力とかわからないもん。」

「嘘をつくな。……と言つても、自覚症状が無いだけかもしれないな。」

「……ッ！」

俺はこの意味を理解していた。自覚症状……は、確かに無かったと思う。

だが、今は認識してしまっている。血だ。恐らく、血の事だろう。これ以外あり得ない！

「もし、判明したなら僕に教えてくれない？ すごく興味があるんだ。」

「判明したら、な。」

俺が横からくぎを刺した。ここで歯止めを利かせないと、面倒だからな。

「君には、聞いていないよ。」

「聖奈は俺の妹だ。赤の他人の事でも関係があれば黙って見てるなんてことはできない。」

「フフ、そうか。君が聖奈の兄か……なかなか優秀そうだな。」

「そりゃあどうも。」

「どっちも、凄い能力者になりそうだな。期待してるからね。」

「期待されてるのかよ……。」

「君達8名は皆優秀そうだから、堕ち込む必要は無いよ。頑張ってるよ。覚醒しなよ。」

そうすれば、あっという間に幹部かもね。」

それを言い残すと、走ってどこかに行ってしまった。って、凄く速いな！

肉体強化が進んでいるのだろうか？ ゾンビの影響ってのはホント怖いよ……。

ところで、覚醒って厳密に言うとなんのことだったけ？

一方、アジトの本部棟

「さて、そろそろいくか。」

座光寺が言う。

「どこに行く気だ？」

相馬が言った。

「ちょっと、目星をつけている奴がいるんだ。期待しちゃうな。」

「そうか。ま、ほどほどにな。」

「わーってるよ。」

座光寺 雅の頭の中は新堂 聖奈の事でいっぱいだった。

「ったく、やつとルナシーの野郎が離れやがった。これで心置きなく話が出る。」

……『念ポイント派察知』。」「

静けさだけが残る。

「お、いたいた。それじゃ、行ってくる。」

「ああ。」

座光寺はまっすぐ聖奈のほうへと向かって行った。

以前から含んでいた不敵な笑みを未だに残したままで……。

C o m e a c r o s s t h e m o n s t e r (前書き)

サブタイトル『Come across the monster
/ 出会いし魔物』

C o m e a c r o s s t h e m o n s t e r

アジトには……こう、なんと言うべきなのだろうな……。ゾンビに対抗する手段が実力のみだと思っていたよ。今までそうだった。こういうチームでは協力が不可欠だったけど、集団にまで発展すると流石に『実力主義』みたいな感じで格差が生まれるものだと思っていた。そして、これからもそうだとは思っていた。しかし、違った。

『このアジト』だけは、実力が絶対ではなかった……！！

「……行つたか？」

物陰に忍んだままじつと新人を見ていたのは河上 かわかみ 佐久 さく だった。

「いや、流石にそこまで警戒しなくても俺たちなら大丈夫だろ。ギリギリ……。」

「ギリギリなら油断ならぬだろう。一線を越えたのは良い。しかし、いつルナシーが評価を下ろすかも知れん。」

「ルナシーも俺達は眼中にはないと思うけどなあ……。」

そして、相方『東条 とうじょう 春 はる』も隣にいた。

「そろそろベストタイミングじゃね？ 邪魔が入らないうちにやっちまおうぜッ！」

「……仕方ない。行くぞ。」

物陰から、いざ出ようと広い道を目指して、二人は姿を道に表した。

「よう、お前ら！」

「な、お前は東条！ どうしてここに！」

「ルナシーが接触したことがどうも気になってな。あの声は俺達にも聞こえていたぞ。」

「聞いてたのか？」

「ああ、説明も兼ねてこうして話をしにきたというわけだ。何かと疑問も多かるう。」

「た、助かるよ……。ルナシーとかいうやつ、そこまで強いのか？」

「近接戦闘は生身の人間としてはそこそこだよ。それなりに武道を心得ているらしい。」

能力は戦闘に関わるものじゃないから今も己を切磋琢磨している。

詳細は後ほど説明するが……。」

「なるほど。」

生身の人間か。俺達はその生身の強度で生き抜いてきたんだ。並じやないぜ。

たぶん、華憐ですらも今までよりは粘り強く耐えていけると思う。

「その能力と言うのが、色々種類があつてな。テレパシーで人とコ
ンタクトを取ったり、

念の力で感情潜入したりする系統が『念力系』^{テレパス}。

別種の力で敵の詳細を探る系統が『視察系』^{インスペクト}。

それから自分自身だけに影響を及ぼす系統が『加護系』^{セルフ}で、
特別分類しがたい能力の類は『特殊系』^{オリジン}と呼んでいるらしい。」

「らしい？」

「リーダーが推測したものだ。今の事全て。ルナシーは話をしたが
らないから、

会話に出された意味を俺達で考え抜いた結果というわけだ。」

「ルナシー、か……。」

「……俺達も気になったのだがハッキリした。さっきのルナシーは相手の力を読み取る

インスペクト『視察系』と『念力系』テレパス二つの能力を有している。

念波に視察系の力がはつきりと浮かび上がっていた。こんなこと、別々の能力者が

協力して初めてできることだ。ルナシーは本当に格上の覚醒者と言
うわけか……。」

「な、そんなことあるのか!？」

「普通はどれか一つだけさ。能力なんて大きな代償と引き換えに使
えているんだ。

安いものじゃない。だが、ルナシーは2つ目まで代償にしている。
それだけのことさ……。」

全然意味がわからん!　そもそも代償ってなんだ?

能力者……って、恐らく覚醒した奴らの事を言うんだろう?

生涯で2度目の覚醒なんてあるのか?

「その、代償ってなんなのさ?」

「……『強烈な感情』と『脳髄に刻まれる記憶』。これが覚醒の鍵
らしい。

直接聞いたわけじゃないからよくわからないが、ルナシーが2つ目
の能力を得た時の事を

覚えていてな。その当時の事をルナシー自身が語っていたそうだ。

ルナシーも覚醒の鍵については同意してくれている。」

「な、なんだそりゃ……。」

「例として言うならば……『大切な人が喰われた』とかだな。」
!!

く、喰われた時……?」

「記憶に残って、且つ強烈な感情……。つまり、これを悲しむ時に、

覚醒する確率は高まるそうだ。」

「なるほど……ってことは。」

「ん、どうかしたか？」

強烈な感情……深く刻まれる記憶……これを、今までに味わってきた人が、俺達の中に3人も？

ということは、聖奈！　そうか、あの時、聖奈は……苦しんでいたよな。

もう、辛い思いはさせないからな。

次は、吉成か？　あのシーンは思い出すと複雑な心境になる。

こういつてしまうのは良くない表現かもしれないが、凄く涙が溢れそうになる。

他人事だからなのかもしれないが、一番苦しかったのは吉成……お前なんだろ？

最後の一人は……大門さんが有力か。

確か、家族持ちだったはずだ。子供もいて、妻もいた。それが、同時に奪われたんだ。

本当の苦しみてのは一番よくわかっているはずだ。

そして、それに耐えながらも俺達の当初4人だったチームをここまで導いてくれたんだ。

大門さんは強い人だ。でも、辛さってのは、誰にでも平等だ。

本当の意味でリーダーに立っていけるような人なのは大門さんのような人の事を言うんだらうな。

「ああ、そういうことか。」

小声で言ったので、誰も気づきはしなかった。不意に口外してしまったが、問題は無いだらう。

「立ち話もなんだろう。場所を移動しよう。」

「あ、そ、そうだな。」

「聖奈、ちよつと疲れちゃったかも。」

「フフ、聖奈は小さいのに、なかなかタフだね。いつも思っていた事だが、

新堂家はたくましいな。」

「守らないといけませんから。聖奈だけはこれ以上傷ついちゃだめなんです……。」

「それでこそ、男と言うものだと思うよ。」

「ありがとう。影山さん。だけど、返事は返せない。」

これ以上は、自分という存在が皆を守れるくらいになってからに……

「それじゃ、行きましょ。」

「少々お時間をいたただきたいのですが、よろしいですかね？」

狭むように放たれた声の発信源は……上空!?

コンクリートの道路を挟むビル。そして、その屋上に人影があった。

「お久しぶりですね。諸君。若干お初お目にかかる方もいらっしやるようですが。」

「て、てめえ……!!」

忘れもしない。その顔、その眼光、その姿!

「貴様……!!」

「幽にイ、あいつつて……。」

「ああ、……江田こた 裕は!」

ギロリとこちらを見下ろす目がここからでも見える。

突然、隣でしゃべりだした者がいた。河上だ。

「誰だか知らないが、そんなところに棒立ちしていて大丈夫か？」

「ここは俺達のアジト圏内だ。入団希望者なら歓迎だが、お前たちは何が目的なんだ？」

「その新堂 幽君とその御仲間の様があるんです。他は去って結

構。

雑魚は失せてもらえませんか？」

「いい度胸だな。貴様……！」

「……たてつくなら、あなたから始末してもいいんですけど？」

「笑止ツ！ 貴様にはアジトの圏内で無礼を働いた愚か者として、罪を償ってもらおう。」

「何を言い出すかと思えば……啓君！」

シャツ！

「動くな。余計な能力も使うなよ？ 分かった瞬間、この首かつ切るからな。」

「ク、いつの間に……ッ！」

河上 佐久の背後に啓が左手の化物のような爪を首に立てている。たたりと一筋の血が流れ出る。完全に佐久は動きどころを無くしてしまった！

「佐久！」

東条の叫びも虚しく、裕に笑い飛ばされる。

「クツハハハハハ！ これは実に愉快だ。さて、その……サクとか言う少年。」

今一度さきほどの言葉を繰り返してもらえませんか？」

「クソオ……！」

佐久の決意も一瞬にして固めるほどの啓の行動に、皆が恐怖せざるを得なかった。

「雑魚は黙ってりゃいいのによお。サバイバルを知らずによくもまあノコノコ生きられたもんだな。」

後ろの啓の言葉が刃の用に突き刺さる。

俺達は実際にサバイバルをしていたも同然の事をしていたわけだが、東条達は……深くアジトとしての誇りを貶けなされている気分だろうか？

こいつらは、それを知っていてやっているのだろうな！ 罪は償う
つてのは良いアイディアだ。

……一応、武器は持ってきてよかったな。矛は未だに手放していな
いぜ。

構えると、啓はこちらを向いた。

「幽にイ。結構時間が空いちまったが、そつちもそれなりに強くな
つたらしいな。」

外見はほとんど変わってねえけど、分かるぞ。」

「お前も相変わらずだな。見る度に複雑な気持ちになってくるよ。」

「……本当に、甘いんだよ。幽にイは。」

「なあ、啓。お前はもう……こつちに戻ってきてはくれないのか？」

「残念だけど、それはできねえ。もう遅いんだ。ここまで来ちまっ
たからには、それなりに

相応のことやっていかなきゃ示しがつかねえんだ。」

「誰にだよ？ お前を縛ってるもんなんか何もねえじゃねえか。」

「……それによ、この姿を人前にさらせるかっての！ ゾンビって
のは、

人と共存できるようなもんなんかじゃねえんだ！ 喰うか喰われる
かの間柄なんだよ！」

「そつか、分かった。……本当は、別の形でお前と合いたかったよ。」

「だが、俺も悪いとは思ってるんだぜ？ その罰はキッチリとるつ
もりだけだよ。」

「もう、これ以上は必要ないか。」

言葉はこれ以上は少なめで良いだろう。通じないなら、いつそのこ
と突き刺さるぐらいの方が、
ちよつど良いのかもしれない。

「さて、始めましょうか。秘密裏ジエノサイドの羅刹遊戯をね……ッ！」

「……砵めッ！」

誰か、気づいてくれ！ アジトの皆！ 侵入者の存在に気づいてく

れ！！ 頼む！

くそ……！！ 誰か、この状況を知る人間は他にはいないっていうの
か！？

S t a r t o f t h e g a m e (前書き)

サブタイトル『Start of the game / 遊戯の
始まり』

Start of the game

「さて、始めましょうか。秘密裏シエノサイドの羅刹遊戯をね……ッ！」

「……砦めッ！」

誰か、気づいてくれ！ アジトの皆！ 侵入者の存在に気づいてくれ！！ 頼む！

くそ……！ 誰か、この状況を知る人間は他にはいないっていうのか！？

「何がジエノサイドだ！ ここで何をしようって言うんだよ！」

東条 春がギラつく目つきで砦に向かって叫ぶ。

「ゲームですよ。あなたはここ一帯を使って私とゲームをするんです。」

「何がゲームだ！ 付き合ってられるか！」

「強制はしません。その場合は私がこの辺にいる人間を片っ端から殺していくだけですから。」

「ふっつっつざけんなッ！」

「まったく、……本当の辛さも知らない餓鬼がきが……ッ！」

ギンツッ！ 碯の目が、急におぞましい雰囲気を放つかのように……！？

東条は片言もしゃべらなくなり、勢いも凍結したかのようになくなった。

「……ようやく、静かになりましたね。」

冷たい空気が辺りを包む。啓は以前のまま、爪を立てている。佐久は動けないままだ。

「さて、ゲームの説明ですかね。ルールは至ってシンプル。

私達が鬼。で、君達が鬼を捕まえる。たったそれだけですよ。」

……鬼ごっこ？

「鬼ごっこ、か？」

「その通り。私たちをとらえる事が出来れば勝ちです。ただし、私たちは捕まるまで

通りすがりの人間を片っ端から始末していきます。もちろん、は阻む

なら貴方達にも

容赦はしません。簡単な事でしょう？」

…

……こいつ

かなりの勝算があるみたいだな。

「制限時間は30分。経過後、すみやかにこの場は離れます。ご理解いただけましたか？」

しかも、30分という、長期戦。一筋縄ではいかないな。

問題は、通りすがりの人間を始末していくという事だ……。

それとアジトの人間は、自由に能力は使えるのだろうか？

自由に使えないなら、この現状にも気づかないのも合点が……。

警戒に関しては怠りが無いはずなんだ。つまり、そういうことなのか？

能力に頼り切ってまともにゾンビとの戦いをしたことがない連中も

いるとしたら、

相当な被害が出る……！！ 瞬殺されてしまう！ どうすればいい

……最善の策は一体……！！？

「真剣な面持ちですね。幽君？」

「……。」

「なら、ごうしましょう。私はここから動きません。貴方達は味方に知らせるなり、

攻めるなりご自由にどうぞ。」

……本当に自信満々なんだな。付け入る隙すきは大きい……か？

「ただし、ゲームが始まってから15秒だけです。ゲームスタートの合図は啓君が拘束解除後、私の下に到着してからです。」

ツ……？

あっさりスタートだと！？

「分かった分かった。」
バサッ

啓が、瞬時に消えた……？

どうということなんだ。

「はい、スタート。」

は？

振り向くと、碯の隣に啓の姿があった。

「いつの間に……！！」

「……5秒経過。」

クソが……！！

「急いで事態を知らせろ！ 戦闘員を非戦闘員のやつらの近くにま

とめとけ！」

俺は力の限り叫んだ。

「わ、わかった！」

東条が走り出す。俺達も行かなきゃな！

「いくぞ、聖奈、日向！」

「う、うん！」

「承知！」

全力で走る。……走っていて気付いた。聖奈が、俺達と同等の速度で走っている……。

今まで無我夢中で気付かなかったが、聖奈……いつのまにそこまでの筋力を！？

「佐久！ 『マインド』で見張ってる！ 動きがあったら知らせてくれ！」

「分かった。……『心眼』！」

佐久の雰囲気が少しばかり異様になった気がする……目が少し変わったな。

「んで俺は……『咆哮』！」

「正気か！？ 位置がばれるかもしれないんだぞ！」

「言葉に乗せなきゃバレないって……！」

能力者は走りながらも能力を使えるのか。自由に能力は使えるみたいだな……。

だとすると、知ってる人は他にもいるはずなんだが……。

走っていると、突然に人影が見えた。俺達はすかさず止まった。

「よう、お前ら。……なんだ、お前らも一緒か。」

「な、お前は座光寺……！」

確か鋭い眼光を持って、関わりたくないような重要メンバーだった。

たか？

醸している空気がお前らしいけど、今は構っている暇は……！

「新堂 幽と聞いたか？ お前。」

「あ、ああ。そうだ。」

「お前と話がしたくてな。」

「……座光寺。今はそんな悠長なことしてる場合じゃねえんだ。話は後にしてくれ。」

「何不安そうな目つきしてんだ？ 眼を見たらわかる。相当な実力者だと」

「悪い！ 俺達は先を進む！ お前も早く逃げろ！」

そう言つて俺は走った。すると、皆も足を進めた。座光寺を横切るうとする……

ガシッ

腕を強く掴まれた！

「な、座光寺！？」

「待てよ、『地区最強』。」

阻まれて、皆が足を止めてしまった。これはマズイ！

「皆、先に行け！ 俺の事はほっとけ！」

「わ、悪い！」

東条は続けて走った。そして河上も東条の隣で動き出した。

……聖奈と影山さんは残ったか。

「15秒！ さあ、ジェノサイドの始まりですッ！」

笑い声とともに裕の声が聞こえてきた！

やばい！ クソ、こいつ何なんだよ！

「そう慌てんなよ。侵入者は他のやつらが始末してくれんだろうが。」

「今回はわけが違うんだ！ いいから放せよ！」

「だから、いままでそういうゾンビとか、強盗が入ってきてもな。」

「一人たりとも逃がしてねえんだ。安心しろよ。」

こいつ、他人事のように言いやがって……自分で警備した事は無い
んだろうな。

この口ぶりから察するに、上から高みの見物をしていたわけだ。

「付き合っほどてられるかッ！」

腕を振り解ほどいた。

すると、

ガシッ ドスッ

「うぐっ！」

「幽にイ！ ちょっと、何するのさ！」

「小娘は黙って見てろ。邪魔だ。」

こいつ……！ 平気で掴んで蹴り飛ばしやがった！

「けほっ！ 何するんだ！」

「話を聞かねえからだよ。黙って聞けよ。せつかく俺が話してやっ
てんだからよ。」

な、なんだこいつの性格は……。何がしたいんだよッ！

「……………」

こいつは、きつと、仲間を……こつという態度で接してきたのだろう
な。

俺達をまだ部外者だと思っているのか？ ありえない。リーダーと

接触したんだ。

一応……飯ではあるが仲間だろ？ 狂っている。こいつは、間違いなく、『害悪』だ。

「幽にイ！ 大丈夫ツ！？」

「小娘、俺はそいつと話してんだ。だまってそいつから離れる。話が出来ねえじゃねえか。」

やめろ、聖奈。離れろ！ そいつは普通じゃない！ 暴行に出るかもしれない！

「聖奈、……大丈夫だ、離れてくれ。」

「良かった……！」

「茶番はもういいだろ？ ほら、どいたどいた。」

それにしてもこの座光寺とかいう人間……人としては最悪だ。

仲間を信じているのか？ 助けているのか？ 協力しているのか？

……してないだろ？

「……おい、座光寺。」

「ああ？ 新人よお。普通そこ『先輩』って呼ぶんじゃないのか？」

「……ざ……な。」

「何言つてんのか聞こえねえよ！ そしててめえは邪魔なんだよ！

小娘ええツ！」

ガッ

「や、め……！」

「カハッ……」

「な、な……！」

ドサッ

せ、聖奈……？ 聖奈が、目の前から急に……右に動いて……？
右に向くと、ぐったりと横たわっている。苦しそうに、両手で腰を
抑えている。

こ、こいつ、何をした？ まさか……『聖奈に手を出した』のか？
この光景から、目が反らせない。涙が、にじみ出て……

「もう面倒くさくてしょうがねえ！ あのなあ！ どけつつつたる！
さっさとどけば蹴られずに済んだのによお！ バァ力！」

言葉を聞いた瞬間、俺は……『俺』でなくなった。

何か、こう、頭の中で弾けるような、そんな感覚。
そして同時に抑えていたものがなくなったような、開放的で不思議
な感覚。

しかし……心地は良くないな。
座光寺、お前は俺達にとって害悪にかなり得なかったようだ。
だから、もう手加減もしないし、奥手にもならないからな。

「……ふざけんな。」

「あ？」

「何したんだよ……お前。」

「小娘蹴り飛ばしたんだよ。見えなかったのか？ もっかいやって
やろうか？」

ああ、お前たちの面子の一人か。こうしてみると、無能な屑くずにしか
見えないが……

生きているだけでも感謝するんだな。小娘。」

何勝手な事言っただやがる……！！

俺は、もう自分を抑えられねえ！ 分かる、自分でもわかる。

この感覚。感情に吞まれていく自分自身が！

覚悟しろよ、座光寺。 てめえは……俺の領域に踏み込んだんだからな。

「覚悟しろよ、座光寺。」

「新人が、いきがってんじゃねえぞ！」

俺は矛を構えて一直線に走った。矛先を前に向けて、両手でがっしりと掴む。

座光寺は矛の動きにだけ目が言っている。おまけに矛先しか見えてねえな。

俺は矛を左手だけに持ち替え、矛を左に水平にして持った。視線が、大きく左にずれる。

俺を怒らせたんだ。ツケはしっかりと払ってもらってからな！

「ゴフツ ケホツケホツ！」

俺は視線が反れた座光寺に向かって思い切り蹴りを入れた！

「武器を使うのかと思いきや、いきなり肉弾戦か……！ なめやがっつて！」

「お前、弱いな。口先だけか。」

よろめく座光寺に、今度は思い切り横薙ぎの一撃を加える。

「ウゴツ！ ハア、ハア。」

脆い……脆すぎる。

「俺が、アジトの中核だと知っててやってるのか？」

「知るか、雑魚が中枢とはんだお笑い草だ！ 聖奈を蹴った分ま

で、
お前の体で償えッ!!」

ゴスッ

クソ野郎が!

「うおおおおお!!」

俺には、怒りしか見えていなかった。
完全に我を忘れていた。

「うらあッ!!」

思い切り蹴りあげた。

建物の壁に座光寺が叩きつけられるかのような音を立てて地面にへたり込む。

「この、野郎……派手にやってくれたな……ッ!!」

「まだ足りねえよ。こんなもんで済むと思っな。」

償え、聖奈に、謝れ! ゲス野郎……!

「……『^{アップデート}身体強化』。」

……何か、能力を持っていたみたいだな。関係ねえ。捻り潰すまでだ。

「おらッ!」

矛で難いだ! ……が、手ごたえが以前より少ない?

「へへ、こうなったら、良い勝負できると思っぜ?」

「ふんッ!」

余裕でしゃべっている間に、腹部に突きを入れる。が、これもダメ
ージはいまいち……?

「この状態だと、お前すらも小物に見えるぞ!」

今度は蹴りを喰らった。向こうの反撃が、思ったよりも早かった!

「ウグツ！ ガハツ！」

そして、想像以上に重い……！

「ヒハハハハツ！ どうだ、思い知ったか！ バアアカ！」

「……そっぴやよ、話ってなんだ？」

「んあ？ 話？ ああ、どんぐらい強えのか腕試ししたかっただけ。

それだけ。」

「……屑くずが。」

「は？」

もう、関係ねえ、邪魔はさせねえ。キレたぞ！ 俺はキレたぞ！

座光寺！

まだ見ぬ自分の中にある何か伝わってくる。これが……『覚醒』
なのか？

分かる。どうすればよいのかが、自然と入ってくる。……やつ

てやる。

「お前の命で償え。……『ティルフィンク覇命剣』。」

この時の俺の脚は、蹴り飛ばされた距離から容易たやすく俺を座光寺のも
とへと運んだ。

そして、放った蹴りはいとも簡単に座光寺を吹っ飛ばした。

「グアアアツ！ な、何が……！？」

……落ち付いている。俺は怒っているはずなのに、やけに冷静だ。

「ゲホツ 痛え……クソ！」

そして、また俺は瞬時に座光寺から一気に距離を狭め、拳を突き出
した。

「ゲホオツ な、なんで急に強くなっただ……！？」

「謝れ。」

「……はあ？」

「聖奈に、謝れ……！」

ぎらついた目線で、座光寺の顔を掴んで、地に叩きつけた。

そして、無我夢中で蹴りと突きを繰り返した。
ゲシッ　ゴスッ　ゴッ　ガッ

「ゴブツ」

いよいよ、座光寺はもがき苦しむまでに至った。

「ガブツ　も、もうやめてくれ！　ま、参った……！」

「ふざけるな……！」

涙を一筋、頬を伝った。お前は、間違っている。

「頭を下げる相手が、違うだろ！」

矛で薙いだ。渾身の力で叩いた。

「ウガアアアアア！　頼む、もうやめてくれえ！」

「黙れええええ！」

矛を思い切り振りあげて、下ろした！

「もうやめてええええええ！」

聖奈の声が響く。矛が、ぴたりと止まる。

「幽にイ！　もうやめてよ！」

「な、聖奈……。」

「もういいの！　もう、いいから……！」

「本当に、いいのか？」

「お願いだから、もう……。」

聖奈、なぜ、何故泣いているんだ……。

憎き奴の敵を打っているのに、なぜ、止める……？

……やめろというのなら、これ以上は無意味か。

「分かったよ……済まなかった、聖奈。だから、もう泣かないでくれ。」

「幽にイ……！！！」

俺に抱きつく聖奈。……ごめんな。聖奈。お前の本当の気持ちがわかってやれなくて……。

こいつはもう放置でいいだろう。気を失いかけているし。

俺も、聖奈を痛めつけたやつを……解決したからと言って救おうとするほどできた人間じゃない。

聖人君主は、俺には無理だ。恨むなら、自分の愚かな行為を恨め、座光寺。

「幽、いまのでかなり時間を消費してしまった。……あの人間は、どうするのだ？」

『ジエノサイド』とやらは、もう始まっているのだぞ……!!」

しまった！

俺とした事が、座光寺にかまっている間に相当時間が……!!
クソ、クソおおおお！

「……日向さん、聖奈を連れて安全な所で待機していてください。俺は、碯を追います……!!」

「それでは、幽の身が」
「俺の事はいいです。今は、任せてもらえませんか。」

……聖奈に、これ以上は……。積荷は俺が背負う。

「分かった。必ず生きて帰ってくるのだぞ。幽……。」
「ああ、必ずだッ！」

そう言って、途中で別れた。走っていると、よくわかる。周りがかめてくる。碯、必ずお前を始末する……!!

スタートから今に至るまで、すでに7分30秒が経過していた。残り時間 22分30秒。

Runner of Limit (前書き)

サブタイトル『Runner of Limit / 駆者の限界』

Runner of Limit

スタートから今に至るまで、すでに7分30秒が経過していた。残り時間 22分30秒。

「啓君、どうかしましたか？」

「……ああ、さっきのスタート地点の方角あたりにおかしな気配があつてな。」

「新堂 幽君ですか？」

「さあな、流石にこの距離じゃ解析できねえ……。」

「若干ですけど、面白味が出てきましたね。」

「そうかあ？ ……うし、こっちも終わったぞ。」

グチャッ 啓の右手が肉塊から引き抜かれ、血が滴^{したた}る。

「このアジド、面積の割には警護が薄すぎますよ。よくもまあ名乗れたもんです。」

「拍子抜けするのはもう慣れたけどよ、いくらなんでも雑魚すぎる。」

「こんなに弱い能力者始めてみた。」

「所詮は宝の持ち腐れってところですかね。才あるモノが持つて初めて宝は宝と呼べる価値を生むんです。」

「なるほどな。こいつらは豚に真珠ってことか。ま、御似合いだぜ。」

「啓君はその能力、もう慣れましたか？」

「……ああ。『加護系^{セルフ}』^{セルフ}にしては珍妙な部類だから不安だったけど、容量は掴んだ。」

「そうですか。これで2つ目でしたか？」

「そうだな。1つ目は『視察系^{インスペクト}』^{インスペクト}だったからがっかりしたけど、こいつはかなり役に立ちそうだ。」

かなり嬉しそうですね、啓君。凶悪な笑みだと私でも思いますよ。

「ふふ、流石はインスペクトの中でも屈指の『円環支配の傍観者^{フィールドウナー}』^{フィールドウナー}の使い手！」

研究した甲斐がありましたよ。」

「まだ使いこなせねえけどな。セルフも『悪徳信者の創世律^{バッドスキル}』^{バッドスキル}と使い勝手が

未だに全部把握できてねえし……。使いこなすには時間がかかりそうだ。

つか、そういう裕だって1つだけ持つてんだろ？」

「クク、そういえば話をしただけで披露した事が無かったですね。」

「そうだよ。気になって仕方が無かったんだ。後で見せてくれよ。」

「クッククク。そのうち見せてあげ……。風向きが、怪しくなってきましたね。」

「………何かが、こっちに迫ってくる！ このままじゃばったり出会っちまうぜ！」

「『円環支配の傍観者^{フィールドウナー}』^{フィールドウナー}で確認を！」

「もうやってる………！ こ、こいつは

「なんですか？」

「幽にイの反応だ！」

「なんとッ！」
期待が高まりますねえ！ さあ幽君、早くこちらへおいでなさい！
目にモノを見せて差し上げましょう！

……なんとなくだが、こっちに裕がいる。

感覚と言うか、勘でしかないが分かっちゃう。向こうから強烈な悪意が漂ってきやがる。

く、未だに涙が止まらない。聖奈のことは、もう終わったはずなのに。止まらない……！

そう思っていると、俺はあるいていた。建物の角を曲がると、白衣の男と人ならざる男がいた。

「……幽にイ！」

「本当に幽君でしたか。驚きです。」

……こいつらのせいで、聖奈が、聖奈が……！

裕に対する怒りは本物だが、啓……お前に対しては複雑な心境だ。

姿形は依然と違えど、もとは血のつながった兄弟だ。こんなことになっちゃうなんて……。

本当に、どうして、碯の側に着いたんだよ……！

「幽にイ、泣いてるのか……？」

「……覚醒しましたか。」

「お前のせいで、聖奈が、聖奈が……！」

「聖奈に何かあったのか？」

「……………」

俺はもう、言葉を発しなかった。発せなかった。複雑すぎて、怒りが満ちていて。

もっただだ視線を浴びせるだけだった。矛を片手で構える。水平に左手で持ち、

歩いて近づいた。

「『クリアコード解明』！」

「な、なんだそりゃ!？」

「……………流石、啓君の兄！ 高貴な能力まで繋がっているとは……！」

……………理解できない。こんな風に、命を絶つなんて。ふざけるな。ふざけるな！

お前たちの足元に横たわっている人たちの命も、お前たちがやったんだろ……？

人の命は安くないだろ！

コイツラ二八、味ワワセテヤル。人々ノ痛ミヲ……。

「うぐつ！ ああああああああ！」

「な、なんなんだこれ！」

「覚醒のレベルが高すぎですね！ 一体何が幽君をここまでにさせているんでしょうか！？」

「聖奈に決まってるんだろ……！！ やばくねえか！？」

……

辺りが鎮まる。

「幽君？」

……返事はなかったが……

ギロツ 視線が碯を向く。

直後、幽がすさまじい速度で碯目掛けて地を駆けた！ そして、この瞬間掌を眼にもとまらぬ勢いで突きだした！

「危な……グフォッ！」

ドシャツ 手ごたえのあつた感覚だが、碓ではなかった。啓だ。啓が身代わりになって碓をかばっていた。

「ゲホッ、お、おい、これが覚醒初期のレベルか……!?!」

「相当な使い手。それも、最強レベル。決して太刀打ちできなくは無いです、

代償も高くつく。それほどの相手ってことです。」

「引いた方がいいか？」

「そうですね。捕まらなければどうという事は」

ヒュッ!

「フッ グううッ!」

見事に呼吸の隙間に入り込むがごとの自然で素早い動きで碓を自分の射程範囲内に、

いとも簡単にその位置に至るまでの過程を通過して突きだされた^{しゅ}拳。^{うけん}

碓はすんでのところで両腕で防御したが、勢いで突き飛ばされた!そして衝撃が碓の体の芯にまで響いた。

「流石にこれでは分が悪い。……さあ、捕まえてみてくださいよ、幽君!」

タンッ

^{ちゅうしちやく}跳躍で^{かれい}華麗に弧を描いて飛んだ二人。そして、建物の向こう側へと姿をくりました。

「う、ぐ、はあ、ああ……。」

力が抜けていく。この脱力感と睡魔は一体……

そして気を失いかけそうになるが、ハッと意識を取り戻す。

「ま、まだだ……！」

現在 スタートから14分07秒が経過していた。
15分53秒。

残り時間

A t h i r d p a r t y (前書き)

サブタイトル『A t h i r d p a r t y / 第三者』

A t h i r d p a r t y

現在 スタートから14分07秒が経過していた。残り時間
15分53秒。

「まだ、終われねエ……」

力が抜けた体を必死に支えた。碇はまだ余力を残してやがったか。本気を出しても、届かなかった……。

100m程度の距離を歩いてみたが、相当ダメージが大きい。負担でミシミシと震えてやがる……。

その場でグツと体を直立状態にする。一歩たりとも動かないが、力んだ表情が表に出ている。

その時、九の言葉が脳裏に浮かんだ。

『死ぬのが怖くて戦ってられるかっての。』

……そうだ、あいつは言っていた。
だけでもっと重みがあったのは……

『そんなんじゃないつまでたつてもあいつに負けちまうぞ』

九はハツキリと言っていた。確かあの時俺が直前に言っていた言葉は、

『悪いが、俺は人間の心を捨てるつもりは無いんでな。』だったな。

あんなこと、やってたよ。あの時以上に重い意味が伝わってきた気がする。

……どうすりゃいいんだ？ 九の言葉のように……人間の心を捨てればいいのか？

九は人間の心を捨ててきたのか？ 戦う度に？
その時、響く声が聞こえた。

新堂 幽！ 聞こえるか！

この声は、東条 春！！

聞こえるなら、片手をあげてくれ！

片手をあげればいいのか？ それなら、矛をもった左手で……。左手を俺は上げた。

OK！ そこから動かずに待っててくれよ！ もう下げないぞ！

俺は腕を下げた。

う、立っている状態が辛い。ここまで消耗が激しいとは。

「いた、いたぞ！ こっちだ！」

見知らぬ人の声がした。声の方向を向くと、続々と人が現れた。

「新堂！ こんなところにいたか！」

「春……！ どうしてここに。」

「そりゃあこっちのセリフだぜ。人気のないところで突っ立ってて何してたんだ？」

「う、動けねえんだ……。」

「へ？」

「この状態から動かせねェんだ。すげえ、疲れて……ウオツ！？」
ドサツと横に倒れた。

「おい、どうしたんだ！？ マジか、こんなところで……！」

「担架たんかみたいなものはあるか！」

「準備してある！ いつでもいける！」

「よし、運ぶぞ！」

こうして、俺は運ばれた。場所は、アジト内だが本拠のビルとは少し遠くの位置にある建物だった。

それでも、ビルの大きさは問題ない。7階まであり、横に広い。

「しつかりしろ！」

「あ、ああ、大丈夫……夫だ。」

「心配しなくてもいいぞ。ここには、今は戦闘部隊がかなり集まっているからな。

事情は影山ってやつから聞いた。ゲームはもう始まっちまってるらしいな。

殺人ゲームって感じなのかどうかはしらねえが、厄介なことってのは間違いないみたいだな。」

「あ、ああ。お前たちも油断するな……！」

「戦闘部隊がいるじゃねえかよ。それに、合流してない部隊もあるが死亡報告はまだねえしよ。」

まだ、届いていないだと？ ……そうか、周囲への警戒が薄くなつたから周りに目が行ってないんだ。

だから俺が目にした光景がいきわたっていないことにも納得がいく。

「死んだ人間はいるぞ……。」

「なんだと!？」

「俺は見た！ あいつらが殺してる姿を！」

「許せねェな。なら、もう被害は予想以上だ！」

放った声を遮るかのように次の瞬間、扉が大きな音を立てて開かれた。

「……真剣な目つきでどうした？」

扉を開けていたのは……座光寺ざこうじ 雅みやびだった！！

「おま、まだ動けたのか……！！？」

「新堂 幽。あの程度で俺を超えた気になるなよ。能力があったからって調子に乗りすぎだ。」

能力……。そんなもの、あるうがなかるうが……頼すがって絶すがるやつはどう考えたって格下だろ！

「お前は、俺の能力を解除させたにすぎないんだ。」

能力の解除。これが如何に座光寺と密接になっていたかがわかる。

「座光寺。能力の解除って……解けたのか？」

「春は相変わらずだね。いや、若干成長したかな？」

「そういうことか。若干って言い方はねえだろ……。」

「悪いね。だけど、新堂 幽。君には驚かされたよ。俺様の『表裏』

が動くとはね。」

「リバーズ……？」

「ああ、あいつの能力さ。『表裏』リバーズはいつも通りの状態に自分の力を施錠ロックするんだ。

ヤバイ時だけ施錠ロックが外れて本当の力で動けるってわけ。強いのはこの状態の時のことだ。

あー、もちろん戦闘員から見たら平常時でも十分強いけどな？ ただ、本当の性格まで封じちまうから、

色々と面倒な役を演じる人形ってとこだな。ロックが外れた時は口調も元に戻るし、

二重人格を作るって言ったほうが早いな。」

「二重人格……か。」

「そうだね、君とはまた手合わせ願いたいけど、今はそれどころじゃなさそうだ。」

「行くのか？」

「君をそこまでにした連中を見てみたい。」

座光寺はそこまで言うと、俺の反応を見ずに扉から出て行ってしま

った。

いったい何がしたかったんだ？ 俺の安否の確認か？

……そういえば、影山 日向さん。そして、聖奈はどこだろう？

一方で、碓と新堂 啓はアジトの中央側のビルの屋上にいた。

「おい、どうするんだ？ 碓あ。あいつら以外まだ殺^ヤつてねえだろう。」

「そうですね。思ったよりも手こずってしまいました。」
碓は思い悩んだ。

「少々、ゲームをなめていました。30分というのは短すぎましたね。」

「欲張りすぎたんだ。次から気をつけるよ？」

……その時、妙な声で語りかけられた。

「んー、そうね。優秀つてのも困りものよね。」

「ッー!？」

「だ、誰だてめえ!？」

研究員とは見てとれない容姿。Tシャツにジーパンという服装。そしてその上に羽織っているローブ。
黒くて長い髪。場違いな笑顔。

「間違いありません。彼女の名は」

この女性の名は……!!

「Minelie Candorre……!」
ミネリエ キャンドール

「御名答。」

ミネリー・キャンドーレ……。外国の名を使いながらも日本を活動の拠点として、

ゾンビに深い関わりを急に持ち始めた謎の多い女性のはずですが。

「素晴らしいわね。能力と力の併用ってものは。完璧に人類を超越しているのよ。」

「能力名は……。『氷結魔術』でしたか？」

「正解。あなたって、どこまで知っているのかしら？」

「だいたいわかりますよ。顔を見ればそういう表情をしていますから。」

「へえ。つくづく情報網が広いのね。感心するわ。」

「フフ、これくらいできなくてどうします？」

本当は『クリアコード解明』で読み取っているだけなんですがね。

この能力。相手の能力を読み取る能力ですが、脳内で唱えると劣化するんですよ。

脳内詠唱だと相手の『能力の名称と大まかな用途』しかわからない。口で唱えるとこれに加えて『詳細』と『対象の能力段階』レベルまでハッキリと伝わってきます。

これが欠点であり、長所でもあるんですが……。隙あらば唱えたいですな。

「あなたは、何か能力があるの？」

「ええ。『インススケット視察系』の能力ですけどね。」

「……訂正するなら今のうちよ？」

「何のことですか？」

その瞬間、ミネリーの左腕が何かを示唆する動きを見せた。その次には、

喉元に飛びつかんとする何者かが動き出していた！

「フラーウィンド！ ジュミネイ！ 今すぐに拘束なさい！」

「はい！」「了解！」

「ッ!?!」

後ろですと!?!?

念入りに準備をしていたとは……。

ガツ 喉元に爪が当てられている。これでは身動きが……。

「嘘ばっかり。」

ミネリーは続けた。

「あなたは厄介な存在になると思っていたわ。現に、能力も知られちゃてるわけだし。」

でも、だからって嘘をつくのはよくないわよ。」

「グ……何を今更。あなたは、どういった経路かは断定できませんが、自分の情報を流出させた。」

その結果が招いた末路ですよ。あなたは、自分のミスを私に押し付けようとしているだけにすぎません。」

「言いたいことはそれだけ?」
本格的に……!

私には、まだ計画が……!! こんなところで、死ぬわけには……! 啓も、冷静を装ってはいますが、動けないのでしょうか……。

「あまり、恐怖つてのは好きじゃないんだけど……。その子達。感染者だから気をつけてね?」

「……!!」
感染する可能性も否めない……!

治す方法は…… 聖奈の血しかないですか。世界は複雑に回っていくことになりそうですね!

もう、もうすぐ……今すぐに動かなければ、計画が無駄になってしまふ!

そんなこと、あってたまるものですか……!!

「……。」
不思議な、理念に捕らわれない何か、私の欲望を支配する……!

「話しましょう。」

「そう、それでいいのよ。」

「私の能力は」

そう、これが、創造の力。

「『領域網羅の幻想系譜』……あなたが恐れる恐怖とやらですよ！

！」

碯が、状況を踏まえても尚、とたんに笑みを浮かべた！

「お、おい、碯？」

啓の呼びかけにも笑みを浮かべるだけで無気味であった。

「……見せてみる。」

「フフフフ、ハハハ！」

ミネリーの声にも応答なし。

「……もういい、殺れ！これだから恐怖というのは……！」

「はい！」

爪が振りろされる刹那でも碯は笑みを止めなかった。

シュツ

「な、な……いない！」

「一体どこに」

すると、別の場所から声が聞こえてきた。

「ここですよ。ミネリーさん。」

「！？」

碯は無傷でそこにいた。余裕の笑みを含めながら……。

「ククク、短時間とはいえ、ずいぶんと節操のない真似をしてくれましたね？」

「あなたにいったいどうやって……。」

彼女の質問は、すべてが終わってから余裕の笑みでこたえて差し上げましょう。

「このご恩、全てをそっくりそのまま……私の施しを加えてからお返ししてあげますよ……！」

碯の眼が不敵な笑みで、且つ鋭くミネリーを睨みつけた！

「『ホーダーリスミック領域網羅の幻想系譜』の力を見せてあげましょう！」

現在、スタートから27分01秒が経過していた。残り時間 2分59秒。

A m a t t e r o f o p i n i o n (前書き)

サブタイトル『A m a t t e r o f o p i n i o n / 見
解の相違』

A matter of opinion

現在、スタートから27分01秒が経過していた。残り時間 2分59秒。

「手の内を見せてくれると考えれば、安い代償なのかしら？」

「今、手を引くなら丸く収まるんですけどねえ……いいんですか？」

「ふん、なるほどね。相手にサービスしちゃったってことね。」

でも、それも私にとっては興味深いわ。どうしても、知りたい。」

「……。」

もう、残り時間がありません。

そもそも、ゲームと名ばかりの『偵察』なんですから、本格的に捜索させてもらいたいものです。

なんせ、厄介な軍団。徒党を組むことに慣れていて、且つ能力者の集団。

相手の能力の段階は把握できましたが、規模は不明のまま。

このままでは帰れません……。

「停戦協定、にしましょうか。」

「寝ぼけてるのかしら？」

「クク、あなたにはメリットがあるかもしれませんが、私には何もない。」

あまりに不釣り合いなことだとは思いませんか？　ここであなたを始末しても私には

関係性が薄い。しかし、あなたはそれを自分にとって大きな利益とする……。

戦うにしているハンデも大きいですし、こちらは逃げるという行為も不自然ではないので。」

「そうね、私を相手に逃げられるのならいいんじゃないかしら？」

「啓君！」

「OK！」

ガッ

「うぐっ！」

「フラーウィンド！」

「面倒なことしやがって。次は命ねえと思えよ。」

流星、啓君ですね。『バッドスキル悪徳信者の創生律』があるとこつもうまくいくとは……。

「次はお前だ。」

「ふうん、面白いこと言うじゃない。」

「面白くありませんよ。なんせ、こればかりは私もリスクーだと思えますから。」

なにせ、バッドスキル悪徳信者の創生律は

「な、な！」

相手の能力を複製して自分のものにできる能力ですからね

！！

「バツチリ死んどけよ……！」

ドゴオッ

ミネリー周辺の床が碎け散る！

今回は『エクストラロージョン周辺爆破』ですか。

抑え目でしょうね。本来ならビルの中枢を破壊し、ビルごと巻き込むのは容易なんでしょうが……。

「爆破の能力……！？」

「面倒じゃないですか！ 殺してもいいですよね？」

「いいえ、まだよ。未知なる解明があるかもしれないし、せめて生け捕りじゃなきゃね。」

ピピピピ、ピピピピ

30分ジャスト……！！！！

「時間ですね。残念ですが、あなたたちには足止めでもさせていただきますよ。啓君！」

「もうやっつてるの！」

次は『フライト照明』の能力で目くらまし。次のときには

我々は安全なビル崩壊余波の圏外で中枢どころか、ビルの下部を狙つての爆発連打。

柱なんて関係ありませんよね。何せ土台が崩れるわけですからね。

「……そろそろ時間です。」

「ああ、……ハッ！」

ドン ドンッ

爆発音が響く。のちに鈍く崩れる瓦礫がれきの音。

「急ぎましょう。厄介なエースが出てくる前にね。」

「ああ、碯は相変わらず何事もないかのようにやってのけてくれるよな。」

「努力の甲斐と言ってほしいですね。相手は履き違えた上に選択を過っただけですけどね。」

啓君のためにも時間は稼いだでしょう？」

「ああ、おかげで、拘束されてる間に盗めたが……。」

「ミネリーの眼は確かなものです。啓君の能力を複数だと危険視したと思われませぬ。」

さらに、爆発という能力が予想だにできなかった能力のように対応の遅れ……。

普段なら真っ先に『氷結魔術フリーズード』ですよ。なのに、使えなかった……。つまり、完全に予想外で後れを取らざるを得なかった……。」

「ほうほう、そりゃあ、お前相手なら知る相手こそ誰でも警戒するしな。」

「さらに言わせてもらえば、私のハツタリにもまんまと引っ掛かってくれましたしね。」

「本当は使えたんだろうにな……。ハツタリとかいいつつも、手の内を隠しただけだろ。」

「クク、鋭くて助かります。ま、盗めただけでも収穫ですかね。今回はもう引き際はです。」

拠点へ戻りますよ。」

「おう！」

去りゆく二人。ビルの崩壊を知る者はまだ、アジトの人間には知る由もなかった。

座光寺が去ってから幾分かが過ぎた。

「……………」

「心配すんな。座光寺はあんなったら負けなしだ。」

「だけどよ……………」

「勝てるんだ。絶対に！」

……………気がかりだ。聖奈と日向が……………今、ここにはいるのか？

「な、なあ、聖奈と影……………」

ドン ドンッ

「な、なんだ!？」

「……………まさかな。」

「どうかしたのか？」

「嫌な予感がするんだ。」

「座光寺の強さを知れば、そんなことも言わなくなるよ。」

「わかった、わかったって……………」

ゲーム終了の旨すら知る手段がなかったアジトの団員は、さらに深入りすることになった。

自らの意思で……。

「痛ッ やってくれたわね……!!」

「ど、どうするんですか。」

「もう、いや!」

「手ぶらじゃ帰れないわ。 裕が来たからには理由があるはずよ。突き止めましょう!」

「わかりました。」

「……軽く終わらせましょう。」

裕の代役といつてもいいほどの存在が、この地に訪れた。

そして、裕を負わずに、留まった。

事実を知らざる人間と、狂気に満ち溢れた人間。衝突する時、本当の交戦が始まる

b a d c o m b i n a t i o n (前書き)

サブタイトル『b a d c o m b i n a t i o n / 凶悪な組み
合わせ』

bad combination

事実を知らざる人間と、狂気に満ち溢れた人間。衝突する時、本当の交戦が始まる

座光寺^{ざこうじ}が、虚^{むな}しき道路を一人で進んでいた。彼にとって新堂 幽とは『赤の他人』であり本来ならば『興味を示すに値しない人物』であった。が、それを大きく覆^{くつがえ}したのは『紛れもない実力』。

座光寺にとって平和とは『退屈』そのものであり、混乱を言い換えるならば『遊戯』の様だった。

今までのような平和な世界では得られない、目に見えぬ何者かが座光寺にとって

生きていくうえでの重要なスパイスだった。武道家の血を引いた所^ゆ以^{えん}か、

それともあらゆる偶然をはらんで生まれた狂気^{テンサイ}だからなのか。

だが、今の座光寺にとってはそれすらもどつてもよかつた。
今は『新堂 幽』と同等か、それ以上の快樂スリルを感じ取れるであろう
『遊戯』を求めていた。

「新堂 幽か……。」

名前を口にしただけでも期待感をそそられる様な高揚に浸れる座光寺。

彼が今この場においてどれほどの影響を及ぼすのかを知る者が存在しない事と、

新堂 幽と江田 裕の衝突が無くなったことも知る人間はいない事。
あまりにも狂いすぎた状況の中でも只管ひたすらに前へと進むという選択は
正解に限りなく近いものだったのかもしれない。

「座光寺……お前もか。」

「ん、相馬そつまに夜久やぐ……？」

「一人で何しようってんだ。念力系テレパスが伝わらなかつたわけじゃない
だろうに？」

座光寺はこれに何食わぬ顔でさらりと回答した。

「相馬。確かにテレパスではそういう事は伝わっていたけど、今は
状況が違うんだ。」

緊急事態だし、敵は並じゃない。そうだろ？」

「そうか、……戦うんだな？」

「勿論。結構楽しみだからね。」

「お前をそこまでにする相手なら、俺たちも黙って見ているわけに
はいかないな。」

「そうね。早いうちに始末しましょう。」

「芸がないなあ。始末だなんてさ。戦うなら楽しまなきゃ損だよ？」

「生憎だが、余裕なんざこつちにはないんでな。」

「……全く、僕よりもましな能力があるつてのに。勿体ない。」

「何が能力だ。座光寺、『今のお前』は俺たちからしてみれば戦闘

凶にしか見えない。

その状態のときでも感情のコントロールができればいいんだが……。

「感情なんてものは積まないほうがいいのさ。荷物を背負ってまで戦う理由はないからね。」

話しながらも足を進めていった座光寺は大きな十字路の道路に出たところで、

右に曲がる。ビルが立ち並ぶばかりだが、そこに不審な何かを見た。

「ん、あれは……。」

「何かいたのか？」

「人影……。」

「相手は人間か。いや、それとも新手のゾンビ……？」

「どっちにしろ手ごわそうね。今までつかまらずに徘徊しているなんて。」

「向こうのほうだ。」

座光寺が走り出すと相馬、夜久も続いた。

口には出さなかったが、座光寺も一応は『念力系』テレパスの使い手。

範囲内の人間の心を読み取る『心境潜水』マインドダイヴがある座光寺には、

犯人を捕らえてしまえさえすれば自軍の目的は完了となる。

「面倒だな。ルナシーさえいてくれれば……。」

「来るよ。ルナシーは。」

「どうしてそう思う？」

「ルナシーは全部見えてると思うからね。誰がどこでどうしているかなんてあいつにとってみれば

大した苦労もなく把握できちゃうもんだから……差し詰め、居場所が見えているかくれんぼってところかな。」

「ルナシーはいつも戦闘部隊を組んで送るだろう。どうして今になつて……。」

「俺たちが一つの隊として組んだことってあると思うかい？　ないよね？」

みんなどこかしらの戦闘部隊のリーダーだったから組む機会なんてなかったはずだよ。」

「そ、そういえば……。」

「だから、ルナシーもきつと違和感を感じてくるはずだ。部隊を送るなんて野暮やぼなことはいらないよ。」

一方、その頃……

「なあなあ、碓！ ホントにいいのかよ！」

「何がですか？ あなたはこのまでいいんですか？」

「そ、そりゃ、むかつ腹が立つけど……引き際じゃなかったのかよ！」

「引き際というのは、一時退却すべきタイミングのことですよ。それに、

あまり望ましくないのでしよう。『自分の獲物を盗られる』のは。」

「碓は熱心だよ……。幽のことは大丈夫だろう。強いし生き伸び

てるし。」

「……だったら尚の事、対策を取らないと全部持っていかれてしまいます。」

強いのはOKですが、中途半端な強さだと返り討ちにあう危険も高いですしね。

正直幽君を盗られると……厄介事が多いですからね。聖奈君も付いているとはいえ安心は……。」

「そうか。……少数だけでもう動きが活発になってきてる。行くなら急ぐぞ。碓！」

「ええ！ なんと少しでも阻止するのです！」

座光寺率いるアジト精鋭。ミネリー。碓が主戦場へと赴き始めた。幽という歯車が抜かれた今、狂ったものは全て一つの終着点へと向かい始めていた。

そして、とあるビルにて……

「もう行くのか？」

「……誰かが、来ている。」

「強そう？」

「かなり。」

「そうか……。」

「それじゃ、もう行く。」

「気をつけるよ。」

ルナシーの名が刺繍されたローブを身にまとってビルを出た少年。彼はビルから少し歩いたところで立ち止まり、空を見上げた。

「……空が泣いている。」

空は雲行きが怪しくなり、灰色の雲が覆っていた。

そのあと、すぐに足を進めていった。少年が進む先が『終着点』だということとは彼しか知らない。

見渡す限り雲に覆われたこのアジト周辺はまるで何かを予兆しているかのよう

着々と色の密度を高めつつある。

いよいよ、アジトを巻き込んだ唐突な遊戯^{ゲーム}は終盤に突入しようとしていた。

A c c i d e n t ! (前書き)

サブタイトル『A c c i d e n t ! / 衝突!』

A c o l l i t i o n !

見渡す限り雲に覆われたこのアジト近辺はまるで何かを予兆しているかのよう

着々と色の密度を高めつつある。

いよいよ、アジトを巻き込んだ唐突な遊戯^{ゲーム}は終盤に突入しようとしていた。

人影の進んだ方角を辿り、座光寺一行はその足を止めることなく進んだ。

「そろそろ武器、構えたほうがいいと思うよ。」
人影を見た次の時から一行の表情はやや険しくなり、警戒も強まった。

ゾンビは1体も見当たらないはずのアジト内に身を軽くして徘徊する侵入者を討伐すべく、

若干足を進める速度が増した。

座光寺の言葉を聞いた相馬が答えた。

「任せておけ。」

腰のベルトに固定されてある鞘さやから刀身を引き抜く。

手に握られているのは歪いびつで小刻みな波を思わせる刃やいば。

長さはやや大き目の包丁と寸分すんぶん違わぬ程。

「いつ見ても物騒なナイフだね。」

「サバイバルには必需品だ。といっても、経験とコネが物を言った社会から唯一持ってこれたものだな。」

「へえ、初耳だな。」

「玲南、充電できているか？」

「大丈夫よ。」

「よし、もう少し急ごう。」

相馬が言つと、一行はさらにスピードを上げて前進した。

ビル群が立ち並ぶ一帯は彼らのテリトリーであり、移動の痕跡をさりげなく察知しながら進んでいた。

「やっぱりこっち側だったか。足音がダダ漏れだな。」

「耳じゃ君しか、わからないよ……。ガレキとかコンクリートの跡とか見てる？」

「そんなことしなくてもわかるわよ。放っている雰囲気は異質だもの。」

「そういわれると……。」「
ビル群はただ静かなだけなのに、そこに残された雰囲気は悪意の漂う予感が彼らを刺激した。

「臆するな！ まだ勝負が始まったわけでもない。隙を突いて、生

「け捕りだ。いいな？」

「はいはい。」

「勿論よ。」

「うむ、……あそこの十字路を右に曲がったところだろう。行くぞ！ 先手を取れ！」

掛け声で一行がコンクリートの上を駆ける！

十字路を右折し、彼らはそこで身構えながら活目した。

「見つけたぞ、侵入……」

そこで見たものは侵入者の予想外の姿だった。

「あら、後ろにも？」

「……ちよつと、これどういうことよ!？」

「ジユミネイ姉ちゃん、あんまり起こるのやめようよ……。」

「煩い！ フラーウインド！ あんたも少しはやる気出さないよね！」

「ご、ごめん、ジユミネイ姉ちゃん！」

「全く、そのノロいところが欠点なのよねえ。で、どうするの、ミネリー？」

「囲まれちゃったってわけね。」

ミネリーと呼ばれる女性が見据えた先には2人組の姿があった。

「援軍ですか。これは予想外でしたね。果たして吉と出るか、凶と出るか。」

「敵も味方もねえよ。今はただ、殺るか殺られるか、それだけだ！」

研究者の白衣を着た男はひとときわ冷静で、隣のゾンビは対照的に熱が入っている。

「何をごちゃごちゃとー！」

立ち止っていた相馬が一気に距離を詰める！

そしてサバイバルナイフを一番手前の少年に向けた！

「うわわわ！」

常人にはとんでもないような跳躍で回避された。

「く、化け物め！」

一瞬で距離が開いてしまった。

「まるでとんでもないモンスターにでも出くわしたかのような顔ね。」

口を開いたのはジュミネイと呼ばれている女性だった。

「……お前ら、何しに気やがった。」

「だ、そうよ。ミネリー。」

「んー、そうね。理由といえば、人攫ひきさらいってところかしら。」

「この、外道め。」

「そうね、外道中の外道『新堂 幽』一行もその言葉の重みを理解していると思うわ。」

「新堂……？ あいつが何か関係あるのか!？」

「私らの目的は新堂なの。聞きわけが良いなら、素直に引き渡してもらいたいんだけど。」

生憎、私らは気が短くてね。面倒なことするようなら次々に壊すし、殺していくわ。」

「言い分はわかった。貴様らは、ここで滅びろ！」

鋭い眼光で迫る！

「『加護系セルフ』!！」

相馬が言い放った。

「能力の発動？ 面倒ね！ 殺すわよ！ いいでしょ、ミネリー!？」

「姉ちゃん、やはり落ち着いた方が」

「黙りなさい！ あんたは目の前の男を殺せばいいのよ！」

「う、ね、姉ちゃん……。」

「兄弟喧嘩の最中申し訳ありませんが、よそ見とはずいぶん余裕ですわね。」

「え？」

顔を背けたのは少年だった。しかも、向けた方向は殆どのほうだった。

「バカッ、前、前」

さらに振りかえると、そこには宙でナイフを向けている相馬が今まさに突きつけようとしていた！

シュツ

「ツチ、外したか！」

「う、血が……。」

傷は浅く、左手に切り傷一つがつけられた。一筋の血が流れる。

「あ、危なかった。」

「うおおおお！」

雄叫びを上げ、さらに攻める！

「同じ手は食わな……え！？」

フラワーウィンドと呼ばれていた少年が目を見張って固まった。

「来斗！ チャンスよ！」

相馬は宙で加速して、距離があつたフラワーウィンドとの差を一瞬で埋めた！

「とどめだ！」

ナイフで突く！

「うわぁッ！」

サシュツ

今度は右のわき腹。これも浅く、服と皮膚の表面を切つた程度だった。

「手ごたえがない……早いな。」

「流石に、感覚が研ぎ澄まされちゃうな。」

フラワーウィンドが逃げ腰だったのが、険しい表情になり、攻めの態勢に入った。

「相馬！ 後ろだ！」

突如、座光寺の声が響いた！

「後ろ？ …… な、貴様！」

「チ、馬鹿！ あんた後で殺すから！」

背後からはひそかにジユミネイが忍び寄ってきていた！

「まずは貴様の命からもらいうける！」

ナイフを急所狙いで的確に突く。交わされるも、次への攻撃を休めずに続けた。

「ちょ、馬鹿！ あんたいい加減にしなさいよ！」

「口だけで煩い奴だ。それに馬鹿はどっちだ。これじゃ、子供のころからロクな生活してなかっただろ？」

「面倒な奴！ ミネリー！」

「準備はできているわ！ どいてなさい！」

「何だと……？」

ミネリーのほうに目を向けると、こちらに向けて手を構えていた！

「特と味わいなさい、最高の能力を！」

その時、ひんやりとした空気が相馬の周囲を包みこんだ！

「こ、これは……！ ハッ！」

大きく跳躍。彼の能力で飛躍的に跳ね上がったその姿はまるで空を舞う鷹。

そして飛んだ先は

「うわわ、どうして僕なの！」

「……すまない！」

ザシュツッ！！

「グ…… ガホオッ」

口から吐血をするフラァーウィンド。彼の跳躍先にはフラァーウィンドがいて、

相馬は勢いに乗せてナイフで腹部に突き刺した。

それは素直に肉へと刺さり、深々とした傷を証明するかのように血

があふれていた。

「ウググ……ゲホツゲホツ！」

「フラーウィンド!?」

ジュミネイが近寄ろうとしたが、

「寄るな！」

相馬がナイフを向けて威嚇した。

「来たらとどめをさす。近寄るなよ？」

「それはこちらの台詞じゃないかしら。」

この大人びた口調は、ミネリーの声。

再び相馬の周囲に冷たい空気が漂い始める。

「くそ、なんなんだ、あの能力は……。」

危機を予知し、跳躍で再び飛ぶ。着地してから振り返ると、フラーウィンドの周囲に氷が落ちていた。

「馬鹿な、氷だと……!?」

「知らないつてのは死に値する無知よ？ でも、この世界で生き延びる人間はきつとあなたのような人材ね。」

「そうとも限りませんよ？ 今の世は死人でも人間でもない者が生き伸びる時代です。啓君！」

「おうよ！ ……標準固定、角度よし、位置よし、範囲よし……ハアアアッ！」

啓の周囲に用意されていた瓦礫の小破片が目にもとまらぬ速さでミネリー、ジュミネイ、フラーウィンドの3人を襲った!!!

「ガフツ ブフォッ！」

「ちょ、危なッ！」

「まだまだ発想が子供ね。」

ジュミネイ、ミネリーはよけたが、横たわっているフラーウィンドだけは直撃した!!!

口からさらに血が出る。

「フラーウィンド！ しっかりしなさいよ……」

ジユミネイが呼びかけるが、フラワーウィンドは息が荒く、動ける状態ではなかった。

「仲間意識がここまで影響するなんて……ん、あれは……。」「
ミネリーが愚痴をこぼした時、碯の後ろで人影が見えた。ミネリーはそれを逃さずに見据えて、
次のときにはもう行動していた!!」

「人質発見!!」
碯のはるか横を通過して、人影へと向かって走った!
その人影は二人組で

「む、な、なんだ、貴様は!」
「だ、誰!?!」

2人とも女性で、片方が木刀を構える。ミネリーの迫る速度で予測して木刀を構えると、

ミネリーは動きを止め、様子を見た。

「く、ここは広いな……どうなっているんだ。」

「か、影山さん。聖奈達、大丈夫だよね……?」

それを見た碯が驚きの表情を浮かべた。

「な、まさか 新堂 聖奈……!?! なぜここにッ!?!」
碯が急接近する!

「人質とはいい度胸ですね、ミネリー!」

「悪人つてのはたいていこういうことするじゃない! あなただつてそうでしょ!」

碯のほうに向かって言い放つと、影山 日向のほうへと向きかえり、手を向けた。

「悪いけど、人質になってもらうわ! ハッ!」

「貴様、いったい何を……ぐあ!」

「か、影山さん!」

影山が左手を抑えて膝をコンクリートに付けた。

「ちっこいこっこのほうが、大人しそうね。」

「ま、待て！」

「待たないわよ。ノロマはそこで大人しくしていなさい！」

ガバツ

「ケホツ！ な、何するの！」

「人質になってもらうわ。あんたに利用価値があるかどうかなんてわからないけど……。」

「く……面倒なことを！」

碇がぼやく。

「こいつらも面倒だな。敵か味方かもわからねえ！」

啓はジユミネイを相手にしていた。が、相馬側も狙っているため、啓は狙いをつけずにいた。

下手をすれば敵を増やす行為に安易に走れない啓ではないが、今回は見も知らぬ能力者同士。数で負けている啓は易々と行動に移れずにいた。

「ああもう、しつこいわよ！」

「ジユミネイといったな。逃げてばかりで逃げ腰の貴様に言われる筋合いはない！」

悔しければ、本気でかかってこい！」

「誰がそんな挑発にのるもんか！」

「……仕方ないか。」

座光寺が言った。

「座光寺？」

「ちょっとただけだけど、読めた。あいつの考えが。俺が相手してる間に、フラーウィンドを囲め！」

「わ、わかった。」

「夜久は充電しとけよ！ いつでも付加かけられるようにしとけ！
「いつでもOKよ。」

「うし、行くぜ！」

拳や蹴りで積極的にジユミネイに立ち向かう座光寺。

必死によけるジユミネイだが、一行にフラーウインドを諦める気配がない。ここまでは計画通りだ。

「相馬、フラーウインドをもっと傷めつけとけ！」

「ちよつと、馬鹿！ 何いってんのよ！」

「そんなこと言ってる間に、ホラ！」

サッ

蹴りが顔の頬を掠めた！

「あ、あんた！ よくもやったわね！」

大きく跳躍して、着地。目つきがそのままだと違う感じになり、雰囲気も逃げ腰の時とは違っていた。

「いいわ、目にも物を見せて上げる……覚悟しなさい！」

「最初からそうしろ。相馬、速くやれ！」

「ウツザいわね、あんた。先に始末してあげる。」

座光寺に向かつて一気に駆けるジユミネイ！ 座光寺はそれを見て足を止めていた！

「ちよ、座光寺……！？」

夜久 玲南が驚愕の声で張り上げた。

「心配すんな。お前は自分の役割を果たせ……。」

そういうと、止めていた足でジユミネイのほうへと走り出した！

「面白い。」

互いに距離を詰めあって、一瞬だけ目を見合った。

「死ね……。」

「お前がな。」

一言だけ互いにそっと放つと、次にはもう体が攻撃に移っていた！

ドスッ

「座光寺ッ!!!」

夜久の大きな声があたりのビル群に響いた!!!

Personality(前書き)

サブタイトル『Personality / 人格』

Personality

「座光寺ッ!!」

夜久の大きな声があたりのビル群に響いた!!

「……………」

「勝負あつたわね!」

「座光寺!!」

ぽたつと一滴の血が落ちる。

その後、不敵な笑みを座光寺が浮かべる。

「フフ、その程度で勝者気取りか?」

「な、なんですか?」

「掠^{かす}ただけだよ。気迫は凄かったけど、腕は鈍^{なまくら}なのかな?」

「クッ……………このお!」

冷静さを欠いていて、気迫だけ発せられている彼女の懐に蹴りを入れるのは至極容易だった。

接近しようとする物体にそれを上回る大きな力で衝突させた時の威力は計り知れないものとなった。

「ウウ……ち、畜生……！」

ジユミネイもフラァーウィンドも勢いを失いかけていた。

残すはミネリーののみ。

「相馬、この女を見ておいて。」

「お、俺か？ なぜだ？」

「まだやらなきゃならないことがあるんだ。」

「……今は緊急事態だからな。引き受けてやる。だが、やるからにはしくじるなよ？」

「任せておいてよ。」

そういつて座光寺が進んだ方向は……

「聖奈……また厄介なことに。」

「ウフフ、なかなか面倒そうな表情ね。そんなにこの娘が大事？」

「アジトへ脅迫するとは、なんと横暴な！ これが何を意味するかわかっていいるのですか？」

「さて、何を意味するのかしらね。」

「……私に語らせるつもりですか。言わずともわかるでしょう！？ これは……戦争ですよ！？」

「そんなに御大層ないい方しなくてもよいじゃない。団体での相手も許容範囲よ？」

「バカ言わないでください……！ 新堂家も逸材が揃っている。率いる面子も厄介ものばかり。

戦っても勝機はかなり薄い。自殺行為ですよ！」

「あなたがそこまでうるたえるなんて、この上なく面白そうじゃない！ いいわ、その戦争、引き受けてあげる！」

「そうはいかないよ。」

「へ？」

ミネリーが碁の後ろから迫る座光寺を見た。

「あなたは……。」

「自己紹介はなしでもいいよね？」

「そうね、今は必要ないわ。」

「とりあえず、君たち面倒だから……出て行ってくれないかな！」「自分を顧みずに頭部狙いの蹴り。」

見事に空振りだが、座光寺は予想していたかの如く体勢を立て直した。

「座光寺家らしい戦い方ね！」

ミネリーが発する言葉も耳に入れず座光寺は攻め続けた。

片腕、片足、どの攻撃も素早く放たれ次の動作への隙が生じることが許さなかった。

間一髪であしらうミネリーだが、距離はなかなか開かなかった。

「フフ、もしかして超常現象系ポルターガイストの能力じゃなかったの？ 勿体ない。加護系セルフかしら？」

「生憎便利そうな能力はほかのみんなに持って行かれちゃってね。

でも、実力じゃ負けないよ！」

そう言いながら放った拳はミネリーの頬を掠めた。

「流石に座光寺家相手だと加護系セルフでも強いわね……！」

「残念だけどあなたの舞台は幕切れよ。これでどう!？」

バツと目の前につきだされた少女。苦しそうな表情で思わず動きを止めた。

彼をそこまでさせたのは『新堂』という単語が関わっていたからだ。

座光寺は聖奈が新堂とどういった関わりがあるのかを知らないが、会話から生まれた焦燥が

座光寺に動きを止めるほどの影響を与えたのはゆるぎない事実であった。

「この娘、死ぬわよ？」

その時、啓がミネリー

「幕切れなのは、てめえのほうだよ！」

その次の瞬間、ミネリーの顔面真横で衝撃が走った！

パンッ

「ちっ、そういえば碯の連れは相当な能力者だったわね……。」

「舐めてもらっちゃあ困るなあ！ 俺の能力は一筋縄で攻略できると思うなよ？」

「爆発……いや、あれも衝撃を与える能力か？ 何も無い空間から衝撃波を……。」

空気を圧縮する能力かしら……？」

「いやあ、取り込み中のところすまないが、俺の能力は一つだけじゃない。

そこらへんも脳内に叩き込んでほしいね！」

「複数能力ですって？ 碯の研究はそこまで進んでいたって……！？」

キツと碯のほうを見るが、聖奈が解放されたのを見て碯は再び傍観者のような視線に戻った。

片時も安堵のある姿勢で心境も安定に近づいている。

一度安定するとブレがない碯には、冷静さを欠いたものが負けといつても過言ではない。

「君、大丈夫？」

「え、うん。お兄ちゃん、誰？」

「座光寺 雅。詳しいことはまたの機会に。今は安全第一さ。」

新堂とまた一つ、関係を得た座光寺。

聖那は敵意こそ示さなかったが、信頼にいたるほどではなかった。

「あなたは二人を連れて退却してください。これ以上騒がれると面倒なんですよ。」

「ザコ引き連れて王様、いや、女王様気分ってか？ 他でやってくれ。」

「ク……覚えていなさいよ！」

フラーウィンドに近づくと、目を閉じて集中した。

手には黄色で透明感がある物体を持っていた。

「……『浮力の光』」

その後、フラーウィンドの体を軽々と持ち上げて、肩に乗せた。

「ジユミネイから離れて頂戴。」

「……この戦いも終わりか。」

そう言っただけでジユミネイから距離をとった。

ジユミネイの体もひょいと持ち上げ、右手で抱えた。

「次合った時は覚悟なさい。」

捨て台詞を吐いて、ミネリーは去った。

「お、おい、碇。なんで逃がしたんだよ！」

「ミネリーは我々の手で殺すべきではない。それに、今殺すべきでもないんです。」

彼女はとある組織の重要なメンバーの一人であると推測しています。それがもし本当なら、

我々は敵対することになるでしょう。対立ならまだいいですよ。でも、

殺してしまったら……ゾンビ大戦とでもいっべき革命が起こってもおかしくはないはずですよ。」

「壮大な背景だな。そしたら、ミネリーはずっと付きまとうのか？」

「殺さなければ危害を加えても文句はないでしょう。フラーウィンドとか言いましたかね？」

あのような、連れてきた部下を始末すればミネリーは必ず引くでしょうね。ザコを殺せばいいんじゃないですか？」

「まともつぱいが結構曖昧だな……。」

「フフ、確実なんてものが手に入るなら私もぜひ手に入れてみたい！」

「はあ……。そろそろ行く」

「それはまだ早い！」

「はッ！！？」

「えっと、あなた方は？」

相馬が碯に声をかけてきた。

「……私は、江田 碯というものです。以後、お見知りおきを。」

「俺は……えーっと、啓！ 啓だ。……よろしくな！！」

自己紹介に啓が戸惑いを覚えた。その理由は、座光寺だった。

（思わず口から出ちまいそうになったが、座光寺とか呼ばれてたやつ……新堂って言葉に

何かと反応している気がするからな。様子を見てからでも遅くはないだろ。）

そう思った啓。座光寺の行動には明らかに新堂を意識するものがあると啓はにらんでいた。

「見も知らぬ方々に戦ってもらってしまったな。我々の事件なのに……すまなかつた！」

「いえいえ、大丈夫ですよ。こちらは無事でしたし。」

「あ、ああ。ま、結果オーライ！」

「疲れもたまっているだろ？ 休憩所に使っている場所まで案内したい。同行願えないだろうか！」

「それでは、お言葉に甘えて。」

「っはー！」

（啓君、やけに別の人物を演じていますね。何か企んでいるのでしょうか……？）

口には出さなかったが碯も啓の異様さに疑惑した。

「ところで、啓君。その腕は……？」

「腕？ 腕って、これがどう……アッ！」

啓の腕はゾンビ化が進んでいて、常人にはあり得ないものとなっていた。

ごまかしようのない異形の腕が視線を集めた。

「こ、これは……俺の能力だ！ いやー、今のご時世いつどこから襲われるかわからないし！」

戦っていない時だって常に準備万端にしとかなないと勝てる相手も勝てないからなッ……！」

啓は焦燥に駆られながらも言い放った。反応は……

「ふむ、啓君の言うとおりだ。戦う準備は大切だな。我々も体制強化を呼びかけなくてはならんな。」

「そうね。この先何が起こるか分からないもの。」

(な、なんとか通った！？ 危ねえなあ、おい！)

「ウグッ……！」

後ろで苦しむ声。全員が振り向く。

「……聖奈？」

聖奈が、苦しそうにしていた。すぐに膝を屈して、本格的にもがき始めた！

「な、おい！ しっかりしろ！」

「い、いったい何が……。」

「うぐううう！」

「おい、何かされたのか！？」

聖那は、か細い声で言った。

「ウウ、へ、変な注射打たれちゃったよお……。」

場の全員に衝撃が走った。

「な、何！？」

「ミネリー、とんだ置き土産を……！」

「すぐに運んだほうがいいんじゃない！？」

「急ごう。まだ間に合う！」

「いや、これはそんな生易しいものではない……!!」
聖奈の目つきが変わり始めた。しかし、矛盾がさらに困惑を招いた。
「な、泣いてる……?」
「苦しいのか!？」
「こ、来ないで……!」
「ど、どうして!？」
「速く、自分が抑えられそうにないの……!!」
「バカ、そんなこと言ってる場合じゃねえよ!」
「速く、速く……!!」
歯を食いしばって必死に耐える聖奈は、啓にも大きな影響を与えていた。

「何があつたつてんだ……!」
「落ち着いてください、啓君。」

「あ、ああ。わかつてる。けど……。」
「……組織の陰謀か何か? それとも、自発的な覚醒? 注射は覚醒促進剤のようなものでしょうか?」

「逃げて、早く!!」
次に瞬間、聖奈を中心に衝撃波が生じ、場のものを全て吹き飛ばした!

「ウゴツ」

「ケホツケホツ なんだ!？」

「思惑通り……! 最悪のシナリオですか!」

「聖奈!？」

目は意識がありそうなのだが、空を見上げている。瞳は充血とは違うような、

紅色に染まっていた。

「聖奈は、攻撃系の能力か?」

「違ったはずです。こんなこと、今までには……。」

聖奈は小さな声で立ち膝状態で空を見上げながら言った。

「助けて……幽にい、啓にい……。」

そして、その言葉は啓の耳にははつきりと聞き取れた。

「聖奈……まだ気にしてくれて……。」

啓もか細い声で言った。聞き取ったものはいなかった。

バチバチツと音が発せられる。黒い雲が覆っていて、ポツポツと雨が降り始めていた。

戦いの終わりは訪れていたにもかかわらず、聖奈は苦しみ続けている。

今回の一連の事件はまだ終わりを告げてはいなかった……！

M e n t a l u n d u l a t i o n (前書き)

サブタイトル『M e n t a l u n d u l a t i o n / 心の波
動』

碓視点です。

M e n t a l u n d u l a t i o n

黒い雲が覆っていて、ポツポツと雨が降り始めていた。戦いの終わりは訪れていたにもかかわらず、聖奈は苦しみ続けている。

今回の一連の事件はまだ終わりを告げてはいなかった……！

「うう……くうッ！」

聖奈が何かを必死でこらえているように、片手で頭を押さえながらうめいている。

「ど、どうするんだ！？」

「対処するしかありません。この場で！」

「……どうすれば止められるんだ。」

「原因を把握しなければ何とも言えませんね。単なる能力の暴走なら……極度の疲労で止まるはずですよ。」

「俺の出番だな？ 『悪徳信者の創生律』^{ハットスケル}。」

「よくわかっているじゃないですか。……ただ、劣化版で務まるのかどうか。」

「流石に複数の能力同時に使うのは無理だぜ？ 今の聖奈、モロ攻

撃能力だ。

それに全方位の展開までできるとは……死角なしか。」

「術者は流石に安全圏内けんないみたいですね。能力の切り替えにはどれくらいかかりますか？」

「そうだな。切り替え程度なら一瞬でできる。」

「能力の……劣化れっか具合は？」

「まだ本物の半分くらいってところだ。」

「……聖奈はまだ相当な余力を残しています。どうあがいても長期戦は覚悟してください。」

「んなの、承知の上だ！」

啓が聖奈の元へと駆け出した！

「……『余力ドレイン転移』！」

聖奈はその場を動けずに今だ能力の漏れもであたりを衝動に包んでいく！

「お、おい、あなたの連れ行っちゃったぞ！ いいのか!？」

「いいんです。彼が、唯一これを抑えられる能力者。彼で收拾がつかなければ……。」

「收拾がつかなかったら、どうするんだ？」

「その時は……。」

「と、とにかく今はあいつを止めなきゃ！」

「待ちなさい！ 聖奈の衝動に対抗できなければ今度はただでは済みませんよ!？」

「仲間のためだ！ 覚悟はできている！」

いくら能力者の集団といっても一個人で対抗できるはずが……。

「全く、仕方ありませんね！ 『ポータルリスミック領域網羅の幻想系譜』！」

「能力者だったか……。策があるのなら、協力してくれるな？」

「今回は身内の危機ですのでね。サ・ビスですよ？」

あまり人前で公開はしたくなかった。しかし、收拾をつけるにはこれしかありません。

概存能力『護壁付加』の起動を実行・対象『新堂 啓』

「聖奈あ！」

「うあああああ！」

バシユッ！

大きくはじける音があたりに伝わる。

「う……って痛みがない？」

よし、旨く行きましたね！

「啓君、今です！」

「え、あ、ああ！ 喰らえええええ！」

聖奈の頭に手を当てた。

「うっしや、成功！」

「サポートします！ 絶対に離れないください！」

「ああ！」

く、代入が面倒ですね。

概存能力『護壁付加』の起動を実行・対象『新堂 啓』

「う、うう……。」

聖奈を取り巻く能力の漏れが少しだけ弱まった。

「お、おお、いける、いけるぞ！」

「これで、万事解決と行けばいいのだが……。」

「おい、座光寺。あの少年の能力は不明だが、勝算はあるのかも知れんのだぞ？」

「素直には喜べないよ。そういうの、全部が終わってからにしてくれないかな。」

「そ、そりゃそうかもしれないが……。」

「確かに、座光寺の言うことは正しいかもしれないわ。だって、ほ

ら……。」

夜久が指を差した先は、碇だった。

碇は目を瞑って集中している。

「何かの能力なのか？」

「今は邪魔しないで準備することね。」

「突撃のか？」

「……殺す準備よ。」

「夜久。流石にそれはまずいんじゃない……。」

座光寺の言葉を夜久は遮った。

「あのね、能力者を止める一番手っ取り早い方法って何かわかる？」

「殺すことなのよ。」

「……フ、団員が団員を殺すなんてね。このアジトも落ちるところ

まで落ちてしまったのか。」

「団員ですって？」

「頭に血が上ってるんじゃない？ 入団したのはさっきだけど、幹

部の座、不信任な気もするね。」

座光寺の言葉を聞き、言葉に詰まる夜久。

概存能力『スキルミラー反射付加』の軌道を実行・対象『新堂 啓』

「こ、これで少しは……。」

聖奈のほうを見やる。

「うぐぐ……！」

啓は確実に吸引して疲労させているが、聖奈の能力弱パワーダウン化は目覚まし

いほどの速度にはならなかった。

「ったく、どんだけ吸いとりゃいんだよ……うちの妹は……！」

「う、ぐあああああ！」

キーン！

金きり音に近い音程が周囲の耳に届く。

「な、なんだ!？」

ドゴオオ！

やや距離があるビルの上から瓦礫がれきが落ちてきた！

「危ねえッ！　いくらなんでもそんなのありかよッ！」

……反射がなければやられちゃましたね。それにしてもなんて破壊力ですか。

反射能力が一発で消し飛んでしまうとは！

幸いにも反射は正常でしたが……吸引がなければ貫いていてもおかしくない威力！

「ッ痛！」

碯が揺らぐ。しかし、なんとか踏みとどまり、姿勢を保った。

「こ、ここまでのものとは。」

流石に能力の使いすぎですか。あと2回ほどの代人が限界でしょう

……。

……脳へのダメージを抜きにすると体を張ることも方法の一つでしょうか。

吸引能力を自分に代入して、護壁付加も加えて突撃……。

疲労スピードは増しますが、啓も私も生還できる保証はなし……。

一方、啓の安全に費やせば啓は無事に帰れるかもしれませんが、聖奈は助からない。

そもそも前者でも助かるかどうか。何しろ聖奈の容量は未知数に近い。

碯が案を練っていると……

バチチチチ！

「うああ！」

聖奈から次の衝動が周囲にまき散らされる！

フッ

「いい加減にしろッ！」

しまっ……護壁バリアが！

「聖奈、俺だ！ 啓だ！ わかるか！？」

「うぐ、け、啓……にいい？」

啓を認識してからやや衝動の流れが弱まった。

「そうだ、俺だ！」

概存能力『オンリーシールド護壁付加』の起動を実行・対象『新堂 啓』

「ぐうううッ！ こ、これほどの痛みとは……。」

頭痛がひどくなって……きましたね。

「啓、にいい……！」

聖奈の能力漏れの鎮まりが皆にはつきりと伝わった。

「聖奈……ったく、心配掛けさせるなよ？」

「どうして、ここに……？」

「お前がやばそうだったから、俺が助けに来てやったんだぞ？」

「あ、ありがとう。啓にいい……。」

「もうゆっくり休め。だからもう我慢するな。」

「わかった、啓、にいい……。」

聖奈は目を閉じた。その瞬間

バチチチチチ！！

聖奈から放出された青い電撃が啓を襲った！

フツ

そして、碯のバリアは一瞬にして消滅した。

「え？」

驚く啓。しかし、その時間すら許すことのない次手が迫った！

バシユッ！

「ぐはっ！」

な、聖奈の攻撃でバリアが……それにあれほどの距離まで飛ばすほどの能力！

「やべえ……まだあんのか。」

壁にたたきつけられ、電撃まで浴びた啓はボロボロだった。

自分で回避することも困難を極める状態で聖奈の我慢から解放された最後の一撃が、

衝撃波となつて啓をめがけて直線状に放出された！

「啓君！！」

……頭痛に関しては奇跡に託すしかないようですね！

概存能力『護壁付加』オンリーシールドの起動を実行・対象『新堂 啓』

「うわあああああ！ ……つて、あれ？ なんで無傷なんだ？」

啓が見た先の聖奈はコンクリートに横たわつていて、場違いな寝息を立てていた。

「っはああああああ、た、助かった！ 碓あ！ やったぞ！」

ところが、碓はおぼつかない足取りでその場をひき返していた。

「お、おい、碓？」

「……啓君。聖奈を運んでください。休養をとれば後は万事解決ですから。」

「あ、ああ。」

「万事解決か。俺たちは必要なかったみたいだな。」

「そうね。無益な殺生じつじつがなくてよかつたわ。」

「夜久……君、冗談だよな？ 僕は君に対する印象が変わつてしまひそうだな。」

その後、碓はなんとか頭痛を隠し、平常時を装おんやいながらアジトの休憩所へと向かつて足を運んだ。

啓は聖奈を運び、夜久が影山を支えながらその場から早々に去つた。休憩所の前で立ち止まると、碓が口を開いた。

「やっと、ですね。」

「つかああ！ 疲れ溜まる！」

建物の中に入ると、見覚えのある人物と目があつた。その姿は

新堂 幽だつた！！

「な、碓……ッ！」

「奇遇ですね、幽君。」

「てめえ、なんでここに！」

「平和協定とでも思ってください。今は団結すべき時です。」

「貴様、あの事を……ガフッ」

「まあまあ新堂君。そうあせらないで。疲労も傷も全部癒えてからにしなよ？」

「詳しいことは啓君から聞いてください。それでは。」

会話を終わらせると足早に上の階へと昇って行った。

別のフロアに移ると、碓はばったりと倒れこんだ。

「おい、碓！？」

「啓君……後の事は頼みます……。」

「待てよ、おい……！」

脳を酷使しすぎましたか……啓君、お願いしますよ……？

碓は深き眠りに就いた。

この晩、アジトでは遠征も行われずに日程を終えて団員の休養を図る契機となった。

この日から聖奈は3日。碓は2日ほどの眠りに入り、その間、遠征は中止となった。

加川は事情を聴きとるまで新たな敵、またはゾンビと何らかの関係者に警戒する旨を報告した。

遠征は結果的に碓が目覚めた日の翌日まで行われることはなかった。そして時は過ぎ、碓が3日の眠りから目を覚ます日の日差しが地上

に差し込まれた。

T a l k t i m e (前書き)

サブタイトル 『Talk time / 語り時』

Talk time

碯が3日もの日数を開けて目を覚ました時、並々の疲労で済んだ啓がアジト内での出来事を任されていた。

啓も碯の世話は怠ることはなかった。

3日というのは大げさすぎるが、日で起きる時間は30分となかった碯の疲労は

並大抵ではなかったことは皆にも伝わっていた。

そして、時は流れ…… 聖奈は奇跡的な回復力で元気を取り戻した。

影山 日向は幸いにも物理的な軽傷で済み、今までと差し障りのない程度のもだった。

幽一行は他のメンバーと合流し、目を覚ました碯の元を集っていた。

「碯、いったいどういふつもりか説明してもらおうか。」

幽の重々しい一言が発せられた。

この場には碯、啓と幽一行の面々のみ。厳選された場所での密会のような状態である。

「……さて、どう答えたらいいんでしょうかね。」

「おい、あんまりふざけた理由なら今すぐにも戦うからな。」

碯の解答に異論を述べたのは藤島だ。

「……なあ、碯。一言だけでいいじゃねえか。用件だけでいいんだ。」

啓が碯に助言するが、碯はそれでも口にするのを躊躇している様子だった。

「何を躊躇しているのかはしらねえけど、ロクでもねえことなのは前科もあるし。」

藤島の率直な意見は紛れもない藤島の見解からは妥当なもの。

しかし、裕はここでついに言葉を許した。

「少しばかり、時間が必要なんです。」

「時間だと？」

大門さんの疑問が皆の代表のように放たれた。

そしてそれに答えたのは啓だった。

「俺たち、困ってるんだよ。この一帯に凶悪なゾンビがいるって情報があるんだ。」

「それって、どう見てもお前の事じゃないのか？」
九いちじくが聞いた。

「ゾンビってのは、たぶん……人間の言葉も何も反応しない連中のことだろ。」

俺は裕につきつきりだし。そもそも人の事見た目で判断するのはやめる！ これは俺の力なんだよ！」

「もうどうでもいいだろ。バレてるのは明らかだ。」
全く、何をやってるんだか。

本題に戻さないと。

「時間が必要ってのはどういう結びつきがあるんだ？」

「凶悪なゾンビ……詳細は不明ですが、高い野生的感覚を有していませんね。」

誰の研究かは知りませんが、強者である事には間違いありません。

故に必要なのです。奴を倒すか、深手を与える決定打が。」

「それには時間がかかるってのか？」

「ええ。まだ足りてません。策はあるのですが、時間の問題にはどうにも時間で対処するしか、

解決できないんです。」

「どうしてだ？」

「狩猟隊です。元々誰かの手柄だったわけですが、それを私たちが狙っていたってわけです。」

しかし……このままだと元の方の手柄に戻ってしまうわけです。その誰かが

自分では手に負えない研究対象を資料にするために、別の策を持ってしてなんとか自分の手中に

おさめようとしている。今のご時世、敵が増えるのは私にとってもおいしい話ではないわけです。」

「結局お前の手柄になつたら何をされるかわからん。真つ当な理由には程遠い。」

「本題はここからですよ。確かに……ゾンビを私が入れて資料にしても、

それだけでは誰かが同じことをもう一度繰り返すはずですよ。再度施行されれば二の舞。

そこで、狩猟隊をもこちらで一網打尽にしておく、というのが本音なわけです。」

こいつ、手柄よりも狩猟隊の撃破を目標に？

だとするともうゾンビの資料は手に入れているのか？

いや、それだと荷物があるはず。しかし、その痕跡は啓にも見当たらない。

信憑性はまだ半信半疑といったところだ。

「それに、ここでの暮らしには何か引つかかるところがあります。」

「どういうところだ？」

「まず、最近になって遠征が行われていないという点です。今まで
の事を聞いた時には

通常通りの遠征はあつたはずですよ。しかし、まだ数日ですが……連続的に中断。

ゾンビってのはここでは野放しにできてしまうことなんですか？」

「そりゃ、アジトの事情もあるだろう。」

「高位能力者が上で指揮をとり、その下の能力者が先陣を切るんですか？」

それはどう考えても平等ではありません。リーダーの意思を聞くにはなかなかの魅力がありましたよが、

行動には出せていないというのは問題ですよ。」

「ま、それもそうだな。で、それだけか？」

「遠征先にも興味があります。ゾンビで町単位が完全制圧というのが少々。」

「そうか、だいたいわかった。」

幽が言った。

「そ、それでどうなんだ。幽。こいつらは白なのか、黒なのか？」

「今はまだ断定できないよ。根拠がないからね。」

藤島と幽の会話は啓を誘発させた。

「そこでなんだ、幽にい。あの時の事、黙っててもらえないか？」

「あの時？」

「そ、あの時。アレはばらさなくてももらいてエンだ。ここにいる面子だけの秘密ってわけさ。」

「……いいだろう。」

「サンキューッ！」

「ただ、条件がある。碓、啓。ここでお前たちの力を見せてくれ。」

「……。」

「碓？」

「持つてはいますが、見せられません。発現が弱いので不安定なんです。」

「……こいつ、能力を保持していたのか。人間だっことは間違いではなかったみたいだ。」

「なるほど。啓は？」

「俺は……『インスペクト視察系』だったよ。敵の位置とかを把握するフツの能力。」

「……わかった。」

「用件はこれくらいでいいですよ。続きは別の機会をお願いします。私もここに居座る身ですので。」

「じゃーねー！」

碯は立ち去って行った。

啓も同じくして出ていった。

俺たちは負わなかった。追うと事実にもますます遠ざかり、警戒心を解くことができなくなってしまっただ。

今はただ、黙って行く先をみるしかない。この目で。

しばらくして幽一行もその場所を後にし、皆の集うビルへと戻って行った。

「碯め……。」

何を考えているのかは知らないが、必ず暴いてやる。

そういえば、最近……その、加川たちを見ない。何かあったのだろうか……？

見守るしかない状況は穏やかであるが、不安要素は後を絶たなかった。

そして、ビル内で再び碯の元へと訪れた

「……熱弁でも振るってほしいのですか？ あなた方は。」

「こつちだつて本当ならお断りさ。」

再びあつた時の碯は異様に疲れていた。疲労がまだ抜けていなかったようだ。

「そうですね、少し話でもしましょうか。」

碯が珍しく自主的に話題を出してきた。

「……。」

勇は黙り込む。ここでの判断は先を見ないとわからない。

「神についてでも語りましょうか。」

碯の突拍子な話題も後を絶たなかった。

M i s s i o n o r p l a n ? (前書き)

サブタイトル『Mission or plan / 実行? 計
画?』

Mission or plan?

「神だつて?」

「ええ。」

「どう聞いても繋がりなんてないと思うぜ。」

藤島の一般論は有力だ。ゾンビのある今にそれを持ち込めるというのはある意味で

人として大切なものなのだと思う。

「ま、あれですよ。学校の授業で稀にある小ネタだと思って聞いてください。」

「あんたもそういうこと言うんだな。」

「おかしいですか? 過去の私はこういう話題も多かったものでしてね。」

碯にも、人としての生活はあったのか?

想像もつかないほど今のイメージとは似つかない。

「さて、皆さんは神についてどう思いますかね?」

「神か。迷信にすぎないんじゃないか?」

幽は素直に答えた。

「信じるつてのもおかしな話だけど、みんなは好きそうだな。」

「藤島はあれか。テスト前にしか祈らないタイプじゃね?」

「九、^{いちじく}どうしてお前がそれを……!」

「んな口調と態度してりゃわかるよ。そこまで頭悪い学校には入ってなさそうだが……。」「

「見透かされていそうで怖いぜ! もうやめろおお!」
碯が続きを話し始めた。

「ま、実在はしないというのは勿論なんですけど……祈る風習も過去にはあったわけです。」

この話だけじゃなく、色々な土地が、色々な国がね。

不思議と祈る事には馴染みのある場所は多いんです。」

「それが、何か関係があるのか？」

影山 日向が言った。

「噂でしかないのですが、今回……大きな陰謀が絡んでいるのではないかと推測しているんです。

野に放つゾンビとしては規模が大きく、目立つ狩猟隊の派遣。

他にも色々と奇妙な事象は発生しています。」

「例えばどうということか？」

九が質問した。

「そうですね……。ミネ、いや……とある研究者の来訪がありましたね。」

それがまさしく何かの予兆。私のように頻繁に外界を動き回る方はそう多くはありません。

何かの目的があつての行動。さきほどのゾンビの件について、結びがないと言いつれ切れません。」

「他にも来てたんだな。」

「お前みたいなのがまだいるのか!？」

「色々動き出している人も多いいみちですね。」

「なら、敵は多いということか？」

会話が進み、裕が答えた。

「そちらのほうはあまり干渉できないでしょうから、考えなくても問題ありません。」

しかし……これは隠密に事を運ばなければなりません。」

「どうということなんだ？ 研究者は問題外と言っておいて、まだ何かあるのか？」

「研究者が敵になるのはゾンビの資料入手後、狩猟隊の始末後です。以前接触した組織に気になる発言がありましたね。」

『全知全能の神誕生計画』という名前が出ていました。

組織単位で大ごとなのは間違いありません。今回はその計画の一部の可能性が高い……。」

「それをつぶそうってわけか。」

「はい。ここで止めなければ、その脅威は世界にまで届く……！」

「お前は、どこかに組織していない保証はあるのか？」

「クク、私はゾンビの出現前にしか組織してませんよ。多少面識のある方と」

「コンタクトは取ってはいますがね。少数精鋭ってご存知ですか？」

「他とかかわる気はないってわけか。」

「ええ、研究成果を盗まれる可能性も今は非常に高いですからね。」

「碯の言葉にはどこか真剣見があった。」

「で、その計画とやらは達成されるとどうなるんだ？」

「……神がこの世に誕生するんですかね。最も組織にとって都合のよい神様になるはずですけども。」

「問題はその神がどの程度の能力で何をするのか。ということですよ。」

「それは見当もつかないな……。セカンドってことは、前回何かあったのか？」

「それは、裏も取れています。初代の計画がありました。」

「神と呼ばれるはずの固体は正常に誕生し、成長していきました。しかし……。」

「原因不明の症状で死んだ、とか？」

「いえ、ただその固体は……研究所を脱走してしまいました。」

「な、なんだって？」

「藤島が顔をひくつかせて聞いた。」

「その固体は脱走して、今も尚この世のどこかを徘徊し続けているってことです。」

「ちょっと、それ本当なのか！？」

「……紛れもない事実です。」

「そ、その神ってどんなのだ？ どんな形してんだ！？」

「人型ですよ。確か、被検体は少女のはずでした。」

「碯、どこでその情報を手に入れたんだ？」

「幽が疑う口調で聞いた。」

「こつこつ事してますからね。色々と探りを入れていたんです。最

も、深い関わりはないです。」

「ってことは、もうすでに神はどこかに存在してるんだな？」

「……実際にはそういうことです。」

「んじゃ、そろそろ狩猟隊とかについて話そうぜ。計画そのものには無縁だろ？」

「そう、ですね。」

今回、協力していただきたいんです。あなた方に。ゾンビと狩猟隊。両方は私と啓君では無理があります。奇襲を手伝っていただきたいんですよ。」

「見返りは？」

「アジトの人間の中で、気になる人間の能力をこっそり教えて差し上げますよ。」

「それだけ……？」

「嫌ですか。なら……ちょっとした能力の秘密でも教えて差し上げましょう。それでいかがですか？」

「どうする、みんな？」

「乗っからないほうがいいんじゃないか？ どう聞いても危ないぜ。」

「

「そうだな。今は安全確保。安全第一だろう。」

「聖奈は、どっちでもいいよー？」

「僕もあまり気乗りしないです……。」

「私も反対だ。」

「んや、俺はやってみたいね。」

「わ、私は……どっちでもいいかな。」

「幽君、君は？」

「俺は……賛成、かな。」

「幽、マジなのか！？」

「今回の事件、本当に危険だ。だけど、避けてるようじゃ……いつか俺たちもやられる。」

これはチャンスなんだ。ゾンビの裏について知るまたとない機会だ

とは思わないか？

俺は知りたい。そして、生き伸びたい。能力とか、関係は持ったのは仕方のないことだけど、

諦めたりはしないよ。俺は、俺のやり方で生を掴む。俺の力で未来を掴む。」

反論は多いか。なら、メンバーは半数程度ってことになるのか。仕方がないが、

成功の暁には、みんなには知り得た事実をちゃんと伝えないとな。

「幽がやるなら、俺もやる。」

「……リーダーがやるのなら、それに従わないとな。」

「聖奈、頑張るよ!」

「それでこそ、幽だぜ!」

「決まりですね。詳細はこちらで固めてから伝えますので、その時まで……。」

そういうと、碯は立ち去ってしまった。

「悪いな、碯はここに来てから忙しいんだ。俺も手伝わないと……。」

幽にい、次合うときは、決戦だ。覚悟しておいてよ?」

啓もそう言い残すと、碯の跡を追った。

今回、ゾンビの思わぬ事態はアジトを巻き込まなかったが

幽一行は確実に踏み込みつつあった。『セカンド・パース神の計画』の領域に……。

The character, missing)前書き)

サブタイトル『その者、不明』

()内は想像言葉、思っている言葉です。

The character, missing

「なあ、幽。」

碇との会話からやや時間が経過した時のことだった。

めずらしく、九いちじくから声をかけてきた。

珍しいというのは不適切な気もするが……何しろここにきてからも何が何やら、

アクシデントが起こっているのだ。ゾンビからは油断も隙も見せられない。

最も、今回で思い知らされたのは……『敵がゾンビとは限らない』ということだ。

碇が登場した時からわかりきっていたことだが、

いずれ生存者をこの手で打つ時が来るんだよな、俺たち……。

ここに住む以上、アジトを導く選択肢には、必ず含まれるはずだ。ゾンビに加担する者への制裁は、必要不可欠なことなんだ。

そんなことを考えつつも、俺は聞き返した。

「ん、どうしたんだ。九？」

「疲れてるのもわかるが、今夜……もっかい碇のところに行くぞ。」

「は？」

九から意外な発言があった。

幸いにも俺と九の二人だけだったので周りから声が上がることにはなかった。

「どうしてだ？ 今夜じゃなきやだめなのか？」

「あのな……アジトに居座るつもりだから言っておくが、

初代の神様とやらはどこかに徘徊してるんだろ？」

「碇はそう言っていた。」

「碇のやつ、うわさ口調にしてはやたらと物知りだとは思わなかったか？」

「……何か隠しているとか？」

「俺はそんな風に思える。 殆どは事実だけを説明したかもしれないが、全部とは限らないだろ？」

「確かに、な。ただ、いくなら今夜だ。」

「おう。ただし、俺とお前、二人だけでな。」

「え？」

「またも意表を突かれる。 丸もいったい何を考えているのやら。」

「夜に大勢でゾロゾロ歩くのはダメだろ。かといって他の奴じゃ騒がれても面倒だしな（女性陣は

比較的おとなしいメンツが揃ってはいるが……メリット少ないし）。

「

……ちよつとおかしな提案かもしれないが、話してみるか。」

「丸、ちよつと提案があるんだけど。」

「ほー、言ってみるよ。」

「ああ、ちよつとな、今夜は」

現在、21時過ぎ。

正確な時間が把握できるのは、今は数少ない生存者。

ここではアジトの人員の中に偶然にもアナログの腕時計を所持している者によつて

得られた貴重なものだ。デジタルが機能しない今、アナログが圧倒的な情報源となっていた。

「そろそろ、だ。」

今は俺と丸を含めた三人だけが待機している。 勿論、殆どの元にいるわけではない。

ただ、他のみんなとは旨く折り合いをつけてこうして集っている。

「ああ。だが、幽。一つだけ聞いていいか？」

「なんだ？」

「どうして、連れてきた。」

「ん？」

「だから、聖奈だよ！」

「えっと、九……さん？」

そう、俺の提案とは……聖奈を連れていくことだ。

裕には色々と能力についての知識があるようなので、是非鑑定してもらいたいと思つての判断だ。

最も、能力についての情報源もどこからなのか聞いてみたいほどの量だが、

それを聞くと夜が明けてしまつたろう……裕のやつ、

暗くなる前も小ネタで色々話していたからな。

路線を外されると何をどれくらい話されるかわからん。

……ぶつちゃけ、嫌いじゃないんだけどな。そういう話。

聖奈を連れてきたのは他でもない。俺も今の今までずっと忘れてきたことだ。

『多重能力』

これについての裕の意見を聞いたかった。

ここに来るまでの間、じっくり思い返す暇がなかったのも事実だが、重大なことを忘れる俺も俺だ。

聖奈について、祖父が記した手紙にはしっかりと書かれていた。

『治癒』と『察知』……

詰まる話、聖奈は治癒の能力しか公開していないが、秘めたる能力はまだある。

これについては俺も聖奈から聞いてことはないので本人が、今どう

いう状態なのかは定かではない。

（もしかしたら特定条件下でしか使えないかもしれないし、能力の規模も分らない……）

聖奈は俺たちの道のりルートに大きな路線変更を希望したことはなかったが、

これは聖奈が安全だということを知っていたからなのかもしれない。あくまで推測でしかないこの事実、果たしてどういうものなのか……。

「九、頼む。今回だけは許してくれ。」

「はぁ……。理由は言えないか？」

「そ、それは……。」

言えるか、言ってもよいのか？ この事を……。

信じてもらえるか？ そもそも確証のない事を言うのは……。速いか？

待つべきか？ いや、だが、しかし……

「……分かった。言えないなら、それでいいよ。そろそろ行くぜ？」

「え、あ、ああ。分かった。聖奈、行くよ？」

「うん！」

こうして俺たち3人はひっそり誰にも知られずに外へ出たのである。

「碓の居場所とか、知ってるのか？」

「場所は聞かなくても分かるよ。雰囲気で……。」

「幽、正気か？」

「いや、だつてさ。アレ見てみ？」

九は見上げた。すると、そこには人影があった。

ビルの屋上に怪しげな雰囲気放っている。そして夜闇の中、街灯なしでもわかるほどの気配。

「ま、あれなら仕方ねえよな……。」

九も納得の様子だった。
俺たちはビルの中を果敢に登って行った。
碯が通った道に敵がいるはずもないというのが果敢に進める唯一、
最大の理由だが。
そして、俺たちは屋上へとたどり着いた。

ガチャ キイイ

屋上の扉が開かれる。俺たちが目にしたのはただ、闇を見下ろす者、
夜空を見上げる者。

「何してるんだ？」

「幽君。それに他の面々まで。」

「なんだ、幽にいか。てつきりリーダーかと思っちまったぜ。」

「今はただ聞きてえことがあるだけなんだよ。な？ 幽。」

「ま、そんなところだ。碯、質問していいか？」

「フフ、何を言っても聞かせてくれるのはわかってますよ。どうぞ。」
すると、九は質問を出した。

「聞いた時からずっと思ってたんだが、……あれだ。初代の神様つてやつだ。」

「なるほど、その件でしたか。それがどうかしましたか？」

「お前、その情報どこで手に入れた？ 噂にしちゃあ知りすぎじゃねえの？」

九が堂々と述べた。これに対して碯はどう出るのか。

「……フフ、ここでの事は他言しないと誓えるなら話でもよいですが、どうします？」

「それでいい。話してくれ。」

「分かりました。……実は初代の神様の誕生と脱走は一連のゾンビの発生の前に起こったことなんです。」

「……は、なんだって？」

「ゾンビ云々の騒動以前に、初代の神様とやらは脱走してしまっていたんですよ。」

「やっぱりか。隠してやがったな？」

「……あの場ではあなたたち以外にも、若干聞いている方々がいたようですし。」

「何より能力で会話を探られていたことも気に食わなかったものでしてね。」

「能力で探られていた？ 俺たちのが？」

「ええ。上層部もちゃっかり裏でこそそやってるってことですよ。」

「なのでガセネタも含んだ会話をしていました。あ、ガセは『セカンド・バース』のこととかですね。」

「こ、こいつ……さらっと言いやがった！」

「な、なんだ……深刻に考えて損しちまったじゃねえか。」

「ただ、ガセはそれだけなので。狩猟隊は事実なので、その辺は押さえておいてくださいね。」

「グ、やっぱりそういうところが裕らしいっていうか……。」

「ふふ、そう簡単にすべてをさらけ出しませんよ。これも今を生きる知恵です。」

「初代の神こと『HT-001』。彼女は本当に特別な固体でした。」

「どんな点で？」

「今思えば、あれは通常ありえない事象でした。」

「ゾンビ化のウィルスを投与されたはずなのに、人としての原形をとどめつつも」

「ゾンビと接した人間と同等以上の能力を得るといふ人知を超えた存在でした。」

「能力の、度合いは？」

「正式な能力は不明です。ただ、ここのアジトの能力者と肩を並べるほどだったはずですよ。」

「さきほどみせてもらった結果からですけどね。ただ、脱走前の彼女と比べた話です。」

「今は……本当の意味で神の領域に立っているのではないのでしょうか」

ね。

脱走後、すでに月日も経ちました。少なくとも、私たちが立てる段階¹にはいないでしょう。」

馬鹿な……！」

そんなやつが、ゾンビ発生前から人間の世界に逃げてきたって言うのか？

その間はどうしていたんだ。いや、待て。

今生きていないということも……ありえるんじゃない

「ゾンビは通常肉食ですが、彼女は人間と同様の食事をするというデータも上がっていました。」

あらゆる面で、ウイルスと適合した上で制御もできていたという見解もありました。」

「なるほど、な。これ以上話すことは？」

「もうありません。私も深入りできる話ではないのでね。」

なるほどな。色々わかったが、とりあえず神が増えるなんてことはないんだな。よかった……。」

「次の質問、いいか？」

次は俺の質問だ。しっかり聞かないとな。

「ええ、どうぞ。」

「実は、聖奈の事なんだ。」

「ほう、というと？」

「多重能力。みたいなんだけど……そういうのわかるか？」

「……なるほど、ね。」

碯^{ためら}が言うのを躊躇^{ためら}っている？

「碯、言った方がいいか？」

「……啓君におまかせします。」

碯の啓の会話が聞こえてきた。何か知っていて……あ、そうか！

啓は、聖奈の手紙の内容を知っていたのかもしれない。祖父が話したという可能性は十分にある。

「知っているみたいだな。聖奈は治癒とは別の能力がある。」

「…………ええ。」

裕はどうにも説明しがたい質問をされているかのような態度だった。啓もそれを静かに聞いていた。

「『察知』の能力についてだ。これについて、解明してもらいたい。」

「ん？」

「あ、そっち？」

裕も啓も不意を突かれたような表情だった。まるで想定外だったかのような…………。

「察知？ それはどういったものですか？」

「ゾンビを探るらしい。」

「…………本人に聞いた方が早いですかね。聖奈、ちゃん？」

「察知は…………いろんな動きが見えるの。」

「動きが見える？ どのように？」

「うーん、輪の中に写る感じ。なんていうか、人が点で、それがどんどん移動していくの。」

「ほほう。興味深い。何かのレーダーみたいな能力ですね。距離はどこまで見えますか？」

「ううーん、よくわからない。でも、この辺り人がいっぱいいるから。」

人が全然いないところまでわかるよ。」

「ふむふむ。察するにアジトの領域ぐらいは完全に網羅できていると。」

「普段から使えるんだけど、使っていると目の前に集中できないからいつもは使ってないよ。」

「なんと優秀なことでしょうか！ 広範囲レーダーのような能力とは素晴らしい！」

「流石、聖奈だな！」

裕も啓もやや興奮してきていた。

「では、早速ですが。最大範囲まで拡大してみてください。そのリーダー。」

「はい。わかりましたです。」
今のちよつとだけかわいいぞ。語の使い方間違っている気がするけど。

「うーん、何これ。こと別にもう一ついっぱい人がいるところがあるみたい。」

「もうひとつ？ 隣町ぐらいまで見えてるってか？」

「そういえばリーダーが遠征に行っていると聞いていましたが。ゾンビの大群でしょうかね。」

「でも強そうなのはいいかな。たくさんあるだけかも。」

聖奈は続けたが、これには皆が驚かされた。

「敵の強さまで把握できると……？」

「なんか、他の能力とは次元が違うな。」

「強いのはいいかな……あ、ちよつと待って！ 何かこつちに来てる！」

「へ！？」

「何が来てるって？」

「何事ですか？」

「見張ってるから安心しとけ。俺も一応、端くれだ。」

「任せましたよ！」

聖奈はさらに言った。

「反応がすごく大きいよ！ たぶんここには勝てる人いないかも……」

「……」

「な、それ、今どこに！？」

「すぐく早い！ それに、こつちにまつすぐ向かってきてる！」

「ちよつと待てよ。ゾンビって人型だけだよな？」

「人型では無理がありますね。人知を超えていなきゃ不可能です！」

「あれだ！ 生物しか探知できないなら、飛行機とか！」

機械は反応ないんだろ！？

「飛んでくる気配なんてどこにもありませんよ！今は、屋上で待機していきましょう。」

「あ、ああ。やばそうだからな……。」

「どうしよう、もうアジトのところ……。怖いよ、幽にいい！」

「聖奈、心配するな。俺たちがついてる！で、どっちから来てる？」

「あっち……。」

指差した方向は闇だった。何もビル群が続くような場所。少なくとも遠征先の町の方角ではない。

「聖奈？」

俺は聖奈の前に立った。闇をみると何も無い。

「来る……!!」

聖奈が言い放った。その時すでに、碯は何か集中していた。目を瞑つむっている。

そして、次の瞬間

バチッ！

「ゲウウウ、速い！」

碯の直前が幅ゆく光り、はじけた！

「くそ、速すぎだ！」

碯は焦りの表情で目の前の光景を見にして戸惑っていた。

碯はいつたい何を？能力？

「クツ、代入がまにあわ」

碯が言いかけた刹那、俺たちは謎の攻撃を受けて屋上に伏した。まさに一瞬の出来事で、視認することができなかった。

唯一無傷なのは……

「せ、聖奈……!!」

聖奈だった！

いつの間にか聖奈の目の前には映画でよくみられるようなボロボロの黒いローブを羽織^{はおり}っていた。

聖奈はそれをおびえた目線で見ていた。体が震えていることがその証だった。

「せ、聖奈に手を出すな！」

俺は立ち上がった。この時は手持ちの矛を持ち合わせていなかったのは誤算だったが、それでも拳を突きだした。

「邪魔よ。」

パシッ

あろうことか、俺の突きだした拳を目の前の手でピンポイントにその平に収まっていた。

「なッ、そんな馬鹿な！」

こいつ、とんでもない力だ！ 肘は曲がっているのに、衝撃に微動だにしていなだと！？

「あなたは優秀そうだけど、この子には及ばないようね。」

そういうと、俺の方へと向き直り、つかんだ拳を放す。

そして一瞬の間に俺の腹部へと蹴りを入れていた。

「ぐあッ！」

「幽君！」

「っ、強い……！」

蹴りも重みのある一撃。他の面々が一撃でやられているのがその証拠。

「ケッ、一撃でK・O。なんざ……とんだお笑い草だ！」

気合いで立ち上がったのは九だった！

「うらあ！」

九も勢いもあり重心の掛け方が直線的の強い蹴りを出した。しかし、そのローブの中には届かなかった。

その蹴りを、左足で軽くあしらうかのように払われた！

「グ、なんつー力だ！」
劇的な瞬間は次に起こった。

グサツ

何かが突き刺さる音。それはローブの者が追撃した音ではなかった。

ピチャ

血が一滴ずつ滴る。

その傷を負わせたのは……聖奈だった！

聖奈の手にはあの独特な形状のダガーがしっかりと握られており、背中から刺したのだ！

「そ、そんな……！」

ローブの中から女性と思しき声。

「どうして、こういうことするの……。私たち、何もしていなかったのに！」

聖奈が強く言い放った。

「……才能を、無駄にしていると思ったからです。」

「え？」

「こんな無能な人たちと一緒にいたら、ダメなんです。」

ローブの中の声はまだ幼稚な感じだった。しかし、実力は確かなものの。

中はいったいどんな人物なんだ……？

「ガフツ……御託はいい。あなた、HT-001……夜霧 やぎり 美鈴 みれい ですか？」

「なぜ、私の名前を……？」

「な、そしたらこいつが神様ってか!？」

「馬鹿な……なんでここに！」

「とんだVIPが御来訪になられたようですね……ッ！」

滴る血が落ちるも、まったく動揺を現さないその少女はローブの中からようやく顔を出した。

まだ幼さの残る顔つきだが、眼はこの世の冷たさを全て抱擁ほうようしているかのような深い黒。

肩より下がるロングヘアー。

「どうして、聖奈を狙った？」

俺がきいた。それに反応するかどうかは定かではないが、余地はあるだろう。

少なくとも、人であるかそうではないのかを把握するにはもってこの質問だ。

「彼女の力が、ここにあったから……。」

「おかしな話だぜ。リーダーが逆に察知されちゃったってか？」

「そう、おかげでここに来れました。」

「どうする気だ。」

俺が恐る恐る聞いた。

「彼女を、ひ弱な人類から引きはがします。」

「その陰謀がなんなのかは分からないが、そういうわけにはいかない！」

「そう、なら、すぐに終わらせてあげましょう。」

夜闇の世界、ビルの屋上で戦いが火蓋を切ろうとしていた……！！

The character, missing)後書き(

感想がありましたら受け付けております。

お気軽にコメントをください。よろしくお願ひします。

M i r e i s c r i m i n a l r e c o r d (前書き)

サブタイトル『M i r e i s c r i m i n a l r e c o r d
/ 美鈴の前科』

「その陰謀がなんなのかは分からないが、そういうわけにはいかな
い！」

「そう、なら、すぐに終わらせてあげる。」

彼女の言葉には迷いがなかった。夜闇の中から忽然と現れた者は
人ならざる冷たい空気を抱擁ほうようしている。

意外というべきなのか、当然と呼ぶべきなのか。
そんな状況を打破したのはやはり、江田 碯たかだった。

「クフッ………全く、流石は最強。」

碓が口にした言葉に彼女はすぐさま反応した。

次に言葉よりも、碓の姿を見て彼女は視線を移すことをしなかった。

「あなた、どこかであったことがあるような……。」「

「フフ、覚えていらっしやいますか？」「

「やっぱり。どこかで会ったことあるのね。」「

「かすかにですけどねども、記憶はあるようですね。でも、ひどいじゃないですか。」「

碓は間をおいて、強調しながら次を紡いだ。

「いきなり暴走した揚句に、所を脱走してしまうなんて、ね！」「

碓に彼女は大きく反応を示した。

「あなた、まさか……。」「

「HT-001。あなたが我々をどう考えているかは知りませんが……敵対する気はありません。」

あの時の面々は今や散り散りに、身を潜めたことはあなたも少なからず察しはついているはずです。」「

「な、なあ、幽。」「

緊迫した俺たちの凍結状態を解いたのは九いっしゅうく。

「ど、どうした？」「

「碓の奴、まだ隠してやがったな。油断も隙もねえ。」「

「ああ……。あれが、最強の……。！」「

「それだけは間違いねえみたいだな。」「

圧倒的な登場をして、俺たちはまんまと盤上で踊らされていたということだ。

敵意を向けるしか選択肢はない。

聖奈はすでに彼女を離れ、HT-001と呼ばれている固体はどうやら碓と面識があるようだ。

どういふ事情にしろ、碓が彼女とかかわりがあった。これは一体ど

ういうことなんだ……？

幽が葛藤している時も、殆は続けた。

「そして、私も……。今やあの時の忌々しい過去は綺麗さっぱりですよ。」

もはや何も無い。」

それを聞いて、次に刺々しい質問が放たれた。

「なら、どうしてこうもゾンビが溢れ返っているのかしら。これは、『そういうこと』でしょ？」

ゾンビの発端にはやはり事情があるみたいだ。そして、その核心に近い事実を彼女は知っている？

どういうことなんだ。彼女は、『元々一般人の人』じゃないのか？特別なのか？

能力だけが、特殊なわけではないのか……！？

「別に、その答えぐらい私に察しがつかないわけでもないですよ。ただ、我々に矛盾に対する

牙をむけるのはおかしい話だとは思いませんか？」

「あなたも、所詮人間なのね。他の人間だったら誰でも言いというの？」

「ハア、通り越して呆れますよ。あなたの側近にいた方はあなたにどうしてもらいたかったのか。」

それくらいはすぐにわかるでしょう？」

「側近……。」

「まさか、忘れたわけではありませんよね？ 風見 恵亮氏の事を。」

その名を聞くと、彼女は急に敵意が散漫になり、後に害意の視線がなくなった。

「あいつは……最低です。」

「何かあったんですね？ 話を聞かせてもらえませんか。」

「お前は、あいつの何だったのです？ 友か、それとも親戚？」

「間柄は『仕事仲間』といったところですよ。ただ、嫌いじゃありませんでしたね。」

「……そうですか。なら、知らなくても不思議はないですね。」

「それでも、風見氏のことはそれなりに理解していたつもりなんですけれどもね。」

立ちながらも俯く。何か、思いつめたような苦しい表情だった。

「あいつは、私を捨てました。自分のために。そういう人でした。間を入れずに裕は答えた。」

「なるほど。そういうことでしたか。それはいつごろの事でしたか？」

「……脱走してから翌日の事でした。」

「風見氏の安否は？」

「生きているはずですよ。」

「ほほう。脱走翌日で手放された。と？ 新たな主は？」

裕がきくと、少し間があった。が、ややあつてようやく口が開かれた。

「今までは放浪の旅でした。この体では飢えることもないので特に困ることは……。」

「なるほど、強靱でこそなせる業ですか。」

「そのようでした。私を次に見つけて助けてくれたのは……」
『あらい 弥栄やひか 誅』

という方でした。今も助力をさせてもらっています。」

聞いたこともない名前だった。そしてそれは、裕にとっても変わらないことだった。

「ふむ、聞いたこともない名前ですね。彼は、あなたにそこまでさせて……聖奈を襲えと？」

彼女の意図に迫る問い。急に刃がつきささるような威圧があたりを支配した。

彼女はそれを察したのか、しかし動揺はせずに言った。

「彼女は、そういう逸材なんです。少なくとも……」

こんな無能なところにおくべき人間ではありません！」

「無能、ですか。」

「ここは、どう見ても低能力者の集まり……でしょう？ 誅も、それを望んでいます！」

堂々たる思考はここにきても変わることはなかった。

しかし、神と呼ぶには歪な関係性がある気もする。

裕相手にこつも話し合うなんて絶対に何かある以外に考えられない。「ハッキリいしましょう。聖奈はここにきて抜群の成長を見せれます。」

あなたが低能力と蔑あはんだ場で飛躍的な開花を見せているのですよ！」

「それは、何かの間違いでは？」

「なら、聖奈の見紛う力の発動は如何にして。 聖奈を憶測だけで

見立てるなんて、

お門違かどちがいも良いところでは？」

今の言葉を受け止めると、やや続いた沈黙の後に彼女は言った。

「……力づくでは少々気が引けました。 猶予を与えます。」

彼女が、妥協しただと……！？

裕の奴、いったいどんな手段を？」

「ふーむ、なら、猶予よりもまず協力をしていただきたい。」

「協力ですか？」

「ええ。成功の暁には聖奈を含む、我々の面々団体で好きにするとよいでしょう。」

「……。と、とにかく明後日の夜にまたここに来ます。 聖奈と申しましたか。」

明後日の晩、再び能力の発動をよろしくお願いします。では……！！
全てを告げるとすぐさま飛びのいて、闇夜へと消えてしまった。

「お、おい、裕！ どういうことなんだ？」

「ひとまず一件落着。 っるところです。」

「状況の説明をしる！ わけがわからない！」

九がやけに興奮気味で責め立てている。聖奈はもう落ち着きを取り戻したみたいだが、どうにもまだおびえが取れない様子だった。俺はそんな聖奈の肩を手で叩いて自分のほうに寄せた。聖奈はその動作以上に密着した。恐怖の程が伺えるほど手の力は強かった。

その状態のまま、俺たちは碇の声を聞くこととなった。

「ですから、我々は彼女を利用するんです。」

「利用だとお!？」

「彼女には聖奈含む我々で好きにしても良いと私は言っておきました。た。

これが後に影響します。必ず深層に近づきます。」

「……要するに、目当ての聖奈のおまけとして付いて行って、潜入しろってか?」

「察が良い。そして彼女の情報を洗いざらい潔白けっぱくにして一網打尽いちもっだじんにするわけです。」

最も、最高のパターンはこちらの提携ていけい関係にすることですけれども。」

「でも、聖奈はどうなるんだ。それは考えてるんだろ?」

「それはもう弥栄氏の考えによるとしか言えませぬ。ただ、求めるランクからして、

手荒なまねはしないでしよう。」

「決まりだな。俺たちは、潜入捜査するわけだ。幽、早速伝えて計画練るぞ!」

「いえ、潜入は後の話です。」

「はッ!？」

「違うのか？」

俺も九も疑問を入れた。

「潜入が成功するのは協力が済み次第ですよ。」

「なんだよ、協力って!」

「彼女には伝えてませんが、『特殊な固体のゾンビと狩猟隊の殲滅』

。これを条件にするつもりです。」

「な、なんだとおおお!？」

「おま、マジなのか!」

俺と九は抗議した。

「これがベターなんです。私は仮にも研究者という筋書きを彼女は理解している。」

だからこそです。ゾンビの資料と、悪質な集団と仕立て上げた『狩猟隊』の件が済めば、

晴れて辻褄も取れて、潜入成功とあります。ま、運も多少絡んではきますが……。」

碯の提案は俺たちにはなにかと荷が重すぎる事ばかりだ。

しかし、HT-001が全ての保障だと碯は主張し、結局それを伝えることになった。

アジトはまたもや遠征延期の旨が団員に報告され、度々リーダーの加川が姿を見せることとなった。

休養を取るという名目らしかったが、流石に遠征の先延ばしが増えると

団員も不安を隠しきれない様子だった。

そして、騒々しい夜は明け、明日になった。衝撃的な夜はもう終わったのだ。

だが、明日に控える密会は確実に迫っていた。

彼女と、弥栄氏の決断が告げられる時は着々と接近しているのだ

とある研究室にて会話が交わされていた。
陰湿な部屋の窓はカーテンで占められていて、朝日が差し込む余地はなく

電氣的な明かりが部屋を照らしていた。

「なるほど。協力か。それが条件なんだね？」

「はい。内容は伺って来れませんでした。」

「よくやった。美鈴。明日が密会の日でいいのかな？」

「はい。明日、密会を始めます。」

順調順調、と呟いた後、話は続けられた。

「なるほどね。なら、明日は僕も行くよ。」

「良いのですか、研究所を離れても？」

「少しぐらいなら問題ないさ。協力といっても、僕だけ高^{たか}みの見物じゃ悪役みたいだからね。

それに、僕も能力者の端くれさ。心配しなくても自分の身ぐらいは守れるよ。」

「……わかりました。」

「うん、報告ありがとう。今日はもう休んでくれ。僕も都合^{けし}のいいところだ、

ティータイムにするとしよう……ふう。」

パラパラとめくらられる資料にうんざりした顔で書物をデスクの上に

置くと、

席を立ててその書物と多数の画面が密集している部屋を退室した。中央の階段を下りると、ご丁寧というまでに綺麗な白の床があった。食堂に移ると、広い場所でポツンと美鈴が席についていた。

「お疲れの様子だね。」

「……はい、少々昨日を思い出していました。」

「そうか。ふふ、明日が楽しみだ。」

笑みが表に出た顔は決して不自然な笑みではなかった。それはまるで待ち望んだ願いが

実現したかのような喜ばしいと述べるかのようなものだった。

「必ずだ。必ず明日は成功させよう。」

そういうと、隣からも「はい」と発せられた。

その後、予定の時刻まで彼らは干渉もない空間で待ち望んだ密会の準備を進めるのであった。

Tremble (前書き)

サブタイトル『Tremble / 密かな揺らぎ』

T r e m b l e

とあるアジトの圏内、ビルの上部階層にて会談が催されていた。

ここに集ったのはアジトの上層部のみである。

「それじゃ、始めよう。ルナシー、守備は？」

「問題ない。」

淡々と

「高みの見物とはいかないみたいだな。」

座光寺が言った。以前のような能力的な変化によって作られた人格とは異なるが、

ここでは何の支障の見当たらないようだ。

「そろそろ先延ばしというわけにはいかなくなってきた。

討伐だけじゃなくて、偵察という意味でも早急に遠征隊を派遣する方針を取ろうと思う。」

加川が真剣な面持ちで語った。

「それで、遠征隊はどうする。妙な侵入者も現れて警戒しなきゃならないだろ？」

「そうだな。先に悩みの種から積んだほうがいいだろう。

編成はルナシーに全て託す。が……新堂 幽達を必ず遠征に行かせるように。」

「何い？」

「新堂だと？」

「実力なら足りているだろう。相手にするのもゾンビそこそこだ。

それに、俺はあいつらを疑っているわけじゃないが……信じているわけでもない。」

「分かった。編成リストに入れておく。」

「よし。……それと、江田 裕の件だ。お前たちにも以前話したはずだ。」

「ああ、盗聴させたっていうやつね。」

「そうだ。江田氏は何かと接触を起こした可能性が高い。いや、起こしたかどうかは置いておこう。」

とにかく江田氏についてもっと念入りに調査を行う必要も出てきた。今後は盗聴班を江田に付かせる。全時間帯くまなく情報を取り出せるように交代制でな。」

「交代つてのはわかるが、江田だけじゃないだろう。」

「……片割れの方が。確か……啓と言ったか。」

「『新堂 啓』です。」

夜久 玲南が冷やかな目線で言った。

「新堂だと？」

「ええ、その線は有力かと。『兄』と呼んでいる節がありましたし。」

「なるほど、な。少なくとも関連はありそうだな。」

啓はいつも江田と行動を共にしているようだし、そちらも一応探っておいたほうがよさそうだな。

ただ、ついでという感じになってしまうが。」

「OK。今回はこれだけか？」

「ああ、また何かあれば能力で個別に伝える。」

「分かった。」

「今回もどうでもいい話だったぜ。」

適当な態度なのは座光寺のみだった。

「それじゃ、解散だ。」

散り散りになる。暗躍しまいと裏でこうして集って密会を開いた加川にも、

一つだけ見逃していた点があった。

それは

「こつも筒抜けだとあくびが出ちまうよ。なあ、碇？」

「あくびが出るくらいで丁度良かったじゃないですか。こちらとしても楽ですし。」

会話は密会よりも2つほど高い階層で始まっていた。

「それにしても便利ですよね、『悪徳信者の創生律』^{ハンドスキル}。」

「なんだかんだで精度が落ちるといつてもここまで近けりゃ低レベルでも問題なしか。」

それにしてもあいつら、俺たちの事なんだと思っただらうな……。

「ま、こうして内容も把握できましたことだし、急いで退散しましょう。」

「急ぐ必要があるのか？」

「あ……あのですね、ルナシーとかいう方にだけはこういう手が使えませんから。」

その時、ガラスのない、空気が筒抜けの窓に座っていた二人の後ろで声がした。

「誰にだけ使えないって？」

「!?!」

「やはり……!」

そこには一人の少年の姿があった。しかし、冷淡とされていて動揺が見られない。

感情の動きすらも読み取るのは困難。そんな雰囲気をもとくなく悟らされる相手だった。

「まさかね、盗聴する相手に盗聴されているとは。」

「ふふ、あなたは鋭い感性をお持ちのようですね。よく能力を理解していらっしやる。」

「……アジト最強の名に懸けて、君たちを野放しにするわけにはいかなくなってきた。」

「フ、スルーですか。まあいいでしょう。でもそこまでの感性があるなら……」

私たちの事も分かりただけですかね？」

碯の視線が深くなり、黒に染まっていった。

人を見る目線ではなく憎悪を孕むような強烈な眼光で見ているのである。

「あーあ、あんた、今なら碯も収まってくれらるって。今は大人しく見逃してくれねえかな。」

「残念ながら、もう連中には伝わってしまったようですよ。それで散ったつもりですか？」

その声に反応したのか、階段、壁から人影が現れ、やがて姿を見せた。

「危険視していたのは正解だったな。」

「あー、めんどくせえ。手間取らせやがって。」

「悪いが、お前は生け捕りにさせてもらおう。」

「覚悟することね。」

面々が次々に言葉を発するのに対し、碯はすでに『クリアコード解明』を使っていた。

「4、いや、合わせて5名ですか。『なるほどねえ』……!!」

この時に碯が碯の言葉に反応し、すかさず『バッドスキル悪徳信者の創生律』で『マルチメッセージ思考回路図』を発動させていた。

「……!!」

碯はこの能力で碯と無言のコンタクトを取ることが可能になる。相手はそれを知る由もなく、ただ目の前の碯を見るばかり。

『啓君、聞こえますか?』

『あ、ああ、聞こえてる。』

『右から順に』、『アクセスマスター名特攻主』、『リパース表裏』、『フラスムトフ跳躍』、『アテンダーハート他が為の協力』、『クレアホイヤンス千里眼』です。詳細は』

「面倒くせエし、先に左からやるか。」

碯の言葉にだれもが反応した。すぐさま敵の面々は左へと集中し、あつという間に

格好の的を見出した!

「代入、完了。」
次に裕に視線が向けられた。
しかし、どこにも異常がない。何も無いことに加川達は^{いふけんえん}畏怖嫌煙を
抱いた。
語るにはあまりにも変化が乏しいことが逆に働いたのである。

実際には裕は『^{ポーターリスミック}領域網羅の幻想系譜』で啓に付加を与えていた。

「こいつら……!!」
「俺たちばかり見てて大丈夫なのか？」

視線がそらされることなく事が運ぶことが成功のカギとなる、啓の
動きは

加川たちの視線の逆側にあった。
「後ろだッ！」

座光寺が振り返る。しかし……
「何も、ない？ どういうことだ！ ルナシー！」

「ツチ、ばらしやがって！」
そういうと啓は自身の能力ではるか下にある瓦礫を能力により一気
に同じ高さまで持ち上げた。

そしてそれはガラスのない窓により、視認ができる。
それは容易に彼らの目にとまった。

「能力者め！」
そしてにやりと不敵に笑う啓。

「本ネタはこれからだぜ？」
するとルナシーが言う。

「う、後ろだ！」
「ルナシー、いい加減に」

こらえたかのようにかすかに漏れる笑い声とともに聞こえてきたのは

「勝った！」

その一言だった。

まさかと思い全員が振り返る。

すると、そこにはまっすぐに飛んでくる瓦礫の軌道。

啓は前方後方どちらからも瓦礫で攻撃できる準備をしていた！

「なんだと……！！」

「逃げるオオオ！」

ゴシヤアアアア

瓦礫が崩れる音が響く。

上層階で彼らだけの戦闘が始まった！！

Compromise (前書き)

サブタイトル『Compromise / 妥協』

Compromise

「くっそ、危ねえな……！」

「ルナシーが正しかったというわけか。」

「だから僕は最初からグツ……」

回避を試みたら5名。手傷を負わせることはできなかった。が、避けた代償は大きかった！

「おうおう、随分と必死じゃねえか。」

加川を向いて啓が言った。

「何が、いいたい？」

冷や汗が目立つ顔で加川は返した。

「あのな、俺たちはあんたらこうしたからって殺したり派手に荒らしたりはしねえ。」

ただな、穩便に事を運びたかったってことは一緒だろ？」

平然と語る事が逆に働き結果的に

「貴様……！」

反する意識を買ってしまっていた。

「そんなに睨にらむなつての。……で、どーする、碯？」

碯はしばし間を開けてようやく口を開いた。

「啓君。『ワーストエリア範囲重力』です。」

「わーっつた……フツ！」

啓が気合いのこもった一声を出した次の瞬間、周辺から碎け、崩れる音が小さく鳴った。

「グワツ……！」

「か、体が重……！」

当りの脆くなつたモノが崩れゆく音だと気づくのは後れを取った後だった。

「どうです、重力の重みでつぶされる感覚は？」

「危険因子だ……！」

碯がそれを聞いてあきれた様子で背を向けた。

「そうですか。私たちとあなた方はなれあうことは難しいようですね。」

ならば私達はおとなしく去りましょう。」

「お、おい、碯？」

啓がきよとんとした様子で聞いてきた。

しかし、碯は元の座っていた風の筒抜けるような窓に手をつけて次のように言った。

「あなた方が他の研究員と接触を起こすなんてことは想定外でしたが、

それでも揺るぎはしませんでしたよ。『あなた方が簡単に倒れてしまっ』事には。」

重力空間でほとんどの身動きが封じられた中、啓と碯だけが淡々と動き続けている。

その中で抗おうと動き出した者がいた。

「ふっざけんなよ……！！」

壁を支えにしてようやく立ち上がったのは相馬マシマ 來斗ライト。

「ついでに言っておきますが、重力効果は私にも同様にあります。

この程度で倒れてしまうようでは力の差は歴然！ 違いますか？」

「確証もない事を……！！」

「では……」

そついうと啓が引きつけて砕けたがれきの中でもひとときわ大きい残骸を片手で拾い上げる。

それはだれがどう見ても『一抱えもある大きさ』であった。

「な！」

「あんな大きさのを！」

碯は片手で涼しげとした様子で持ちあげた。

そして、壁に叩きつけた！

ゴシヤアア！

「これでも、信用なりませんかね？」
周りが鎮まり返る。

立ち上がった相馬ですらも、戦意喪失を起こさせるほどの圧倒的な
差を

痛感させる行動だった。

「では、失礼。啓、『氷結魔術』^{フリザード}です！」

「任せるツ！ ハアアアア！」

啓と裕が遮断物のない窓から跳躍した。

その跳躍は並々のものではなく、道路を挟むビルとビルの間までの
距離の移動を可能にしていた！

「化け物め！」

飛び移ると、重力空間の効力が一気に消え去った！

パッ

「ガハッ！」

「元に戻ったか？」

「くそが！」

「正気、かしら？ はあ、はあ」

「うぐ……なんて距離だ。」

そして、会話から数秒開けると冷気が漂い始めたことに皆が気がつ
いた。

「まずい！ 逃げろ！ 冷気から離れるんだ！」

「なんて奴らだよ！」

「あーもう！」

「この辺一帯が全部攻撃範囲だ！ 逃げ切れない！」

「……。」

ルナシーが敵の能力を敏感に察知するが、脅威はぬぐえないほど強
大だった！

「ふうー、一応氷は使えたか。」

「では、幽君の元へ急ぎましょう。」

「全くよー。碇もちよつとぐらいは考えとか教えてくれたっていいだろ！」

「フフ、毎度の事じゃありませんか。それに、

こんなこと啓君意外にやったら離れてしまいますし。」

「うがああああ！俺もそろそろ嫌気さしてきたんだって事に気付いてくれよ！」

啓が事の終わりで気を緩めたのか、弾むような会話が交わされた。

そして幽の元へと一刻を急ぐ勢いで向かった。

「なるほどな。大体わかった。いや、分からないことだらけだが……。」

「どっちだよ、幽にい。」

「あーもう、何やらかしてんだよ。俺たちもここに居座りづらいだろうが！」

「心配には及びませんよ。弥栄やえか氏の拠点に連行されることはもう決定事項のようなものですし、そうなればここに居座る意味も薄いです。」

とにかく、ここはひとつ協力してください。聖奈のためでしょう？」

「そりゃ、そうだが……。」

まるで、悪魔のささやきだ……！こつも弱みに付け込まれるなんて、俺とした事が……。」

「悪魔のささやきみたいだな。」

藤島が考えていた事をスパツと言ってくれた。

「忙しい奴だな、啓だったっけ？お前も大変そうだな。」

九が後半をつけたしたかのように言つと、

「碓といると疲れるぜ？ 今晚まではしっかり休んどけよ？」

加川も急にここに来るなんてことはないだろうからさ。」

「あ、ああ。マジかよお……………」

丸がガツクリと頂垂れる。

「問題は討伐の方だ。作戦の方はいいのか？」

大門さんが碓に聞いた。

「それについては簡単です。作戦はなしでも十分ですから、ご安心を。」

そついうと、『そろそろ時間ですので』と行って足早に去って行ってしまった。

碓も一応約束の頃には戻ってくるようだったが、果たしてアジトの監視がどこまでの

ものなのか……………警戒しなければならぬようだ。夜に妙な動きがあれば必ず

向こうも動くはずだ。

そして、各自、束の間の休息を取っていると、急かすように時間は訪れた。

幸いなのは一グループごとにビル1つを与えられているところだろうか。

この状況のおかげで碓と面談する時には周りを気にしなくて済んだのだ。

しかし、夜は流石に……………能力については気をつけないと。

そんなことを考えていると

「幽君？」

「な、碓！」

「迎えに来ましたよ。あちらも一足早く到着したようです。」

「ハ、ハハ。妙な胸騒ぎがするな。」

冗談交じりに言つと碓は深刻そうな顔つきでいった。

「………とんでもないVIPも一緒のようです。気を抜かないでください。」

あたりの闇がこちらを覆ってしまうかのような沈黙が入り込んできた。

「と、とにかく行こう。」

俺がそういうと皆は各自、武器を取ってビルを後にした。

さようなら、俺たちはもうここには………残れない。

武器とともに、今まで背負ってきたリュックも共に持ち歩きだした。黒に包まれた街中で俺たちはアジトを脱する決意を堅くし、碓について行くのだった。

Appraisal(前書き)

サブタイトル『Appraisal / 鑑定の時』

Appraisal

「ここです。」

数あるアジト圏内の廃墟はいきよと化したビル。

そのなかでも高さ、幅ともに並々であるう建物の中に俺たちは侵入した。

碇がただ階段を上っているときでも俺は不安をぬぐい切れなかった。死の恐怖や、恐れを抱いているわけじゃない。

とてつもなく大きな不安ではないが、何かこう、小さな種のように些細なものが

芽生えているような気がするんだ。

階段を上ると、やがて屋上へとつながる扉が見えた。

「行きますよ。」

そう言つて躊躇ためらいなく扉を開けた。

現在は午後。今は正確な時間を知るすべはない。ただ、冬ということ

空の夜闇を見るとすでに活発に動くべき時間帯ではないという事だけは

ハッキリと分かる。そして目の前に対峙する人影。

「……これで、全員かな？」

「ええ。揃いましたよ。」

そういうとやや愉快そうな口調が聞こえてきた。

「さてと、まずは自己紹介からだね。僕は『弥栄やえか 誅るい』。

拙い実力の研究員の一人だ。よろしく頼むよ。」

夜闇によろやく目が慣れてきてわかった。

この弥栄 誅という人物、今の表情は楽しんでいるかのようににこやかだ。

どこからそんな笑みが漏れるのかは分からないが、まだこの人物を

異常だと判断するのは

早計すぎだろつか……？

「弥栄、さんつて言った方がいいのか？」

「それで、構わないよ。……ん、君は確か『新堂 幽』君だね？」

「え、ああ。」

「なるほど、ね。確かに優秀そうだ。うん、何度か死線も超えてるような顔つきだね。」

……一見ただけで優秀の一言か。これであっさり『貧弱そうだ』等の返答があつたなら

やつ底が知れてしまう程度なのだが、死線を越えている事も予想しているのか。

こいつも碇と同じ事だ。敵対すると一筋縄ではいかなさそうだ。

「おっと、話がそれてしまったね。そろそろ本題に入る。

僕が要求するのは君たち全員の身柄さ。ああ、手荒なまねはしないから安心してよ。

むしろ、協力といつてもいい。」

「協力だと？」

「そう。僕にも勿論活動拠点があるわけだけど、君たちはそこで生活してもらおう。

ただそれだけさ。僕は優秀な人材を集めているんだ。」

「集めて、どうするんだ？」

「どうする、か……。それは後々考えさせてもらうよ。今は時間が惜しい。

それで、江田氏、そちら側の要求とは？」

「フフ、実はここからそう遠くない地帯にとある強靱な固体のゾンビがいますね。」

そのゾンビを研究対象として狩猟隊が始末しにくるんですよ。

私はそのゾンビと狩猟隊を討伐したいんです。それを手伝っていたきたい。」

「ふむ、分かった。できるか。美鈴？」
「できるだけ、迅速に完了いたします。」
「よし、できれば今すぐにも向かいたいのだが、大丈夫か？」
碯の提案を弥栄は鵜呑みにした。
「ここまですんなりと通るものなのか。」
「皆、行けるか？」
俺は確認を取った。
「俺は大丈夫だ。」
「俺もだ。」
「僕も行けます。」
「私も大丈夫です。」
「ああ、今すぐでも行けるぜ。」
「私もだ。」
「聖奈も大丈夫だよ！」
全員、整っているようだな。
「私も啓もOKです。」
「では、行こう。碯、先陣を切ってくれ。」
「分かりました。啓君！」
「わーっ！」
啓の返事を聞くと、碯はすーっと……
「おい、碯！？」
「うわ、マジか！？」
俺と藤島が真っ先に声をあげた。
何しろ、碯が啓とともにビルの屋上から落下していったのだから！
「まあ、彼らぐらいになると階段を使うのは面倒にもなるか……。」「
ため息交じりにやれやれという具合に弥栄が言った。
「ど、どうして飛び降りたんだ！？」
藤島の質問には弥栄がすぐに答えてくれた。
「肉体がゾンビを含む環境内で強化されると生身でも飛び降りれる
ようになるよ。」

ただ、彼らは能力で衝撃を緩和しているみたいだけどね……。」「
な、なんだと……！」

御、俺たちには到底できないし、させられないぞ。

「君たちは普通に階段から降りなよ。その方がいい。」

「ああ。そうさせてもらうよ。」

そう言っただけ俺は屋上の扉へと向き直る。

階段を降りるときに「それじゃ、僕も行くよー！」と碯に向かって
叫ぶ弥栄の声が聞こえていた。

それ以降声がなかったのはきつと弥栄が……いや、考えないように
しよう。

ビルの外で俺と碯たちが交流すると、碯を先頭にして進んだ。

合計11名という多勢でゾロゾロと歩く姿といえば見栄えが悪いが、
少数精鋭といえれば聞こえは良くなるだろうか。

等と考えながら俺はひたすらに歩いた。

皆はそれぞれ2、3人ずつに分かれて何かを話している様子だった。

俺は藤島、聖奈と行動を共にしていた。

「なーんか陰気だよな。この雰囲気。」

「そりゃ、陰気にもなるだろう。何しろお先真っ暗だ。俺たち。」

「はあ、もう何が何だかな……。あ、そうだ、幽。」

「んん、なんだ？」

「俺もよ、やっと習得したんだぜ。自分の能力ってやつをさ！」

「本当か？ 凄いじゃないか。おめでとう！」

「へへ、こっそり頑張ってみた甲斐があったな。あんまり目立つ能
力でもないから見せてやるよ。」

「おお、そうか。楽しみだ。」

何気ない会話のようにつなげるが、能力に関しての話題なんだよな。
これ。

藤島の能力か……。一体どんなものなのだろうか。

「ツツ〜！」

！！

果たして何が起ころうとしているのか全く想像できないが分かる。

藤島のあまりある気力が一つに集中している事が……！

とてもじゃないが目立たないような能力には見えないぞ！

「……ふう、こいつが俺の新しい武器だ。」

「こ、これは……！！！」

右手に向かって睨むかの如く費やしていた労力の成果がようやく視認できるものとなった。

「ほ、炎？」

「ああ。便利な能力だぜ？ 明りにできるし、手から若干離れても大丈夫だし、

ある程度の規模なら自由に動かせるし。」

「多様だな……。それ、藤島の望んだ能力と比べてどうだった？」

「ん、望んだ能力も何も、まんま想像してた能力と同じだぞ？」

「それじゃ、希望どおりってことか？ 凄いな！」

「ちょ、あんまり大きく言うなよ！？ これは秘密だぞ。俺と、幽

！ それから聖奈だけのな。」

あ、そうだった。聖奈はしっかりと聞いているんだった。静かなだけだもん……。

「秘密って言ったけど、俺以外にも能力を身につけてるぜ？ 華憐

も努力してたし。」

「おお、藤島以外もがんばっていたんだな。」

「もう頼りっぱなしってわけにもいかなくなってきたからな。

そついう幽はどんな能力何なんだ？」

え？ 俺の能力……？ そつだ、俺の能力は

「……屑が。」

そつだ、俺はあの時

『お前の命で償え。 . . .』
自分が抑えられなくなって

『聖奈に、謝れ……!』
無我夢中で

『黙れええええ!』
反撃の余地も与えないほどに

『コイツラ二八 』
一方的な衝動を

『味ワワセテヤル。』
その矛先を

『人の命は安くないだろ!』
容易く誰かに向ける行為を良しとしていた。

その理由が何であれ、使ってはいけないようなものと薄々気づいてはいた。

『悪い、俺のはまだそういうの無いんだ。』
『マジかよ! それじゃ、お前は今まで生身で戦ってたのかよ!
あの化け物を!?!』

『お前の方こそ声がかい! 喧嘩慣れしていたからとはいえ、
今まではできた話だったとは思わないか? 藤島も能力それがあるなら
今度はお弱い俺を引っ張ってつてくれよな?』

『な、なんだと……!?!? お前、まさか自分だけ楽をしようって腹
じゃないだろうな?』
『そんなわけあるか!』

まったく、冗談がきついで藤島……。

「聖奈ちゃんはどう？」

「聖奈はあるよ。そういつの……」

「へえ、見せてみてよ。」

「いいよ！」

その言葉に敏感に反応したものがいた。

裕と啓である。

「むー！」

聖奈は目を瞑ってひたすらに集中した！

すると……

「みえた！」

「へ？」

「あれ！」

「あれって、何？」

「ほら、あそこも大きいの！」

「大きいのって……大きいのか？ ちょっと待て、あれなんだ！？」

藤島が指をさす。すると全員の視線が指の延長線上に集中した！

「ほら、いるだろ？ バカでかい牛が！」

ま、まさか、こいつが裕の言うターゲットなのか？

「冗談じゃない。牙をむき出しにして長く太い尻尾を持つ牛なんているわけないだろ！！」

俺たちは知らず知らずのうちに、戦場の付近に突入していた！！

H u m a n e a t e r (前書き)

サブタイトル『H u m a n e a t e r / 人喰らい』

江田 裕視点です。

Human eater

道路の中央で堂々とした勢いも焦燥へと変わり果てた12名。本格的に人間とは相容れぬ存在を目の前にして驚愕を隠せない様子だった。

しかし、内4名はそれでも平然とした姿勢を保っていた。

「皆さん、修羅場はここからですよ。気を引き締めてください。」
建物の先へと視線を飛ばした連中に呼びかける。

やがて意識を取り戻した面々は碇を見た。

「まだ手を出してはいけません。当初の目的は『狩猟隊の殲滅』です。」

ゾンビの始末はそれから。それまでは、あの化け物の周囲で常に気を配って

狩猟隊に対して完全な不意打ちを仕掛ける事だけを考えてください。気づかれた場合は多少手荒なまねをしても沈めさせますが、殺すのはNGです。

殺すのは狩猟隊を抹殺してからでお願いしますよ。」

内容の再確認を込めた言葉。

それは皆の冷静さを若干だが高めていた。

「ある程度、身体能力が高まっている事ですから、全力なら化け物に食われる事もないでしょう。」

ただ、攻撃の隙があるならば……決めてください。尾行の秘訣は音を立てない事です。」

これで、旨く行けばよいのですが……。

音を立てない事は非常に重要ですが、果たしてそれを理解しているのは何名なのか……。

人間も、一番敏感に反応する衝撃は『音』なんですけどね。

「基本は2、3名ずつで行動してください。他のメンバーとのコンタクトは各自でお願いします。」

それでは、行きますよ。狩猟隊はいつきてもおかしくありませんから。」

「な、なあ、碓。」

「なんですか、藤島君？」

「狩猟隊はいつくるのか分かっているのか？ まさか来るまで延々と待ち続けるんじゃない……。」

「……少なくともまだ来てない事だけは確かです。」

「そんな！ それじゃ寝るときはどうするんだ？」

碓がどう対応すべきか悩んでいると、

「それにはいいアイディアがある。」

と返された。

「弥栄氏？」

「建物の隙間から確認できたけど、あれは『C??? - Villtis』シートゥエルヴだね。」

「C???ですと？」

聞いたこともない検体番号ですね。

それに、12という数値から察するに、相当な時間と労力を費やされた固体つてことですか。

そして決定的な者が『人間以外』に影響を及ぼしている事。

Villtisは人間専用に取りられたデータがほとんど。他の生物に投与するなんてどうかしてます……！

それに人間以外にはVilltisに支配された時点で死に至り、動

く事はなかったはず！

なのになぜ、なぜゾンビ研究で最大の課題とされていた難関を突破できている……！？

「『ふなやま船山 うじで耕治』の成果だと思えますよ。

確か人間以外で成功させようと試みた人間の中では最高の技術者でしたから。」

「またもや聞いたこともないような名前ですね。なぜそのような考えに至ったのか……。」

「さあね。ただ、ゾンビ研究の中でも人間以外に投与することを目標にした人数は

5人くらいしかいなかったはずなんだけどなあ。」

「あなた、どこからその情報を？」

「聞き込みさ。ただ、これ古い情報だけだね。今じゃもうどうなってるのかは見当もつかないよ。」

「そう、ですか。」

古い情報……以前にもこのような情報が流れていた？

いつどこで？ いや、美鈴の事を知っているということはそれなりの知識もあつたはず。

美鈴の事は知っていたはず。そもそもゾンビ研究は過去にあの施設でしか行っていなかった。

元研究員であつた事は確かですかね。施設から解放された後は一体どのような研究を

していたのが気がかりですが、今はそれどころじゃなさそうですね。

急がないと赤の他人が目撃するなんて事もあり得ますし。

「ねえ、幽にい！」

「ど、どうした、聖奈？」

「後ろからいっぱい人が来てる！ どうしよう、アジトから皆追っ

てきてるみたい。」

「なんだって!?!」

「な、アジトの奴らだと? もう暴拳に出るつもりかよ!」
く、猶予もあまりないようですね!

「皆さん、C??の方へ走ってください! ただし、気づかれないようにお願いします!

アジトの面々はC??とぶつけさせて消耗させるんです! 急ぎますよ!」

「ちょ、おい! 待って!」

幽が叫ぶ中、裕は啓と共に走り出した!

そしてそれに率いられるように皆が後をつけた。

やがて建物と建物の間を通ると、広い道路に出た。

右を向いて、指をさした。

「あれですね。」

その方向には巨大な四足歩行する何かが見られた。

「行きましょう。皆さん、左側に寄って走ってください! 聖奈ち

ゃんは常にアジトの人間を

警戒してください!」

「あ、ああ!」

「アジトの皆、もう近いよ!」

「先回りするぐらいの勢いでお願いしますよ!」

怪物は数百メートル先といった具合ですね。残念ですが、怪物を発見してしまった時点で

すでに打倒の算段はついていきます。おいでなさい、アジトの面々。

あなた方の最後はかなり近いですよ?

H u m a n e a t e r (後書き)

感想などがあればお気軽にどうぞ！
お待ちしております！

H a v e a c h a t a n d . . . (前書き)

サブタイトル『Have a chat and . . . / 雑談』と...『

い。』

この状況がほしかった。

必須というわけではない。だが、これは圧倒的なメリットになる。相手は多勢。こちらは少数。見たままでは少数側の勝ち目は薄い。しかし、それは何者にも干渉されない環境のみで成立する考え方だ。何が言いたいのかというところ、『相手の心境を攻撃できる作戦』^{メンタル}が今の俺たちの取っている行動に繋がっているわけだ。

ただの人間の集団を俺たちは相手にしようとしているわけではない。立派な能力者たちを核としたバリバリの超人集団だ。

そして、戦況をいち早く察知できる『視察系』^{インスペクト}に属する構成員が今の俺たちをどう思うのかが勝敗を握っている。

俺たちは11人。たった11人。しかし、とたりには誰もが恐れるであろう怪物。

実際、人を一人殺すのにどれだけ静かに行えるだろうか。

脳を破壊、機能を停止させるには相応の行動が必要であり、

それには周囲にそれを察知させる証拠が散らばる。

もちろん俺たちは一筋縄では殺すことはおろか、撃退すら遠く及ばないような

屈強な人間までもが揃っている（俺たちが同じ側につくのは不本意ではあるが……）。

だからこそこれは有益なのだ。勝利の女神は見方につくかどうかすらも危ういが、

少なくともここには女神ではなくとも味方につく神はいる。

今も現役の立派でまごうことなき『疫病神』が……！！

作戦を提供してくれたのも疫病神のおかげ。今もこうして頭の中ですぐに思いだせるぐらいにインパクトの強いアイデアだ。

だが、もう一度聞かないとおかしいぐらいの状況だということぐらいは

病みかけの俺にだってわかる事さ。

「先ほども話した通りじゃないですか。大丈夫ですよ。必ず旨く行きますから。」

碇だけが言っならまだしも……

「それに、いざとなれば美鈴の力でも十分だからね。安心してよ。」
弥栄 誅もこういうのだ。

なんでも夜霧 美鈴の力は底なしという。

俺たちが目にしたもののほんの断片であつたらしい。

彼女の力を派手に使えばこの争いもごり押しで圧倒できると語る弥栄が

俺にはどうにも不安要素でしかなかった。

……どうして、この状況にまで至つたのか。

争いでしか解決できないのか？ 戦わなくては終わらないのか？
今しなくてはいけない事なのか？ それはそこまで優先するべき事なのか？

……それは、殺すことでしか開けない道なのか？

わかつていたことだ。ここまで派手な能力がぶつかれば死人は必ず出る。

そうでなくても怪物を利用するわけだ。

もし、もし怪物を起用しなくてはならない時が来たならば
どちらかの完全勝利でしか収まらない事になる。

アジトの勝利か、俺たちの勝利か、怪物ことシートゥエルブが一人勝ちをなすのか……。

「皆さん、C???が歩行速度を落としました。ここからは慎重に行

きますよ。聖奈ちゃん？」

「えっと、向こうも遅くなつたよ。気づいたのかな？ あ、先頭が止まったみたい。」

「フフ、いい具合に牽制けんせいがきいてますね。」

思惑通りのようだった。相手をよく理解しようとする碯だからこそなせる戦術スタイルだ。

相手には優秀な視察能力を持つ人材がいることが、逆に歯止めをきかせる枷かせとなる。

「そのうち、背後に回って穩便おんびんに近づこうとするでしょう。」

その時が……コレの使い時です。いいですね？」

そう言つて碯が手に持っていたのはどこから入手したの疑問である。『爆竹』だ。手軽な品だが音で気づかせるには十分なものだ。

あれで、怪物の気を引き、慎重である相手には二択を迫る事が出来る。

『退却させる』、『一気に勝負を決める』かのどちらかだ。

相手を取りえる行動とは、この2パターンしかない。それしかありえない。

第三者を使った奇策は多勢に大きな打撃を与えるだろう。

退却は後列が動かなければ前列は後退に支障が出て、最前線には少なからず先手を打つ事が出来る。

一気に勝負を決める場合にも逆の発想だが、

先手を決められるのは基本的に最前列が最前列に対してのみである。つまり、何があつても『後列が攻撃してくる』事はかなり時間のかかる事だ。

ここでは美鈴に全てがかかっている、頼るところが美鈴しかないが爆竹を使った場合には怪物の行動も加わってくる。

俺たちは少数精鋭に対して、多勢である相手には酷な状況になつてくるだろう。

とにかく、『狩猟隊』が到着する前に撃退か壊滅のどちらかを遂行

しなくてはならない。

しなければ、必ず達成しなければ！ 聖奈が、かかっているんだ…

…！！

「できれば、使いたくはないです。ですから、温存しながらも全力で戦ってください。」

狩猟隊と、怪物も狩ることになるのですから……。「酷く恐ろしい静寂が少しだけ俺たちを包んだ。」

その間だけ 誰も語らず、誰の目も輝いておらず、誰の足も進まなかった。

「弥栄氏、全てはあなたがたにかかっています。いざというときには、お願いしますよ？」

「任せてくれよ。君たちは捨てるには惜しい人材だからね！」

…… 本当に、ゴールデン 碓と同じくらい最終目的が分からない人だ。

ついでにけど、俺たちは2、3人で組みを作って行動することになっていたが、

今はどういうわけか全員がそろっている。急に命がけの作戦を思いつかれたため

やむなく集っているというわけだ。

「……浮かない顔ですね。幽君？」

碓が俺にだけしか聞こえないような小声で言ってきた。

「そ、そうか？」

「ええ。あまりにも似合わないです。状況を打破するためなら

何事も惜しまないような、そんな人間だと思っていましたが……。」

「その勝手な想像とかは当てにはならない世の中だ。分かりきっていることだろ？」

「まさか、戦わずに済む案を考えているわけではないでしょうね？」
俺は少しだけ考えたが、口を開いた。

「……馬鹿な。戦わないで収まる争いじゃないだろう。」

「深く考えないほうがいいです。今なら……許されるんですよ？」
「許されるだと？」

何を言い出すんだ。碓は？

「常識的に考えて殺人を犯しても裁きを下す人間はいない。だいぶ前にも話しましたよね？」

「……許す許されるの問題じゃないだろ。」

「幽君、よく聞いてください。あなたは未だに幼稚さが抜けていないようなので率直に言います。」

「幽君は行動の全てが甘いんですよ。そんな考えを抱いてどうします？ 聖人君主にでも成りたいのですか？」

「俺はまじめに皆の事を」

「幽君。あまり私を失望させないでくださいよ。いくら死線を潜ってきたとはいえ……ねえ。」

……。

「いずれ、必ずその考えを変える出来事が起こるでしょう。それをしっかりと刻みつける事です。」

「……そっか。」

俺を変える出来事か。それは成長なのか。それともただの変化ではないのか。わからない。

「どうしてそこまで話してくれたんだ。」

これだけは今すぐに聞きたかった。碓がどんな心境で語っていたのか。

「……それは、あなたが『イレギュラー未知の狂人』だからですよ。」

「え、……イレギュラー？」

「詳しい事は啓君から聞いてください。そういう約束ですので。約束？ 啓が、俺の何を知っているんだ？」

「そろそろ開幕の時が来ましたね。」

碓が口になると、後方に群がる何かが見えた。

「あ、あれって……。」

「ええ。作戦通りです。彼らは筋書き通りの道をたどった。たったそれだけです。」
「いや自信ありげに答えた碯の目はまっすぐに後ろへと向き直っていた。」
「こちらを狩りとりんとする、じつじつ獰猛な野獣の群れへと……」

「皆さん、覚悟はできてますね？ 爆竹を使うかもしれませんが逃げる準備だけは怠らないようにお願いします。」
「重い言葉が、すんなりと入ってきた。覚悟があればある程度までは耐えられるという事なのだろうか？」

俺たちは動きを鈍くした怪物の隣で静かに待った。伺うように忍ぶ連中を。

そして、会話が通じる程度までに最前列との距離は縮まった。その先頭には加川が立っていた。

「よくも逃げ出してくれたな。だが、それもここまでだ。」

「フフ、その余裕。なかなか地震があると見えますね。」

「ああ、確実に仕留めてやるさ。一人残らずな。」

「その態度、素晴らしい意気込みです。ファインプレーです。」

しかし、これを見てもそんなことは言えますかね？」

碯はチラつかせるように爆竹を見せつけた。

それを見て加川の表情はやや目つきの鋭い面持ちになる。

「貴様……！」

「あなた方が引くのなら、御隣さんにも迷惑はかかりませんが、どうしましょうか？」

「よ、よせ！ お前たちは怪物を避けるために行動してきたんだろっ！？」

「馬鹿な事を。避けるため？ 笑わせないでください。我々は利用するためにここまで迫ったのです。」

敵の思惑も知らずにここまで踏み入るとは、愚の骨頂ですね。」

加川が黙っている。……ここだ。俺の意思を伝える場面は今しかない!!!

「……なぜ、争いにこだわるんだ。」

「なんだと?」

「どうして戦わなくちゃいけないんだ。どこまでしなきゃならない理由って、なんだ?」

「お前には理解できん。多勢を率いるその重みが、……その責任が!」

「責任って、何? 協力するために徒党を組んだのに、その頂点の位置に立つだけで何か代償を払わなきゃならないってこと?」

「……二度目を言わせるな。」

理解できないってか? 一体何が、理解できないって言うんだ!

「でも、争う理由にはなってるない。」

それを聞くなり、加川は話すのを放棄したかのように、争いに傾倒していくかのように

不敵な笑みを浮かべた。

「新堂の小僧、よくきけ。今のご時世生きていくには色々と必要なものがある。」

お前はそれらを全員分賄えるというのか? できないだろう?

誰かには腹いっぱい飯を。しかし誰かにはたった一口の食事しか与えられないような事は

不平等だとは思わないか? 全員が同様の生き方をしていけるような代償を払わなければ

徒党は組めない。それが責任だ。それだけじゃない。

もめ事の処理も、寝床も上が率先してやらなきゃならない。……違
うか?

考える。戦う事だけが全てじゃないんだ!」

……そんなこと、とっくの前にやってきたさ!

藤島、大門さん、良成、聖奈、華憐……それから九、影山さんも全部！

今まで協力してやってこれた！ そうやっていけばいいのに、なんで、なんで……

「どうしてリーダーが全ての責任を背負うんですか！」

「貴様には永遠に理解できない！ 理解できないまま死んでいけ！ ついに緊張の糸がきれた！」

俺も臨戦態勢に入り、構えた！
すると……

パン！ パパンツパン！

「フ、フフ、ついに、やってしまいましたね。覚悟してくださいよ、加川氏？」

爆、竹……？

ま、まさか！

ここから先は……個々人で逃げるしかないだろうな！ 味方にすらかまっている暇はない！

「聖奈、逃げるぞ！」

「う、うん！」

俺は聖奈の手を握る。ってどこに向かって走れば……！？
その次の瞬間……

「ヴオオオオオツ！」

雄叫びが響いた！

「怪物主演の殺戮ショーの始まりです！」

裕がそう言った。

悔しい事に、こういう台詞は裕にはよく似合っている。

皆が冷や汗をかいている。恐らく次には怪物が……
俺も直感でわかる。次の咆哮ほうしゅうが攻撃の合図。
だとすると、もうすぐ来る！

「ヴオオオオオオオオオオオオオアツ！」

来る、どうする、どっちに逃げればいいんだ！？

Intersection (前書き)

サブタイトル 『Intersection / 交差』

I n t e r s e c t i o n

俺は、焦りに駆られた。

体は、硬直に囚われた。

本能は、咆哮に震えた。

嫌な予感が、脳裏を過った。

それが、見も知らない秘めたる『もう一人』を呼び覚ませた。

「ここは……？」

暗がりの空。街灯のない街。荒れた道路。重厚な音がやや距離を置

いたかのような響きを
今も尚、伝え続けている。

「あれ、俺って確か……。」
思い出せ。咆哮を聞いたんだ。怪物がうなりをあげたんだ。
そこからだ。その先が……わからない。

ここに至るまでの経緯、どうして思い出せない？
辺りを見回すと、聖奈だけが同じ場所にいる。へたり込んでいた。
腰が抜けたかのように座っていて、夜闇の具合が伺えるこの場所は
どこかの建物の屋上のようなようだ。

だが、まず優先すべきは聖奈だろう。
俺自身何も痛みはないし違和感もない。聖奈は何か知っているかも
しれないし。

「聖奈、大丈夫か？」

「え、うん。大丈夫……。」

「何かあったのか？」

「何かあったのは、幽にいの方だよ。」

！！ 薄々考えてはいたが、俺がこの不可解な現状を生み出したの
か？

「俺、何かしたのか？」

「何にも覚えてないの！？ で、でも幽にいは……！！」

「セ、聖奈！ 落ち着いて！ ゆっくりでいいから！」

あせっついても仕方がない。ここがどこだかわからない以上うかつ
には動けない。

俺たちしかこの場にいないことと、怪物の唸り声はなかなかの距離
を介して

俺たちにまで届く声をあげていること。

……まさか、皆が？ 怪物にあっさり……？

いや、そんなはずはない！ 何があるうともあいつらが死ぬはずは

……

違う？ だとしたら……まさか、裏切り？

弥栄……碓……美鈴……！！

思えばおかしな話だった。急に美鈴が来訪したかと思いきや、碓が絡み、行動に至り、弥栄が易々と承諾……

ふざけるな！ どこに、そこまで都合のよい話がッ！

やられた……完全に！ クソ、俺たちは荷物もない。

無一文どころじゃない。食いつなく食料も水も、

寝床も道具も……！

……冷静になれ。

放浪の旅に戻れば、まだ生きる術は……。

「聖奈、ダガーはまだ持つてるか？」

「う、うん。」

「よし、分かった。聖奈、行こう。あの怪物のところに。」

「うん！ 皆もきつと心配してるよ！」

皆、だと？

「そういえば、俺っていったい何をしていたんだ？」

「……」

聖奈は答えにくそうな面持ちをしながらも答えた。

「幽には聖奈を引っ張ってここに来たの。でも、凄い速さだった。

建物も全部飛び越えちゃったんだよ？」

「え……？」

聖奈は……嘘などつくはずがない。この言葉は、正しいのだろう。
しかし、思い当たる形跡が……。

建物なんて飛び越えられる脚力は持ち得ようがない。

……俺は何を？

待て、考えるより先に怪物の元へ行かない！
仲間の安否を確認してからでも考えるのは遅くない！

屋上にはなぜか俺の木製の矛が転がっていた。

無意識の中でもこれだけは手放さなかつたようだ。

無意識の中で俺は一体何をして何を思ったのかはまだ知る由もないけどな。

「聖奈、行くぞ！」

「うん！」

「フッフ、ハハハ！ さあ、どうしますか。諸君ら！」
碓がビルの屋上から見下ろしていた。

怪物をも見下ろせるほどの高さから見物する碓と啓。そして弥栄と

美鈴。

「それにしても意外だねえ。怪物はビルには突撃してこないのかい。」

「弥栄が呟いた。」

怪物はビルの上を見上げるだけで攻撃はしてこなかった。

その理由は分からないが、ここまで派手に刺激をして何も感じていないという事は

ないだろう。元々戦闘には向いていないのか、それとも別の理由で？

「皆、撤退だ！ さがれ！ 大至急だ！」

アジトの群は徐々に引いて行った。怪物はビルには攻撃をしないが、下々の者なら容易く目を傾けるに違いない。その予感が彼らをこつも強く動かしたのだ。

「フフ、とりあえずは作戦成功といったところですか。」

「殺す労力が減ってよかったな。碇？」

「ええ。本番はここからですからね。まだまだ疲れている場合にはありません。」

「それにしても幽にいはどこに行つたんだ？」

「……死にはしないはずです。あの覇気、間違いなく幽君から発せられたもの。」

「いよいよ本領発揮ですかね。『テイルフィンゲ覇命剣』。」

「……やっぱり、それって話した方がいいのか？」

「その方がいいです。使えば使うほど取り返しができませんし、何より……暴走すると手が出せません。」

「このタイミングで……なあ。幽にいつてどこまで強いんだ？」

「『テイルフィンゲ覇命剣』は上手く使えないとしたら

実力は勿論我々と同等つてところですかね。」

「……ただ、アレが自由に扱えるなら勝算は極めて薄いです。」

「ふーん、俺より強い……ねえ？」

「今、それを掘り返しますか。……本当は忘れたかったのでしょうか？
捨て去りたかったのでしょうか！？」

「……さあね。」

「素直じゃありませんね。ま、いずれそれは晴れるでしょう……。」
碯が妥協して啓に告げた。

バタン と屋上の扉が開かれた。

「こ、ここにいたか！」

「ハア、ハア 疲れましたよ……。」

「つたくもー、お前らだけだぞ、ジャンプで飛び越えられるのは！」

「怪物よりも怪物らしいや。」

「同感だ。敵も味方も怪物だな。」

「み、（藤島）満君速いって……ハア、ハア」

違和感がふと碯を過った。

「……さては、そういうことですか。クフフフ」

碯はふと思った。幽君なら、これをどう思うのかと。

口にするほどシンプルな変化はない。

碯が貫く詐欺師に必要なスキルだと確信しているもの。それは……

『変化を読み取る力』だ。

死しかないような世界で、芽生えようとしているのかもしれない。

こんな世界とは無関係に喜ばしいと感じる事が出来る何かが。

「セ、聖奈。まだ走れるか？」

「だ、大丈夫……大丈夫！」

もう少しで騒動の中心にたどり着けそうだが、聖奈は……疲労しきっている。

俺は走る脚を歩く程度に速度を変え、聖奈を止めた。

「そんなに頑張らなくても大丈夫だって。俺がついてる。疲れてるのが顔に出てるぞ？」

「へ、えへへ。そ、そんな幽にいても……ハア、顔に出てるよ。『心配だ』って。」

「こんな時まで気を使う事はないんだ。聖奈は守るって言っただけ？」

「でも幽にいい。もうちょっとだよ。歩いてもいいから、行こう！」

「ああ。皆、無事でいてくれよ……。」

歩く、歩く、街を歩く。暗がりだからこそわかる事がある。

明らかに音に敏感になっている。

視界が封じられて耳を使うようになったからだろうか？

人間の五感が飛びすまされるような不思議な感覚だ。

「幽にい、あそこ……。」

聖奈が指差す先には……ビルの屋上があった。

暗くてよく見えないが、指をさすってことは何かがあるのだろう。そんな疑問を持った時、聞こえてきた。それは上からだった。

「幽にい！ さっさとビルの中は入れ！ 食われるぞ！」

啓の声だ！ 食われるって、怪物はまだ……怪物？ どこだ？ 歩いた時からやけに静かだとは思っていたんだ。

まだ付近にいたのか！？ 討伐したわけじゃなかったのか！？

「ヴヴウウウ……」

「ヒッ！」

聖奈が脅えた。

……マジかよ！ いる、確実に！

ノシツと歩く音が聞こえてくる。五感がフルに活用されている。

「幽にい！ 何ぼさっとしてんだ！ 後ろだ！」

ガバツと振りかえると、暗がりしか……いや、待て！

何か、何かいるぞ！！

「……ッ！」

声が出ない。聖奈も声はあげなかった。あげることができなかった！

……1階建ての建物と同じ大きさ。角、むき出しの歯。塗まみれた血。俺は聖奈の腹に腕を当て、抱えあげた！

そして、肩に乗せて走った！

後ろからは何も聞こえない！ とにかくビルへ！

扉が壊れた入口に突入し、階段を見てからはすぐに全力で登った。

……しかし、途中から記憶が飛んでいた。気がつく……屋上に立っていた。

「幽にい、ホントに暴走しちまったのか……。」

と言っている啓がいた。

「何の話だ？」

「な、戻った!？」

「暴走が解けたようですね。」

「怪物は……!？」

「大丈夫です。怪物はビルには攻撃しませんし登ってもきません。安全確保です。」

碯の言葉を聞いて俺は屋上に腰をついた。

「やっと、ここまで……。」

疲れがどつとあふれる。

「幽にい。話があるんだ。」

「どうしたんだよ、啓。今更話すことでもあるのか？」

「……大事な話なんだ。」

啓の深刻な目線は、暗がりの中でもはっきりと見えた。

Grave talk (前書き)

サブタイトル『Grave talk / 深刻な話題』

Grave talk

……啓が俺に対してそこまで重みのある話など想定していなかった。思えば啓が俺たちに対してどの程度の把握ができているかすらも、深く時間をかけて考える事をしなかった。

だが、啓は……その目は、

知り得た情報を突きつけ、相手に一方的な強制を要求する目線ではなかった。

人は……嘘というものを突く。嘘は人を陥れ、不幸にする。

だが、そんな意識がないとハッキリわかるほどに啓の顔には深刻な面持ちがうかがえた。

声にも、常のような余裕がない事が出ている。

いつもの声じゃない。いつもの態度じゃない。いつもの顔じゃない。

俺は啓が今から言わんとしている事を聞く事にひどく不安を覚えた。だが、不安は知らないままにして置くのはダメだ。絶対に。

今、ゾンビを舞台とした世界に人間が見紛うほどの勢いで死んでいくだろう。

今を生きる人間も、ここまでに至って初めて人間の死に触れた人間も少なくないはずだ。

「幽にいい。よく聞いてくれ。」

「待て、話すなら俺だけに聞こえるようにしてくれ。その方が都合がいい。」

「……わかった。」

啓が碯を見る。

無言のアイコンタクトが取られた後、碯は表裏が返ったかのように

やや落ちついた態度とは一変して一行へと向かってトークを始めた。「さて、皆さん。アジトの連中は撤退していきました。私たちの第一歩は100点満点というところでしょう!」
「……皆の気を引いてくれているのだからうか。
それはそれで都合がいい。」

「啓、話してくれ。」

「ああ。実は、幽にいの能力の事なんだ……。」
「お、俺の……能力？」

「人並みには使えないと、思う。自由に使えるようなものじゃなかったからな。」

「座光寺との一戦で交えたあの時の感覚は忘れてしまいそうなくらいうつすらとし始めていた。」

「……ここ最近は眠りにつく時ですらも、気を張っていたのかもかもしれない。」

「安眠とは無縁の気構えはできる限りしていたし、」

「最低限の警戒も怠らなかつたアジトでの日々だからな。」

「……ま、言いたい事は二つあるんだ。」

「二つ？」

「ああ。……幽にイ。これみんなには内緒だけど、碓は能力を見る能力ってのを持ってるんだ。」

『クリアコード解明』って言うんだ。誰がどういう能力で、どう使うのかまでわかる。」

「詳細もつかめるらしいぞ。」

「……!!」

「予感的中した瞬間だった。」

「馬鹿な、碓にそんな能力が……!？」

「……ってことは、俺たちには能力について碓に隠し事はできないってこ」

となのか!?

やられた…… 碓には俺たちが知る由もない秘密を握られた!

俺も今だれがどんな能力を持っているのか、全員の事はわからない。しかし、碓は……!

「そ、そんな深刻な顔スンナって。重要なのはそこじゃねえんだから。」

「え?」

「幽にいいとつてもっと大事な事! あのさ、忘れかけてるかもしれねえけど」

『トランスパレントゴースト』って能力が幽にいの持つ能力なんだ。」

「長い名称だな…… 碓命名か?」

「みたい、だな……。能力はあれだ。その、なんつーか、一言でいうなら『幽体離脱』ゆうたいりだつできる能力らしい。」

幽体離脱……?

そんな能力を実感した覚えは…… あ!

ショッピングモールで気を失ったかと思っでいていつの間にか自分の意思で周りを見渡せたあの出来事! 能力だったのか!

啓が続けた。

「座って目を瞑れば使えるらしい。ま、できるかどうかは幽にいい次第だ。」

霊体から体に戻るときは一瞬だけど、霊になるときは自分の足の速さでしか動けないから、

そこだけだ。俺が言いたいこと。でも霊は体が透けるから攻撃受けたりはなし。

相手にも絶対に見えない。……でも本体に攻撃は当たるからな。使いきんなくてことだ。」

…… 碓はそこまで俺の事を?

どの道俺の能力は実戦向きではなかったという事だろう。自力でつかむさ、戦いのスキルは。この矛だけでも切り開いてきたじゃないか。

「問題はこの次。幽にイ、なんか暴れたりしてない？」

アジトで会った時もそうだったけど、あの能力だけは使わないほうがいいよ。」

「あれか。あれも能力なのか？」

「ああ。『テイルフィンゲ覇命剣』って名前なんだ。」

使えば鬼人のように強くなれるし、一騎当千もできるってくらいに凄い能力だ。」

「へえ……だけど、なんで使わないほうがいいんだ？」

「あれは、呪われてる力さ。『テイル』って（碇に）命名された使い方があるんだが、

それだけは絶対に使うな。死ぬぞ？」

「……死ぬ？ 一体どんな使い方なんだ？」

死ぬほどの負担がかかるのならば説明は

省かれても良いはずだが、言い方からして何かあるはずだ。」

「……使えば、覇者になれるくらい格段に強くなれる『儀式』だ。」

使えば自然と頭に方法が浮かんでくるって碇は言ってたが、

好奇心で使っちゃう前に言っておく。簡単に言くと『ゾンビの血を飲む』事が条件だ。」

何があってもそれだけは気をつけてくれ。血飛沫とかには特にな。」

「あ、ああ。」

「使っちゃったら最後。呪い殺される。どうしてもって時には、

『テイル』だけは使わないようにしてくれればいいからさ。」

「……色々助かった。だが、どうして教える気になったんだ？

知ってたんだろ？」

「幽にイ。ホントは敵対するかもしれないか思ってたけど、

やっぱり俺の兄貴なんだって思うと何も知らずにいると思うと忍び

なくなてな……。

使えば使うほど呪われるのが売りらしいから。」

「ホント、サンキューな。啓。 裕とかかわってから墮落する一方かと思っていたけど、

これで俺も一安心だ。お前も死ぬなよ。兄貴に心配かけさせるんじゃないぞ？」

久々だ。こんなに兄弟らしい会話をしたのは。

「……ああ！」

啓の声には嬉しさがこもっていた。ような気がした。

啓が裕のところに戻ってトークに口をはさむのを見て、

俺もその無駄にテンションの高い会話の中へと入ってゆくのだった。

7階建てビルの屋上。3人組の男がじつと夜闇でも見えるような、ぎらつく眼光であたりを警戒していた。

「……………くそ。邪魔者が。いつまで居座るつもりだ！」

「落ち着けて。『C?? - V i l t i s』シートウエルグに長居するような馬鹿はいないだろう。」

「そつだぞ。何しろ愚民どものためにこの辺にアジトがあるらしいじゃないか。」

それに、能力者でも勝てるとか甘い考えで作ったおつもりではないらしいからな。

『みやのこうじ宮ノ小路』様は。」

3人は確実に、誰にも悟られぬように忍びつつあった。怪物の元へと……………。

They wait upon for the Queen ? (前書き)

サブタイトル『They wait upon for the Queen / 女王のために彼らは傳かくす ?』

They wait upon for the Queen ?

忍ぶる者。

それは確実に迫りつつあった。

確固たる思いで命を遂行するために……！！

地を這いずる思いで建物を縫うように動く。

静かに悟られぬよう、まだ200メートルはあるであろう距離からでも

細心の注意を払い、集中し続ける程に彼らは油断はなかった。

「『クリアサイト透明細工』。」

そのうちの一人がじつと壁を見続けた。

やがて辺りを見回し始める。

「……見つけた。」

ピタッと視線を止める。

「動きは止まっている。だが、やや後方のビルの屋上にまだ人がい

るみたいだ。」

「誘導作戦は気づかれるか。どうする……フェロモンに切り替えたほうがよくないか？」

「フェロモンは匂いが出る。人まで呼び寄せるかも知れんぞ。」

「……シートゥエルグC??がここまで来るのを待つか？」

方向的にはいずれこの付近にまで到達するはずだが。」

「問題はあの人間らが強いのかどうかだ。無能力者なら我々には無害だが、

能力者なら勝算は薄い……。増援は呼べない。勝負の分かれ目だ。」

沈黙が彼らを包む。一步、進む道を外せば落ちるところまで落ちる。そういう状況で彼らは覚悟を決めていた。

一度決めた事には迷いが無い。しかし、決める前は追及するのだ。人として、そして主へとつくすものとして。

「……マスク。つけるか。」

フェロモンは自分以外には全て効果がある。それは味方においても同様。

それを防ぐ手段はガスマスクのようなもので遮断する事だ。

「フェロモンの作戦で行こう。ただし、誘導もする。」

「タイミングは、フェロモンのタイミングはいつごろだ？」

「誘導の……爆破が始まったらすぐに使ってくれ。」

戸惑いは捨て去らなければ。その一心が彼らを包んだ。

「いいか、躊躇は無用だ。俺たちは宮ノ小路みやのこうじ様に尽くさなければならぬ。」

そしてここから生きて帰るようと命じられた。生きるんだ！この任務を終えるまで！」

「ああ！」

「その命、生き残るにはハンデが大きすぎるみたいだ。」

「何？」

「人間。総勢12名。囲まれたらおしまいだ。しかも、『お告げ』通りだ。」

「……元から想定内だ。『お告げ』は外れない。だとすると、
まともに戦って勝てる相手ではない。フェロモン作戦で行く！」

「しかし、いざ決行してみるとな……。『念派系』^{テレパス}がほしくなつてくる。」

「フェロモンは重要な、作戦の要だ。俺たちと同じだとすぐに気付かれるから、

敢えて一人にさせて距離を置いた。だが、……いや、俺たちに失敗の二文字はない！」

ここまで来たからには何があっても成功させなくてはならないんだ！」

道路を挟む2組。片方は2人、片方はフェロモンの能力を持つ1人。この間、挟んだ道路から約100メートルの付近まで^{シートゥエルヴ}は近づいていた！

「行くぞ！」

男が右の手のひらを前に出す。すると……

シュボツ！ 燃えたぎる球が出現した！ 輝くそれは今も高い温度を周囲に放っている！

彼はさらに集中することで球をより大きくため込んだ。

「この規模なら！ ……おっと、迎え撃つ分も必要だったな。」

左の掌も上に向けると、やがて熱量を持つ球が出現した。

左も右と同様の大きさにまでため込むと、

彼は左の球を目の前の道路に向かって放った！

ドゴオオッ！

派手な爆発音、コンクリートを弾け飛ばすほどの破壊力、粉塵が舞い上がる。

「ヴオオオオオオオオオオオオ！」

これに反応したシートウエルヴ。ここまでは通常の計画通りの算段だ。

そしてこの声が発せられる前にはすでにフェロモンが向かいのビルの間から
匂いと共に漂わせる準備が始めっていた。

「今回は……『冷静』のフェロモンだったはずだな。」

『冷静』とは名ばかりだと、能力者自身の彼は思っていた。

相手にはただ落ち着きを利かせるための能力だったはずが、このフェロモンは

効力がやや高いため、それ以上の効果をもたらしてしまう。

過剰なフェロモンも、コントロールがきかないために多く使用してはならない。

が、それはマスクをしている味方には無効。外野の人間には有効なのだ。

最も、彼らが邪魔をする事は杞憂であると祈るばかりである。

やがて地を駆ける新堂が響いてくるが、その歩行速度は徐々に鎮ま
った。

「ヴオオオ……ヴウ」

安全に静まった。

「おい、人間どもの守備はどうだ？」

「……屋上の外だ。降りてこちらに接近している。間違いない、彼らはここにくる！」

……どうすれば、爆風はフェロモンを吹き飛ばす。ここは無風だが、フェロモンは使い続ければ徐々に一体を満たすだろう。

問題はいかに相手に悟らせないかだ。
俺たちが……命をかければ彼らは戦意を喪失させる域にまで彼らはフェロモンで墮ちる。

ただ、彼らは屈強な猛者どもだ。一度攻撃の姿勢を見せれば殺されることに……。

時間稼ぎすら、俺たちには許されないことなのか……!?

「……早まるなよ。俺たちは、シートウエルヴが『子を産む』瞬間まで守り抜く事だ。

俺たちが死ねば……子は殺されるかもしれないし、あわよくば敵に服従させられるかもしれない。」

本命をもう一度耳にするが、ますます現実的な作戦が難しくなる。

……戦わずに、相手に許しを、命乞いをするしかないのか？

いや、それも選択肢の一つだ。死なずに命を全うする方法。それが必要なんだ！

今はそれしかすべはない。

「……どうする？」

「戦うのはダメだ。だから、戦意は見せない。俺たちは素直に相手に頭を下げる。」

それしかない……。化け物はシートウエルヴだけじゃないんだ。」

「分かった。ならその役目は俺がやるう。」

「な、な！」

「俺は壁を透けるように透視する能力しかないからな。」

フェロモンも、爆撃も大事なスキルだ。俺が欠けるならまだしも、他が欠けると支障は大きい。」

「……」

「だから、俺が行く。隙あらば、その右手をぶつ放せばいい。」

采配は、お前に任せるよ。『林』^{はやし}もフェロモン使いで通ってきたん

だ。

異論はないはずさ。あいつは察するのがうまいからな。」

「馬鹿野郎……！ だからって」

「いいから、ここは任せてよ。大丈夫、シートウエルヴについては上手くだますから。」

後は、お前の隙にすればいい。北山。」

そう言つて、大きく息を吸ってからマスクを外す。

それをその場に捨て、道路に走る。

総勢12名の多勢に向かって走るのは無茶がある。

不安を紛わせ、生を祈り、彼らは無言で潜み続けた。

なぜ彼らの元へ走ったのか、答えは簡単だ。フェロモン領域から脱出するためだ。

マスクを着けたままじゃ意図が伝わる。そして彼は

このにおいの原因もシートウエルヴが関連していると『偽の情報』を伝え、

手中に落とす。それが魂胆だった。

やがて領域を出た彼は、止めていた息を吐き出し、新たな空気を吸い込む。

「ハア、ハア」

領域圏内は広くなつていき、もうすぐここも満たす。その前に彼は歩いた。

「さてと、狩猟隊か、それとも民間人か？」

「化け物の方から歩いてノコノコ来たつてことは関係ありなんだから」

……相手も馬鹿じゃない。できうる理解はできていて、こちらには隙を見せない。

「君たちは、あれが目当てなのかい？」

後ろを指差す。シートウエルヴが据わっていて、動く様子はない。

「……さあな。」

「お願いです。命だけは、命だけは……！」

彼は頭を下げ、膝を地面に付けた。

「どういふつもりだ。」

「……お願いです。僕とシートウエルヴの命だけは……勘弁してください！！」

「虫がよすぎるとは思わないか？ あり得ない話だ。」

「どうして、あなた方は狙うのか。その理由だけでも、利かせていただけないでしょうか。」

「……どうする？」

「冥土の土産にはちょうどいいんじゃないでしょうかねえ？」

やはり、俺はもとより殺される。そういう風に相手に決定されてい
たのだ。

俺だけが出てきて良かった……。

「俺たちは、普通にあんたらを始末しに来たんだ。あの怪物も、お
前らの命も。」

そうしなければならなかったんだ。」

「そういうことです。」

ムウウ……ダメだ。なら、悪あがきに終わっても、いいだろうか。

フェロモンを吸わせ、蹴りをつける。それが、最後の……。

「分かりました。ならば、せめてシートウエルヴの元でお願いしま
す……。」

殺される。殺される。殺される。

だが、焦りや焦燥はない。なぜだろう。覚悟を決めたから？ それ
とも、……。

「う、ここ、匂いが！」

「シートウエルヴのせいです。ここを根城にするつもりだったので
しょう。」

「まったく、あと50メートルが苦しいぞ……！」

声を発する間も与えないほどの威力と炸裂音。

彼が、命を、意識を奪われる感覚をかみしめながら、最後の目を見開いて見た光景。

それは、まばゆい程の爆発の光だった！！

T h e y w a i t u p o n f o r t h e Q u e e n ? (後書き)

途中からおかしな部分がありましたので、

前部も修正しておきます。仲間の総勢は12名でした。すみません

!!

感想なども受け付けております。何卒、よろしく願います！

They wait upon for the Queen ? (前書き)

サブタイトル『They wait upon for the Queen / 女王のために彼らは傳かくす』?

They wait upon for the Queen ?

「ゲフツ……！」

衰弱しきつた体では少々の爆風すら芯に響く。

幸いなことにフェロモンですっかり鎮まったC??はシートゥエルザ

それにも動じる事はなかった。が、これで全て決まる。

相手はせつかくフェロモンで大半が戦意を失いかけているというのに
まだ効果が行きとどいていない者がいる。

行動できるものがいたとするならば、疑うべき対象は間違いなく俺
だ。

あれほどため込まれた北山の『爆熱余波』を喰らってメルトゴマー

生きていられるはずはない……が、あれは相当の熱量と光を放つ。

気づかれたっておかしくはない。

「ウ、グ……一体何が？」

しらを切るように俺、『三鷹 みたか 道介 みちすけ』は口を開いた。

ここまで来てしまつて俺の言葉があいつらに聞き入れてもらえるかどうかは些 ちか問題 mondaiではあるが、

今更引けない。やるしかねえんだ！

「ガフツ！ ば、馬鹿な……」

声が、聞こえてくる。

どこからだ、シートウエルヴの奥から聞こえてくる。

フェロモンが爆風で全てかき消されてしまったので徐々に鮮明な視界が戻る。

「だ、誰だ！」

よろよろと僕が立ち上がると、辺りを確認する。

……あいつらの声が、シートウエルヴの方角から聞こえてきた理由がわかった。

爆風で吹き飛ばされたんだ！

俺が爆風を受けていない理由は、最後尾の誰かが被弾したからだろう。

一方最前列の俺は爆風の被害をほとんど受けなかったということか。

しかし、俺は視界が戻るとともに徐々に相手にしている人間が怖く

なってきた。

なぜ、誰も死んでいないんだ……！？

誰かが爆風を被弾したのは間違いない。爆風で吹き飛んでいるのだから。

だが、誰も死んでおらず、怪我也大きな外傷は見当たらない。

爆風でコンクリートに思い切り擦れたと思われる傷口は見受けられないが、

それ以上がない。一体、俺たちは何を相手にしようとしていたんだ？
宮ノ小路様のお告げ、一体どこまで見えているのだろうか。

そして、なぜ我々はこの任務を命じられた？

俺たちは、この任務を成し遂げられるのか？

あいつらは多少のダメージを与えたとはいえまだまだ行動不能には程遠い。

く……どうする。我々は宮ノ小路様のお告げの『生まれる時刻』ギリギリに動き出したんだ。

そろそろ、シートウエルヴは『産む』ぞ……！？

「ヴ、ヴォオオオオウ!?」

!?

やはりシートウエルヴが……！

「な、なんだ!?」

「怪物が目覚めやがったのか!?」

間に合わなかった!

北山は恐らく先ほどの方角。シートウエルヴ越しにしか攻撃できない。

フェロモンは十分に満たすためにも相当の時間がかかる。

俺は戦闘能力がない。

……終わった。あいつらはゾンビを殺す。俺も殺される。

最悪の場合は林と北山だけでも逃げ切れるだろうが、
シートウエルヴは……任務は果たせない。

畜生、畜生！！

……時間がゆっくりになった？

なんだこの感覚は。最後の最後に走馬灯をみて俺の命は終わるのか。
驚きのあまりに動きを止める12人組。
俺は、シートウエルヴの付近にいる。

今、シートウエルヴの下半身。2本の足の間から、何かが出てくる。

それは、ゾンビなのか。それとも……『人間』なのか？

悠久の時のように思えた光景だった。

生命の誕生とは、こつこつ美しいものだったのか。
最後の最後にこの神秘的な光景をこの目に入れる事が出来たんだ。
悔いはない。

……と思いきや、そのような甘い考えは捨て去らなくてはならなかつた！

シートウエルヴは座ったまま、子を産んだ。

この子の生態については俺も知る由がない。髪が長くて、見た目は女子のようだ。

あいつら12人は、シートウエルヴをどう判断するか。

今の行動のツケは相当デカイ。

この子の誕生を知っているのは今のところ俺一人だ。
だからこそ、任務達成の余地はある！

……しかしだな、これは生まれたての人間のような赤子？
性格は……なんだ？

人間とは質が違う。生まれても産声を上げず、行動もしない。ただ、俺をじっと見つめている。

宮ノ小路様は、この子はお告げ通りによると『世に改変を齎す』らしい。

だが、ゾンビ。つまり異形の姿ならゾンビの世界を作り上げる事は容易なものだ。

だが、これは一体……。

宮ノ小路様のお考えは我々には到底理解できないような崇高なものかもしれない。

ドゴゴゴツッ!!

「うぐあ!」

「ま、また奇襲だ!?!」

「どこから撃ってるんだ!」

第2発目の爆撃が起こったようだ。今の知る状況でここまでの規模の爆発を起こせるのは

北山的能力以外あり得ない!

第2発目の不意打ちは完全に予想外の様子だった。

またもや爆風でシートウエルヴからますます遠ざかる。

そして爆発で粉塵がますます舞い上がった。

……チャンスは今しかない!

「行こう!」

グイッと手を引っ張る。この子の詳細については宮ノ小路様が

後々指示をくださるはずだ。今は考えるな。無事に帰還する事だけを考える!

決断したところで

「三鷹、何してんの！ 行くよ！」

「ああ！ 急ごう！」

走っていると、第3発目の爆発音が聞こえてきた。

もう粉塵で完全にあいつらの視界はふさがっているはずだ。

行こう、宮ノ小路様の元へ！

「っと、その前に北山も一緒だつてこと忘れるなよあ？」

「わ、わかってるって！」

一瞬忘れかけていた。歓喜のあまりつい思考が宮ノ小路様一色だった。

俺たちは、任務を無事達成したんだ！

「ここは僕に任せて。」

「ちよつと！」

ビルや建物の間を進み、ついにおかしな場所まで来てしまった。

窓ガラスが割れてて、不吉さマックスだ。

「フェロモンを使うには人気のないところに行かなくちゃね。」

「誘導のフェロモンだな？」

「勿論。範囲全域に共有しちゃうから普段は使えないんだけどね。」

「便利なんだか、不便なんだか……。」

誘導のフェロモン……今回初めて見る。

林の放つフェロモンはなんだかんだできついにおいではない。

むしろ、すうーつとなじむように入ってくる。

俺が言うのもアレだが、誘導ってどういう能力なんだろう？

「……。」
すっかり無我夢中だった。この子、俺の服の袖をギュツとつかんでいるぞ。

寒い……よな。今はすっかり冬だ。外は雪景色には程遠いのだが、気温はすっかりそういうの低さだ。

「俺の上着、貸すか。」

俺は上着を脱ぎ、生まれて間もないこの子に着せた。そして、フアスナーを閉める。

生まれて間もないため、当初は体全体にシートウエルヴの羊水よしみずが包んでいたのだが、今は空気も乾燥しているせい、水っ気はない。上着を着せないと後々の健康被害に繋がる可能性も否めない。

最も、ゾンビの関係があるため、この子が風邪をひいたりするかどうかは分からない……。

「……よし！」

「誘導できそうか？」

「ギリギリ！」

「能力使いすぎてるんじゃないかねえの？」

「それでもなさそうだけど、爆風って果てしなく遠くまで届くからねえ。」

「なるほどな……。」

気になって仕方がないんだが。この子。

宮ノ小路様の事だ。この子は生涯大切にされるだろう。

温厚なあの方の事だからそれだけは断定できる。

……しかし、名前がないと呼びづらい。宮ノ小路様はどのような名前をつけられるのだろうか。

「……待たせたな！」

北山！ よし、これ以後は帰還するだけだ！

「行こう、宮ノ小路様の元へ！」

俺たちは駆け出した。シートウエルヴの子が俺たちと同じ速度で走っている姿は

現実的に考えてとても奇妙な光景だっただろう。

しかし、俺はそんなことがどうでもよくなるぐらい気分がハイになっていた。

思わず笑いがこみ上げる。

あいつらには本当に勝負して勝てるとは思えないが、なぜか笑っている。

そういえば、どこかの本で読んだ事がある。

人間は恐怖から解放されると笑いが込みあがってくるらしい。

俺が今笑っている理由もそれなのだろうか？

「ク、ククク……！」

「碇、急に不自然な笑い方をするのはやめろ……ッ！」

「冷たいですねえ。幽君……。聖奈ちゃん。見つけましたか？」

「うん、走ってると思う。」

「聖奈ちゃんの能力を使えばどこに隠れようが一目瞭然^{いちもくりょうぜん}。」

これを忘れていたとは!」

「……で、追うのかよ?」

「当たり前です! 私の研究が滞るかもしれないライバルですからねえ。」

寄りつく虫はちゃんと始末しないとけません。」

「……勝てるのか?」

「幽君。君、見たでしょう。爆撃の様子も、あの貧弱な男も。」

影からコソコソ狙ってくるという事は、真っ向勝負で勝つ自信は極めて薄い。」

加えてあの男、死ぬ気だったんでしょ。罠おとりですかね。」

「そういえば、匂いもなくなったな。」

藤島が不意に発言したことが、皆をハツとさせた。

「匂い……そうです。シートウエルヴが発していたと言っていましたね。」

まだ死んでいないはず……。」

「おいおい、狩猟隊取り逃がしておいて……。もう殺した方がいいだろ。」

「いや、狩猟隊を……。」

「ヴヴヴ……。」

隣から殺意に満ちた唸り声。

「……!」

「ヴオオオ……。」

やがてビル群から姿を現した巨体。それは、いとも簡単に俺たちを目に入れた。

「……まさか、最後の最後に『クリアサイト透明細工』が役に立つとはね。」
「妨害もほとんどなかったしな。そういえば結局あいつら追っ
てるのか？」
「ここまで来ちゃったんだ。もう見えないよ。遠すぎる。」
「そっか、ま、全員生き残れたんだ。任務も達成できたし。」
「そうだな。そうだよな！俺たち、まだまだやれるよな！」
「あつたり前よ！こんなところで死ねるか！そろそろ宮ノ小路
様の

管轄内だ。敵なんていなくなるさ。」

仲間とは、時に想像以上の支えになる。そう深く実感した三鷹 道介だった。

They wait upon for the Queen ? (前書き)

サブタイトル『They wait upon for the Queen / 女王のために彼らは傳かくす ?』

三鷹 道介視点です。

They wait upon the Queen ?

「宮ノ小路様。任務達成の報告に参りました。」
「そう、ご苦労だったわ。北山、林、そして三鷹。」
コツコツと歩く音が耳に届く。

俺たちは無事に命を達成し、今宮ノ小路様の宮殿内にいる。

宮殿には人間のみが立ち入りを許されているが、宮ノ小路様の配下には……ゾンビもいる。

知能あるゾンビ。人間のように動けるゾンビ。

俺は配下にそのようなゾンビがいても、奴隷のような扱いを受けるのだろうか？ と

疑問に思っていた。そもそも配下に入れて一体何ができるのかとすら思うほどに

ゾンビに対する評価は低かった。何しろ、辺りを徘徊する奴らは、ノロマで考えもせず、しゃべりもしない。知る人ぞ知る『デク人形』

人を食うこと以外には何も恐怖する事がないのだ。

ただ、今はただのゾンビは相当少ない。殺されたのか、餓死したのかは分からないがとにかく、

数は見ない。

それどころか、今はゾンビのできる範囲の水準がどんどん上がっているらしい。

酔狂な研究家がゾンビについて熱心になっていて、

それを世にばらまいているのが原因と聞くが真意は定かではない。

その、酔狂な研究家は今どのような事をしているのか俺にはさっぱりだが、

世にゾンビをばらまいたくらいなんだからクレイジーな奴だと思っ
ている。

そつでなきや、世の中こんな狂いはしなかつたさ。

トントン と少女の背中を押す。

少女は疑問符を浮かべたような顔で俺の顔を見上げていた。

「行くよ。」

少女の背中を押しながら宮ノ小路様の傍そばによる。

「シートウエルヴの……子です。」

「そう、これが……。今回の件、本当に助かつたわ。ありがとう。

あなた方3名には休暇を与えるわ。ゆつくり休みなさい。」

「え、いや、まだ引き続いて別の任務をするのではなくてですか？
とつさに声を出したのは北山だ。」

「北山、あなたは特に今回の任務では大きな役割を果たしていたはずよ。」

あなたの『爆発余波』マルチボマーがなかったら

そもそも任務は成功に導くことはできなかつたわ。いい？ これは命令よ。

休暇を取つて、次に備えなさい。」

「は、はい。」

「分かつたのなら、いいのよ。下がっていいわ。」

「分かりました。……失礼します。」

やや残念そうな表情で北山は部屋を後にした。

「ぼ、僕も失礼します。」

林もそくさと出て行ってしまった。フェロモンは長時間使つていたからな、

疲れも出て当然といえば当然だろう。

さて、俺も長居は無用だ。宮ノ小路様にはこの子の事があるだろうし……。

「僕も失礼させていただきます」

「待つて。三鷹はここに残りなさい。話があるの。」

「話、ですか？」

「一体どんな話なんだろうか。お告げ……とか？」

「ええ。この子は『世に改変を齎す』子。一体どんな名前を付けてあげればいいのか、

一緒に考えてくれないかしら？」

「え、あ、俺がですか？ 荷が重すぎますよ。それにこの子は……」
少女を見ると、じーっとこちらを見つめてくる。まさか、俺の事を親だとも思っているのか？

「分かったかしら。その子はあなたの事を親だと思っているようにすし、

あなたも名前を考えるべきなんです。それに、あなたはこの子を養育しなきゃいけないわ。」

「な、なんですつて……！？」

俺が、親？ 養育？ ちよつと待つてくれ。俺には……荷が重い！
そもそも非戦闘能力関係の俺は食糧調達の任務も多いんだ。

食料に響けば養育どころじゃなくなるんじゃないか？

貯蔵分があるわけでもないし……。

「飲み食いを全部俺が……？」

「そうね。でも、この子なかなか成長具合も良好だわ。

勉強もすぐにできそうね。」

「勉強させるんですか！？」

「日本語くらいは軽くマスターしてもらわないと困るわ。

それから戦闘訓練も積ませないといけないし、やる事は山積みよ？」

「そ、そうですか……。頑張ります。」

「ふふ、よろしく頼むわ。期待してるわよ。」

「は、はい……。」

「それで、名前の件なんだけど。」

「……日本名ですか？」

「もちろんんよ。」

ここだけ調子が強かった。なぜだろう？

「……名字はどうします？」

「そうね、宮ノ小路でいいんじゃないかしら？」

宮ノ小路……というと、この子も様づけになるのだろう。

そうすると名前で分けなきゃいけない。呼びやすい名前じゃないと後々困るな。

そうだな……うーん。

「……高嶺たかねというのはいかがでしょう。『高い』に山と領の『嶺ね』です。」

「ふーん、あなた、いいセンスしてるじゃない。」

「勿体ないお言葉です。」

「決まりね。あなたの名前は高嶺！ いいわね、高嶺？」

「……。」

無反応の少女『高嶺』。

「……ふう、仕方ないですね。」

ポンツ 手を頭において、声をかける。

「自分の名前だぞ。今日から、『高嶺』だ。た・か・ね。いいな

？」

「……コクツ」

頷うなずいただと？

……ま、反応を見せたんだ。これで決まりだ。名前があつてようやく呼びやすくなった。

だが、養育係に任命されちまうなんて……。北山、林と任務は組めなくなるってことか。

残念だ……。最後に、爆破ミッションなんて気持ちのいい任務を果たしたかった……！！

なんてな、ゲームのやり過ぎたせいか。以前は結構夢中になってやってたからな。

今はそんなものなんてない。あるのは現実だけだ。

娯楽のためのものは全部使えない。それが今なんだ……。

「ふー、明日から養育だッ！」
結局、明日からに決まった。覚えが良いというか、記憶能力が凄
いから

今日中に女としての基礎を全て叩き込むと宮ノ小路様は言っていた。
日本語よりも先に女を教えるのはまあ賛成だが、順序は間違っ
てなかつたと考えたい……。

たぶん、女としての基礎って、生活の事だろう。

ならば、明日は普通に日本語を教えてあげられるってことだ。

戦闘訓練については俺は聞いちゃあいないが、俺は管轄外。

宮殿の側近辺りに教わるだろう。この分じゃ能力の開花も近そうだ。

「もう寝るか。どうせあいつらも寝てるだろ……。」

そう、北山は戦闘向けの任務ばかりこなしていたからだろうが、

俺たちはそこまで労働に慣れていない。だから夜全力を出すことは
本当に疲れる。

夜目が利かなくなかった俺は能力で何とか補っていたものの、

警戒し続けるのはつらい。疲れもどつとあふれてきた。

……そして、朝が来た。

宮殿は広く、仕える人間は入口の間で寝ることになっている。部屋
がないからだ。

側近のみが個室を持っていて、それ以外は事務など。凡人には手
に入らない。

「ん……」

「な、なんだこの声？」

俺は群がって寝るのを嫌う。1週間ほど前、どこかの集団が夜に奇
襲をかけてきて、

パニックたやつらが俺を下敷きのごとく踏みつけて俺が逃げられず、
結局その集団にやられそうにあったからだ。

それで降俺は大勢で寝るのはトラウマなんだ。

しかし……誰かが隣にいるんだ。俺は一はずらしていない。なら、誰かが俺のそばに来たってことか。一体誰が……

「……ううう、う？」

やがて眼を開けたその人。いや、その女性。

顔をのぞき見てやろうと思ひ、そつと顔を見る。

「……高嶺か？」

高嶺は眠たそうに上半身を起こす。

服を着ているが室内のような衣装だ。戦闘訓練はなさそうだな。

「ミツケ？」

「は、ミケ……ミツケ？」

「ミツケー！」

「ウグツ！ な、なんなんだ。ミツケって……こら、あんまり抱きつくなくて！」

こいつ、相当うれしそうだ。昨日何かあったのか？

本当に生活のことについては色々と学んできたようだが、

日本語はやっぱり俺が教えなきゃならなそうだぞ……。

「と、とにかく宮ノ小路様のところに戻るぞ。」

立ち上がって高嶺の手を掴む。

すると、高嶺も立ち上がる。

階段を上ってテラスに行く。

「……朝も早いし、ここで時間つぶすか。」

ここにはもともと人は来ないので都合が良い。来るのは宮ノ小路様と、俺ぐらいだ。

「日本語なんて使えば自然となれるもんじゃないのか……？」

日本語の教え方についてひたすらと思考を張り巡らす三鷹 道介だった。

They wait upon the Queen ? (後書き)

病氣と闘って執筆しました(笑)

完全にヤツテミタカタダケーといわれそうなので

ちよつとストーリーに組み込んでみた。

『ミツケ』は三鷹の名前『道介』ミチスケの最初と最後を取って着けました。
これこそ手抜きみたいなの……ごめんなさい。後悔しています。

まだまだ頑張りたと思いますので感想などあればお気軽にどうぞ
!

They wait upon for the Queen ? (前書き)

サブタイトル『They wait upon for the Queen / 女王のために彼らは傳かくす ?』

三鷹 道介視点です。

They wait upon for the Queen ?

テラスで朝日を拝んでいる時間でいくつかが気がついた点がある。

それは、『宮ノ小路』の名を獲得した少女……『高嶺^{たかね}』についてだ。昨日のように、大人しくて静かな様子はどことなく無くなっている。代わりに、活発にしゃべるようになった。

宮ノ小路様が女性としてのノウハウを教えていた間に、すでにいくつか……というかなりの日本語を習得したのではないかと思う。

稚拙な言葉も多々あるが、それでも上達は凄いスピードだ。

日本語は色々難しい表現や、漢字もあるのでまだまだ教える事は山積みだが

一晩でここまで習得できたのだから漢字の習得も時間の問題だろう。戦闘訓練が始まるのも近いだろう。

空がやや照らされる頃に、ようやくテラスを離れた。

冬は朝、日が昇る時刻も遅いため、これでも恐らく7時前。

宮ノ小路様も起床している頃合いだ。

「ミツケ、どこ行くのー？」

「……え、ええっと。」

言葉に詰まった。宮ノ小路様の事を俺はどう呼べばよいものか。

宮ノ小路様の名前……は素直には口に出せるはずがない。

もともと、宮ノ小路様はそれ自体は許されているのだが、俺には口にする勇氣すらない。

「^{ゆめ}柚姫のところなの？ ねーねー。」

「そ、そういうことになるか……。」

宮ノ小路様の本名は『宮ノ小路 ^{ゆめ}柚姫』。

本来は日本でもお偉い家系に使える家柄で、補佐などが専らほじつの家だつたとのことらしい。

しかし、ゾンビの騒ぎで有名な家系の血筋を引く者の消息が途絶とだえてからは

自分の家柄に所属する人間や、そのさらに下に使える者が集った。

さらに、宮ノ小路様の御意向ごいじやうにより一般の人も共に行動できるようになり、

今に至っては知能あるゾンビまでもが配下にある。

宮ノ小路様の御心ごこころはとても慈悲深く、誰よりも人々を導こうとするために

毎日、計画的に役目を分担させて今の宮ノ小路様を筆頭とする集団がある。

「それじゃ、部屋に入るぞ。」

念のためだが、高嶺には色々教えてやるべきことも多い。

日本語だけが全てじゃない。今の世の中はそれだけじゃ生き抜けない。

そして、弱者ができる事は、『協力』すること程度しかないのだ。

『強者に尽くす』というと聞こえが悪い。が、宮ノ小路様は信頼も厚いお方。

皆も協力は惜しまないし、戦闘においても一心、事欠かないほどの能力者がいるので

外敵からも身を守る事はできている。

コンコン 扉をノックする。高嶺はその間、じつと大人しく様子をうかがっていた。

マナーは教わっている……らしい。理解力も大したものだと思う。

「誰？」

「三鷹 道介と高嶺です。」

「いいわ、お入りなさい。」

許可が出たので、扉をあける。

扉の奥には宮ノ小路様と、もう一人……

「おはよう、三鷹君。」

「三條 神海……様？」

三條 神海は家柄的に、過去高い地位を得ている。

宮ノ小路様の側近にはこういう貴族のような位置づけの者が多い。

三條は宮ノ小路様の側近。つまり、

戦闘能力が極めて高い者で単身で周囲の警備を任される程の実力者。他にもごく少数側近が存在する。全員で5人いるそうだが、俺はただ3人しか見た事がない。

彼もその3人のうちの一人だ。残念ながらどんな能力を有するのかまでは知る由もない。

「相変わらず堅いねー、三鷹君。」

「高位の方を呼び捨てにするのはちょっと……気がひけます。」

「気にしないでいいんだよ？ 少なくとも僕にはね。」

「いえ、そういうわけにはいきません。」

「北山君には普通に接してるのに僕にはダメなの？」

「そ、それは……。」

言葉が詰まる。高嶺の任務を共にした北山。

彼も側近の一角を担う能力者だ。『マルチボマー爆熱余波』なる爆撃は

恐るべき突破力で5人の側近の中でもじょれつ序列2位という他を圧倒する格付けがされている。

その側近の中でも北山は唯一、皇族、貴族の血筋がない一般の側近でもあり、

周囲からの信頼はそこそこ得られている。俺も彼には何度も世話になっただし、

お互いに林と励ましあった。

「彼は……その……。」

高位だが、それ以前に励ましあつた仲間だ。とは素直に言えない。上にはそれなりの態度を示し続けてきたのだ。今更変える事は……。それに、彼とは呼び捨てにするほど今後進展するとも思えない。側近は単身任務が多いので接点もないだろう。

「信頼し合つてゐることなのかな。僕にはまだ心は開いてくれないつてわけね？」

「いえ、決してそういうわけでは……！」

「いいよ、大丈夫。僕はそろそろ巡回があるから、

次は話相手になつてもらいたいね。それじゃ。また今度ね！」

巡回を急に思い出して扉からすぐに出て行つてしまった。

温厚そうな人物、としか今は言えないが、彼の言ふ事は的を得ている……。

俺は信用しきつていない。高位の人間は尽くす一方で、

逆に高位の方からの誘いを受ける事には抵抗がある。宮ノ小路様には尽くしているが、

彼からの頼みとなると素直に引き受けがたい……。

そもそも、側近は側近同士で仲良くなるものだと解釈していたものだから、

非戦闘員の俺が対象になるなんて思いもしなかった。

「えっと、それで、宮ノ小路様？」

「……あ、三鷹。話は済んだようね？」

何か考え事でもしていたのだろうか。朝からだと疲れもたまるのではないだろうか？

それなのに事務担当がこの部屋にはいない事を考えると頼める人がいないのだろうか。

いや、人望の厚い宮ノ小路様に限つて頼む人に困る事はない。

側近が5人もいる。必ずフリーになる者もいるだろう。開いたものに頼めば良い。

……とにかく、宮ノ小路様が朝から疲労している事は、俺の杞憂きゆうで

あると考えたい。

「今日は、早速日本語をマスターできるようにしてほしいの。授業の仕方は好きにしていいいわ。作法は改めてまた午後私に付き添いで教えるから、

午前はそつちに集中していいいわ。朝食と昼食は欠かさないようにな。

」

「分かりました。」

「はい、頑張ります。お母様！」

「良い返事ね。頑張って覚えてくるのよ？」

母と子のような対話が終わって、俺は高嶺と広めの個室で授業をする事となった。

宮ノ小路様からスケジュール（授業の目安）が書かれたメモを受け取っていたので、

折りたたんでいたメモを開く。

「……ふむ、初歩的な漢字の読み書きか。」

これは書かせるのが一番早い。早速白紙とシャープペンを用意して机に向かわせる。

「まずは簡単な漢字からだ。『高』^{こう}って感じから音読みと訓読みを覚えるんだ。

そのあとは書く練習。使い方もしっかり教科書に書いてあるから、よく見るように。」

どこから用意されたものなのか不明の国語の漢字専用の問題集^{ワーク}。

覚える漢字の順序はバランスがとれていて覚えやすいように見える。書くことに慣れていないようで、おぼつかないペン捌きだが、なんとなく読める。

コンコン 不意に個室の扉がノックされる。

「どちら様ですか？」

「北山だ。三鷹だろ？ 入ってもいいか？」

「ああ。」

ガチャ 扉が開かれ、北山が姿を見せる。

「おお、本当に養育係じゃないか。」

「宮ノ小路様から聞いたのか？」

「ああ。気になって仕方なかったから来ちまったよ。」

「側近の名が泣くぞ？ いいのか、ここに立ち寄って。」

「側近なんて冠かんむりさ。それに、養育係がお前だつてことに

不満を持つてる側近もいるからさ。護衛みたいな感じなのかな？」

「宮ノ小路様の命じゃないのか。俺には『透明細工クリアサイト』がある。

扉の奥に誰かがいるならわかるさ。」

「さつきノックした時は使つてなかっただろ？ 反対を行動に移し

そうなやつはいるし、

悪い話じゃないだろ。」

「そ、そうか……。高嶺、覚えたか？」

「ページの半分くらいできたよ。」

「な、なんだつて……？」

机をのぞいてみる。確かに、問題集ワークはページの約半分ほどの漢字は

攻略されている。

「へー、凄じじゃないか。」

「知能は凄じぞ。この分じゃ、書くことにさえ慣れればもっと速い

と思う。」

「なるほど……。そういえば、さつき三條に会ったか？」

「え、あ、宮ノ小路様の部屋で会ったよ。それが？」

「やっぱりな……。さつき話していたらお前の事を三條が言つてた

よ。」

「ハ、ハハ。側近は側近同士で仲良くなるものじゃないのか？」

「そりゃまあ側近同士で三條は親しみやすいけど、『広幡ひろはた』とかは

話しづらい。

あいつは側近つてだけで何かとでしゃばるからな……。」「

「へ、へえ〜……なるほど。」

「あ、そうそう。聞いてくれよ。あいつこの間能力で勝負ふっかけてきたんだ。」

倒壊したビルに向かって見せつけるだけなんだけど、あいつ俺の能力見たら

途端に言いがかり付けてきたんだぜ？」

「酷い話だ……。で、勝負の結果は？」

「勿論、俺の圧勝だ。広幡の能力って『パワートリガー 充力発動』って言って、ため込んだ分だけ怪力になれるって能力なんだけどな。動きは素早いし、パンチも強いんだけど

まるで防御がなっていないんだよ。攻めることばかりで隙だらけだ。能力に頼り過ぎてるよアレ。側近には向いてない性格だよな。」

「アハハ……。色々あるんだな。あ、高嶺。次のページ進んでいいぞ。」

確かにそれは側近には向いてない、かも？」

「結局あいつは序列5位。当然の結果だろ。」

「ところで序列って誰が決めてるの？」

「宮ノ小路様さ。基準は知らないけど、序列は的中してるみたいだから、

俺よりも序列1位の『ウチ九条』は強いってことだ。

確かに九条の能力には一瞬身震いしたぜ……。」

「そ、それってどんな能力なんだ？」

「『サイジマイン 百式地雷』。あいつが序列1位を掴んだ能力だ。」

コンクリートを軽く吹き飛ばす衝撃を持った爆弾を作れるんだ。」

「ば、爆弾!？」

「ああ。地面にしか設置できないけど、色々爆破の方法が違う。」

手動、条件式、時限式、重量式……どれがどこにしかけてあるのかわからん。」

「……化け物だな。」

「全くだ。俺よりも数段強そうだ。」

勉強も進ませつつ、北山と話が弾み授業も一緒に行った。

やがて、午後になり、昼食を済ませ、高嶺を宮ノ小路様に預けた。その後はフリーになり、テラスに再び足を運んでいた。

「序列、か……。」

ふと、北山の話の思い出す。

外を眺めていると、屋根のほうから声が聞こえてきた。

「おい、北山！」

「ん、ああ、広幡か。」

「今度こそ俺が勝つ。勝負だ！」

「やめとけ。お前じゃ絶対に無理だから。」

「さあて、どうかなあ!？」

タンタンタンタン！

素早く屋根を駆ける足音が聞こえてきた。

テラスで屋根を見ると、ギリギリ広幡と北山の姿が見えた。迫る広幡に

シュボツ 北山の掌が瞬時、彼の顔面に向けられ、寸止めをする。

そしてその掌には熱球が収まっており、勝負が決した瞬間だった。

「クソッ！ どうしてだ！ スピードじゃ確実に勝っているのに！」

「……その理由は、自分で考えな。」

北山は屋根を歩き、とある場所で飛び降りる。その場所とは

スタツ

「どうだった？ 俺の華麗な勝利！」

「お、お前な……。」

テラスの間上だった。

「ま、待て、北山あ！」

「勝負はまた今度な。次は序列4位様にでも頼むわ。じゃあな！」
北山は俺の手を引っ張り、室内へと走る。

「うわわ、ちよつと！」

「そんなに焦んなつて。俺がついてる。」

「だ、だけど！」

「そんなことより、大事な話があるんだ。」

「大事な話？」

「ああ。すつごく大事なんだ。宮ノ小路様に見言えない事だ。」

宮ノ小路様にも言えない事？

北山にもそんな事があるのか？

彼が口を開く。俺は、その言葉の重みを知らずに彼の真剣な面持ちから発せられた、

彼の紡いだ言葉を平然と聞いていたのだ。

「側近よりも高位の、本当の序列1位がいる。」

彼ら二人以外には聞く者はいなかった。半信半疑で聞いていた彼には、

重みどころか、どこが大事な事なのかも、疑問の対象だった。

その言葉は、宮ノ小路の宮殿に新たな謎を生み出したのだった。

T h e y w a i t u p o n f o r t h e Q u e e n ? (後書き)

謎な締め方で済みません……。

三鷹視点はまだ続く予定です。

ぜひとも、感想の方をよろしく願います！

They wait upon for the Queen ? (前書き)

サブタイトル『They wait upon for the Queen / 女王のために彼らは傳かくす ?』

三鷹 道介視点です。

They wait upon the Queen ?

「側近よりも高位の、本当の序列1位がいる。」

非戦闘員の俺には縁もゆかりもない話だと思える一文だ。

これが、側近である彼らからしてみれば顔を拝みたくなるほどの事だろう。

側近という地位を与えてもらいながら……隠されていた。

つまり、偽の称号を手にし、彼らは宮ノ小路様に信用されていなかったという事になる。

側近を信用していなかったら、一体誰を信用すればいい？

……いや、側近だけじゃない。広まれば、きっと皆も宮ノ小路様に対する信用は

あっという間に崩れ去るだろう。

「一体、どういふことなんだ？ 宮ノ小路様は……。」

「さあな。ただ、他言厳禁だ。俺も信頼を失うと側近から外されるかもしれない。」

「わ、分かった。で、俺に喋ったからには何かあるんだろ？」

「ハハ、そうだ。策もある。側近の俺としては真実を知りたいし、何より……最終兵器があるとなると迂闊な行動も取れない。」

「序列2位もいまではただの冠。だから、俺と協力してほしいんだ。」

「林は、林には話したのか？」

「あいつは……フェロモンの能力があるからな。任務で忙しいらしい。」

「昨日はあつてない。スケジュールだと『調達隊』に配属されっぱなしだ。」

「そうか、俺たち林抜きで……。」

「心配するな。戦力には事欠かない。それに、お前の『眼』も必要だ。」

「だけど、俺も高嶺の教育があるし、いつでもできるってわけじゃ……。」

「その点については問題ない。お前は養育係で優遇されること間違いないんだ。」

「お前に問題があれば宮ノ小路様も黙っちゃいない。下手すりゃ側近使って止めるはずだ。」

「そうなれば、その時だけ俺は動きやすくなる。ま、フリーの時も俺はやるつもりだけだな。」

「それと、その……危険じゃないのか？ 下手に探りを入れたりしなきゃ。」

「宮ノ小路様に言いたい台詞だよ。だけど、さっきしらを切られた。だが、核心を突かれていたような様子はあつた。間違いない。」

「ハ、ハハ。……今日から始めるのか？」

「ああ。これ、メモだ。なんか、この事件の入口を示唆しているんだと思う。」

「文章の様子からしてどう考えても宮ノ小路様が隠しているのに、敢えてばらそうとしている感じだ。メモは誰にも見せるなよ。俺も写したの持ってるけど……。」

「後でじっくり見させてもらうよ。高嶺には見せていいか？」

「……子供（精神面だけだが）に見せるのは気が引けるんだが、お前が固く約束させるならいいだろ。」

恐らく、お前の事を親だと思っっているはずだ。賢くても親は親。

それに賢いならといてくれるかもしれない。……期待は薄いけどな。」

「それじゃ、何かあったら知らせるよ。」

「ああ、頼むぞ。」

こうして二人は別れた。メモは結局、夕食後で高嶺と二人である個室に入る時に開いた。

「メモ、ねえ？」

メモ容姿を開く。文章は結構な字数だ。4つ折りにしてあったので広げるとややサイズは大きかった。

ノートの1ページの半分程度のサイズだ。

□

歓迎状

この手紙を見ている者へ。私は、宮ノ小路様に仕える者の一人だ。だが、その待遇は他を圧倒するほどの地位で、五近ごきんの者共より高い影で暗躍する日々を送っている。が、そんな私も退屈な任務の日々は飽き飽きした。

私と君でゲームをしよう。君が勝てば全てを話す。宮ノ小路様に君の地位の昇格の推薦も考えよう。

おいしい話だと思うだろう？ 私はこのメモが抜き取られたことを確認した時から

宮殿内、敷地内、領域内を監視することにする。だから、君が探そうとすれば

私には君がメモを抜き取った人間だとすぐにわかる。徒党を組んでも把握は容易だ。

私は逃げも隠れもしない。ただ、暗躍して君たちを見守るだけ。

最後に、歓迎状と記したが……ゲームへの招待状も送ろう。
暗号を解き、見事この私にたどり着こうものなら私が君に力を授けよう。約束する。

暗号は下記の文章だ。では、幸運を祈る。私と、君のだ。　　
本当の序列1位　より　　

序文：

宮ノ小路。宮殿にはまず、女王が居り、下々の民が居り、そして我が居る。

民には決して知られざる秘宝在り。その秘宝、民が手に取る事決して叶わぬ。

本文：

真の問題、そこに在り、そこに無き事。　死人の枕元は常に暗し。然しそこに助言在り。又、死人の枕元下々の民の手には容易く届くことなし。

然るべき道は明るみなり。汝は明るみの道の終点、暗黙の枕元に届くこと叶う事を強く祈られる。

死人への道は明るみで待ち、汝の到着を詫びる。ただし、道は六に分かれけり。　　

「……漠然と書いてある事だけじゃなあ。」
なんとなく、わかりそうな気はする。すぐには無理そうだけど解け

そんな予感はある。

だけど、全てを解いて真相に行きつくには一筋縄ではいきそうにない。

これはたぶん、序章。門を潜る段階に過ぎない。

なぜなら、ここで語られている『私』……つまり、『本当の序列1位』は

挑戦的な文面をつづっているからだ。

それに、こちらが逆に挑発しても彼は動じないだろう。

むしろこちらに侮蔑の文を送り返しかねない。敵は、馬鹿ではない。

「こつちも限界か。」

ウトウトし始めてきた高嶺がカクツと首の力が抜けて瞬時に力が入る。

睡魔には勝てないのだろう。幼い精神では無理もない。

俺は高嶺の手を引き、宮ノ小路様の元へ向かい、預けた。

そして俺はメモをポケットに入れていつもの寢床に戻った。

寝る前までメモを眺めていたが、結局意図は理解できず、一時の眠りについた。

宮殿、深夜。

「……寝てるよな。」

三鷹を眺めて呟くのは北山だった。

「養育も大変だろうが、明日はもっとハードになるんだ。しっかり

寝とけよ。

俺は、見えたぜ。門を潜る道が。明日、お前に伝えるからな。」
寝ていて、誰も聞くはずがない声。独り言のようだが、三鷹に向か
ってしつかり小声で発せられた。
まるである種の決意のように言葉は強く彼を動かした。

夜闇を駆ける、序列2位。

「死人、6に分かれる道……全部、理解できたぜ。いらない前置き
書きやがって……！！」

彼は、宮殿からやや離れた宮殿の門番をしている者の元へと向かっ
た。

文面に綴られた、示唆された事は、確かにそこにあったのだった

They wait upon for the Queen ? (後書き)

『女王のために彼らは待つ』編はここでおしまいです。

ただ、ストーリーは続いて次のサブタイトルが変更になるだけです！
いらぬ思案ばかりしてすみません！

感想等々お待ちしております。評価もよろしくです！

D e s i g n o f N o . 2 (前書き)

サブタイトル『D e s i g n o f N o . 2 / 第2位の目論見』

北山 視点です。

「……おや、五近の方ですね。」

ボロボロだが石作りの民家。その中に一人の男の姿があった。ただし、そこには寝具のみがあり、他には何も無い。

「なぜ、分かった？」

驚きを押し殺したような声が返ってきた。

「そりゃ、わかりますよ。気配が違いますからね。北山様？」

「ほう、そこまでバレてるのはな。俺の目的も知ってるのか？」

「いえ、さすがにそこまでは存じませんが……。女王様の勅命しゅくめいですか？」

「いや、今回は違うんだが……。死人の枕元って言えばわかるか？」

「！！ では、招待状も？」

「ああ。俺が持つてる。」

「なるほど……。少し、そこでお待ちください。預かり物をお渡しいたします。」

そういうと、寝具を裏返した。

「ところでお前、ホントにゾンビなのか？」

「ええ、生命活動自体は停止していませんので腐臭はないと思います
が……。気分を損ねられましたか？」

「いや、そういうことじゃない。ただ、ホントに人間みたいだなあ
って思ってます。」

「元、ですけれども。」

「ハハ、でもな……。お前と人間の差ってなんなんだろうな。」

「女王様のご命令でたくし共はここでの定住を定められています
が、

それはわたくし共には到底理解しかねます。」

「そうかあ？ ホントはお前も分かっているんじゃないの？」

「……いえ。今は、仕えてもらえているだけでも至福ですので。」

「そうか。その至福、逃さないようにな。」

「ええ、北山様も御精進できるようにお祈りしています。彼もその助力をしてくださるはずです。」

「しっかしなあ、まさか組んでたとは思わなかった。お前はあいつのこと知ってるのか？」

「はい。しかと、この目で拝見させていただきました。」

なるほど……否定しないってことは、とことん俺たちで遊びたいってわけだな。

ゾンビは全員この事を知っているのだろう。ただ、それを周りに報告したいだけで。

女王様こと宮ノ小路様は当然理解してる。報告はいらぬ。

誰かがひっそりと暗号に気付くのを待ってたってわけだな。

「これです。彼からの暗号です。御武運をお祈りしています。」

「ああ、サンキューな。他の連中にもよろしく伝えておいてくれ。」

「^{かしこ}畏まりました。北山様。」

さて、今度はこいつもメモって三鷹に渡さないとな。

今日は……正午からシフトが入ってたな。それが終わったらフリーだ。

面倒事を起こさないようにしっかり手をまわしておかないと……。

「しっかし、シフトつつつても見張りだもんな。」

宮殿には中央に煙突のように高い突起がある。それは並の人間でも登れるように

鉄製梯子が設けられていて、五近に位置づけられた俺たちは、度々ここからあたりを広く監視する。

並の人間や、低能力者（特に戦闘能力に欠けている者）は視力が（戦闘系の能力者と比べると）低い。

そのため、こうして俺たちだけがここから眺めるといってもいいぐらい暇な仕事を請け負っている。

「退屈でやることねえや。」

その煙突のような高い突起の頂上には、柵と屋根があるだけ。

窓はなく、天候が悪い時には非常に危険でもあるが……

宮殿の作り自体が強固なため、この小さな塔とでもいうべきこの頂はいただき案外いい穴場だったりもする。

どうということかという……

「暗号もややこしくなってくるか……。」

という具合に人目を気にせず堂々とメモを見れたり、ちょーっと自分の能力を試したりするには

丁度いい場所だったりもする。

何かつぶやくにも適していて、

それに、……ここからの眺めは悪いもんじゃない。

「ハアア……！」

右の手のひらから小さめの球体を出す。勿論これは俺の『爆熱余波』マルチボマーだ。

今までは手から放ったり、じかでぶついたりしているだけだったが、そろそろこれも限界だ。

ぶつけるに至っては、俺自身能力の強さを抑制セーブしなきゃいけないからな。

あまり強すぎると自分の手を焦がす。

放つ事が出来るからこそ正規で2位の座に座る事が出来たといっても過言じゃない。

それは、1位の座についたあいつも同じ事だ。

当然の力を持ったからこそその地位。なら、もっと能力を高める事が出来れば……

「そう思った結果がこれだよ……。」
球体からレーザー状に光線が伸びている。しかし、その射程は約30cmほどで非常に短い。

「やっぱり能力セーブしてたら試せねえ……。」

直径5cmの球体でようやく30cmだ。これが直径に比例して光線が伸びるならまだしも、

実際は上手いかなえもんだ。特に射程に関しては……。」

たぶん、直径30cmでも1mいくかどうかってところだ。

難しいぜ、能力開発ってのはよ。」

「……つたく、覗きとか趣味悪いぜ？」

徐に発した言葉と思われたが、聞く者はいた。

「相変わらずいい感覚もってるよな……怖い怖い。」

「今日は、相手してやらないからな。広幡。」

「分かってるよ。お前、今日はずーっとせっぱつまってそんな顔つきだったし。」

「最低限の洞察力ぐらいはあるみたいだな。」

「馬鹿にするな！ これでも五近なんだよ！」

「……だったら、大人しくしてりゃいいだろう。勝負とか、本当は五近の役目じゃねえ。」

「らしくないこと言うなよな、北山。シフトだ。次俺だから変わってくれよ。」

「OK。次は俺を負かすぐらいの戦略とか練ってこいよ。」

そういうと俺は梯子伝いに降りた。広幡は勿論だとも言いたげな目線だったが、

俺の様子を見て黙っていたらしい。洞察力だけは本当に大したもんだ。

「次の暗号だ。」

今日も俺は三鷹の教室に立ち寄った。高嶺……といったか。この娘、高嶺が三鷹と共にいる光景も当たり前のような感じになっていくのだろうか。

慣れっでもんには驚くばかりだぜ。

「そうか、第2のメモだな。そいつと昨日のメモを照らし合わせると何かわかるかもしれないな。」

「昨日？ あれはもう解いちまったよ。」

「ええ！？ そ、それじゃ俺が必死に出した答えって……。」

「お前は、どんな答えだったんだ？」

「結論から行くと、たぶん門番を担当してるゾンビの事じゃないかって思ってたんだ。」

枕元がピンポイントかは別問題だけど、たぶん寝室とか民家にあるってことじゃないかな？

ほら、ここに仕えてるゾンビって6人だけだし。分からなかったのは最初の文章だけかな。

『真の問題、そこに在り、そこに無き事』ってやつ。」

「当たてる。お前、勘がいいな。俺もお前と同じ結論を出したよ。」

「本当か！ 俺の結論あたってたんだな！ で、次は！？」

「そんなに焦んなって。ちょっと写すからペンと紙くれよ。」

「あ、ちよつと待ってて。高嶺は42ページまで終わったら、野外授業だ。」

「はい！」

……おい、高嶺の性格変わってねーか？ 昨日とは違う気がする。

それとも、中身はガキってことなのか？

わけわからんね……。徐々に明るい性格になってるのは確かだと思っただが、

戦闘訓練、果てには人殺しも味わう事になるだろうな。

果たしてあの明るさがどこまで伸びて、どこで止まるのか……。

「はい、これね。」

「さんきゅ、写し終わるまで待っててくれよ。」

俺はさっそく複製を開始した。

今回も難しい語句並べた感じで終わりそうな予感だったが、ま……ゾンビも顔知ってるぐらいだ。自信は相当あるような奴だ。ま……次も気合い入れてやんなきゃな。

さきほどのゾンビの民家には、6人のゾンビが集っていた。門番を務める者たちだが、今は例外。

石造りの家には人間を含めると7人……。

「それで、やつは『一人』できたんだな？」

「ええ、間違いありません。」

「果敢な奴だ。流石は序列2位。1位は謎解きには興味なさそうだったし、

他も気に留めるような奴じゃないからな。北山か……なかなか強そうだな。」

食欲をそそるといったような気分で彼は期待した。

たった一人で暗号を解きに来た北山を……。

「次も簡単にたどり着くかな。それじゃ、またな。よろしく頼むよ。」

「はい、……来夏様。」

1人が去ると、残りの6人も散った。

「なんだありゃ？」

来夏がその時見たものは、宮殿の頂から短く伸びる光線だった。

「そうか、あいつも精進しようとしてんだな。感心感心。」

さらなる期待感を抱いて、彼は向かった。宮ノ小路の元に

E s o t e r i c b u d d h i s m (前書き)

サブタイトル『E s o t e r i c b u d d h i s m s / 密教』

三鷹 道介視点。

「……うむ、なるほどね。それでわざわざ報告しにきたのね。」

「僕も驚きましたねー。まさか第2位の彼が見つけるとは。」

北山君。名前は何て言ったっけ？」

「名前すら覚えてないのね……。五近程度は覚えてほしいわ。」

「北山 邦銘ほうめい」よ。あなたって興味がない事はホントに無関心なんだから。」

「仕方ないだろう。……それにしてもホントに北山か。」

俺的には戦闘とは無縁のような奴が暗号を手に入れると思ってただけだな。」

「……私は、隠さなくてもいいと思ったんですけれどね。いつバラすの？」

「近々には。でも暗号を解いた特典ってことにしようか。」

「本当の1位……には隠しておいてね。」

「アハハハ、九条君プライド高いもんね。」

「一種の密教のような組織になってしまったけれど、仕方ないわ。」

今回は許すけどバラすことは覚悟なさい。他にも同じような密教があるかもしれないわ。」

そういうところは早々に対処したいし、そろそろ偵察範囲も広げたいからね。」

「お任せあれ……。そういうえば、もうそろそろ九条が帰ってくる頃ですよね。」

そろそろ失礼させてもらおうよ。」

ややフレンドリーな会話が幕を下ろした。

彼の言う通り、九条は帰ってきてもおかしくない時刻なのだが、

彼はまだ帰還しない。その理由は

「私を動かすことができる感情など存在しないのかもしれないかもしれません。本当の意味で心なしで、私は人間の皮をかぶった化け物なのかもしれません。どうか、どうか……私の正体を明かす者が現れませんように。過去の栄光にはもう2度と縋りません。この世のために、地獄のために修練します。禁欲もします。できるだけ数多くの人々を救い、導いてみせます。だからどうか、継ぎ接ぎが分かるほど、私に誰も近づかないでください。」

私は神に強く祈りました。恐らく、信仰者、宗教者よりも強く一心不乱に願いました。度重なって、幾度も両手を翳して捧げました。しかし、私には何も変化はありませんでした。神様は、もう私には目を向けてくれないようです。

私は神に見放されました。もう、誰も私の秘めたる思いを成就させることはできないでしょう」

「メモ、随分長いね。これ、一種の小説か何か？」
「全部読んでみなきゃ分からないが、つつかかる節はある。何かヒントがあるはずだ。」
その後も、続きを読んでみた。
このメモ……今回は随分と長く、ノート4枚分だ（しかもノート1ページ分がそのままに）。

両面にギッシリ文章が詰まっているため、読み返すだけでも時間はかかりそうだ。

内容はというと、誰にも理解されることなく孤独を味わう思いを綴った詩のようなものだ。

詩には興味がなかったのだからこれを詩と読んでいいのかは疑問だが、不思議と読み飽きたりすることはなかった。むしろ中身が気になり引き込まれるような感覚だ。

「そろそろ、ラストか？」

「たぶんね……！」

「そこで、私は考えました。変化がないから心も変わらぬのだと、心も動かぬのだと。」

なので、私は今までした事がない新しい事に着手しました。

まず、恋をしました。勿論、片思いです。私が好きになれると思っただ女性を、

思い焦がれるほどに想像しました。次に、告白しました。

自分は努力の末によくやく化け物としての継ぎ目を簡易的にごまかせる程度の

人間の姿を手に入れる事が出来たので、タイミングは自分としては上出来だと感じました。

結果的に私と女性は付き合う事になりました。私にとっても、彼女にとっても、

これはなんと喜ばしい事でしょうか。

私は自分を、空っぽの心を埋めてくれるような出来事に胸が躍りました。

これが、自分を満たしてくれる事なんだと自分は強く実感しました。生きる事に強く感謝し、今ある幸福に涙を流しました。

神様がついに自分を救ってくれる活路を下さったのだ。

そう思つてなりませんでした。重なる祈りが成就したのだと疑つて
ませんでした。

しかし、神様がくれたものではありませんでした。そして悲劇が起
こりました。

これは、自分自身が作った状況であり、自業自得の道に入りこんで
しまつただけなのでした。』

「ここで終わつてるな。」

「……ここから、次のヒントを探すんだな。えーと、まずは……。」「
物語の中からヒントを見出すんでしょ？ どこから抜き出せばい
いんだ？」

「たぶん、余剰部分じりょうぶぶんから取るんだろ。これは。」

「えーっと、文章の中で特に必要のない部分があるんだよ。不自然
じゃないけど混じつてる。」

例えば、『人間の姿を手に入れる事が出来たので、タイミングは自
分としては上出来だと感じました。』

のタイミング云々のところ。タイミングとしては上出来つてのは、
この暗号のこと。俺たちは都合よくこの暗号を手にとつてくれたつ
てことさ。

まだまだあるけど、できるだけ抜き出して考えたほうがよさそうだ
な。」

「へえー、よくわかったね。」

文章が面白かったから全然気がつかなかったなあ。

「一刻も早く解きたいからな。」

結局、抜き出しの作業はすべて北山がこなしてしまつた。

高嶺の勉強もおろそかにはできないので、僕はそちらに費やしてしまっただ。
漢字もかなり覚えてきたし、そろそろ熟語もいいたろうということでも時間をかなりさいてしまった。その甲斐もあって、高嶺は日本語がますます上達していった。

「ねーねー、ミツケー。」

「どうした、高嶺？」

「今日は、ミツケと寝ていってお母様が。」

「宮ノ小路様も何を考えていらっしやるんだか。」

ミツケが駄々をこねたのか。きつとそうに違いない。

それにしてもなぜに広い玄関の角で一人しんみり寝たいところに強襲されなきゃらんのだ。

「……戻りなさい。皆ビツクリするから。」

「やだー！ 一緒じゃなきゃ大声出すもん！」

「……待て！ わかったわかった！」

あわてて謝罪する。養育つて大変なんだな……。

他人行儀だったらどれほど楽だったろう。

「今日だけだからな。」

「うん！」

毎日、勉強詰めだったせいのあるのだろうか。駄々をこねたのは。

確か、明日から戦闘訓練だ。気分も晴れ、鬱憤^{うつげん}も飛ぶだろう。

辛抱だ。今日だけの辛抱だ。こんなこと、あっちゃいけないんだ。

年頃の体つきの女性と夜を共にするのは……！！

彼は結果的に強い責任感のおかげで、その夜正当な養育者として全^{まっ}うしたのだった。

朝起きて、高嶺を起こそうとしてふと気がついた。

「メモ……忘れてた。」

日課だった。寝る前にメモを見返す事が日課にしようとしていた。見てて飽きない文章だし、謎ときは嫌いじゃなかった。

それにしてもヒントが14もあるのかよ……。

一行ずつにまとめると……

1・『夜行するような背徳的な実感がたまらないのだ。』

2・『仕えるものは必ずしも手先としてばかり動くわけではないのだが……。』

3・『私もうすうす感じてはいた。からっぽの心の隙間に影がうごめいている事ぐらい。』

4・『初めて気づいたのは13の秋の事だったが、解明の手掛かりにはなると思われた。』

5・『前言撤回。私には過去を振りかえる事は無意味に近い。必要なのは今なのだ。』

6・『無頓着なぐらいに無防備な影は私には危害を加えてこない。だから私も害する事はない。』

7・『だからといって私は自分から行動をうつすつもりは全くない。』

8・『あの力を手にした時ですらも、心は簡単に表情を変えなかった。』

9・『誰も活路を見出せなくても同情してくれる人がいるかもしれないので、』

柵の隙間、本の中に文を残します。』

10・『影は私に言いました。一人でも二人でも関係ない。徒党を組もうが無意味だ。』

ただし死人を超える徒党からは話は違ってくる。』と。』

11・『死人はきつと私を理解してくれる。その思いが募りました。』

12・『どうか、どうか……。私の正体を明かす者が現れま

せんように。』

13. 『人間の姿を手に入れる事が出来たので、タイミングは自分としては上出来だと感じました。』

14. 『これはなんと喜ばしい事でしょうか。』

高嶺を起こして、テラスで時間をつぶす。高嶺と日々のお話をしたり、日常を満喫していた高嶺の話はなかなか味になってきたのではないかと思う。

「1は……『夜中に動く感覚が好き』かな？」

わからない。でも、自分なりに説明してみても面白い。

北山は何て言うのかなあ……。

文章を観た感想も交えて、自分の解答を書いた。そして、高嶺の勉強机の上に置いた。

ガチャ

「おい、三鷹……？」

部屋にはだれもいない。

「ああ、戦闘訓練？ ここについて来ちゃった。って、ん？」

机の上に自分を名ざししてあるメモを見つめる。

「これって、きのうのメモか？」

ヒントを順に書いてあるメモ。確かに自分が写したものだとは確信した。が、

書き加えられている者に気がついた。

「あいつの解答か？ ……！！！」
衝撃が走る。

- 『 1 ・夜中に動いたあの時の感覚が好き。』
- 『 2 ・命令ばかりでなく、自由な時間もある。』
- 『 3 ・自分が誰かにつけこまれていないかと思っっている。』
- 『 4 ・13歳の時にその異変はあった。恐らくそこに何かの力ギがある。』
- 『 5 ・前言撤回。実はそうではなく、気づいた当時では解決に繋がるヒントはない。(4は無意味)』
- 『 6 ・心に付け込んだあいつを見つけたが、あいつは何もしてこない。だから自分も様子を見る。』
- 『 7 ・下手に自分から動く必要はない。向こうからの動きを待つ。』
- 『 8 ・大きな変化があったのに自分はほとんど興味を持たなかった。(実は影にも影響している?)』
- 『 9 ・本棚に次のヒントを隠してある(正解)』
- 『 10 ・あいつは私に残した。一人や二人なら構わないが、6人を超えるなら対策をしよう。』
- 『 11 ・ゾンビならきつと理解してくれる。』
- 『 12 ・自分のヒントや手紙に気付いても広めないでくれ(ゾンビにいつているのかも?)』
- 『 13 ・普通の態度を取っていれば断定される事はない。目立つ事もない。』
- 『 14 ・嬉しい誤算だ。(普通にしていれば堂々と宮殿を動ける?)』

Anger (前書き)

サブタイトル『Anger / 憤り』

北山 邦銘視点。

「14もあるなんて手の込んだ仕掛けじゃねえか……!」
今更ながらの言葉を吐き捨てる。

言葉は沈黙の中に広まり、やがて静寂が訪れた。

「それにしても珍しいですね。図書室を使いたいなどと……。」

「調べものがあるだけです。すぐ終わります。」

図書室は宮ノ小路様同伴の元でないと使用許可が五近ですら降りない。

子供扱い甚だしいと本来なら自分のプライドが拒むのを
理性で無理やり押さえつけ頼み込んだ結果がこれだ。

メモは宮ノ小路様には見せられないのでこっそりと本を読むふりを
しつつも

確認するという形になる。14も散りばめられたものを
一人で考えることになるのは想定外だったが……。

「それにしても高嶺のやつ、いよいよ戦闘訓練ですよね。」

高嶺はわかりますが、どうして……三鷹まで?」

「三鷹さんが同伴してくれないと拒むかもしれませんがね。」

それに、誰しも最初は苦痛が嫌いですし、耐えがたいものでしょう。

三鷹さんも一緒であれば、お互い乗り切れると思いますし。」

「お互いつて……まさか、三鷹は見守ってるだけとかじゃなくて?」

「? 戦闘系ではないのでゆるいトレーニングをしてもらっている
程度ですけれども。」

「ああ、そうですか。意外とゆるいですね。」

「ええ、ゆるゆるです。」

実際は

「どうしてこんなことになってるのかな……。」「

「ミツケー。ホントに鬼ごっこなの？」

「どうだろね……。」

俺たちは何をしているのかというと、鬼ごっこだ。

使命を課せられていて、門番が持つフラッグを奪い取れば俺たちの勝利。

制限時間は1時間だったはずで、歩いてきたからあと50分程度だろうか。

「それにしても門番だと……。」

噂だとゾンビが担当してるはずだ。ウムム……こりや大変だ。

体力と筋肉には相当自信があるはずだろう。

まずフラッグに近づくには持久走を制覇しなくてはならない。

奪い取るにも力がある。……が、当然そんな力はないので奇策が必要だ。

能力未開花の高嶺に無理はさせられない。使えるのは俺の『透明細工』^{イト}ぐらいだ。

おかげで建物の影という影、見渡す限りで俺の視界からは逃げる事は出来ないが

相手の間合いをいかにして詰めるかというのが肝心だ。要は俺の能力が要なのだ。

「ミツケ、どうするの？」

「やるしかないだろ。いくぞ。フラッグを取る……！」

「うん！」

先手必勝。透けて見えるぞ、フラッグを持つ人影が……！！

一方その頃

「つかー、後どことどこだ……？」

本棚。どこの本棚なのかは全然わからず。影つつつてもない。

「ん、影？」

ふと本棚をみると『影』という書物がある。なんだこれ？

手に取ってみてみるが、何かの小説のようだ。

『私は初めてその視線に気がついたのは13歳の時だった。その目は』
『』
等と文が露わになる。パラパラとほとんど目を通すだけで次のページをめくる。

『私は彼女の死ですらも、心が波打つ事はありませんでした。』

彼女の体が、黒に包まれて飲み込まれ、そして……食われてゆく姿を私はみてしまいました。』

んん、待て待て、なんだこの展開。

『私は、見殺しにしてしまいました。しかし、心は平穏なままです。』

感情がないってことか、この主人公？ 共感が沸かないんだけど……ん？

この章が次で終わるツポイな。最後まで見届けてやるか。そう思い、紙をめくった。

「うわっ！！」

ポトツ 思わず本を落としてしまった。

本は落ちた衝撃で閉じてしまった。しかし、あれはなんだ？
なんであんな顔の挿絵イラストが……。

おぞましい顔だった。バックが全て黒で、そこに青白い顔が堂々と大きく書かれたものだった。

もはや女性かどうかすらも判別がつかないほど奇妙な顔で、どこかのピエロか、はたまたクラウンといったようなものを想像してしまうが、

そんな顔が俺は特に恐ろしく思えた。所詮はイラストだという思いが高まり、

再び堕ちた本に手を駆ける。

「脅かしやがって。」

ペラペラとさきほどのページに戻るうとする。しかし、異変に気付く。

「イラストどこだっけなあ。」

めくり続けると、ページが終わってしまった。

「やべ、飛ばしちまったか。」

今度は戻る。しかし……

「最初まで来ちまった……どこだ？」

いくら探してもイラストは見つからない。挿絵なのでパラパラ読みでも見逃すはずがない。

「あれ、あれ!？」

どうしてだ! どうしてイラストが消えている!?

さっきまで確実にあったのに!

一心不乱に探していると、とあるページが目についた。

それは、第7章の終わりのページだった。

終わりがらしくせつない文章で、第8章に繋がるうとしていた部分だが、隅に書かれていた。

『驚イタ? 怖カツタダロ? 本当ノ事ヲ話シタイ。 宮ノ小路様

二八内緒ノ密会ヲシヨウカ。

門番ノ元ニ行ケ。スグニ会オウジヤナイカ。 祝ツテヤル祝ツテヤ

ル祝ツテヤル』

片仮名表記か! 怖いな……。クレイジー野郎に違いないが、

俺がビビっているようじゃダメだ。会うと言っている以上は、堂々と構える俺。

最後の方は一体何なんだ。祝ってやるって……新手的名言だろうか?

祝ってやる というのは力の事か? 力をくれるとか言っていたよ
うな気がしたが、

そんなものはどうでもいい。とにかく、あいつの正体が分かれば。

「宮ノ小路様、そろそろいいですよ。ありがとございました。」
「わかったわ。行きましよう。」
図書室を後にした。図書室の雰囲気って怖いな。ゾクツとしてくるぜ。

「すまない。帰還が遅れた。」

「おお、九条様！ 長旅ご苦労様です！」

……きやがったな。序列1位、九条！

今までどこで油売ってやがったんだ。今回は恐ろしく遅延してたよ
うだが。

「勝ったア……！！！」

「やったー！」

隣で高嶺と三鷹が何かを叫んでいるようだ。一体何があっただんだ？
トレーニングメニューでもすべて制覇したのだろうか？
ゆるいトレーニングだったはずだが……。

「集会かよ、だりい……。」

急に収集がかけられた。五近が全に集まるらしい。なんでだ？

二人で十分だろうに……！ ああああ、見張りとかどうしてんだ！？
イライラしつつも扉をあける。イライラ立ちも加わっていて、荒々しく
扉を開けた。

「1, 2, 3, 4, 5, 6, ……8人？」

五近と宮ノ小路様。合わせて6人。追加で2名だと？

「ああ、主役来たね。」

「主役？」

「僕は、今まで影で宮ノ小路様の護衛を担当してた『院ノ宮 喜助』だ。」

よろしく頼むよ。」

続いてその隣の禍々しいほどの圧力を放ち続けている男が口を開いた。

「宮ノ小路様の護衛、『東条 劉』だ。」

2人目の方は愛想がないな。つか、こいつら……!!

まさか、手紙で暗号吹っかけてきたのこいつらか!?

「紹介するわ。この二人が新しく仲間に加わるから、よろしくやってほしいの。」

序列は後で伝えるから、各自仲良くしてね。」

最後の語尾なんだ! まじめにやっているのか!?

「そうか……。」

つまらなさそうにしていた九条が先に退室していった。

強者を目にしても全然動じないところを見るとゆるぎない信念があると見える。

……さてと、恐らくあの圧力放ってるやつが真の序列1位か? となるとあの別の方は……?

「君君、ちょっとこっち。」

「?」

「暗号解読おめでとう。面白かった?」

「な、ため、ふざけてるのか!」

「まーまー、そんなムキにならないでさ。」

「……!」

「お前が北山か。」

「東条……!」

挑戦的な目線だ。だが、それは俺も同じ事。こいつもかなり自信があるようだ。

「約束は守る。褒美をくれてやる。」

「待て、それは……俺が受け取るもんじゃない。別の奴だ。」

「どういうことだ？」

「あ……3人で解いたんだ。暗号。だから、俺だけってわけにはいかない。」

「成るほど。なら、3人分くれてやる。受け取れ。」

何やら怪しげな小箱が取り出された。その中が開けられ……

「これだ。」

そう言われて受け取ったのは……

「んん？ 指輪にネックレス？」

「3人分用意してある。常に肌身離すな。何があるかは、時期に分かる。」

「……つたく。褒美ってこれの事か。」

「貴重なんだから大切にしてよね？ 俺たち努力の結晶ってところなだからさ。」

「ああ、大事にしとくよ。」

俺も退室した。悔しいことに、あいつらと共にいる空気には耐えられそうにもない。

「へえ……そんなことが。」

「これキラキラしてるー！」

高嶺と三鷹は何の抵抗もなく指輪にネックレスを装着していた。外もなさそうだ。俺もつけとくか。見た目はよさげだしなあ。指輪とネックレスに何の意味があるかわ俺にもわからないが、お守り代わりにはなるだろ。

そんなこんなで、宮ノ小路様直々に記した広告が宮殿に広まった。

『五近から七星へ 側近増加!』

見出しがこれか。だからさつきから周りが盛り上がってるのか。

『序列変動! まさかの九条1位失脚!?』

ん、九条が失脚う? ってことは見かけ倒しじゃないのか。あいつら……!

1位:東条 劉
2位:九条 莊子
3位:北山 邦銘
4位:三條 神海
5位:冥加 柱
6位:広幡 岸谷
7位:院ノ宮 喜助

俺たちの順にそのものは変わってないな。新入りが最上位と最下位に入っただけってか。

別に順位とかは関係ない。だがな、俺は面倒なだけなんだ。

九条が暴れだすんじゃないかって……。

俺は、三鷹と高嶺を先に見つけ、ほぼしてやるべきかどうか葛藤する羽目になった。

「何、流浪? 旅の者か。」

「え、あ、はい。道中怪物に出くわしまして……。寢床を貸していただけないでしょうか。」

「それなら、ここを使うといい。許可は取っておくから。ただ、宮殿で立ち入っていいのはここだけだ。いいな、絶対だぞ？」

「はい、ありがとうございます。」

「はい、ありがとうございます。」

「あー、化け物ぶつ殺して気分爽快だったな。」

あの声

「聖奈、もうだめかと思ったけど、幽にイかつこよかったよ！」

あの姿

「そんなことないって。ほら、今日はもう寝るぞ。疲れもたまってるし。」

あの面々

「クク、居候とはふがないですが、今日はこれで良しとしましよ。う。」

「あー、碇……これお前のせいだぞ？」

「終わりよければすべて良しじゃないか！今日は休もう！」

「弥栄様、今日はいがかなさいます？」

「ああ、そうだな。今日は君も休んだ方がいい。」

「わかりました。」

あいつら！！ やばい！ シートウエルヴの解き出くわしたやつらじゃねえか！！

なんでここに！？ バレたらやばい！ あいつらなんてそうそう相手にできるもんじゃない。

お告げなんて忘れかけてたが、実力者ばつかだろ……？

俺の『爆熱余波』^{マルチボマー}を喰らって軽傷ですませやがるような、

未恐ろしい集団だ。

とにかく、俺は見つかるわけにはいかねえ！

俺はそそくさとその場を後にした。

「おい、貴様。」

「なんのつもりだ。九条？」

「貴様が1位で俺が2位なのが許せない。」

「ふざけるな。宮ノ小路様の厳正なジャッジにミスがあるとしてもいいたいのか？」

「宮ノ小路様を疑うつもりはない。ミスがあるとすれば、貴様らの混入だな。」

「……そうか、1位の前任か。」

「いや、今もだ。貴様に俺が負けるはずがない。」

「天狗の心に駆られるとは、愚かな……。俺も貴様に負ける気などしない。」

「なんだと……？」

「確かに、俺はお前は強い部類の人間だと思っていた。

今存在する人間の中でも特に上位のな。だが、違った。お前は殺す力は強いが、

所詮強いだけだ。子供だましで通じる世界でどこまで調子に乗ってきた？」

「ここで始末してやってもいいんだぞ、東条？」

「……ここは、宮殿の中じゃない。外なら能力は使ってもいいのか？」

「好きにしる。」

「そうか、少しだけなら遊んである。」

ドゴオッ！

「能力者の戦いだ！」

「やばいぞ！ 九条と東条だ！ 逃げろ！」

周りがあわただしくなってきた。

「いよいよか、ヤルとは思ってたぜ。」

九条が我慢できるはずがねえ。だが、あの東条って男も冴囲気はヤバイ。

九条でも、無傷で勝てる相手じゃない気がする。

俺でも九条にはかすり傷一つ入れるのは難しいが、九条がてんぱってまで

突っかかるほどの相手だ。下手するなよ、九条……！！

戦いの波は激しくなるばかりで収まりを知らなかった。

今日は夜までこのままか。流浪っていつてたっけ。あいつら。

あいつらは何も知らないんだったよな。怪我しなきゃいいけど……。

Anger (後書き)

宮ノ小路の部下による外伝的なストーリーはここでおしまいです！
次からは普通の物語に戻していきたいと思います！

なかなか話数が開いてしまったのでお忘れになっている方も多いと思います、

続きは過去に戻ります (They wait upon for
the Queen? まで)！

そのこの描写が最後となっておりますので、そこから続きますので、
何卒、よろしくお願ひします！ 感想、評価も随時受け付けており
ます！

PS・PV8000HITS！ 皆さまのおかげです。ありがとう
ございます！

Splash (前書き)

サブタイトル 『 Splash / 飛沫 』

「こいつ……！」

「どつする、幽!？」

「いや、そこは裕に聞けよ。」

啓が冷静に言うも、裕の支持が少ないので気にかける者は出なかった。

「もう、やろつ。」

「やる? 殺るってことか?」

「ああ。狩猟隊はもうここには帰ってこない。

あいつらも悟ったんだろ。『俺たちじゃあいつらには勝てない』って。

だから、化け物で俺たちを足止めさせようとした。……ってところか?」

「よし、殺していいんだな?」

「クク、私もこいつのデータが取ればノープロブレムです!」

「同じゾンビだけど、仕方ねえよな。」

面倒なのは慣れてる。ここで始末しとけば、あいつらへのいい見せしめになるかもしれないし。

「ヴオオオオオオオオオオ!」

「突進來たぞおおお!」

愉快そうに喋っているのは丸いぢやく。いままでの鬱憤が張らされるがごとく高揚しているかのようにも見える。

化け物は俺たちによけられ、途中で停止する。

「おおおおあああ!」

シュボッ

そういえば、藤島……炎が使える能力だったな。
ただ、あの時はそこまで炎の規模がおおきくなかった。
単に本気を出してなかっただけなのか。

「届いてくれよ！」

手をなぐようにして球を投げつける。

その球は見た目に反し、恐るべき速度で進む。

「速ッ！」

「へへ、上出来！」

ボンッ

「ヴウ……！」

ダメージは薄いか……。

「嘘だろ……ほとんどダメージがねえ！」

確か全員が完全に能力に目覚めてるわけじゃなかったはずだ。

俺もあの力はいつでも出せるわけじゃない……。

「藤島、炎で足止め頼む！」

「え？ あ、ああ！」

藤島はそれを聞いたとたん、両手からも炎を出し、さらに自信の周りに

小さな球体を作り出す！

「弾幕張れる程度にはやってやるぜ！」

「……あの能力、ちょっとほしいかも。」

「啓君、後になさい。あなたも良い能力は持っているはずでしょう？」

「……まあな。後にするか！ 『バットスキル悪徳信者の創生律』！」

「では、私も。……代入！」

「うおおお！」

矛を片手に化け物へと突っ込む。
大きな怪物の瞳がこちらを向くが……

シユボツ　ボボボボボ

目をそらした隙に藤島が見計らってくれたのか。サンキュー！
人外相手じゃどこが急所かわからんな。
ま、とりあえずは顔だ！

矛を地面とは垂直に振り上げ、勢いよく叩きつけた！！

グジュツ　「ヴヴヴオ！」

グラツと化け物がバランスを崩す。顔を狙ったが、そこまで効果的
だったのか？

「ひゃっほう！　ボコ殴りできるのって気持ちいいな！」

……なるほど。丸が好き勝手に足を攻撃していたからか。
おかげで、楽に崩せそうだ。

「幽にだけがいいとこ取らせるかよッ！」

「啓君、その力は？」

「えーっと、『具現技師』^{トリックアーティスト}だよ、確か。

武器を自由に作って出し入れできる能力。」

「へえ、便利ですねえ。」

「一つしか使えねえってのが面倒だけどな！」

啓も喋り終わると走り出した！

「……！　ぶっ倒れねえな。」

炎の球を連続的に放ち、弾幕を作っている藤島にもそろそろ疲労感が彼を襲った！

「ねえ、満みじ。大丈夫？」

「え、あ、大丈夫さ。まだ……まだ行ける！」

とは言ったものの、自分でもわかる。炎の精度が徐々に落ちてる。

射程距離、速度だけは未だに持続できているが、

命中精度はかなり落ちてる。幽たちにあたらないようにするのが精いっぱいだ……。

手数も減ってる。このままじゃ弾幕を突破され兼ねない！

頼む、幽！ 全部お前にかかっているんだ！

「弥栄様。どういたしますか。」

「僕らも参戦するよ。美鈴、いいね？」

「はい。」

美鈴も化け物の元へと駆け出す！

「ハッ！」

足による連打。弾幕が続く限りで相手の行動を不能にし、後にとどめをさす。

これが一番安全な方法だ！

「うらあぁ！」

スパツと切り裂くような音がした後、着地する。

「ヴオオオオオオオ！」

「へへ、効果てきめん観面！」

啓もいれば心強い。短時間で終われそうだ。

「ま、幽にいの出番もここまで。もう出る幕はないよ。」

「え、どうしてだ？」

「……俺たちも化け物引き連れてるからな。」

グシヨオオオ！

「ほれみる！」

「な、あいつ、弥栄の！」

弥栄の連れ……なんて攻撃力だ。化け物の胴体を一瞬で……

皮膚を破裂させたかのような傷口が見て取れる。血がドボドボと垂れ落ち、

戦意喪失を促すであろう光景だ。

それでも彼女は血飛沫一つ受ける事はなかった。

攻撃の次にはすでに次の部位を狙い定めて、突きのモーションに移っている。

人間の業じゃ、不可能なことばかりだ。

「外破空掌がいほうくしょうだと？」

「フフ、美鈴にだけ許された能力だ。」

大門は弥栄と話をしている。

「君は参戦してなかったようだが……いいのかい？」

「俺の役目はすでに託してある。それに、美鈴がいるのだろう？」

「ま、いいか。とにかく、美鈴が使うソレは生身で受け切れるほど軽いものじゃないんだよ。」

美鈴は能力の使い方がうまいからね。今に化け物がぶっ飛ばさ。」

ドゴオ

「ほら、ね？」

「化け物が……吹っ飛んだ!？」

「すげえ！」

「流石って感じかな。」

化け物が、建物に叩きつけられ、横たわっている。

「まだ、生きてますね。」

「殺した方がいい。」

「そうですね、しかし、任務はここで終了ですので、失礼。」

美鈴は主の元へと去って行った。

彼女にとって主とは何なのだろうな。

まあ、いい。

「……………」

足元がふらつく。なんだ、この感覚は？

「う、おお、マジか……………」

「ん、幽にイ、どうした？」

「おい、幽………… フラフラしてんぞ。お前何か食らったのか!？」

………… 口を動かすも、声が出ねえ。

一体何が、どうしたってんだ!？」

「ハア、ハア、ハア」

「おい、幽! どうした!？」

「………… 治癒の能力は持ってないし! やべ、碇に連絡入れるか何か

しねえと!」

啓は碇に駆け寄り、手だてを打ちにいった。

「幽、しっかりしろ。とりあえず、何食らったのか言ってみ?」

「………… 何も、ない。」

「へ?」

「何も、喰らってねえよ…………。」

「無傷か、なら、疲労か? 肩貸すか?」

「……………」

「おいおい、こんなところで寝るな! 化け物ブツ倒したばっかだ
る!

さっさと起き

「

その瞬間、幽の瞼は開かれた。しかし、内に宿されているものは先
程とは違う。

「ゆ、幽？」

スツと立ち上がり、化け物の元へと歩み寄る。矛を置いて化け物を見据える。

「ああ、辛いなら俺が殺つとくぞ？」

次の瞬間、

ブジャアアアア！！

幽から突きが繰り出された。その拳は

「ゆ、幽？ なにしたんだ！？」

常人には見えなかった。

次に、幽は顔に移動し、蹴りを入れた。

華麗に宙を舞う何か。

ゴト

「こ、これって……首！？」

幽は首をおもちやのように見つめ続ける。ただし、通常のおもちやとは違い、

まるで興味が削がれたような冷かな視線。

少しの間見つめると、元いた場所へと歩いて行った。

「碇、幽がなんかおかしい！」

「と、言いますと？」

「フラフラしてて危なっかしいんだよ。疲労に利く薬とかねえの？」

「持参していませんよ。長旅とは思ってませんでしたし。」

「それでも！ こんな夜中だからこそだろうが！」

「大丈夫ですよ、危機は去ったのですから。疲労なら休めば取れるでしょう？」

目立った傷がない以上、疲労としか見て考えられる点がない。

碓が化け物討伐の安全性を主張した以上、これより先の論は無意味だと

考えた啓は、興奮を抑えて口を閉ざした。

「任務完了です。弥栄様。」

「御苦労！ じっくり休みなさい。」

「はい。」

「君には驚かされる。その若さでな……。」

「……言っておきますけど、僕は下っ端の位置づけでしたからね。あなたも、そろそろあちらに戻られた方が都合がいいのでは？」

「そうだったな、じゃあな。」

大門は戻って行った。

「ハア、ハア、ぶっ飛ばすなんてな……。」

おかげで集中力が途切れて弾幕が一気に止まっちゃまった。

「凄い汗よ、ホントに大丈夫？」

「アハハ、さすがに疲れた。今日は休むことにするよ。」

「すぐに寝た方がいいわ。」

「ああ、そうするよ。」

「ゆ、幽……どうしちゃったんだ？」

「……………」

「お、おい！ ちょっと！」

無言のまま歩く。

「ん、幽か？ おーい、幽！」

「幽にイ！」

「フフ、幽君元気そう……じゃありませんか。なんですか、あの敵意満々の覇気は？」

「危険……………」

碓、美鈴ですらも気にかげさせるほどの敵意を幽は持ち合わせてい

た。

しかし、目的を失った幽は

「……………」

ただ、黙っていた。うつすら仲間だという事を自覚している。

「バカな、どうしてあの状態に？」

「し、しらねえ。聖奈には何もなかったのに……………」

「何かが幽君の力を誘発させたのかもしれない。」

「ま、敵意があっても行動に移らなきゃ問題ないか？」

「ですね、今日はもう休んでも良いでしょう。」

「んじゃ、俺はそうさせたもらう……………」

結局のところ、幽は無言のままだった。夜中でも眠ることなく眼光を光らせていた。

「あなた、一体どういっつもりですか。」

寝静まった空気で、美鈴が幽に聞いてきた。

「……………」

「敵意に満ちているのでは、私も眠れません。」

「……………」

「先程のあなたとはまるで違います。一体何が？」

「悪い、いま鬱憤晴らしたい気分なんだ。落ち着いた時にしてくれ。」

「……………」

「今でないと困ります。」

「……………」

「それが何か？」

「今殺れば今夜は静かになりそうだな……………」

それを聞くや、彼女はすぐさま立ち上がり、構える。

幽も立ち上がる。

「正気ですか？」

「……………」

幽はそういうと、その場を離れた。だいぶ距離が開いた所で、一人で地に横になった。

夜空を眺める。街灯がないと、星空が綺麗に写る。

こんな夜は、開放的になってもいいかもしれん。気分がいいからな。次に徐につぶやいた言葉は幽を驚かせた。

「テイルフィンゲ……。」

フツ ガシャ

「ん、なんだ？」

音の方向を観ると、一本の剣があった。

剣は装飾がされている……というより模様に近い。また、剣の形も独特であった。

刀身は割と細い（レイピアのような、突きを重視した剣ではないが）。

そして、柄はやや刺々しい模様がある。だが、刀身を収める鞘はなかった。

「……。」

なんとなくという理由以外にない。

幽はその剣を手に取り、ひと振り薙いで見た。

剣が風を切る。これ、ホントにただの剣か？

そんなことを、夜中寝る間も惜しんで起きた出来事である。

そして、朝が来た。いつの間にか、俺は剣を失っており……夜中の記憶も鮮明だが、

あの感覚は以前と同じようなものだった。あれが、俺の能力……！
一人身で朝を迎え、俺は朝日をぼんやりと眺めた後、皆の元へと向かうのだった。

次は、狩猟隊の……！

本当の戦いは、まだ残っているようだ。しかし、昨晩の間には手だては何もなかったが、
とある偶然により、回路は一気に開こうとしていた！！

M i y a n o k o u j i L o a d (前書き)

サブタイトル『M i y a n o k o u j i L o a d / 宮ノ小路の道』

M i y a n o k o u j i L o a d

地平線から太陽が姿を見せ始めた。

その時にはすでに俺たちは旅路の支度をしており、行動に移れる状態だった。

俺としては狩猟隊の行方はいざ知らず。

今は能力に頼るほか、道はないわけだが……

「うーん、見えない……。」「

聖奈には何か見えているのではと思ったのだが、勘は外れてしまった。

どうやらあいつらは相当遠くまで逃げおおせたようだ。

「さて、どうしたものか……。」「

「見つからなかったのか？」「

「ああ、お手上げた。」「

「マジかよ？ んじゃあ、俺たちこの先どうすんだ？」「

「さあな……。それは碯が決める事だ。」「

俺は、ただ聖奈を手に入れようとしている弥栄がどうにも気になる。あの時は言いなりだった。仕方がなかった。

だが、もし……。もしも『能力が自由に発揮できる』ならば……。夜中の時の俺はかなり挑発的な態度だった事は覚えている。

誰にも負ける気がしなかったし、それこそどんなゾンビ相手でも屈する事はなかったと思う。

あの状態ならば俺は……。美鈴を倒す事が出来るのだろうか。

「なあ、碯。」

「どうしました?」

「お前、どうすんのさ。聖奈でもわかんなかったんだろ?」

「我々一行はただ歩き続ければよいのです。」

「……ちゃんと策はあるんだろ?」

「練っていますよ。ちゃんと先の事は考えています。しかし……。」

「どうかしたのか?」

「根本的な要素が欠けていますのでね。ただ、もしかすると道はあ

るかもしれません。」

「へえ、どんな?」

「それは幽君」

その時、何者が分からぬ人影が碯の目に移った。

「あなた……。」

すると、足が止まる。

「何か、用?」

「なかなか、良い目をしてますねえ。」

「……」

「その紋章……まさか、宮ノ小路家の方ですか?」

「貴様、能力者か。」

「ええ、端くれのものです。」

「俺には、そういう風には写ってはいないが。」

「宮ノ小路家はまだ人員を寄せ集めていますかね?」

「なんだ、志望者なのか? それなら、能力で探しても宮殿は見つ

けられないぞ。」

「え、どうしてですか?」

「宮殿には多数の能力者がすでに集まっているからな。密教も多い

近頃は、

能力者対策に力を入れている。」

「なるほど。一度、宮ノ小路様に謁見できたらと思うのですけれど

も。」

「最近は取り込み中だ。だが、少しで良いなら会えるかもしれん。ついてくるか？」

「いいんですか？ 我々はスパイかもしれませんが？」

「かまわんさ。何しろ、宮殿は他の密教には負けん。」

「なるほどね。」

碯のおかげで俺たちはこの男について行く事となった。

宮殿は意外とここから近いとのことだ。

だが……そこまで世の中は上手く事が運ぶはずもなかった。

「なんだ、こいつらは。」

「ああ、こいつらしつこいんだ。どこかに遠征してるっていつていたけど。」

「最近宮殿にたてつく輩がいたが、まさかこいつらが？」

九条と後で名乗っていたこの男。相当の実力をもつ。

「邪魔はもう入らせん。次こそ君たちを仕留める。」

「皆、全力で行くぞ。」

もう、あの時に未練等俺たちにはなかった。

因縁を断ち切るべく、能力の全てを使って彼らを打ち払う体勢に入る。

「俺ももうあんたらに次を与えるつもりはない。」

「こ、これは…！」

「仕留めるまで気を抜くな。」

九条の一言が重く発せられた。

「は、はい！」

爆発する能力のようですね。

「フッ！」

ドスッ ジャブが入り、アッパーを入れる。

相手一人一人を確実に急所狙いで大門は突き進んだ。

「さ、流石だな。『急所距離』クリティリチ…ここまで便利なものとは。」

「そおら！ 凍りつけ！」

冷気を漂わせ、敵を翻弄する様子はまさに悪魔のような裁きだった。

「凍って動けない奴は碎けて果てる！」

『バッドスキル悪徳信者の創生律』の稼働率はフルだった。

「ククク、なんと愚かしい！」

碯の代入による付加は恐るべきもので、それは攻撃面においても変わることなく発揮された。

「……代入、代入！」

次々に相手に向かって衝撃波と手から発する碯。受け切れるものは皆無だった。

「密教とは、こうももろいものですか。」

彼女、美鈴はものともせず血しぶきを浴びることなく急所急所の連続攻撃。

もちろん、息の根を残さぬように本気であった……。

「僕が弱いと思ったあ？」
スラッシュハンド『斬鉄拳』！

手からの一撃は相手の体を裂く！

「ひゃっハアアアア！ 弱い弱い！」

素でも強い九は遺憾なく実力を発揮していた。

攻撃はよけ、自分の攻撃は外さない。能力なしでも九は強い。

「ハア！ まだだ！」

影山 日向は実力の程は一般人には計れるものではない。彼女も木刀をふるう一撃一撃が重く、受けられるものではなかった！

「塵どもが！」

九条は爆発の能力者であり、相手を吹き飛ばし、集団としての機能を停止させた。

最も、負傷者、死者も彼が一番多くたたきだしていたであろう。

それでも止まらない密教、一体、こいつらどこまで……！

そうして、日も暮れるほどのあくなき闘いにまで発展していた！

「くそ、こいつらいつまで……！」

「ふうう……一瞬だけ出すなら、炎は何回でも出せる、かかってこいよ！」

「幽にイ、大丈夫？」

「心配するな、俺はまだいける！」

「くそ、いい加減に沈め！」

相手も本気のような。全戦力をここでつぶせば、もう密教が生き延びようと、

俺たちに突っかかる事はないだろう。決着は必ず俺たちの方に傾く

はずだ。
今の状況が続けば……！！

「けっ、ザコが。あの時査定してやった上層部もこんなにカスなのかよ。」

啓が愚痴を吐く。

「幽ももう終わったよな。」

「ああ。」

「アガガ……！？」

幽の手が、残った人間の顎を掴んでいる。

「こんなはずじゃなかったって顔だな。大人しく俺たちの事なんか忘れてりや良かったのに。」

とにかく、密教もここでおしまいだ。」

ゴキッ

この力で、密教を終わらせた。俺は、密教を滅ぼした。

「夜になっちまったな。宮殿には明日でいいか？」

「ああ。」

「疲れた。一日も浪費するとは……。」

「とにかく、寝よう。」

そういうとバッテリー倒れこんだ。

この一帯にはゾンビはもういないらしいが、そんなことは関係なしに俺たちは

地面に横になった。そして、意識は薄れ、明日に向かって時間は進んでいったのだった。

Counsel time (前書き)

サブタイトル『Counsel time / 助言する時間』

Counsel time

翌朝、そしてその後も気になる点はなかった。

旅路の途中とはいえ、九条という男は仕える者らしく

俺たちはその主の宮殿に一日の宿を取ろうということになった。

宮殿で、人の出入りも活発な場所は寝床というよりも、情報収集が目的だ。

3人組で、能力の大まかな目撃情報しか持ちえないので

決定打となり得る証拠や情報が手に入るとは思えないが、

このまま当てもなくさまようよりは幾分か状況は良くなるに違いない。

しかし、ここで情報が入らなければ本格的に大移動をしたということになる。

搜索は困難だ。そうなった場合の判断は江田 裕にゆだねられるわけだが……

その殆も結局のところ、弥栄に従順な……夜霧^{やぎり} 美鈴^{みれい}が邪魔なのだろう。

底知れぬほどの果てなき破壊力、未知の能力。

そして、何より驚異的なのは……弥栄の命令一つで感情を殺し切れる事だ。

ただの気まぐれで殺しさえも遂行するだろう。彼女はそこまでやり切れる……。

そんな中で今、唯一保証されているのは聖奈の命だけだ。

俺たちにはあらかた興味はないようにも思える。でなければ、

あの時……アジトの件で聖奈だけが優遇されるはずがない。

「何、流浪？ 旅の者か。」

「え、あ、はい。道中怪物に出くわしまして……。寝床を貸していただけないでしょうか。」

「それなら、ここを使うといい。許可は取っておくから。ただ、宮殿で立ち入っていいのはここだけだ。いいな、絶対だぞ？」

「はい、ありがとうございます。」

律儀っつーか、礼儀正しい奴だな。ん？

「あー、化け物ぶっ殺して気分爽快だったな。」

「聖奈、もうだめかと思っただけど、幽にイかつこよかったよ！」

「そんなことないって。ほら、今日はもう寝るぞ。疲れもたまってるし。」

「クク、居候とはふがないですが、今日はこれで良しとしましよ。う。」

「あー、碇……これお前のせいだぞ？」

「終わりよければすべて良しじゃないか！ 今日は休もう！」

「弥栄様、今日はいがかなさいます？」

「ああ、そうだな。今日は君も休んだ方がいい。」

「わかりました。」

何気なく場所取り、許可も取れた。

こうなると、久々に暇を持て余すことになるが……

今のご時世、暇というのは思考の贅沢だ。俺も今は、この贅沢を満喫したいと思う。

そうしてちよつとした時だ。

宮殿に仕える人間であろう声が俺の耳に入った。

「能力者の戦いだ！」

「やばいぞ！ 九条と東条だ！ 逃げろ！」

!?

な、なんの騒ぎだ!?

「ゆ、幽にイ…………!」

「…………敵か!??」

困惑から間もなくして、宮殿内の人々が声をかけてくれた。

「九条と東条か…………? ああ、流浪の方々は心配なさらずにいてください。」

その二人は宮殿に使える身ですので。」

と、説明が入ったのだが…………

ドゴゴゴ! グラグラッ

…………ちよつと待て。激しすぎやしないか?

いくら身内の件だからつつつてもこれは安い戦いじゃなさそうだ!

「…………藤島。」

「ん、どした? つかこの揺れ…………。」

「聖奈を頼む…………。おれはちよつと様子を見てくる!」

「ちよ、幽!??」

幽が立ちあがると歩みだす。

「よつと、面白そうだから俺もついてくからな、幽!」

九もこの雰囲気能耐えきれなかったのか、幽の元へと駆け寄った。

物影に隠れながら音源へと向かう。

すると、会話が聞こえてきた。

「チツ、これでもか……。」

「……何がお前を動かしているのか、俺には理解できん。」

「そうか、ならこいつも理解されてほしくはないんだが……ね！」
ドゴオオオオオオ！

「いい加減諦めてはくれないか。」

「ハッ、まだ言うか。ギャラリーもできたところでそろそろ決めるぜ。」

それだけを言うと、俺たちはようやく視認することができた。人影を！

一人は体格の良い男。筋肉質よりの体系で強そうなイメージを持たせるにはふさわしい。

もう一人は……九条。うすうす感づいてはいたが、まさかあいつか

……！

一緒に戦った短い時間では、想像もつかない。

ひたすらに攻撃を続けていくあの姿が……。

よほど、彼の癪に障る何かがあったのか？

様子を見てみよう……。

俺も気づいているが、九が大人しく観戦だけで収まってくれる事を願う。

九条が、ギャラリーと俺たちを示唆している事にはかなり驚いたが……。

「爆発か。飽きない奴め。」

「お前だって回避の一択だろうが！何をほざく……！」

「む、今のお前には言葉は無用だな……。」「
爆発は地上からのものばかりで、九条はよけてよけての連続だ。
脚力、瞬発力は素晴らしいものだ。また、洞察力も常人の域には収
まっていないだろう。」

余裕を持って余している。だが、なぜ攻撃に移らない……。
いや、逆か。なぜ、九条は攻撃している……？

激しくなる一方の九条。避けるばかりの東条……。

シャキッ

東条が、ついに腰に納めていたナイフの柄を握った！

「やる気か！？」

「おお、決着だ！」

東条が迫る！

九条は爆発を駆使するが、それでも迫る！

スツと、彼は迫り、九条はそれを許してしまった。

結果……

「だが、この状況なら、耳にも入るといものだろう。」

ナイフが、首元に……。刃が首を向いている。実力の差が、明らか
になった瞬間だ。

「てめ……ッ！」

「それでも、まだ続けるといのか。宮ノ小路様もなぜお前のように
なやつを入れたのか……。」

「チッ、そうだな。どうしてまあ、宮ノ小路様も」

そこまで言いかけた時、九条の口元がすりあがり、笑みを浮かべる。
「ッ！？」

その時、俺は見た。

九条が、さりげなく忍ばせた左手が小袋をつかみ、その中身を東条に振りまいた場面を。

その中身が、粉であった事を。

さらに、粉が爆発を生み、二人りを包みこんだ瞬間を！

「俺の1位変動を許したのか。」

「グフツ、貴様……！」

「ギヤラリーも増えてきたしな。後は宮ノ小路様に抗議するか……。」

「卑劣な手を使うとはな！」

「へん、そうか。せいぜい主を守って死ぬ時ぐらいまでには使わな
いようにしとけよ。」

その台詞。あんまし聞いた感じ良くないぜ。」

……これが、強者の在りようというやつなのか。

九条の知られざる一面を見た気がした。

これで、本当に良いものなのか。

俺たちには知る由もない事だ。関係もない。

深く考えるのはやめよう。無駄だ。俺たちは未来を考える必要があるんだ。

俺たちは、そこから立ち去った。すぐに宮殿の入口に戻り。合流した。

俺は戦いは収まったようだ。　としかいえず、俺個人の考えはあえて伏せた。

話す必要がなかったから。本当は話したかったが、些細な事だろう。水に流せば、全て済む話じゃないか。

そんな事を考えていると、九条が現れた。そして、俺たちの元に来

る。

「君、名前は？」

「え、俺？ 新堂 幽だけど。」

「宮ノ小路に会えるのは一人だけだ。ついてこい。」

「……皆、行ってくる。」

俺はそう言い残して、宮殿の中へと進んだ。

「どうして、俺を選んだ。」

「リーダーは君だ。すぐにわかるよ。良きリーダーは自然と人を集めるものだ。」

……そういうものなのか？

「ここだ。」

九条がノックすると、扉を開けて、俺たちは広間に入ったかのような感覚を覚えた。

中は広い。そこに、少数の人間。

「あなたが、新堂 幽ですね？」

「え、あ、はい。」

「少し、話がありますの。」

「話、ですか？」

宮ノ小路様と呼ばれる宮殿の主との対話。一体、何の話があるというのだろうか。

そして、話が始まった時にはいつの間にか、九条が部屋から退室していた。

「それで、九条さん。 幽はなんの話？」

「幽は宮ノ小路様と適当な質問と応答をしているだけだ。本命は俺

が君たちにする質問だ。」

「なるほど……幽が不都合だったわけですか。」

「すまない……。時間も限られているのでな、手短にお願ひする。

君たちは見た当初では気づかなかつたが、相当の兵の集まりじゅわものじゃないか。

一体どうしてそこまで強い？」

「うーん、どうしてって言われましても……。」

俺はゾンビが出てきた初日からずっと連戦して、ヤバイ時は逃げの連続でしたから。」

「初日だと？　今までよく生き延びてこれたな……！　他も、そんなのか？」

「俺も、一応藤島と共に旅をしてきた中だ。」

「聖奈は途中からー！」

「え、えつと……私も途中からです。」

「在ったのはちよいと前の話だ。ま、それでも駆け巡ってきた戦場は同じだ！」

「私も途中からだ。一応、迷惑をかけないように努めてきた。」

「私とこちらも途中参加です。」

「えつと、僕とこつちも途中参加。」

「なるほど……。外の世界はサバイバルも容易ではなかつたのだろ
う？」

「まあな。なんとか今に至ってるけど。」

「……こちらとしても、是非加入してもらいたいのだ。ここに。」

「その意図は？　リーダーなしでできる話ではないでしょう。」

「……他言しないと誓えるなら、話す。」

「分かりました。話して御覧なさい。」

突如、裕が担架を切つて話を進めた。

「……宮ノ小路様は未だに、最終手段をお持ちになられている。

今は、海外との回線で通信をしている。近々、我々はアメリカへの移住が確定しているのだ。」

「なるほど……!!」

「バカな……!?!」

「碇以外も驚愕している様子だ。」

「軍事的な力を持つアメリカが、なぜ日本の我々を救おうとしているのか……」

理由は俺たちの能力だ。原因を観察してくれる。人体実験ではないが、様子を観察する程度らしい。」

俺たちは、移住後は平凡な生活が帰ってくる。だが……」

「だがって、なんだ？ 何かあったのか？」

「3日前の事らしいが、『新堂 彰吾』が拉致された。」

「新堂……?」

「え、あ、そうか！ あいつの両親は……!!」

「両親……だと？ そちらはまだ確認されていない。新堂彰吾は確か……祖父？」

いや、祖父の弟に当たる人物のはずだ。」

「ってことは……道場の人の弟!？」

「何か知っているようだな。とにかく、拉致されただけならまだしもだな……」

とある組織が、その細胞を使って生物兵器を生みだそうとしている。間違いない。

新堂家には何かあるのだろうか。一人では飽き足らず、

未だに新堂の生き残りを搜索しているようだ。」

「な、な!？」

「信じがたい気持はわかる。だが、君たちは流浪すれば必ずつかまる……」

アメリカはついにゾンビを抹殺するために、核兵器を使うことを宣言した。

だから、我々はアメリカに移住しようとしている。それに、提案を持ちかけてきたのは

アメリカ側だ。新堂がつかまる前の提案だが、薄々感じていたの

だろう。

難しい事はいい。今はその生物兵器もろとも、なくしてしまう方針だ。

だから、君たちも加入してくれ……頼む……！」

「そんなこと、急に言われても……！」

「幽君も、納得してくれませう。きっと。……加入しましょう。」

「お、おいてめえ！」

「なんですか？ 無駄死にが確定して五袋満足に今後を生きられるあてでもあるんですか？

今は生きる事の方が遥かに大事なものはわかってる事でしょう。

幽君にとっても、それが一番のはず。……弥栄氏はご自由にどうぞ。君たちとは無縁ですし。」

「冷たいなあ、碓君……。僕たちもいいよね？」

「もちろんだ。」

「ほら、許可下りたよー？」

「あーもう、好きになさい……。」

「……では、今の旨を幽君に伝えてもらいたい。お願いするぞ。」

「わかりました。」

碓が取り仕切った場で事が決した。その頃、幽は ?

G r i p (前書き)

サブタイトル『G r i p / 握りしめる』

まだ時間はたっていないが、若干把握できたことがある。
まず、宮殿の体勢だ。

統率された指示に対してきちんと動くので、乱れない。
専門分野もくつきり分かれている。

いざというときには戦闘員がなんとかゾンビに対して殲滅を行って、
宮殿を守るだろう。

宮ノ小路……様は宮殿の主で、元の地位も日本では上位。

そんな彼女が皆を率いてこれたのは有意義な指示を下していたから
だろう。

「私も、そこそこ良き主としてここを動かしてきたけれど、限界な
の。」

「限界？ ここはまだ活発じゃないですか。」

「それでも、ダメなの……。私もあなたも恐らく日本ではもう生き
てゆけないわ。」

「ど、どうしてですか？」

「……日本は、近いうちに全てを失うわ。命あるもの全てが死にゆ
くのよ。」

「ゾンビがそこまで驚異的なものなのですか？」

「強い人は良く言うわ。今はもうゾンビが人を食うだけじゃない。

人はこの短期間で大きな成長と進化を遂げているわ。

能力を手にして、……生き延びようとしている。だけど、

今はもうゾンビだけが敵じゃない。能力者同士でも戦いが起こって
いますし、

それに……生存者がもう足りないんです。」

「そうですね。そろそろ研究員も動く頃だと……。」

「研究員？」

「え、ええ。風の噂ですけどゾンビの研究に携わっている研究員が多数日本に潜伏していると……。」

「興味深いですね。生存者を見なくなったのはそれが関係している可能性が非常に高いと思います。」

「そうですね。僕たちも旅先でできれば研究員を発見でき次第、事情くらいは履かせたいと思ってますけども。」

「……そう、ですね。」

ためらった？ そんな疑問がよぎったか、些細な事。

そう思い、気にも留めなかった。

「研究員は徘徊している事もあります。僕も一度在った事がありますが、

明らかに人の所業とは思えない事をしてます。ここも警戒していた
だけると幸いです。」

「分かりました。以後、警戒に努めましょう。」

さてと、ここまで話もしたしそろそろ皆のところに戻るか。

「それでは、僕はこれで。」

「あ、待ってください。」

その時、扉が開かれた。

「宮ノ小路様。」

「九条か。……新堂、もう帰ってもいいですね。」

「え、あ、はい。」

引きとめられた気がしたのだが、空耳だったのか？

呼び止められたとしてもその理由が分からなかった。

歩きながら考えるうちに皆の元へとたどり着いていた。

「皆、ただいま。」

「お、幽。御帰り。話はどうだった？」

「旅先にはあんまり関係のない事だった、かな？」

「そうか、今日はまア休むんだろ？ 自由にしてもいいよな？」

「ああ、藤島がそうしたいなら。あんまり宮殿に迷惑かけるなよ？」

「できる限りな！」

そういうと、藤島はどこかに向かって走り去った。元気だな。藤島が動くときも自由な時間を過ごした。

俺も今日はゆっくりしたい。

宮殿の外に出て、芝生が生えそろっている道を通る。

そして、宮殿を囲っている塀にもたれかかり、座った。

俺はこういう人気のない落ち着いたところが好きだ。

だから、たまの休みぐらいこういうのもいいよな？

その一人の時間、俺はぼうつとしていた。

しばらく暇を持って余すかのように眠っていた。

ふと目が覚める。まだ、空は明るい。

しばらく、考えてみたかった事がある。ゆっくり時間をかけて。

それは……自分の能力だ。抑えがたい魔性の力といってもいい。

藤島は、炎を扱う力だったよな。ああいうのがよかつたんだけど、

そういうわけにはいかなかったのが現実だ。

聖奈も探知の力があるし、治癒も持っている。ゾンビを打ち消す素

晴らしい力だ。

俺の力は、自分でも扱えない。自由に使用できない。

このままじゃ足手まといにしかなくなるのも、時間の問題かも

しれない。

せめて、手につかめるような感覚があれば……。

ん、手につかめるような感覚？

ちょっと不思議だ。自分が暴走するだけなのに手につかむって。

想像してみる。自分の暴走する力が……『何かの塊』に置き換えて、

それを、自分自身で触れてみる。それを思い描いてみる。

触れている間だけ、自分が力を得るだけなのだとしたら。

強くしがみ付くだけ理性を抑えられなくなるのだとしたら……。

「なるほど、な。」

独り言。たったそれだけのこと。

だけど、分かる。今の俺は5分前とは圧倒的な差があるような気がした。

「幽にイ？」

「聖奈、か？」

「うん。そこで何してるの？」

驚きだ。聖奈がここまで来るとは。一人の時間もここまでか。

「聖奈、今の俺をどう思う？」

「今の幽にイ？ ……そういえば、さっきの幽にイとは違う感じがする。」

ちよっとカツコイイよくて強そうかも！」

「そ、そうか……。」

帰ってきたのは聖奈独特の解答のような気がする……。

自分の能力を少しだけコントロールできる気がしたのだが、ただ気分が高揚していただけのようだ。

少しずつ、鮮明に思い描く『能力を掴む』感覚。

がっしりと掴む想像をしていないので果たして本当にコントロールができているか……。

今、掴んでみてもいいかもしれない。きつかったら、離せばいい。

俺はやってみた。

力を 掴む！

……なんともない。むしろ、すがすがしい気分だ。
晴れやかで開放的だ。

「凄い……。」

となりで聖奈が呟いた。

聖奈は俺を見て呟いていた。

「さて、……そろそろ戻るか。」

「う、うん……。」

一足先に宮殿に戻った。やがて、日も暮れ始めてきた。
皆も揃って合流したが、俺は気づいた。

気づいてしまった。皆が、俺を見る目が明らかにおかしい事を……。

M o v e m e n t & q u o t ; L e a v e J a p a n & q u o t ; p a r t 1

サブタイトル『Movement』Leave Japan』／日
本離脱』

p a r t 1

何かが入り混じったかのような目線。
そんな目線が俺を指していた。

「幽……」

「皆どうしたんだ？ 何かあったのか？」

「んーまあ、何かあったって言えばあるんだが……。」

「まあって……言にくい事なのか？」

「い、いや……」

言いにくそうな藤島を遮って入ったのは碓だった。

「私から説明しましょう。」

「碓……」

場がさらに固まる。

「新堂君、ここ……日本を離れましょう。」

「はあ？」

「ふふ、二度言わなくては理解できない人間じゃないはずですから
ゆっくり思い返してください。」

実は宮ノ小路様直々の御達しで日本を離れる計画を考案されていた
ようです。

宮殿総勢ともども日本から離脱する事を宣言していました。私たち
もそれに肖るといあやかうことなんですよ。」

「宮ノ小路様……が許さないだろう。」

「許可は下りてます。すでに私たちの待遇は確たるもの。すくなく
とも宮殿の人間同様に

離脱の手立てもあるようですし……どうです？」

日本からの離脱……。

状況はそこまで悪化していたとは。

だが、日本を離れてどうするつもりだ？

俺たちには、日本から離脱する手立てがあっても着陸後の保証は……

「幽君……まさか、いらぬ詮索をしているのでは？」

移住後の保障もちゃんとありますし、日本にいてはあなたがいくら屈強で最強の人間だと仮定しても、

世界の科学を前にして太刀打ちできるはずもないでしょう。」

「科学……？ ウイルスの事か？」

「ククク……ウイルスなら移住には至らない。核ですよ。核兵器！アメリカは日本の現状を見かねてついに核兵器の使用を宣言しました。」

日本はついに破滅の運命をたどっているんですよ……。

世界から日本は抹消され、日本人も抹消される……いや、この場合は隠蔽いんぺいですか。」

「核兵器だと……!?!？」

「あなたは兵器相手に立ち向かって勝てるだけでも？ 今回は私の独断で移住に同行する事にしましたが、幽君でも同じ判断に至れましたかね？」

アジトで一泡吹かされたことが影響してこういうチャンスを逃すのは少々見苦しい。

それに……『自分の姿』が見えたのでしょうか？」

「な、どうということだ？」

「先程とは明らかに違う……。何をしでかしたのかは知りませんが、驕おごっては判断も鈍ります。」

とにかく、今はプライドを抑えつけて同行してください。」
裕は言い終わると宮殿で休んだ。

日本が破滅

宮殿の移住

核兵器の使用……

何もかもがくるってる。

アメリカがどうしてそんな結論を出したのか……

簡単だ。日本が危険だからだ。

そんな日本からの移住をアメリカが認めるだと？
信じられるわけないだろ……！！

だが、核兵器を使われては日本は確実に……
どうすれば、どうすれば生きられる……

俺たちには、もう破滅しか道はないのか？
今まで生きるために戦ってきた事は無意味だったのか？

敵襲もなく、宮殿にはその後数日にわたる平和があった。
平和といっても何事も変わる事がなかったという意味での平和だ。
承諾を受け入れてからは何かと移住に関しての話を耳にするように
なった。

そして、今日は移住を告げられてから数日後の今だ。
明日はついに移住結構の日。皆が食糧や支度を整えている最中だ。

移動手段は飛行機らしい。船だと時間がかかるうえ、途中で食料が尽きてしまいかもしれないしな。

（船でアメリカに着くまでどれくらいかかるのか見当もつかなかった俺の勝手な推測だが……）

今日は支度ができ次第、指定の空港に行くだけだ。

そして空港で夜明けを待ち、朝方に出発。

空港について、飛行機については心配はないらしい。

すでに整備されているとの事だ（宮殿の精鋭が日数をかけてゾンビを駆除したとしか聞かされていないが……）。

俺たちは自分の分の準備で良いと告げられていたが、俺たちはすでに準備が整っている。

後は出発を待つだけだった。

移住後は平和。

その言葉に偽りはない。アメリカは日本を危険視している。

逆にいえば余裕がなければ日本が危険だと判断できるはずがない。

ゾンビ化はアメリカには起こっていないという証明だ。

俺たちが受け入れられるのかは不安だが、何より……

『移住するまでの過程で敵襲がないか。』それだけが不安だった。

そんな時、九条が俺たちの前に現れた。

「そっちは大丈夫そうだな。出発はもうすぐだ。待たせてすまんな。」

「

「いえ。」

「心残りか？」

「え？」

「……報告はしていなかったが、空港に差し向けた駆除隊は一人か

二人の人影を逃したらしい。

ゾンビにまぎれていたから間違いなくゾンビの類なんだが……。」

「大丈夫なんですか？」

「ふふ、戦闘部隊には武器も持たせてあるし、いざとなれば宮ノ小路様の側近も出るだろうさ。」

その言葉があっても俺は何か引掛かっていた。

非常に小さな何か。今にも忘れそうだが、それでも不安で仕方がない。

何事もなければいいのだが……

「出発！」

その言葉で宮殿の人間が動き出した。

荷物運び、戦闘部隊、護衛部隊……警備は万全を期している。

俺たちは最後尾について行く形で後に続いた。

宮殿はもぬけの殻。寂しい雰囲気だけを臭わせる形だけを見て俺たちは先に進んだ。

「ここだ！」

空港！ 待ちに待った……離脱の日！！

確かに、駆除隊はゾンビを確実に殺していた。

動くゾンビは建物内にはいない。

宮殿の戦闘隊は真つ先に建物をくまなく進行し、安全を確認した。

その間は護衛隊が荷物運びを守る。

「内部に異状なし！！」

その声で俺たちはようやく中に入れるのだった。

だが……その時、俺の不安はようやく見える形となって現れたのだった。

「くそ……駆除隊にも察知能力者を入れておくべきだったか。
九条がぼやいている。」

空港の内部から俺たちは考えていた。

離陸場に佇む怪物、人影をどう対処するのかを……！！

「やっとよ！ ジュミネイ、フラワーウィンド……やっとこの時が来たわ！」

「あの時の借り……返してあげるわ。」

「……感情的になるのはやめた方が」

「うるさいッ！ たかだか一般人相手に撃退されるなんて屈辱以外の何物でもないわ！」

今度こそ……屈辱は百万倍にして返してあげるんだから……！！」

会話する三人と、それをただ聞くだけの巨体が3体。それに加え……

「あれが碇君が乗る団体様かい？ 丁重におもてなしをしないとイケないねえ……！」

そう思うだろ、『エーシックス』。」

「よくもまあ、獣人を……。期待してるよ。」

「期待にはこたえるのが僕の主義でね。見てるがいいさ。エーシックスの怪力をね！」

宮ノ小路一行が勝利を掴むには、まだ速かった……！！

M o v e m e n t & q u o t ; L e a v e J a p a n & q u o t ; p a r t 2

サブタイトル『Movement』“Leave Japan” / 日本離脱

part 2

「さあ、楽しいショータイムの始まりだ!!」

「さっそくエーシックスが出るとはねえ。じっくり見させてもらおうよ。」

「ふふふ、……まあ、ミネリーがそついうのならやる気が出るまでみてていいよ。」

エーシックス！ 建物に隠れているざ子供を引き裂いてこい！」

「オオオオオオオオオオオオオオオオオッ！」

雄叫びが周囲に響き渡る。同時に空港に潜む人影にも緊張感が走る!!

「雄叫び……!?」

「ぼさつとするな！ 来るぞ！ 構えろ！ 前線に戦闘部隊が立って守れ！」

なんとしても……着陸に間に合わせるんだ……！」

その声で一気に人員がなだれ込む。

敵は雄叫びをあげてまだ動かないが、こちらはすでに敵に向かって広範囲をカバーするほどの

戦力を向かわせていた。空港内部の2階、窓で広く見渡せるフロアは察知能力者が多数揃い、

荷物運び担当はすでに逃げる準備に移り、空港内を正面出口から続々と出ていく流れがあった。

「俺たちも加勢するぞ……！」

俺は声をあげた。この勢いだ。恐らく戦いは止められない。

そして敵も止まらないだろう。この戦いはどちらかが潰れるまで収まらない……！」

「着陸まで後17時間……それまでに……。」

ぶつぶつと呟く察知能力者達。リミットはそう長いわけじゃないさそ
うだ。

こうも短いと誘導すらできない。

俺たちは前線部隊と同じ列に並んだ。

「皆、用意はいいな？」

「ああ、大丈夫だ！」

「こっちもいける。」

「ええ、なんとか！」

「幽にいがいるから大丈夫！」

「私はいつでも行ける。」

「やーっと親球がお出ましか……やってやる！」

皆、やる気だ。俺たちはこの戦いに勝って……俺たちの平和を掴む
！！

「聖奈は2階で見てもいいんだぞ？」

「大丈夫だって！……それより、啓にいたちどこ行ったんだろー
？」

「啓……あー！」

いない！ あいつらこんな時に何やって

「ゆけ、エーシックス！ 屑どもを食いちぎれー！」

「グオオオオオオオオ！」

敵は砦たちの到着を待たずに襲いかかってきたー！！

「くそ……！！！」

「ふう、彼らとはなんとか離れる事が出来ましたね。」
「関わってるから仕方な言っちゃ仕方ねえが……な。」
「いいんじゃないの？ 僕たちは便乗するのが役目だからね。」
「……………」

啓、裕、弥栄、美鈴が空港内のある一室で会話を交わしていた。
「うまく放れる事が出来ましたが……あの咆哮からしてすでに戦って
るでしょうね。」
「ふふふ、うまーく戦ってくればいいんですけどねえ。」

「俺たちにとってあのゾンビ使いは邪魔なんだっけ？ めんどろだなあ。」

最初から出てぶちのめせば楽なのに。」

「ゾンビの制御だけはお手の物ですからね……彼らは。」

油断すると啓君が持つていかれてしまふ。戦力的にもそれだと勝てない恐れもありますし。」

「美鈴もなのか？」

「うーん……強力な薬剤に耐えうる精神力の持ち主ですから何とも言えませんが……。」

彼女が相手の配下に置かれるなら、私たちに未来はないでしょうね。少なくとも逃げる事すらままならない……私たちはね。」

「なるほど……過大評価してくれるじゃないの。」

「とんでもない。事実にすぎませんよ。それに……こちら美鈴だけが最後の切り札とは」

言いきれない事も事実ですから。切り札は一枚あればいいってもんじゃないんですよ？」

しつかりたくさん手の内に納めないと。」

「切り札？ まだそんなやつがいたのか。宮ノ小路の側近か？」

「いや、……違いますよ。幽君です。ふっふっふ、心外です。」

側近？ 彼らが屈指のエースだと思っていたのですか？ ありえない。」

能力は優秀でも圧倒的に美鈴と幽君には届かない。なぜなら……」

「なぜなら？」

「……実戦経験と、くぐりぬけてきた死線の数が足りないからです。」

「うおおおおおおお！」

俺の振りおろす矛が相手の手首にあたる。

鈍い感触が矛越しにつたわる。

そして、敵のうめき声。

なぜだろう。いつから俺はこんなことになったんだ。

周りには前線で戦った宮ノ小路の使いが倒れているが、

俺たちは誰一人として倒れていない。なぜだ。どうして俺たちが立って戦っている？

1つの巨体『エーシックス』に次々と倒れていく前線部隊。
しかし、幽一行だけは倒れていなかった。

「はああああ！」

藤島は炎の弾幕で敵の目を引かせると同時に遠距離攻撃。

その隙に俺や九いちじくなんかに近い奴から順に渾身の力を込めた攻撃をする。

聖奈は護身用のナイフでできるだけだが体液がどつとあふれ出している。

長くはないだろう。あの巨体も……。

大門さんも、良成も懸命に協力してくれている。

大門さんは武器で殴打する事しかできないが、大人の力ならではの重みがある。

良成も藤島が間を開けている時に投擲術でまた引きつける。

敵は止まってはくれないが、良成の投擲術を起点とすれば

藤島の能力も引きつけるだけでいい。次には俺たちが巨体をなし崩すだけだ。

「うらあ！」

九の手に持たれた鈍器が肉体に埋まるのではないかという勢いで振ったが、

敵はそれだけでは崩れない。まだだ。まだ足りない！

「うおおおお！」

俺は頭や手足を狙っている。少しでも危険を減らすために狙っているが、

思うように当たらない時もあるし、当たっても敵は精神力が人間ではない。

怪物だ。それが意識を保たせているのだろう……。

「化け物……！」

「ヴウ……！」

敵も披露しつつあるようだ。ここらでラストスパートでも入れたほうがいい。うが……！

塊を……ゆるくつかむ！

そのイメージを思い浮かべた。

「……ふう。」

開放的だ。意識が現れるようですがすがしい。

エーシックスは幽の変化を敏感に察知した。

すると、飛びのいて後退してしまった。

「なんだと？」

なぜ、なぜ飛びのいたんだ？

「エーシックス？ 戻ってくるぞ。」

「……ふむ、怪物か。」

「怪物だつて？」

「敵も秘策を残していたようだな。だが、まさか人間でエーシックスを圧倒するような

力を持つ奴がいるなんてな。」

「こっちも全力を出した方がよさそうだね。仕方ないか……ジュミ

ネイ、フラーウィンド！」
敵も、ついに全力で動きだす！！

M o v e m e n t & q u o t ; L e a v e J a p a n & q u o t ; p a r t 3

サブタイトル 『 M o v e m e n t ” L e a v e J a p a n ” /

日本離脱』

p a r t 3

「せめてあの一向……半分くらいは削つてくれよおツ！」
テンションがハイになりつつある巨体を従えし者。

そして、ひと組の兄弟姉妹を引きいる者。

いよいよ、強者と呼べる敵勢の一角が動きだしていた！

「逃げただとお！？」

「なんだなんだ？ ……つて今度は3人もこっちにきてるじゃないか！」

「くそお……次も強いぞ！」

「ヒイイイハアアアアア！ 今度はぶっ殺す！」

声をあげているのはジュミネイ。走りながら右手に持っている金属棒が構えられる！

さらにゾンビならではの人知を超えた移動速度で迫り、敵を圧倒させている。

「ハアツ！」

その弟、フラーウィンドも同じく金属棒を持っていた。

しかしその棒はその手から勢いよく放たれた。

屈強な肉体からの投擲。それも金属棒を滞空させ、直線的な動きをさせるほどのもの！

空を薙ぐような音。金属が空中で旋回しているのだ！

「うお！ 金属棒だ！」

「幽！ 気をつける！ 来るぞ！」

「こんなときに……ハア！」

かがんで金属棒を避ける位置に立つ。そしてそこから矛を金属棒にあてた！
回転していたため軽く流されるような威力でしか当てられなかったが、
それたために失速し、地に落ちた。

「あれに立ち向かってくるなんて……。」
フラァウィンドが呟く。ジユミネイに続く後ろを走っているが、
姉を影にして能力を発動させていた！

「使うしか……ないよね。」
閃光がいまにも放たれんとするような光。

それは黄色でも白でもない。輝く事を忘れたかのような闇色の球。
まるで周囲の光を奪い取るように中心に力が収束していく。

弾は終息していくうちに、サッカーボール程の大きさになった。
そのうちにジユミネイがついに敵陣に突撃した！

「ハァアアアアア！」
「な、しまっ」

幽に棒を振るおとしたその時

キィーン！ 金属音が響く。

「あぶなかつたな……幽！」

「くそが……うらあっ！」

矛をふるった。ただ、敵の体のどこかに充てるように矛を使った。
それだけの意識だったはずだ。

だが、敵は血反吐を吐きながら空を回っていた。自分が矛を使った
事により、

それほどの現象が起きていた。

「……………！！！」

フラーウィンドが止まる。

球を隠す程の考えが止まるほどに今の現象に戦慄していた。

勢いに滞りがなかった強力な金属棒による一撃を受け止めた人間に。そして……今自分がいる位置よりもはるか遠くに一撃で吹っ飛ばす

ほどの力を持った人間に！！

「そんなことが……！」

恐れは増すばかり。

こんな相手は、彼らは見た事がなかった。

そして、在る意識にたどり着いていた。

『怪物はゾンビだけではない。』という意識に

ガチャン。とある一室のドアが開かれた。

「んん、誰ですか？」

「なんだ、戦つてない奴もいたのかよ。」

「お連れ様かよ。しかもこいつら、バリバリの戦闘タイプか。」

「……無謀。」

4人が愚痴をこぼす。その先にいるのは……

「私は宮ノ小路。この団を率いる者なのだけれど……あなた方は新堂一行の団員達よね？」

「宮ノ小路？ なるほど、どつりで見えた事がない。これは失態でしたね。私とした事が……。」

「あなたたちはここで何をしているのかしら？ 戦場で戦いはもう始まっているのよ！？」

「ここでのんびりしている場合じゃないわ！」

「……なら、どうして精鋭、いや……側近たちを連れてきたのですか？」

「あなたたちを動かすには力が必要。そうは思わないかしら？」

仮にも新堂一行ですもの。」

「なるほど。ご教授感謝します。ですが、私たちにはいけない理由があるのです。」

敵勢にはゾンビを使役するほどの者たちです。こちらには何も対抗策がない。

力無き我あれはここで待つ事が全てというわけです……。」

「……嘘。そういう態度を取るのね。なら、こちらも仕方ないわ。」

「……やりなさい。」

その言葉で後列の人間が動き出す。

「戦場に行け。ごまかせると思うな。」

「……二度も言わせないください。無駄死にするだけです。」

砦はさも嫌がるように答えた。傍から見ると厄介払いしているようにしか見えない所作、言動。

勿論、裕は本当に厄介払いしているだけにすぎない。戦場に向かう事を内心で拒んでいる。

「だったら、そいつの腕はなんだ？ 見間違うはずがない。人外ではないか!!」

「誰が人外だ！」

指摘されたのは、啓だ。ゾンビの人外的な力を手にしている代償に人の腕を失った。

その右に宿る魔性の腕は人外の道を歩いた照明というべきだろう。

「弥栄さん、なんとかありませんかね？」

「仕方ないなあ、美鈴、全部殺せ。ああ、宮ノ小路だけは残してくれ。」

「分かりました。」

「ついに本性を出したな！ この下郎目が」

次の時には、宮ノ小路を残した他の側近の首が飛んで、血祭りが始まっていた。

M o v e m e n t & q u o t ; L e a v e J a p a n & q u o t ; p a r t 4

サブタイトル『Movement”Leave Japan” /

日本離脱』

パート4

「嘘、嘘よ！ こ、こんなこと……」

「こつちにはこつちの事情があるんだ。しかも今は相当気が立っててな……。」

正直なところ、こつちは多勢。相手は少数だ。どう考えても勝ち目はこつちにある。

ザコ共の死傷は当然としても……勝ったも当然だろうが。」

「ぐう……なんてひどいことを！」

宮ノ小路。

唯一。唯一の正常な人間の集まりともいえるこの団体の司令塔。

たった一つ。しかし、まぶしいほどの希望の光に満ち溢れていた宮ノ小路。

その光が風前の灯ともしびと化し、率いる団員も……

完全に、その役目を終えようとしていた。

命尽きる日はまだ先の事でも、希望を目指す目の煌めきはもう微塵もない……。

「……そもそも、お前どうして俺たちが戦場にいないってわかったんだよ。」

「……………」

宮ノ小路は、ついに心が折れた。絶望の淵に立たされている。

宮ノ小路が彼らの不在に気付いたわけではない。気づいたのは側近の一角を担う

『九条 莊子』による密告だ。だが、それも無意味……

ふらふらと立ち上がり、部屋を出ていこうとする宮ノ小路。
4人はそれを止めなかった。

壁伝いによるめきながら進む。

戦場を見渡せる能力者部隊との合流地点にまで行く途中で、絶望の淵、

真つ暗な未来しか浮かばないところに一筋に光が浮かぶ。

閃き。奇跡。

先程の4人の会話を思い出す。

どう考えても勝ち目はこっ

ちにある

「高嶺……ッ！」

最後の希望。唯一の光。

彼女、高嶺の出生の秘密を知る者は少ない。高嶺は団員からも隠されてきた。

部屋の移動すらも制限され、挙句教育者もしぼられて育った。

しかし、行動そのものが稚拙だとは言いつれない。

生まれながらにして知性を持ち、理性を持って生まれた高嶺はやはり常軌を逸した

性能の持ち主。能力に置いててもその差は歴然だという推測もなされた。

勿論、高嶺は戦線には出ていない。三鷹 道介がそれを許さないはず。

問題は、乗り切った後にどうするか……。

高嶺だけは、絶対に死なせるわけには……！

一方、三鷹と高嶺のいる察知部隊では……

「三鷹……無事だったか。」

「北山！ 戦線は大丈夫だったのか？」

「俺は宮ノ小路様のそばにいたからな。それより、大変だ……」

「何か、在ったのか？」

「側近が4人死んだ。東条、九条、広幡、院ノ宮が……」

「死んだって？ どうして？」

「幽一行のやつらがやりやがった……。戦線で戦ってるやつらが全員じゃなかったんだよ。」

「科学者ポイ奴ら4人がそこそこと一室に隠れてやがった。」

「な……。！ 何やってるんだよ！」

「状況はひどい。だが、宮ノ小路様だけは無傷……。何か考えがあるのは間違いない。」

「お前は高値と一緒に隠れてくれ。危険だ……。」

「あ、ああ！」

高嶺の手を引いて、三鷹は場所を移動する。

「これで、よかったんだ……。」

彼はあの時、同じ場所にいた。敢えて最初に部屋に入らず、用心深く部屋の外で様子をうかがっていた。そういう算段だった。

しかし、一瞬にして側近4人が同時に始末される。

足がすくむ感覚。宮ノ小路がふらふらと立ち退く姿を見る事しかできなかった。

そして、戦場では

「ハア、ハア、…行ける。」

「仕留めたぞ！ 次はだれだ！」

「怪物から仕留める！ 余った人員は奥の奴か、女を！」

狂ったように戦うのが戦場。それが、いまできる最善の行動！

叩け！ つぶせ！ そして勝て！

怪物も引けを取らざるを得なかったようだが、いよいよ終幕。

幽を意識するあまり、後ろに回った九の攻撃を直で受けてしまう。

「よおおおし！」

追撃でさらに攻撃。頭部の殴打。そしていよいよ力が抜けて動けなくなつたところを見て、

幽は思い切り足をけり上げた。

ガッ 放物線を描き、飛ぶ。エーシックスすら手のひらで踊らされてるような現状。

「女を始末したぞ！」

敵勢は強者といえど、もう3人も削つた。

後は2人。

どうする……。

もう、こちらでも疲労しきっている。

能力どころじゃない。疲労感で上手く使えない。

ここからが正念場だつて言うのに……！！

「ああー、そろそろ行った方がいいな。」

「戦場に？」

「まーな。恐らく幽頼りつきりだろ。幽が崩れたら皆も崩れるんじゃないかって思ってたよ……。」

「……相手が研究者組だけなら、我々が出陣してもいいんですけどねえ。」

ザコが壁になつて操作されたら面倒なことこの上ない。」

「美鈴なら、一瞬で首をはねれるけど？」

「不安なら、視察してきますかね？ 美鈴もつれて、都合がよければ助太刀。これがベストでしょう。」

「仕方ないなあ……美鈴、いざというときはよろしくね。」

「はい、弥栄様。」

動く。4人の奥の手が、動く。戦場に終止符を打つ格好の好機が

訪れようとしていた！！

M o v e m e n t & q u o t ; L e a v e J a p a n & q u o t ; p a r t 5

サブタイトル『Movement』Leave Japan /

日本離脱

パート5

「なかなか手こずってるようじゃん。」
 気楽な態度で啓が言う。

「何やってんだよ……今までどこで何してやがったんだ。」

「まあまあ、そう怒らないでよ。俺も……ふざけてたわけじゃないぞ。」

幽から目をそらし、眼前に遠くの人影が移るように焦点を合わせる。

「ここからが肝心……ま、すぐに決着はつくでしょう。」

「碓……」

「幽君、心配には及ばないさ。僕らはただ見てるだけでいい。」

「ど、どういうことだ？」

「シッ、黙って見ていなさい。不穏な動きは見せないように。……」

美鈴が動いています。」

「……………ッ」

美鈴。碓達が一目置いていられるらしい。俺から見たら容姿は拍子抜けするほどの体格だ。

見た目はただの女の子。華奢でとてもすたれたこの世とは不釣り合いな程だ。

だけど、一目置いていられるだけあって……強い。

少しだけ彼女の戦い方を見たが、あれは尋常ではない。

普通、いや……人間がゾンビとの接触や影響で増した力でもなしえないほどの動きができる。

身のこなしも素早いし、何より純粹な力がある。細い腕だと油断している、あっさり首を落とされる。

それほど恐ろしい力を秘めている。人の事を言える立場ではないが、あの細身のどこにそんな力が……。

「もうすぐ、もうすぐだ……フフフ。」

弥栄が何やら呟きだした。

この反応を見るからにもう勝利を確信したのだろう。

だが、俺は手に持っている矛を収めたりしない。油断とは、そういうことだろ……。

「キタツ！」

あまりに耳障りな音量で発する。弥栄のやつ、一体どうしてここまで生きてこれたのか……

美鈴のおかげとしか言いようがないくらいアホというか、思慮が浅い。

次の瞬間、俺にも美鈴が人影に襲いかかる瞬間は目視できたが、……仕留めそこなった！

「追撃だ！ 行くぞ！（弥栄のやつが余計な声を出さなければ……くそツ！）」

俺は突っ込む。美鈴なら時間をかければ容易くいずれこちらに勝利がある。

だが、そんな悠長な事をしている余裕はない。何せ相手にしているのは研究員。

これ以上余計な戦力を相手に持たせるのは分が悪い。疲労もかなり来ている……。

俺が相手にするのは……女の方だ！

そして、俺は女川と対峙して、ようやく気付いた。

「あら、あなた……。」

「お前は」

な、なんだ……この背筋が凍るような感覚は。いや、これは本当の冷気？

「ふ、ふふふふ……！」

「ふっ！」

矛を振り下ろす。そして華麗に避けられる。

「そうね、どうせ死ぬのだから、遊んであげましょうか。」

「だったら退屈させるなよ。」

怒涛の攻め。相手に攻撃の拳動を許すことなく続けた。しかしなんだ、

この悪寒は……。

しばらく続く荒れる戦況で、ついに敵が不審な動きを見せた。

「そろそろ、頃合いかしら。」

この言動がおかしい。圧倒的不利な状況なはずだ。

ザシュツ！

その隣で、ついに美鈴が男を仕留めた。

これでこちらの勝利は不動。ゆるぎないものだ。

だが……

「幽、美鈴、その他を人質にできたのは嬉しい誤算だったわ。さて、向こうはどう出るのかしらね？」

「人質だと？ 気でも触れたか？」

「そうね、ために……彼で証明しましょうか。」

冷えた空気が伝わってくる。この空気はどこから……

そして、視界の先に氷があった。

「う、うわあああああ！」

氷の中には、良成がいた。

「良成っ！」

「ふふ、見事人質にできたわね。観念しなさい。」
こいつ……！

「てめえええ！」

「動くな！ あなたも氷漬けにされたいの？」

……！

打開策……あるかもしれない。決死の秘策だが、旨く行けば……

「氷漬け？ 笑わせるな。そういうのが油断だって言ってんだ。」

「あら、そうかしら？」

「自分の欠点にすら気づけないとは、哀れだな……ゾンビに取りすがるゴミが。」

「なんですって！？」

そう、怒れ、もつと激怒しろ。

「聞こえなかったのか？ ゴミ。おや、眉間にしわが寄って酷い顔だ。無様だな。」

「……死刑、確定ね！」

眼力を込めてこちらに意識を向けている。能力の発動には集中はつきものだ。

頼む、気づいてくれ！ 美鈴っ！

視線を挑発相手のさらに後ろに向ける。

視線が合うと、美鈴がすぐにそれを察知したかのように駆け出す！

ぐう！ 腕が、体が凍てつくような冷気が！

そう感じるころには、すでに首に今手刀を振りおろそうとしている美鈴の姿があった。

そして

「幽！ しっかりしろ！」

「ぐうう……こ、今回はちょっとやばかったかもな……。」

「んな弱気なこと言ってる場合か！ 俺たち、勝ったんだぞ！」

「そうか……！」

「そつだよ！ だからしっかりしろ！ お前は俺たちのリーダーだろ！」

「へ、へへ……その言葉も懐かしいな。」

「後は待つだけだ。時間がたてば、飛行機が来る！」

「……………」

「おい、幽!？」

「な、なんか、すっげー眠てえ。頼むよ、寝かせてくれ。」

「死ぬなんて意味じゃないだろうな!？」

「馬鹿言つなよ……一応、おれだって化け物さ。死線だって結構くぐりぬけてきただろ……。」

「そ、そうだけど……。」

幽が最後まで聞かずに首を落とし、瞼を閉じる。

その後、同様の声があったが、飛行機はその後無事に到着し、生存者のすべてと荷物を載せて離陸した。

機内は特殊な構造で、部屋がある。

広いが、隔離されているような状態だ。生存者全ては大きな一室で生活しなければならぬ。

通訳は碯がしている。コンタクトが取れているのは凄いなと思うが、碯を今後頼らなくてはならないというのは凄く不安でならない……。

俺も機内で意識を取り戻し、苦難について思い返す話をしていたところだ。

碯のとある言葉が耳に留まった。

「おお、そうでしたな。さすが啓君。一番の助手です。」

「んなことはいいんだよ。あれって、まだ生きてるんだろ? いいのか?」

「核でお陀仏になるのですから、関係ありませんよ。」

「対放射性あるとか言っただけ?」

「どうせ熱で焼かれますよ。生物の最大の弱点を克服できなかった

のは残念ではありますが、
構いませんよ。何も知らずに死ぬのですからね。」

な、なんて物騒な！ 放射性……馬鹿じゃないのか！？

そんなこんなで、戦いは終わった。俺たちは今、空の上だ。

A f t e r s t o r y (前書き)

サブタイトル 『A f t e r s t o r y / 後日談』

A f t e r s t o r y

.....

ジャパンが滅亡したって？

ああ、その通りさ。

俺たちはその日本から来たんだ。

日本から離陸してまだ間もなくして

「あれって、まだ生きてるんだろ？ いいのか？」

啓の不審な言葉が耳に響く。

そして、彼らの間で会話が進んでいく。危険から、日本から解放されたとはいえ黙っていられなかった。

「それって、マジなのか？」

幽が深刻な顔をしているのを見て、裕が言う。

「何をそこまで深刻に……？ ゾンビについてはもう関係ないじゃないですか。」

「……お前、まだそんな怪物を！」

「あせらないでくださいよ。あれは戦闘用じゃありませんって。実質三流以下です。」

「どうということなんだ？」

「彼らもゾンビ。もとは人型。そこを利用して考えていただけです。」

もっと、もっと屈強な肉体を絞ってコンパクトに、そして能力を付加できるように考えていました。

そして、生物として持てる本能を生かせないものかと考えていました。研究は観察できませんでしたけどね。」

「ますます意味が分からない。何をしようとしてたんだ？」

「ようするに、疑似的^{ニュータイプ}新種ヒト型生物を作ろうとしていただけです。新たな生物として機能しないものかと考えていました。ところが、大失敗。」

「失敗？」

「ええ。体細胞をある程度自然成長させてから特殊な培養液の中で

成長速度を高めて

観察していたのですが、急激に身体がものすごい変化をしまして。体は絞られるどころか、かなり戦闘タイプに近いものになってしまいました。

ま、あれほどありえない急激な変化をしている事ですしそうとう短命だと思えますよ?」

「なるほど……な。」

あきれ果てた様子で幽が言う。

「もう秘策とか、そういうのは残ってませんよ。」

「分かったよ。」

相変わらずの『信用できない』の一言が浮かんだ顔つきで去って行った。

「危なかったな、裕?」

「ふふふ、修羅場でしたね。なんとか話をそらせたのは大きい。

まさか……ニュータイプ 疑似的新種ヒト型生物が生殖行為を行えるとは思ってもいないでしょう。」

「手の内は最後まで隠しとくのは基本ってことかな。」

「そういうことですかね。色々ありましたが、秘密を全て知られていたら……」

私たちは幽君一行には勝てなかったでしょう。」

「だろうな。で、どうなんだ。生存者の目星はついたのか?」

「ええ。確か生存者は……1000人ほどいるはずですよ。」

「意外と多いな。核を打つまでもないだろうに。」

「核じゃないとゾンビは死にませんからね。」

啓をじっと見ながら裕はいった。

「俺を見て言うんじゃないよ……」

「クク、常に事態は最悪のケースを想定しないと。」

「さてと、俺が回ってきたところの生存者ってのは今頃どうしてんだらうな。」

例えば……あれだ。ゾンビ事件が始まってから初めて幽にいと会った時だ。

あの頃は慕っていた連中もいたなあ。幽にいても相当気張ってたし、今更申告したりするほど野暮な真似はしねえ。

ま、そいつらはめでたく……御愁傷さまってわけだ。

生き残りも全員だ。ゾンビと腐るほど戦う最後まで、核で全部終わらせてくれるわけだ。

……ハッハッハ！

そんな、そんな下の連中の事を考えていられるほど俺は冷静で安全だ。

これを感じれるほど快感になれる事はねえな。

戦いを勝ち抜いて、仲間と同等、優位な状況で作戦組んで成功して

……

自分で作った今を強く実感できるほど、幸せな事は他にはないな。

俺は仲間のいた部屋に戻った。冬だからというのは言い過ぎな高い室温が俺を包む。

「良成は？」

「おお、幽か。安全ラインは突破だ。一命は取り留めている。」

「よ、よかった……！」

碓が最初見て言うには

「氷は高めの室温で溶かしてください。それだけで十分です。あ、一応通常の

所作は行ってください。急げばまだ通常通りの機能は取り戻せるはずです。」

と、言うのだ。氷漬けにされて果たして通常になるのかは心配だが、なんでも能力で作ったものというのは普通とはどこか異質らしい。例えば氷漬けの良成がいい例だ。

普通なら凍傷でもすまないほどのものだ。時間も経ってしまったし、死んでもおかしくはなかった。なのに、碓の言う通りでどこか異質な氷であったがために一命を取り留めている。

ゾンビで手に入れた異質なものの中で唯一今までのものと一致しているものは

『力』らしい。

碓がそんなことも言っていた。今は深く考える事ではないが、何か言いたげな台詞だったな……。

そして、俺たちの異国での生活は幕を開けた。

そして、あれから1年と3カ月が過ぎた。

「まさか、またこの面子が揃うとはな。」

「幽にイは嫌なの？」

俺たちは異国での生活にも慣れてきた。やっと普通になれそうだったのに、

『日本へ出動してほしい』

との命令が下るとは……

「軍隊はつらいね。」

「仕事まで決まっていたのは想定外だったな。」

俺は住居、仕事まで決まっていた。なんでも学校に通わせるのは危険だ。とか

そういうことも騒がれてようやく今の位置づけになっている。

俺は聖奈と一緒に暮らしている。他は裕と啓、弥栄と美鈴。大門さんと良成。

一人暮らしは藤島と九と日向。

しばらくはあっていなかったけど、また再開できそうだ。

「日本到着は色々合わせて後18時間後だって！」

「そうか、長いな。」

聖奈も、こつちに来てから随分と成長した。

髪も少し伸ばすようになったし、かわいいという感じから、綺麗という風に変わりつつある。

でも、若干幼いところも残っている。

「今度は……生きて帰ってこれるか？」

「幽にイが言っちゃだめ！ 聖奈も生きるから……そんなこと言っちゃだめ！」

「わ、悪かった。一緒に帰ろうな、聖奈！」

「うん！」

俺たちは、またあの地獄のような記憶しかない日本跡地に戻ろうとしている。

なんでもビックニュースがあつたそうだ。

『核の被害地から謎の生物！ ゾンビの生き残りか！？』
というニュースだ。TVでかなり宣伝されて大騒ぎだ。

恐らく、碯が言っていたあの処分のし忘れだろう。いつまでも迷惑をかけてくれる……。

そんな碯は確か、研究員をここでも続けているそうだ。

何が平和で、何が調和なのか……。

全世界がゾンビという危機にさらされそうになって、核を使った。その地域の全てが滅亡し、その代わりその他の全域が危険から解放されている。

何かの犠牲の上に、別の平和が成り立っている。そして犠牲は日本……。

今回も日本の滅亡で幕を閉じるのだろう。結局日本の所有権はアメリカが握つたし、

全て後になってご都合主義で回っていく。理不尽極まりない。

だから、俺は……少しだけ頑張ってみようと思う。

今回の事で活躍できたら評価されると思うし、それで少しでも犠牲という考え方が消えるなら……

ま、なにはともあれ……全ては生きて帰ってからようやく実現するものだ。

だから、俺は戦場に行く！ そして、生きて帰ってくる！！

大事な事を忘れていたが、聖奈が最優先だ。家族だけは絶対に守らないとなー！！

そして、
掴むんだ

本当の意味での平和を！！

その決意で俺は自ら戦場へと向かっていくのであった。

After story (後書き)

どうも、C・コードというものです。

このたびは『Death such as in nightmare』を読んでいただきまして

誠にありがとうございます。そして最後まで読んでくれたそのあなたに、

僕は感謝です！

今回はゾンビものとして書かせていただきました。

執筆開始の当初は『学園黙示録 High school of the Dead』を見ていた経歴もあり、

ノリノリでしたが途中で意気消沈したりと色々ありましたが、

ここで完結です。自分の拙い文章力にはため息が出るほどですが、それでもようやくここまで書きあげる事が出来ました。

ついでにいいますと、このサイトで凄く良かったゾンビ系のお話があったのですが、

いつしか探しても見つからなくなってしまいました……。

シヨッピングモールで奮闘するお話なんですけれども、そのお話が凄く好きでした。

僕の方はそこだけに焦点を当ててメインの舞台としてしまうと、完全なパクリとか言われてしまいそうなのがすごく怖くて

作中の一部に登場した程度でした。かきあげてとても楽しかったです。

はい、そういうわけで……この物語はここでおしまいです。

少しでも読んでくださった方々に多大な感謝をします。

本当に、よんでくださってありがとうございます！

別の作品などを執筆するかは後日決めます。

また最近、(アナログですが)イラストを描く練習をしております。

いつの日か、文章だけでなく絵に描いたような物語でも
より皆さまに共感していただけるように頑張りたいと思います。
(そもそも小説を書いたのは 絵に自信がないのに物語を描きたか
ったからです)

はい、長々としたあとがきになってしまっして申し訳ございませんで
した。

それでは、ここいらで失礼させていただきます!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9403m/>

Death such as in nightmare

2011年9月20日15時01分発行